蒼の月　鴉

之ち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蒼の月　鴉

【Ｎコード】
Ｎ２０５４Ｔ

【作者名】
之ち

【あらすじ】
魔術師の弟子・東堂夙夜
高校受験を目前に控えた氷上恭司
将来にも今にも現実味を見出せない白瀬トオル
新宿という街と三人の少年を中心に繰り広げられる青春物語。

第一章　ドッペルさん　一話

一

「た、助け、てくださ、い」
第一声はいつもここから始まる。なにかしらのトラブルに巻き込まれた人間だけがこの場所へとやってくるのだ。
喉の奥から必死に絞り出した声は確かに事務所にいた二人の耳に聴こえた。その声はまるで何年も使っていなかったようで上手く言葉が出てこないようでもあった。歳はまだ若く十七、八頃だというのに喉は声を出すには錆びていた。彼女は黒のセーラー服を着ているので学生だと確認できる。胸元に赤いネクタイがあるだけで他は黒ばかり。手と首より上に随分と光を避けていたのか血管が薄らと浮かんで白くなった肌がある。顔は俯いていてはっきりと見えないが向かいに座る魔女には事務所へ入ってきた時に見た美女の顔があった。黒の瞳は大きく、まつげは長く、鼻は小さく薄い桃色の唇は年相応より艶をもってして男の視線を得るには十分な色気を振り撒く。
全てが完璧なように見える彼女は身体を震わせている。
壊れかけた音楽プレイヤーが出すような途切れた声で彼女はまた「助けてください」と告げた。その声にも喉の痛みが雑音として混ざっていた。あまりにも耳障りだったため事務所の奥にあるソファーから一人の少年が起き上がる。
「きゃっ」と女学生が肩を上げる。
少年の姿はソファーに埋まっていて見えなかったのだ。女学生を出迎えたのも今座っているソファーに招いたのも魔女だった。
少年は着ている学生服と同じまだあどけなさの残る男子だ。学生服は長年使い切った学校指定のもの。堅苦しいのか前のボタンを全部外していて無地のTシャツが見えている。

「お客さまの前よ。もっと凛々しく」
黙ったまま首だけ頷く。
「ごめんなさいね。ちょっと眠ってないのよ、あの子」
女学生がふたたび足を振るわせ始める。
「まずは落ち着きなさい。何に怯えているのか知らないけれどここには貴女を脅かすものは何も無いわよ。せっかくの美貌が俯いていては台無しじゃない。顔をお上げなさい」
動き出す少年はささっと歩き書類の海が造った山を掻き分けるように進む。その先にはコーヒーメーカーがあり手馴れた仕草でスイッチを押した。魔女はその行動を見ることなく感じ取り震える美少女の隣りへ移動する。襟元から薔薇の香りがして女学生が顔を上げた。肩に置いた手は確かに暖かく人の温もりが伝わる。不思議と少女の不安や恐怖というものがたったそれだけで和らいでいく。魔女は見る、少女の目は赤く腫れていた。まるで朱肉でも塗ったように瞳が赤く酷く傷ついているように見えた。
「どうぞ」と少年がコーヒーを二つカップに入れて差し出した。
彼の手元には自分の分と見られるもう一つのカップがあった。少年がカップに口をつけるのを見て少女もそうしようと思った。だが、黒い沼のような水面に映った自分の顔にひどく驚いて泣き出してしまった。どうすることなく魔女と少年は彼女が泣き止むのを待つことにした。
新宿駅より数分歩きビルの森の中を入ると暗い洞窟のような路地がある。関係のある人間でさえ歩くのを止めたがるような人気の無い道だ。表側から見るような派手な看板がなければ外灯もない。夜になれば表の通りとは全く別の世界が変化する。そんな通りのある一つのビルに魔女は店を構えている。
洸敷事務所。とくに何をしているかは明記していないこの看板はビルの一階にあるテナント表記プレートを占領していた。ビルは五階建て。一階あたり部屋は一つだが狭くない。魔女の事務所も三人掛けソファーを長机を挟んで二つあるし魔女の仕事机だって窓を背

後に設置されている。少年が寝ていたソファーは二人掛けだが壁際にある。ただ、問題は事務所に溢れるノートや雑貨の類が邪魔をする。魔女と女学生が話をするソファーは高く積み上げられた紙の山に閉じ込められているようだった。加えて仕切り壁を隔てて奥には給湯室とトイレ。まだこの他に二部屋存在する。魔女はその一室で眠る事もあった。

一部屋だったビルの構造を弄っている。

外の世界と断絶されたこのビルには他のテナントはなく魔女は空き放題使っている。以前は一階に喫茶店があったがさすがに客がこないのですぐに消えてしまった。以来、いつもコーヒーメーカーで作ったコーヒーばかり飲んでいる。

少女が泣き止むまで三十分くらいかかった。その間、少年は携帯電話を弄繰り回しああでもないこうでもないといった表情で過ごしていた。またメールの着信音が度々流れていた。

魔女は少女から離れることは無くずっと背中を摩っていた。泣き止むきっかけは「にゃ～」と言う鳴き声だった。昼の間、非常に短い間だが僅かに太陽の光が差し込むことがある。その光で身体を温めようとする猫が一匹居る。黒い毛をした黄金色の瞳をした猫。どうやら猫は光りを追っているようで場所を変えながら鳴いていた。

「落ち着いた？」

魔女はそれこそ全世界の男がそれだけで堕ちてしまうような笑顔で微笑んだ。いや語弊がある、男であっても女であってもだ。彼女の優雅さに性別は問題にならない。いや、性別さえも超えるだろう。

「す、すみま……せ、ん」

口を開く事さえ難しいのか。それとも声が出ないのか。彼女の声は小さく擦り切れている。このまま声が出なくなってもおかしくないように少年は思えた。

「その声、もっと聴かせてちょうだい、綺麗な声なのよ」

魔女は少女の唇に指でそっと触れる。じんと肉の触れた感覚が彼女を襲う。指は顎から喉を伝っていく。蕾が開花する時のような神

秘的で淡い感触だった。少女の吐息に触れて魔女はなにかを呟いた。
「すいません」
壊れかけたプレーヤーはすっかり直ったようだ。少女自身、自分の声に驚いた。何か特別な事をしたわけでもない。魔女はただ当たり前のことをしただけである。少女の声はまるで彼岸花のような色をしていると少年はふと思った。少女の着ている制服のネクタイが彼女の黒という色を払拭させるほど毒々しく輝いていたからかもしれない。毒とは対照的に美しくどこまでも淡く透き通る声が少女の口からは発せられる。それでいて響く。きっと彼女が唄を歌えば誰もがその声に酔いしれるだろう。
「どうして、私の声？」
「女はもっと優雅にしなくてわね」
魔女は少女の近くで微笑んだ。彼女の姿から察するにまだ二十代に見える。歳の近い姉のような彼女に心はさらに落ち着いていく。とは云うもののやはり魔女なのだ。容姿からだけでは想像できないほどの包容力と艶かしさが少女には伝わっている。もしも魔女が女学生を好いてこのまま押し倒されても彼女は抵抗しないだろう。そんな魔女はワンサイズ下のような身体のラインがピッタリと見えるスーツを上着なしで着ていた。その下の肉体から女をこれでもかと見せ付けながら少女の傍を離れた。再び対面に座った魔女は「ゆっくりと話して頂戴」と告げる。
少年は自分が寝ていたソファーの肘に腰を預けるように立つと少女の声に耳を傾ける。この場から去る気配は無い。少女は冷めかけたコーヒーを一口含むと喉の渇きを潤して話を始めた。
「私、ストーカーなんです」
あまりにも酷い始まりだった。突然の告白に少年はコーヒーを噴出しそうになった。ぎりぎりの所で留めたのでなんとか周囲を汚さずにいられた。少女の言葉はそれだけでとまった。何一つ感じていないような表情で魔女は「それで？」と催促する。
「私、ある男の子が好きで……ずっと見てたんです」

「ずっと？　ずっとと言うのはどれくらい？」
「四ヶ月と十三日と半日です。彼を見た日からずっと見ていて……だから憶えてるんです」
「で、助けて欲しいのは貴女かしら？」
魔女の問いに少女は黒い髪を揺らして否定した。なんて綺麗な黒髪なんだと魔女も感心した。きっと彼女の髪に指を這わせれば気持ちいいだろう。
「違います。助けて欲しいのは相手の男の子なんです」
「……誰から？」
「私です」と少女は言った。
少女はまだ震えている。少年と魔女は互いに目を合わせた。見たところ震えている少女におかしな所は無い。何かに怯えて恐怖し震えている。それ以外にはなにもない。ストーカーだと自分で言ったその内容についてそれがどの程度の物なのか不明。しかし女学生が人を殺すようには見えない。しかし女学生が刃物を持って振るう姿を想像するとちょっとは様になるんじゃないかと少年は想像する。
「なぜ、貴女はその男の子を殺すことになるの？　それに解っているのなら自制できるでしょう」
「無理なの」
魔女の言葉を遮りそうになっていた。
少女の声は全身を震わせて発生した。俯いたままの少女は机に両腕を這わせて長く伸びた爪を立てる。その指が痛むのを見ていられなかったのか魔女はそっと手を握る。呼吸を整えた少女が小さく呟いた。
「ドッペルさんって知っていますか？」
今度は魔女が首を横に振る。すると今まで声を出す事の無かった少年が二人の間に新しい波を注いだ。
「それなら俺が知ってます。半年くらい前になりますが、ある雑誌の企画で作った都市伝説です。読者参加型のちょっとした恋のおまじないですよ」

魔女に話す少年の言葉は丁寧であった。魔女の口元が緩む。
「ほう、なら説明してくれるか、ぼうや。知っての通り私はそういった雑学には疎い」
「雑学って言うほどのもんじゃないですよ。それと先に言っときますけど俺が知ってるのは最初の頃のものですからね。その企画の最終形態がどんなものになっていたかは知りませんよ」
「なによそれ？　中身が変わるみたいじゃない」
「さっき言った通り雑誌の企画なんですよ。みんなで新しい恋のおまじないを作ろうっていう。結構、人気があったらしいんですけどね」
「らしい？」
「生憎、俺は女じゃないのでその手の雑誌は買わないんです。クラスの女子がそういう話をしてたんで聞いたことがある程度で確か連載していた雑誌は……」
少年が言葉に詰まる。その名前を思い出そうとするがなかなか出てこないようだった。少女が顔を上げて「リリィです」と小さく呟く。少年ははっとして「それだ」と答える。
「で？」
「そのドッペルさんっていうのは最初、好きな相手が今、どこで、何をしているか、知りたくないかという物だったんですよ。ドッペルゲンガーってあるじゃないですか。あれですよ、あれを作って知っちゃおうみたいな。そんで願いを叶えるためにもう一人の自分が気になる相手を見てくれる、報告してくれるという内容だったんです」
少年が一応の説明をすると少女は「そうです」と告げ話を紡ぐ。
「リリィでのドッペルさんはまず自分の携帯電話で自分の携帯電話にかけるんです。当然ですが通話中になります。それを三回繰り返すと不思議な事に繋がるんです。でも向こうは何も言わないし答えない。でもこれでいいんです。後は電話に向かって好きな相手の名前を伝えれば電話は勝手に切れるんです」

直ったばかりのプレーヤーは本来の能力で音を出す。
「怪しいわね。そんな奇妙な方法なの？　まるでホラー映画のようじゃない？　しかもその手法ではじまる都市伝説云々は山ほど在るわよ」
「そこがいいんです。まるで魔術のような非現実的な入り方が好きなんですよ、たぶん」
溜め息をつく魔女。
「それで貴女はやったのね？　その儀式を」
「はい。まさか本当に出来るとは思わなかったしこんな事になるなんて思わなかったものですから」
「ドッペルさんとやらがなぜ相手を殺す事に繋がるのかしら？」
少年は首を振った。彼の知っていることはもうないらしい。代わりに女学生が口を開く。
「電話の向こうで相手の名前を聴いたドッペルさんはそのまま行動に出るんです。でもこの時点ではまだ姿も形も無くてただ見ているだけなんです。説明すると目だけ浮いているんですよ、こう、ぼんやりと。で、時が経つにつれてドッペルさんの観ているものが目に映るんです。視覚を押し付けられるんです。最初は何が起きたのか理解できませんでしたが事態を把握できたころはもう部屋に篭ったままになっていました」
「それでどうやって生活していたの？」
「ドッペルさんの視覚が送られてくる時は見ているときだけなんです。どうやらドッペルさんは集団行動している時や個室のような閉鎖された場所に居る時は見れないようなんです。だから彼が学校に居る時やトイレに入った時なんていうのは見えないんです。だから朝から昼は寝ていられるんです。そんな生活にもすぐに慣れましたよ、一ヶ月もすればそれが普通になりました。もちろん学校は休学になったしアルバイトもお稽古事も全部止めましたが」
「それで放っておくとどうなるの？　ただ見ているだけなら殺す事にはならないでしょう」

女学生の問題は殺してしまうということ。
「ドッペルさんに意識が芽生えるんだそうです。私の場合、まだそこまでいっていないんですがじきにそうなるでしょう。ドッペルさんが自分のことを見て欲しいと思い始め姿も形も使った本人とそっくりになるそうです。そのドッペルさんの衝動が激しくなると相手の子を殺してしまうんだそうです」
「暴走ですね」
「そのとおりです。ドッペルさんが暴走するんです。好きな相手を監視するだけの存在だったドッペルさんに気持ちが生まれるんです。自我をもってしまい自分を見て欲しいって思うようになるそうです。その不満が積もり殺す事になるそうです。それと同時に恋の障害も取り除くらしいです」
「障害って？」
「所謂、恋敵でしょうか。同じ相手を好きになった別の子です」
「他人に攻撃するなんてけっこう危ないこと付け加えたわね。でも解く方法があるんでしょう」
「はい。対象となった子と恋愛対象になればすぐにドッペルさんは消えます」
「他には？」
「対象の死亡だけ」
「それで助けてほしいということね。随分と傲慢なおまじないね。好きになった相手が振り向かなかったら殺せばいいなんて馬鹿馬鹿しいわ」
「そんな事思ってないわ！　私が使ったのは四ヶ月前よ。でもその後、いろいろと追加されていくし雑誌が廃刊になった後もネットで話は続くし……」
再び俯く。しばらく震えてぴたりと止まった。少年は携帯電話を取り出す。
「それとおまじないをかけた本人はドッペルさんと出会うと死んでしまうっていう情報が追加されました。そしてドッペルさんの目で

すけれど見ているというより解るんです。ですから私が見ている物はきちんと認識できます。なんていうか頭の中にイメージみたいな感じでもやもやって」

どう説明していいのか解らないのだろう。少女は身振り手振りで表現しようとするが上手くなかった。その混乱にも似た感情が溢れ出してきたため目から涙がこぼれだす。

「無理して説明する必要はないわよ。言いたいことは解るわ。さて、ぼうや。そのドッペルさんの解決方法は？」

携帯電話を弄っていた少年が画面を魔女にみせる。

「ありましたよ。対象との恋愛を叶える事、または対象の死亡を確認することとのことです。さっき聞いたとおりこの二つだけですね。このどちらかが確認できれば自然消滅すると書いてあります。かなりエグいですよ」

「相手の子とはどうなの？」

少女は首を横に振った。それどころか出た答えは「まだ話をした事も無い」という一言。少年と魔女は彼女がはじめに言った言葉を思い出す。ストーカーなのだ。それなら口を利いていなくても納得できた。加えてドッペルさんからのイメージがやってきてからは外出する事も少なくなっている。声をかけるタイミングは無かった。

「つまり貴女は話をした事も無い子を好きになったの？」

「はい」

一目惚れかと二人して思う。それしかないだろうと。そして事態の解決に相当な労力を必要とするとなると呆れそうになった。

「で、その相手の名前は？　それくらいは知っているんでしょう」

「……氷上恭司、くんです」

必死に絞り出した名前。その名前に少年が驚く。女学生は傍に置いてあった鞄から写真を取り出した。

「ドッペルさんが送ってくるんです。どうやって届けるのか作ったのか解りませんがこうやって写真とＵＳＢメモリに動画を詰め込んで送ってくるんです」

そう言って次々と出す写真には背が高く整った顔立ちの男が写っている。少女と一緒に写っていればそれは見事な美男美女のベストカップルとして拍手を浴びそうな相手であった。写真を手にとって少年は強く口にした。

「この仕事、やらせてください」

声をあげるまで時間は掛からなかった。少年が自分から志願することに疑念や雑念は無かった。さも当然のように言い放った。

「解ったわ。この件はぼうやに任せるよ」

「今さらですけれど信じてくれるんですか？　こんな話」

このような話を信じるのか。至極当然の事である。だが「ここはそう言うところよ」と魔女は優雅に告げた。

第一章　ドッペルさん　二話

二

いつものごとくベッドの上に押し倒されていた。敷かれた布団を二人分の体重で限界まで押し付けて家庭教師であるところの遙さんは僕の股間と自分の股間を密接にして跨っている。怪しい笑みはいつものとおり勉強のあとの彼女が提唱するお楽しみタイムが始まって三分のことだった。彼女のなすがままにすると僕はあっという間に押し倒された。

「今日はね、最後だから大サービスよ」

そういって僕のシャツのボタンがひとつ、またひとつと外されていく。当然、僕は男なのでシャツの下には何も着ていない。彼女の指が乳首やら心臓の上あたりをくすぐってくる。もう慣れたはずのいつものスキンシップだというのにぞくりという背中に走る妙な感覚。指はそのままゆっくりとじっくりと這っていき二人の接点へと進行した。腰の辺りに差し掛かるとびくっとした。電気のようなものが走った。

「やっぱり可愛いわ。手放したくないわね、恭司くん」

「だったらまた来ればいいじゃないですか。遙さんが来たい時に」

「駄目、なのよ。決めたの」

彼女との行為はもう一年近く続いていた。限りなく性行為に近いスキンシップ。始めたのは彼女の方で僕はそれを受け入れただけだ。股間の接点へ指が到達すると今度は状態をまげて僕の胸に突き出したピンクの肉がぬるりと来る。纏わりつく涎がひんやりとさせたかと思うと肉の持つ暖かみが胸をくすぐる。そのまま首の方へと近づいてきた。

「ごめん。今日は仕事があるから首は駄目なんだ」

そう言うと口はぴたりと止まって左へと向かった。

「こんなことしてるって知ったら恭司のファンはどう思うのかしらね」
「知らないよ。ファンなんているかどうかもわからないでしょ」
「そうかしら？　ここ半年で恭司は見違えるほど……いえ、以前にもましていやらしくなったわよ。ああ、違うわね。男前になったわよ」
「それ、いくらなんでも違いすぎるよ」
「ふふっ。でも本当にいい男よ。このまま恵子さんの言われる通りにお手伝いなんかじゃなくって本格的にモデルや俳優を目指しなさいよ。きっと群がってくる女の子を着替えるようにとっかえひっかえできるわよ。男にとっては夢のような日々だと思うわ」
　耳元で囁く。「それって楽しいのかな」と返すと遙さんは「きっと楽しいわよ。女の子ってすごく抱き心地がいいのよ」と腕を広げて自慢した。今、僕の身体と密着している彼女は同性愛者である。いわゆる百合、レズと呼ばれる部類にはいる。そんな彼女が僕のような男に対してこういった行為をするのは彼女曰く異性に対しても興味があるのだということだ。同性愛者であり異性にも興味があると彼女は言う。それはバイじゃないのかと尋ねると恋愛対象には絶対にならないし恭司くん以外にはこういったことはしないと言った。つまり男の身体に興味があるだけなのだ。そしてそれは成熟した男ではなく成長途中の中学生を対象に興味を抱いているのだと告げられた。そんな告白をされたのは遙さんが僕の家庭教師になって一ヶ月ほど経ったころだった。単純に女の身体に興味があるかと問われたときに僕は世の中の男子十割がそう答えるようにありますと答えた。すると彼女はそのまま着ていた衣類を脱いでみせてくれた。はじめて見た女性の身体は細く綺麗だった。自分より四つも上のお姉さんだというのに頭も良くて運動もできるのに、彼女の身体は小さかった。全力で抱きしめたらきっと折れるだろうななんて考えた。ブラジャーのしたにある二つのふくらみは同業者の見せるようなものとは全く違っていた。大きくは無いが掌にすっぽりとおさまる。

どのくらいの力加減で揉めばいいのかわからないのでゆっくりと力を込めていく。これがまた凄くて力を込めると一旦は凝縮するのだがすぐに押し返されるのだ。それがやけに気持ちのいい物体で何度も揉んでいた。それが初日の事だ。それからずっと週に二回、こんなことが続いている。

その間、僕は一度もセックスをすることはなかった。それは遙さんが拒んだというよりできないと言ったから。事実、僕が彼女の股間に何をしてもどこをどうしても一切濡れる事は無かった。彼女は僕に謝るような事は一切言う事はない。

「私が男と寝る事が出来ないからよ」と言い続けた。

「さて、今日も一度だけ抜いてあげる。最後なんだから好きな方法を言いなさい。何でもしてあげるわよ。手コキでも足コキでもフェラでもなんでもよ、そうね……膝裏、脇なんでもござれよ」

「そんな選択肢を出されると僕はまるで変態みたいじゃないですか」

「あらいいじゃない。普通なんて一番つまらないのよ。ちょっとくらいヘンタイっぽいほうが私の好みだもの。ふふっ、なんならまたコスプレしてあげよっか？　バイト先の制服持ってきてるわよ」

遙さんは秋葉原にあるメイド喫茶で週に三日バイトしている。そこの制服は店の内容から解るようにメイドの衣装で黒を基調としたミニスカでふりふりなのだ。少し前に休日出勤になって制服を持って来た時がある。太ももまであるニーソックスと短いスカートの間にはなぜか男の視線を吸い込むブラックホールが存在していたのには大変、驚いた。世の中の男はみんな一緒なんだと遙さんは言っていた。

「じゃあ口でしてあげる」

初めてのとき、口でするのは嫌じゃないのかと尋ねたことがある。遙さんは僕の、男の性器を舐めるのは非常に面白いと答えた。「嫌悪しているわけじゃないの。人間として興味はあるのよ」と本人もその辺は良く解らないらしい。

彼女の口の中に入ると温いゼリーのような感触を下半身で感じた。

女性の場合、下の口がなんて台詞がエッチな本でよくあるが男の場合はなんていうのかな、なんて考えながら快感に溺れた。
「でもなんで今日で最後なんです？　また来ればいいじゃないですか。もしかして母さんにバレたとか？」
　スキンシップを終えて普段着に着替えると彼女は帰る仕度をはじめた。僕の出したものを味わいながら喉を降っていくところを見ているとどうしてか罪悪感のようなものがこみ上げてきた。
「単に生活が忙しくなるのよ。ほら、一ヶ月前に私の父さんが亡くなったって言ったでしょ。そのせいで大学を辞めるかもしれないのよ。来年の受験勉強を手伝えないのは哀しいけれどね。こればかりは仕方ないわ」
「そう、なんだ」と言って哀しくなった。
「なに？　哀しい？　もうオナニーのお手伝いしてくれる女がいなくなって淋しいのかしら、恭司くんは」
「そうじゃないよ」とちょっと怒る。遙さんはそうやって僕の感情に起伏を与えてくれる。そして優しく笑って家を出て行く。玄関まで送った。できれば家の前まで送るよと言ったが「どうせすぐそこじゃない。もし会いたくなったらいつでも来なさい。それにケー番だってしってるでしょ。でも抜きたいからって言うのはなしよ。そういうのは出来る相手を見つけなさいよね」と実の姉が叱るように言った。
　遙さんが夕焼けの道を歩いていく。これまでのことをいろいろと思い返したが結局、スキンシップの事ばかり甦ってきた。彼女の親とうちの親は友人関係にあるらしくきんじょでも交友関係の深い家だ。遙さんは都内、いや日本でも有名な立命館や東大と並ぶ大学に通っており僕が目指しているM高校の卒業生でもある。つまり僕がこれから歩むだろうとされる道を既に歩いた憧れの対象でもあるわけだ。そんな彼女は頭の悪い後輩をなんとかしようと家庭教師を買ってでた。平均以下だった僕の悪い頭を鍛えるには相当、大変だっただろう。けれど彼女の教え方は最高で僕は通っている中学で突如

トップクラスになった。この行為になにか応えられないかと思ったが残念ながら僕はまだ中学生でお金もなにもない。だから母さんのためにもM高校の受験には受かりたいと思う。

振り返って氷上の表札を見た。帰宅する時、学校へ行くときいつも思う事がある。今日なにをしたか、明日へ向けて何をするか。表札には恵子と恭司という僕の名前ふたつだけがある。父親の名前はない。遙さんは一ヶ月前に死んだといったがうちの家はもっと前だ。僕がまだ幼稚園にも入る前に交通事故によって死亡した。僕は父さんがどういった人だったか知らない。憶えてもいない。時折、母さんが似てきたわねなんて言うけれど僕にはわからない。氷上家が所有する唯一の財産はこの家だけだ。最近では東京の中にある古びた町並みだった景観も消滅し始め古い日本家屋は氷上家くらいになってきた。周囲の家、遙さんの住むアパートを含めて全て洋風になった。昭和以前の名残を残したうちの家はまるでタイムスリップしてきたような雰囲気があった。まぁそれは単純にお金が無くて改装なんて出来ないだけだ。と僕は思っている。でもそれとは逆にこの古臭さが堪らなく好きだ。そして玄関を空けて中へ入る。

風情溢れすぎる建築物となった家の中には誰一人いない。僕はいつものように台所へ向かってお茶を淹れる。居間には小さなテレビと書類がわんさかと置いている。書類は母さんの仕事道具の一つでもある。母さんは物書きをしており雑誌のコラムや小説を書いている。普段はこの一階にある居間でカタカタとキーボードを叩いている。取材や担当の編集者に会うため出かけることもある。今日は雑誌の撮影があり現場へ出向いている。そこへはこの後、僕も行くことになっている。

渋めのお茶で喉を潤すとそろそろだなと時間を確認。さて、行くかとバッグを持って家を出る。鍵を降ろすとがしゃんと大きい音を立てて戸が閉まる。夕暮れを背に駅に向かった。家から駅まで十五分もかかる。同じ東京でも都心とはえらい差がある。けれどそんなただ歩くだけの時間も嫌いじゃない。

僕の通う中学には部活をしないという選択が出来る。というのもちょっと前に部活しなければならないのはおかしいとそれこそ頭のおかしな親が学校へ講義し部活に対する姿勢を変えざるを得なかったわけだ。とくに素晴らしい成果を上げていた運動関係はなく文科系もとくに凄いという訳でもなかった為、学校側は自由にしてしまった。そのおかげで放課後は自由になった。僕はというと夕方の時間はほとんど家にいる。五時になると通っている塾へと出向くわけだがそれも毎日じゃない。

母の仕事の関係で雑誌のモデルを頼まれている。いつからモデルをやっているか自分でも覚えていない。母さんに言われるがままに始めたんだと思う。非常に曖昧だが僕がモデルをすることで母さんの評判がまたよくなるわけだ。それならそれでいいや、と続けている。そう僕は氷上恭司ではなく氷上恵子の息子として見られることが多い。僕としては受験期間を除いては頼まれる限りはやっておこうと決めている。

駅につくと新宿駅までの切符を買って一番最初に来た電車に乗った。帰宅途中の高校生や同学年らしい中学生が電車の中にはわんさかといた。同じ年頃でも随分と僕は違っている。そりゃ年相応の背丈でもなければ顔つきも違う。よく大学生かと見間違われる。だからモデルとして仕事が来るわけだ。僕自身も自分の事は気にいってる。といってもナルシストじゃない。普通に嫌いじゃないということだ。

電車は夕暮れの赤い町を横切って新宿についた。まだ日は落ちそうにもない。ゆっくり脚を動かして歩く。混雑する駅のホームを抜けると携帯電話で時間を確認した。最近買い換えたばかりのメタリックブルーの新型が表示していたのは十六時三十分。撮影スタジオに集合する時間まであと一時間半もある。おそらく母さんも新宿にきていないだろう。スタジオに行っても邪魔になるだろうしどこかで時間を潰そう。

適当に歩いているとコンビニがあった。外から見ると何人も横に

並んで雑誌を読んでいる。サラリーマンというのは立ち読みが本当に好きなようだ。スーツ姿の男が全部で七人一斉に雑誌や漫画を読んでいる。それは非常に不気味だった。僕も並ぼうと思ったけれど入る隙間が無いのであきらめる。

次は書店だった。立ち読みするならこっちのほうがいいか。コンビニより種類も多いので入ることに決めた。どういうわけか、コンビニよりも人の数は少ないように思えた。広いはずの店内がそれにも増して広く映る。僕はファッション雑誌のコーナーへと直進してこれから撮影する雑誌の名前を探した。

雑誌の名前は「リリィ」というらしい。女性誌という名目は無いが記事の内容からすると女性雑誌に分類される。男が見るような特集は組まれていないようだった。表紙には黒い髪の女性が載っていて大きく美耶子最誕などと書かれていた。やけにキラキラしている表紙を捲ってみると中はけっこうシックで表紙の女性のインタビューが載っていた。

インタビュー中の写真らしき物が掲載されているがおせじではなく本当に綺麗な人だと思った。三枚のしゃしんがあるがどれも笑顔らしきものはない。が、よく見れば彼女の口元が少し、ほんの少しだけ笑っているのだと感じた。なんというか笑顔ではなく微笑みだと感じる。そしてなにより驚いたのはインタビューをしている女性はあろうことか僕の母だった。そういえば母さんが言っていたことを思い出した。最近、お気に入りのモデルがいるとかどうとか。多分、彼女の事なんだろうな。

しばらくリリィを読んでいるとお客が増え始めた。さすがに男が読むような雰囲気ではないなと空気をよんで場を去ることにした。それというのも誰かに見られているような気配がしたからでもある。店員の目が気になったのかもしれない。

漫画の単行本が平積みにされている場所をとおり文庫本コーナーへと入る。なにか読みたいようなものはないかと新刊を見てまわったが特に欲しいものがなかったので書店を出る事にする。まだ時間

はあった。
少し歩くとまたコンビニだった。今度のコンビニは小さかったが本を置いてある場所には誰もいなかった。丁度いいのであと少し時間を潰しておこう。するとまたあの女性の表紙が目に入った。売れているのかな、と手を伸ばした直後、僕の手が白く小さな手と触れた。
「あっ」
触れた指先はすぐに引っ込んだ。その先にはどういうわけか極上の美女が立っていた。学校の帰りなのか黒いセーラー服に赤いネクタイという格好をしている。上品過ぎるほどの容姿と相まってお人形のような姿だ。でもなによりその制服はよく知っている。何年か前の遙さんを思い出した。よくこの制服で家に来ていた。M高校の制服だ。極上の美女は学校指定のタイツも穿いている。
「ほ、ほしいの？」
一歩下がってそう言った。なぜか引き気味だ。それもそうか、女性雑誌に手を伸ばす男って不思議だもの。
「いえちょっと気になってただけ、だから」
彼女が顔を伏せるようにすると前髪が邪魔をして表情が見えない。できれば引かれたくは無い……がそれは無理なんだろうな。彼女は「いいのよ、私もちょっと気になっただけだから」と言って僕に雑誌を強引に押し付けた。それを持つと彼女はそのままコンビニを走って出て行ってしまった。悪い事をした、ような気がした。でもなんて綺麗なんだ。それもそうだ。走っていく時の脚の動きが一般人とは違っていた。自分の身体中心に脚の着地点をあわせている。モデルの歩き方だ。もしかすると僕と同じようにモデルの仕事をしているのかもしれない。僕の身長が百七十とすると、彼女の背が同じくらいだったからありえない話じゃない。いや、モデルよりも女優の卵なのかも、と妄想は尽きない。
「なにやってるんだ、恭司」
「べつに何もしてないよ」と振り返って言った。僕に声をかける男

子というのはほとんど決まっている。その場にいたのは中学のクラスメイトで親友の東堂夙夜だった。僕とは違ってレジで支払いが終っているらしい。どっさりと買い込んだパンを入れたレジ袋を持っていた。

「仕事熱心だな」と言うのでどういうわけか考えた。僕の胸元にはさっき極上の美女に渡されたリリィがあった。夙夜は僕がモデルの仕事をしている事を知っている。彼の身長は丁度、雑誌に目が行く程度だ。百六十くらいだろうか。どういうわけか年下の僕のほうが大きい。夙夜はクラスこそ一緒だが小学校のころに二年間、事故と治療でブランクがある。僕が十四歳で彼は十六・本来なら高校生だ。

「今からこの雑誌の撮影があるんだよ」

「なるほど、俺も仕事なんだ」

「解ってるよ。やっぱり今日も遅いのか？」

「当然。多分、一緒に帰るのは無理っぽいな。新宿からまた移動するだろうしな」

夙夜は新宿駅近くでアルバイトをしている。雇い主はお互い共通の友達である白瀬トオルの叔母で洸敷千影さんという美女だ。一度だけだが会ったことがある。どういうわけか僕らの周りには美女が多い。大変喜ばしく思う。その千影さんの元で万屋……何でも屋のような事をしているらしい。金目的なのかと聞いた事があるがそんなことは絶対になかった。夙夜の家は大変な金持ちで世間で言うセレブになる。日本国内では名前を出しても微妙なのだが海外、特に英国、欧州では有名なホテルの会社を経営しているらしい。その割に夙夜はそんな事とは無縁なように僕達と変わらない学生だった。すぐに仲良くなった僕は数少ない友人である。

「まぁいいや。それよりその胸にいる人って曽我部美耶子だよな」

「そうだね」

「もしかして今から会うのか？　綺麗だよな」

「知らないよ。詳しく聞いてないからね、どうしたの？　珍しいじゃないか夙夜が女に向かって綺麗だなんて」

「羨ましいな、と。年上のお姉さんって最高だもの」
「夙夜がそんな事を言うなんてますます珍しいな」
「好きな人に似てるんだ。容姿がね、だから結構お気に入り」
「京都の」と言うと肯いた。
夙夜は休みの日になると度々京都へ行く。その理由は女絡みである。詳しくは聞いていないがどうやら好きな人がいて会いに出かけているらしい。それが結構な回数だと聞くところ、そこはちょっとだけ普通の庶民とは感覚が違うのかもしれない。そんなに関西に出かけるお金は持っていない。
「恭司も好きだろ？　黒髪の美女って」
「好き、なのかな」
自分でも良く解らないな。女性の好みはこれといってない。まだ人を好きになったことはないな。初恋ってしたことがあるのかすら不鮮明だ。多分無いな。遙さんはあいったことをしたけれど彼女に対する思いというのは憧れや尊敬だ。それも女性という部分じゃない。
「おっと、そろそろ行くわ。あんまり遅いと怒られる」
「そうだね、僕もスタジオに行くよ」
そう言って僕達はコンビニを中心に逆へと歩きはじめた。
撮影スタジオはざわざわと賑わっている商店が並ぶ大通りから三つ外れた場所にある。周囲には駐車場が多く存在し特に目立つような店は無い。出勤、退社の時間なら駐車場を利用している人たちが歩いているが今日はそうでもないみたいだった。スタジオは外から見るとやけに無骨でコンクリート剥き出しの壁に囲まれている。重い扉を開けてはいるとすぐに地下へと階段が続いている。一階には受け付けだけが存在している。僕は入館許可証をみせて降りて行く。降りるとスタッフの人たちが大声を上げていた。カメラマンの大沼さんが僕に気づくと「まだ準備中なんだ」と言ったので待つことにした。このスタジオにはモデルの待機室もきちんと完備してあるのでそちらへ向かった。

「あら、さっきのイケメン君じゃないの」
びっくりした。
スタジオの暗い雰囲気を完全にぶち壊したのはさっきの極上の美女だった。彼女はコンビニで会った時とは全くの別人のように笑顔で僕を迎える。並べられている壁掛けの鏡を前に彼女はメイクをしていたようだ。彼女と会うのはこれで二度目のはずなのになぜか他にもどこかであった事がある様に思えた。
「どうも」
「緊張しなくてもいいわよ。隣り座りなさいな」
ぽんぽんと彼女は隣りの回転椅子を叩く。今回は僕が声がまともに出なかった。拙い返事だったと自分でも思う。彼女の言うとおりに隣りの椅子に腰をおろした。
「メイクしてあげましょうか？」
荷物を降ろしている最中、とつぜん言われた。
「大丈夫です。あとで母さんがやってくれますから」
「母さんって？」
「僕、母さんの手伝いでモデルやってて、いつもメイクは母さんがするんです。他の人にさせると怒るんですよ」
彼女は僕の言葉のあとしばらく何かを考えるように黙った。そして「もしかして」と話をつなげた。
「恵子さんの息子さん……の恭司くん？」
「そうです、けど」
彼女が身を乗り出してこちらを見る。黒髪の下にある美しい顔が数センチ先にまで押し迫ってきた。子供っぽい仕草に思えたがそんなことはない。子供の無邪気さではなく大人の余裕というのが内面から伝わってきた。遙さんに似ているなと思い出した。「へぇ」となぜかニヤニヤする。その次は足先からじーっと見上げていく。
「なに？」
「なにって観察しているのよ。あの恵子さんの息子さんがどういった男の子なのかをね。う～ん、顔はまぁ良いわね八十点。現代のイ

ケメンと呼ばれる芸能人と並んでいるわね。髪型もまぁ……似合ってる。真面目で優しい優等生といったところかしら。学校でモテるでしょ」
「どうかな、自分じゃわからないよ」
「でも身体の出来がイマイチね、四十点。細身であっても適量の筋肉はつけなさい、服の上からでも貧相なのがわかってしまうわ。それじゃいざという時、女の子を護れないわよ」
会ったばかりの、それも知り合いの息子に点数をつけるのってどうなんだ。言いたい放題な彼女を見ていると美女からわがままなお姫様にさえ変貌を遂げていくようだ。
「……最後に眼の形がお母様にそっくりね。百点よ」
いろいろと言われたけど許すことにする。
「あのさ、そうやって人の採点するのっていつものことなの？　ええっと……」
そういえば僕は彼女の名前も知らない。自己紹介はなしで進んでいたことに気づいた。
「もしかして私の事、知らないのかしら」
「知らない」と告げると雑誌リリィを渡された。「表紙」と短く呟いたので見ると曽我部美耶子が載っている。交互に見る。ああどこかで見たことがあると思っていたらと納得できた。
「曽我部美耶子さん」
「フルネームでどうも。氷上恭司君。私のことは美耶子でいいわよ。苗字で呼ばれるのは好きじゃないの。呼んだら承知しないわよ」
指をびしっと差される。しかし彼女の瞳がウインクして憎さマイナス百点、可愛らしさプラス百点になった。
「点数の事だけどね気に入った人にだけするわ。嫌だった？」
普通、嫌です。けれど首を横に振った。でも彼女は悪気があるように思えない。人を貶すならもっと違った表現をしたほうがいいんじゃないかな、と言いたかったが多分僕が言ったところで彼女は変えないだろうな。彼女はバッグから出したミネラルウォーターを口

に含んだ。
「母さんとは知り合いなの？」
「そうよ。以前、ちょっと仕事で一緒になった事があったの。私、ここ半年は休業していたんだけど彼女に誘われてまたはじめるようになったのよ。いい人よね、私なんかに才能があるっていうんだもの。お母さんの事好き？」
照れる事はなんかない。僕ははっきりと頷く。彼女も嬉しそうに笑った。はじめて見た笑顔だった。
「そういえば私の事知らないなら教えてあげよっか？」
「知ってるよ。美耶子さんだって解ったからそういえる。実はここへ来る前にこの雑誌呼んだんだ。さすがにいきなり目の前に現われると解らないもんだね」
「そう、そうね。あのインタビューどう？」
「どうと言われても……よかった？　よ」
また沈黙。視線が定まっていないのかあちこち見回して声を出す。いちいちリアクションがおかしい。その不思議なところが魅力的な女性だ。
「私ね、ああいったことは好きじゃないの。ほら、私ってヘンでしょ？」
自覚はあるんだな。不思議ちゃんとかじゃないようだけど。天然ボケなら手におえない。どれだけ一目惚れしたっていっても帳消しに出来るんじゃないかと思えるスキルだ。
「人と話すの苦手なのよ。でも恵子さんに言われたの。モデルの仕事なら人と話すことが仕事ってわけじゃないって。恵まれた身体を武器にしなさいって言ってくれたの」
「仕事って高校は？」
アルバイトじゃないのかな。今も彼女は制服を着ている。それも僕が目指しているM高校のものを。
「当然、通ってるわ。見たでしょう私の制服姿。綺麗だった？　図星みたいね。高校は行けってお父様から言われていてね、仕方なく、

仕方なーく通ってるのよ」
「M高校は仕方なくで通えるような所じゃないよ」
M高校は都内最高クラスとして有名だ。例え中学の頃、学年トップだったとしても入学すればすぐに平均の仲間入りと塾で聞いた。
僕の言葉に彼女が笑った。いや、嘲笑った。
「例え都内最高クラスって言ってもね、結局は日本の学校なのよ。でもそんな事知ってるってことはもしかして目指していたりするのかしら？」
彼女は目つきがやけに刺々しい。そして言葉がきつい。おまけに笑い方はふふっと優越感に浸っているようなお声。
「それでも僕は必死に勉強して入試に控えてるんだ」
ちょっと頭に来た。声が大きくなったかもしれない。いや卑屈になって聴こえたかもしれない。けれど彼女は「知ってるわ」と返してきた。
「伺ってるのよ、恵子さんから。恭司はいつも勉強ばっかりしてるって。綺麗な家庭教師もいるんでしょ？」
恥ずかしいな。
「確か家庭教師さんはもうじき辞めるんじゃなかったかしら？　どうしてもっていうなら高校受験手伝ってあげましょうか？　私と繋がってるって面接で言えばそれ相応の対処もされるわ」
「なんで？」
「私の家、あの高校では有名だもの。なんていうのかしらＶＩＰかしらね」
「そういう卑怯なのは遠慮します。第一、まともなお手伝いじゃないよね」
「じゃあまともにお勉強して入れるの？」
「入ってみせるさ。そのためにずっと勉強漬けなんだ、できなきゃ時間がもったいないよ」
僕がそう言うと彼女は「それは避けたいわね」と言った。話の隙をつくように待機室のドアがいきなり開いた。

「入るわよ」
どうやら仕事の開始時刻のようだ。母さんがやってきた。仕事に出かけていたのかスーツ姿でいる。すぐに僕の隣りにいる曽我部美耶子に気づいた。彼女もまたすぐに立ち上がりお辞儀した。
「お久しぶりです、恵子さん」
「美耶子ちゃん、綺麗になったわね。恭司、もう挨拶はした？」
「ええ、とてもいい子ですわ。恭司くん」
さっきまでとは大違いだ、どうやら母さんのことを好いてくれているのは嘘じゃないようだ。入ってきたばかりですぐだが母さんがメイクの道具を取り出す。まるで釣りで使うあの大きなバッグの如く大きなボックスを化粧台において僕のメイクに取り掛かる。すると当然だけれど僕は話すことが出来ない。母さんはメイクに集中し始め隣りにいた美耶子さんは時折、母さんと話すだけになった。まあこんなもんだろう。
メイクが終るとすぐにスタッフが駆けつけてきた。僕たちは撮影スタッフに言われるがままだった。そのまま仕事は何事もなく進み終わった。なんてことはない、いつものとおり渡される服に着替えて写真をとるだけ。ただ今回は女性向けだったため僕の出番はほとんどなかった。これなら何も僕じゃなくても良いんじゃないかなと思う。母さんにそれとなく聞くとなんでもこの雑誌のスポンサーからのご指名だったようだ。そのスポンサーがどこで僕を知ったのか疑問だけどおそらく母さんが言ったんだろう。歩く宣伝みたいなものだから。
「それじゃあね、恭司くん。おつかれさま」
「お疲れ様です」
「また会えるといいわね」
最後の笑顔は嫌味もなにもなかった。ただ彼女に対して綺麗だという印象しか与えてくれなかった。そして彼女の身体からは甘い香水の香りがした。社交辞令だとわかっていてもやはり嬉しい。あのキツい言葉遣いとは違うこの雰囲気。やっぱり卑怯なくらいの美人

だ。
「悪いけど母さんはまだ仕事なのよ。先に帰ってなさい」
また言われるがままに動く。だけどここに残ってもすることがないし迷惑になる。それに少しでも勉強時間を増やしておきたい。今日は塾に欠席届をだしているし今から行っても間にあわない。仕方なく家に戻ることにした。スタジオを出るとひんやりとした風が身体を包んだ。一人きりになったと思い知らされる。新宿駅までの道のりを歩く中、僕は遙さんのことを思い返していた。スキンシップと称してやっていたこと、M高校や大学のこと色んなことを話した。その人は今、近くに住んでいるのに遠くに行ってしまったようだ。
また同時に曽我部美耶子のことを頭に描いていた。撮影中の最中、服の着替え中にちらりと彼女の裸身が見えた。「見た」ではなく「見えた」である。決して故意じゃない。そのときこれでもかと真っ白い肌に僕は視線は釘付けになった。夕方、一度射精しているというのにだ。
あれだけの美人でスタイルも最高ならやはり彼氏はいるんだろう。雑誌の特集ではそういったことは書いていなかったけれどそれは誰でも書かないだろうから不思議じゃない。だけどあの話し方は独特だな。ユニークって言えばそうだけどどうも棘がある。きっと彼氏は大変だろう。
「よう恭司！」
新宿駅の前でまた夙夜が立っていた。今度は何ももっていなかった。買出しじゃなさそうだ。夙夜はこちらへと近づいてくる。なぜかな、周囲を見回して何かに軽快しているように見えた。といっても泥棒が低姿勢で首を左右に振るような素振りはなく視線だけ動かしてクールに歩く。
「仕事は終ったのか？」
「さっきね。どうしたの？」
「なんでもないよ。ちょっと気になることがあってね、今日ヘンな奴見なかったか？」

何を基準にヘンな奴なのか。ここは新宿だ。ヘンな奴ならごろごろいる。たとえばすぐそこのベンチに腰掛けているおっさん。見かけは普通だけど目がおかしい。濁った瞳が動かない。その視線の先には金融会社の看板がある。その隣りには今にも下着の見えそうなギャルが数人。露出度が高いああいうのは簡便被りたい。

でも夙夜が捜しているような人は僕は見ていないはずだ。「見ていないよ」と告げると夙夜は辺りを見回すと行ってしまう。どうやら買出し途中ではないにしろ仕事中だというのは変わらないみたいだ。そんな夙夜は僕の事などすぐに忘れたように仕事へ戻っていく。いつものことなので気にすることも無い。僕からすれば親友にあえただけラッキーなんだ。

第一章　ドッペルさん　三話

三

電車の中でも家への道も風呂に入っている間も眠るまでずっと「また会えるといいわね」と言った彼女の顔が頭から離れなかった。僕もまた会えるといいな。

二人の女性が頭のなかでぐるぐると回っていた。せっかくの週末はどういうわけか気分が優れなかった。

金曜日、空はまるで僕の頭の中がそのまま出てきたように曇っていた。遙さんは当然のように僕に連絡をしてくることはなかった。彼女のいない部屋は空虚なものだ。勉強机に向かう事も無かった。学校から帰るなりベッドに倒れこんで天井を見た。携帯電話のメモリーをじーっと見つめているだけで気づけば一時間が過ぎていた。彼女のことをこれだけ意識したのは初めてだった。こんな思いが続くなら一度アルバイト先のメイド喫茶にでもいってみようと思った。そして気づいた、そういえば一度も行った事が無いことに。秋葉原に行った事は殆ど無かった。何度かＣＤを買いに行ったが正直いうと圧倒された。路上にはアニメかゲームかの可愛いキャラクターの大きな看板がどこの店の前にも置いてあってそこら中にメイドのコスプレをした呼び込みがいる。店の中からはまたアニメの曲らしき音楽が鳴り響いていた。僕は人込みに付き合いきれなくなってすぐにダウンした。もう一度行く気にはならないな。

土曜の朝は寝坊した。いつも乗っている電車に乗り遅れたがそのおかげでトオルと会った。別の中学校へ通っている。彼と朝出会うときは決まって僕が寝坊した時だけだ。べつにトオルの始業時間が遅いわけじゃない。ほぼ、一緒だ。簡単にいうとトオルはどんな事どうでもいいらしい。彼に言わせると僕は真面目すぎるらしい。電車のなかで少しだけ放したがまた女子が僕の事を噂していたと言っ

てきた。どうやら少し前に撮った写真が掲載されたらしく評判がいいみたいなのだ。周囲ではそういった話を聞くらしいが本人に話が来ないのは同いう訳なんだろうか。
「告られたこととか無いのか？」
「ない、とは言えないな。でもそんなにしょっちゅうじゃないよ」
「回数は問題じゃねぇよ。で、付き合ったのか？」
「無理。なんていうかそう言う気になれないんだ」
トオルは僕の返事に勿体無いと言った。でも、好きでもない女の子からの告白で付き合うようなことは無いだろ。第一、僕はその子の事を何一つ知らなかったんだと続けた。すると「そっからはじめるんじゃねーか」なんて言う。僕はそんなトオルに「そっちこそモテルだろ？」と言うと「オレの場合、兄貴がな」と下を向いてしまった。深く聞いたことは無いけれどトオルの兄は相当モテルらしい。家庭環境がごちゃごちゃしているらしく詳しくは聞いていない。そして会った事も無い。そんな他愛ない話をして電車を降りた。学校は退屈な授業ばかりだった。どういうわけか夙夜は休みだった。教師も知らなかったようで理由を知っている者はいるかと聞いていたが誰も応えられなかった。こういうとき、僕に話が回ってくるが当然、知らないと応えた。どうせ、仕事絡みだろうとは思うけれどそれは秘密だ。
「ねぇ氷上君。進学調査のアンケート書いてきてくれた？」
休み時間になると胸にメロン二つ詰め込んだような女生徒がやって来ていった。ここって中学校だよなと意味不明な衝撃に襲われた。同じクラスの女子かどうかも憶えていないその子はもじもじしていた。アンケートに関しては持ってきていたので渡す。
「ありがと」
子供っぽさが残る声だった。僕の顔を見ないように彼女は下を向いていた。その子が教室を出て行くとクラスメイト達がこちらへとやってくる。そのうちの一人が森下さんと言い女子の一人が美希ちゃんと言っていたので名前は森下美希なんだとわかった。毎年、ク

ラスメイトがランダムに入れ替わるし僕は特に女子と口を利く機会もないので彼女の名前が解らなかった。「どうだった？」と聞かれたが「なにが？」と応えた。何に対して答えを求められたのだろうかわからずに言うと女子達は深い溜め息と落胆の声をあげて散らばっていった。男子は「森下さん可愛いよな」と賛同を求めてきたので「ああ、そうだね」と言った。事実だった。肩までの髪はさらさらとしていて目なんかくりっとしていた。肩幅も狭く身体のラインは小さいのに胸だけは発展途上を越えて主張しまくっていた。けれど僕には彼女に対してそれほど興味は得られなかった。

僕はずっと美耶子さんを思い描いていた。遙さんのことを考えていても何も得られない。なら少しでもいい思い出を見ていたほうがいいと思ったからだ。クラスメイトとの話のあと思い出したのは「相手を見つけなさい」という言葉だった。あの言葉は多分、彼女を作ったほうがいいってことなんだろうな。

昼はすぐに訪れた。夕方まで図書館で一人、勉強をしていた。僕の実力ではまだM高校へ入学できるレベルじゃない。まだ一年あるけれどそんなものはあっという間だと最高の家庭教師さんは言っていた。大先輩の言う事は聞くのが吉。時間があるときは意識を向けて必ず勉強する。四時間ほど勉強して塾へと向かった。

日曜は朝からずっと家にいた。母さんは「せっかくの休みなんだから遊びに行けば」と言うが生憎、遊ぶ友達はいない。トオルとは友達だけど一緒にいると色々と人が増えてくる。夙夜はおそらく仕事でそれどころじゃないだろう。僕はずっとテレビを見て過ごした。夕方頃、携帯電話にメールが届いた。差出人はCDショップの店員、左近寺さんだった。内容は「リヴァイアサンの新しいCD入ったよ」というもので僕はすぐに「明日行く」と返信した。

リヴァイアサンというのはインディーズのバンドで二年位前から活動しているらしい。僕の周りではなぜかみんな聴いていてお勧めだと言われたのがきっかけになる。その後、勉強中に聴く事も多い。ライブにも何度か足繁く通っている。自分自身、よくハマったなと

歓心するくらいお気に入りだ。ショップの店員左近寺さんはトオルの紹介で面白い人だ。インディーズ音楽専門のショップというのは忙しくないようで彼はレジの隣りにモニターをつけていつもゲームをしていた。店に来る客は大体が知っている人物らしく盗みをやるような奴はいないよと言って笑っていたのも憶えている。

夕飯を食べた後はじっくりとリヴァイアサンの音楽に浸りながらドイツ語の勉強をした。M高校は日本語と英語の二つは出来て当然らしい。どこのエリート集団だよと最初は思ったものだ。そういえば美耶子さんはあの学校でどういうわけかとてつもない権力をもっているんだよな。と、何気なく思い返した。

僕の週末はこうして終った。何でだろうか心にぽっかり丸い穴が空いたようだった。

月曜日になるといつものように学校へ登校した。夙夜が学校へ来ていた。教室へ入るなり僕を連れだした。二人で屋上へ上がっていったあと少し話をすることになった。でも話の中身はたいしたものじゃない。やっぱり新宿の時と一緒で変な奴を見なかったかというものだった。

「どんな奴を捜しているんだよ？」

「そうだな、全く言葉を話さずじっと見ているだけの奴かな」

「それ、なんなの？　新手のいやがらせ」

「違うよ。まぁ見てい無いなら問題ないな」

「見たらどうなるんだ？　まさか死ぬのか」

「それはない。安心しな、死ぬ事は無い。それとトオルがまた言ってたぜ、あいつはモテすぎるって」

夙夜にもそんなことを話していたのか。「そんなことないよ」と僕は返す。夙夜は首を横に振って「やれやれ」と言った。

「まぁモテルかどうかは別として周りが結構気にしているんだ。彼女作ったらいいじゃないか。好きな子はいないのか」

僕は恥ずかしくなって「いないよ」と言った。その直後に予鈴がなって二人して教室へと戻った。この日の授業は滞りなく終った。

休憩時間に夙夜がさっきの話を振り返る事は無かった。僕と同じようにリヴァイアサンのＣＤを買うと言っていた。でも今日のところは行けないようだ。僕は一人でショップへと向かう事になった。
学校が終ると塾までの時間が一時間程度あった。すぐに駅に向かって走った。ショップは新宿駅の人通りが多いところから外れたところにある。まぁ人の多いところでインディーズ専門のショップが淘汰されずに存在するなんてまず無理なんだろうな。雑居ビルが多く並ぶなかでカラースプレーで見事なまでに落書きされた看板が一つだけ目立つ。両隣の店はＣＤショップのことを良く思っていないようだった。
ショップへ向かう途中には大きくて長い歩道橋がある。ビルとビルをつなぐ大事な役目をおびた橋だ。その橋から僕に向かって凄まじい光が放たれた。一瞬目が眩んで何が起きたのかパニックに陥りそうだった。なにかが反射したんだろうともう一度橋を見ると誰かがこちらに向かって手を振っていた。橋の上には当然、その人以外にも人はいる。恥ずかしくないのかと思ったがその人物はどんな行為も美化してしまうほどの極上さをもっていた。
「お久しぶりね、恭司君」
慌てて駆け寄ると髪型を変えた美耶子さんがいた。以前はストレートだったのに今日はウェーブがかかっていた。撮影の帰りなのか制服は着ていない。Ｔシャツの上に軽そうな薄いジャケットとジーンズというラフな格好をしていた。それでも充分に色っぽく特にその胸から腰のラインにかけて芸術のような曲線をみせていた。
「髪形変えたんだ」
「これ？　違うわよ。さっきまで撮影だったの。そこでストレートじゃあわないって無理やり変えられたのよ」
そう言って話す彼女の手にはさっき光を反射差せた物が握られていた。丸い長い棒みたいだった。
「なぁに、じっと見て。そんなに珍しいかしら。ライフル用のスコープって」

「なんでそんなもの持ってるの？」
「私の趣味なのよ。モデルガン。女の子達からはおかしいって言われるけどね。でも堪らなく好きなの、ターゲットをスコープで狙っているとき、引き金を引く時の機械が軋む音。他にもスポーツカーやパソコンなんかね。どうおかしいでしょ」
「そんなことないよ」
「あら嬉しいわね。で、本音は？」
「ちょっと変かな。でも僕は好きだよ、だってみんな一緒じゃつまらないでしょ。興味を抱く対象なんてのは人それぞれじゃないか」
「じゃあそんな恭司君はどんな物に興味を抱くのかしら？」
「そうだね、たとえば音楽かな。今もＣＤを買いに向かっているところなんだ」
そう言うと美耶子さんはするっと僕の腕に巻きついた。
「じゃあそこまで一緒に行きましょう」
それはいいけど胸が当たっている。こういうのは言った方がいいのだろうか。でも腕に付き纏う感触はまるで美耶子さんの方から押し付けてくる感じだった。自意識過剰かな。
「どう、私の胸。気持ちいい？」
「はっ？　なにを！」
いきなりで越えが裏返ってしまった。まるで動揺しているみたいじゃないか。遙さんで免疫は充分出来ていると思ったけれどどうやら隙をつかれると駄目らしい。
「なにをって……あのね、この私が胸を当ててんのよ。少しは緊張とかドキドキとかないの？」
「し、してるよ。当然じゃないか」
「よかったわ。恭司君てあまり表情を表に出さないからどうなのか判断しづらいのよ」
「そう？」
「そうよ。今だって私の胸が当たっててもも顔色変えないじゃない。もし正常な男子なら股間を抑えて前かがみになるべきよ」

「それどういう理論だよ」
「だって童貞でしょ？」
「そりゃそうだけど、僕の年齢でアンケート取ったら大部分が童貞だろうね。もし否童貞がいたらそれはそれで危ないよ」
「あっさり認めるのね。男子ってそういうの恥ずかしいんじゃないの？」
「普通は女の子が恥ずかしがるんだけどね。僕の場合、そんなことどうだっていいのかもしれない」
「自分の事でしょう。ま、恭司君みたいに格好良かったら余裕も出るでしょうね」
　こんな下世話な会話を続けながら僕は目的のショップへと辿り着いた。さすがにお嬢様な美耶子さんはショップの看板を見て落胆とショックを隠せないようだった。なんというか見世物小屋でも見るような感じで店に入っていく。するとすぐに強烈な爆音が響いて心臓が跳ね上がる。店の中は店員である左近寺さん直筆のプラカードがわんさかとぶら下がっていてそれこそ全部のＣＤに解説が加えられていた。
「いらっしゃい！　誰かと思えば噂のイケメン君じゃないか！　おやおやおや～今日は彼女連れかい？」
「彼女？違うよ。モデルの仕事仲間だよ」
　腕を握っていた力が急に強くなったように思えた。それに美耶子さんは左近寺さんから隠れるように縮こまっていた。言っちゃ何だがＭ高校の生徒がこんないかにもな店に来る事はないだろう。外見もそうだがちょっと低俗すぎる。左近寺さんもいるだけで電灯代わりになれるほどの金髪に革ジャンを着ている。しかも首にはぎらぎらと光る棘のようなアクセが巻きついている。
「いやいやご両人、なかなかのお似合いですぜ。いやぁ～やっぱりモテルね～」
「そんなことより」
　バッと右手で僕の言葉が止められた。「解ってるよ、解ってます

よ」と言ってCDを差し出してきた。ジャケットには青い龍が水面より飛び出す画がプリントされていた。僕はすぐに財布を取り出して料金を払った。美耶子さんは僕の腕から放れることがなかったのでちょっと面倒だった。その時、美耶子さんが気分を悪くしてそうに見えて僕はショップをすぐに出た。

「またね～」

屈託の無い、ストレス一つなさそうなあっけらかんとした笑顔で左近寺さんは見送ってくれた。「大丈夫？」と声をかけると小さく肯いた。また歩道橋のところまで来ると美耶子さんが急に立ち止まって僕から離れた。

「私、用事があるから帰るわ」

唐突に振り返って彼女は歩いていってしまった。声を出す直前、何かに気づいたようだったけれどそれが何なのか僕は解らなかった。周囲を見回しても何か変なものは無かった。ともかく彼女を送ろうにも時間がなく僕は塾へと向かう事を余儀なくされた。

夜、美耶子さんのケータイに電話しようかと思ったが塾でちょっとした噂があって鬼になっていた。高等部になにやら凄い美人が来ていたらしい。中等部ではその美人を一目見ようといつもは勉強ばかりやってるガリ勉までもが浮き足立っていた。それとクラス委員長の森下さんが一緒のクラスにいたことに気づいた。今までずっと一緒だったらしいが僕は気づかなかった。

家に帰ると僕は寝るまでずっとCDを聴いていた。非常にソフトな楽曲だった。以前のCDは比較的ハードなロックばかりだったが今回は色々と挑戦したと書かれていた。また、近々大発表があると告知されていた。

美耶子さんとの出会いからもうすぐ一週間が経つ。それはつまり生活の変化からそれだけの時間が経ったと言う事。部屋での勉強は思うようにはかどる気配は無かった。やはり一人きりでいると息が詰まる。でも受験への意識がなくなったわけじゃない。夕方まで学校へ通いその後は塾へ向かう。家に帰れば夜の十時に近づくような

文字通り朝から晩まで一日中勉強漬けになっていた。
学校から塾へ向かう途中の事、妙な感覚に苛まれた。どういうわけかずっと誰かの視線を感じていた。とにかく一人きりで歩いているとずっと誰かがこっちを見ているような感覚だ。それが肌を刺激して鳥肌が立った。これが自意識過剰ならそれでいいんだがどうも気分が悪い。
視線は塾の中へ入ってしまえば感じなくなった。被害もあるわけじゃないから放っておけばいいだろう。通っている塾では最初から今年何度目になるかわからないテストを終らせた。もうすぐ夏休みになる。そうなれば塾の授業も長くなる。今は夏期講習前の実力査定になるため時間的には早く終る。もう夜の八時になりそうだった。家に帰ればいつもより一時間ほど早く着く計算だ、今日は早く帰ろう。そう思って荷物を纏め始めた矢先、エレベーターの前では大量の待ち人がいた。どうやら高等部も授業が終ったらしい。みんなあきらめて階段を使っていた。仕方ない、僕も階段で降りようとした時、踊り場で声をかけられた。
「ねぇ、氷上君」
振り向いたそこには僕を追いかけてきた女子がいた。走ってくるその間、激しく上下するその胸のふくらみに言い知れぬほどの刺激と感動を得た。クラス委員長だった。
「なに？　えぇっと……森下さん」
彼女とこうやって話すのは実に初めてのことだ。というよりあの一件が無ければ彼女の名前も知らなかった。こうやって名前を呼ぶことも出来なかっただろう。彼女は前方への成長は群を抜いているようだが上へは止まっている。僕の場合上への成長が多い。つまるところ彼女こと森下美希さんを見下ろしている訳だ。おかげで全てを吸い込むブラックホールいや違うな落ちれば抜け出せない底なし地獄の如く暗闇が見える。その暗闇は衣服の隙間から見える双璧のことだ。
「よかった。私の名前、憶えてくれてたのね」

「まぁね。森下さん、僕に何か用？」
「そんな言い方ないんじゃない。まぁいいか、氷上君あんまり人付き合いよくないし」
ちょっと冷たい言い方だっただろうか。僕自身では普通に言ったつもりなんだがどうやら彼女はそんな風には聴こえなかったようだ。
「はっきり言うね」
「私ね、けっこう氷上君のこと見てるからこの程度のことを言っても嫌われないって知ってるの。それにしても学校一の人気を持っていても本人にその気が無かったらこんなものなのかな」
今度は胸を張って言われた。心底その胸の大きさに度肝を抜かれる。確かに嫌いにはならない。打たれ強いのかな。それともまさかMなのか。美耶子さんとの会話中もけっこう酷い事を言われてなんとも思わないし……自分の今後が危ぶまれる。
「でねでね、本題なんだけど、もしよかったら今週の日曜日、一緒に勉強でもしないかな～って思っちゃったりするんだけど、どうかな？」
なぜ一言ずつリアクションを起こすのか？　森下さんは再び上目使いになると左右に体を振る。揺れる揺れる。
「えっと何で僕と？」
冷静に返す。顔色は変えないように。
「ん？　氷上君の志望校ってM高校でしょ。だったら同じだな～って」
以前、志望校調査なるものがあってそんな話をしていた。当然ながら僕はM高校へ第一志望としている。第二、第三は適当に書いた。
「同じM高校志望同士なら敵じゃないの、なのに一緒に勉強？」
「氷上君って本当にM高校志望なの。あそこは男子と女子で合格人数が違うのよ」
「そうなの？　でもそんな事書いてなかったけど」
「あれ？　書いてなかったんだっけ？　父さんが言ってたから間違いないと思うんだけどな」

「お父さん何者？」
「教師よ。でもM高校じゃなくて大学だけどね。なんでも教師仲間にM高校の先生がいていろいろ聞いたみたいなの。たとえば今回はテストより面接が肝だとか」
「凄い情報だね、ふ～ん。でもそれでなんで僕と一緒に？　正直、僕と一緒に勉強してもあまり効率よくないと思うけど」
「効率の問題じゃないんだけど？　楽しいかもしんないよ」
「勉強だよ」
「そうよ、勉強。でも一人でやるより二人のほういがきっといいわ。協力する事で道が開くこともあるよ」
　積極的だな。森下さんは上目に僕を見て「どう？　どう？」と答えを迫ってくる。そこにはまるで勉強以外の目的がある様にみえた。これってもしかして……もしかするのかな。自意識過剰か。またかと僕は自分の中で頭を横に振った。
「で、勉強するのかな？　しないのかな？」
　首をかしげながらの行動へうつる森下さん。やばいな、可愛い。クラスにこんな子いたんだ。
「ええっと、特に用事は……」
「あら、恭司君じゃない」
　また声をかけられた。おかげで僕の返事はかき消された。グッドなのかバッドなのか解らない微妙なタイミングだ。ともかく声のしたほうへ目を向けると階段の上には美耶子さんがいた。今日はM高校の制服を着ていた。学校帰りなんだろうな。しかし一つ疑問がある。なぜ彼女がここにいるんだ？
「ねぇ、氷上君！」
　いきなりの事にびっくりして棒立ちになっていた僕を森下さんに引き戻した。そして彼女はバッグからささっとメモ帳を取り出して何か書き出した。
「なに？」
「これ！」

力強く僕に向けた。
「私の携帯電話の番号なの。もしよかったら返事お願い！」
美耶子さんが現われたすぐに態度が豹変したかのようにメモを僕に渡すと森下さんは階段を下りていってしまった。渡されたメモを見ると０９０から始まる電話番号が載っている。それをじっと見ていると降りてきた美耶子さんが僕の上から覗き込んできた。これまた超絶美人の横顔が現われる。
「もしかしてお邪魔だったかしら」
喋るたびに息がかかる。傍に来ると解ったけれどなんていい臭いなのか。香水かな。なにか柑橘系の匂いがする。
「別に。そんなことないけど……ってなんでここにいるの？」
「なんでって、学生が塾にいる理由なんてひとつでしょ。塾生だからに決まってるわ」
「だけど今まで」
「会わなかった、でしょ。同じ塾って言ってもここは高等部と中等部じゃ開始時間も終了時間も違うでしょう。でも私驚いてるのよ。もまさか一緒の塾に通っていたなんて思いもしなかったから当然よ。今日はエレベーターが混んでいたから階段を使って帰ろうとしただけよ。そしたらなにやら女の子と楽しそうに会話しているイケメンを発見しただけよ」
誰がイケメンだよ、恥ずかしいな。
「そのイケメンっていうのやめない」
「なぜ？　謙遜する必要ないわよ。恭司君はその言葉が持っている意味を見事現している最高の逸材ともいえるわ」
「煽てないでよ。それになんかそういう風に言われると逆効果だ」
「ならなんて言えばいいかしらね。草食系男子？」
「テレビとか流行に流されすぎじゃない？」
「テレビなら見ないわ。勿論、流行なんて知らないもの。モデルの仕事で皆使ってるのよ。嫌でも覚えてしまうわ。恭司君はテレビ見ないの？　ちょうど中二でしょ、お笑い番組に夢中になる時期じゃ

ない」
「僕は中二病じゃないよ」
「あらそう」
「そうです」
まったく。でもやっぱり彼女と話していて嫌な気分にはならない
そりゃこんな美人と話が出来るだけで幸せな気分になるっていうの
もあるけど。もしかすると僕は本当にM気質なのかもしれない。
「で、呼び方だけどハンサム君は？」
「続けるの、それ？　しかも昭和くさいよ。もう普通に恭司君でい
いよ。妙な言い方造られるのは勘弁してください」
「面白くないわね。私の父は相手にあだ名をつけて心底面白がって
いたわよ」
そっぽ向く。こんな事を云うのもなんだけど嫌な人だ。
「だからってイケメンや草食系っていうのは安易なんじゃないかな。
マスコミの印象刷り込みがすごいんだろうけど」
「言ったでしょ、私じゃなくて周囲よ。私はテレビなんてほとんど
見ないわ。それよりさっきの女の子、胸が大きかったわね。好きな
の？」
「なにが？」
「なにがっておっきいおっぱいに決まってるでしょ」
「そんな事聞いてどうするの？」
「おっきいのが好きなら私は毎日自分で揉むわ。揉んで大きくする
わ。普通くらいなら問題ないわね。でも小さいのが好きなド変態な
ら私はシカトするわね」
「なんで小さいのが好きだとド変態なのさ。大人の人でも小さい人
はいるでしょ」
「女からすれば好きな男がどういった胸の大きさが好きか興味ある
ものよ」
「それって」
「特に意味は無いわよ。でも恭司君のことはもっと知りたいと思う

わ。だって弄りがいがあるもの」
　顔色一つ変えない。もしかしてっと思ったが期待はずれか、なんて僕は何を期待していたのか。
「そこなんだね、普通可愛かったわねととかじゃないの？」
「普通、ね。私、普通なんて嫌いよ。普通が一番とか言う人がいるけれどあんなものは逃げてるだけよ。上を目指さない人たちの言い訳よ。結局他人が認めるのは一部の変人や奇人なのよ。で？　あの胸の大きな子は誰？」
「無茶苦茶言って、またそこなんだ。食いつくね、まぁいいや、クラスメイトだよ」
「そうなの？　彼女じゃないのね。がっかりね」
　美耶子さんは階段に腰をおろして座った。下品だと思ってしまったが美耶子さんの容姿がそんなことを完全に打ち消すオーラを持っていた。おかげで僕の目にずっと立ちっぱなしで疲れた女神が腰をおろしただけに見えた。
「なんでさ？」
「曲がりにも恭司君は私の恩人の息子さん。しかもその息子さんは性格こそ穏やかなれどルックスは最高なのよ。彼女の一人や二人侍らしていてもおかしくないでしょう」
「なんか僕のこと馬鹿にしてない？」
「してないわ、恭司君は馬鹿にしてもまるで動じないでしょ。ただ低俗な言葉では満足しないようだったから変えただけよ。恭司くんのことは気に入ってるのよ。ただの男なら相手にしないわ。そこらの石ころよ」
　容姿を褒めてくれるのは嬉しいけどどこか喜べない。
「ともかく僕のことはおいといてクラスメイトに一緒に勉強しないかと誘われてただけだよ」
「それって！　デートじゃない！？」
　女神が立った。座ったばかりの女神が立った。疲労などものともせずに美耶子さんはぐわっと飛び上がって言った。さすがにこれに

は驚いた。僕はあまりに食いつきが良すぎたので一歩後退してしまった。
「違うよ、勉強会みたいなもんだよ。でも、なんでそんなに驚くのさ？　さっきまでからかってたのに」
「お、驚いてなんかないわ。それで、するの？　しないの？」
なんだかな。今日はやたらこの手の質問を受ける。女の子はこういった話が好きなのか。答えを早くに求められるのも多い。たかが勉強を一緒にするだけなのに。いやたかがだからなのか。混乱しそうだ。第一この問題に美耶子さんは関係ない。
「美耶子さんには関係ないでしょ」
「冷たいわよ。年下の男の子に今、彼女が出来るかどうかっていうのは気になるものよ」
「僕は女の子と付き合うとか考えた事は無いよ」
「恭司くんって好きな女の子のタイプはあるの？」
言われても答えはない。第一、考えた事が無いんだ。いつも勉強ばかりだからそういうことに頭が働かない。周りは恋愛話に興味津々みたいだけど僕だけ違うみたいだ。
「困った顔するわね。じゃあ私なんてどう？」
「えっ！？」
いきなりで声が裏返ってしまった。すると「可愛い」と笑われた。
「あのね、からかわないでよ」
「で、さっきの子とはするの？　しないの？」
答えを求めるのはあきらめないんだな。僕の言葉が届いているのかどうか不安だよ。
「僕の問題じゃないか。そんなに聞きたいの？」
「聞きたいわ。だって恭司君とあの子なんだかお似合いなんですもの」
どういう風にお似合いなのか自分ではわからない。もしかして焼き餅か。いやまさか、そんなことはない。ないだろう。
「実際のところ決めてないよ。ただの勉強だって考えもあるしね。

明後日まで時間はあるし携帯電話の番号も持ってるんだから明日には答えるけど」
「はっきりしないのね」
「突然すぎたんだよ。だいたいこっちはクラスが一緒だってくらいしか知らなかったんだから。話をしたのだってさっきのが初めてなんだ」
「じゃあなに？　一度も話をした事のないクラスメイトが志望校が同じって理由に便乗してアプローチを仕掛けてきたわけね」
「そう……なのかな？」
「そうよ。わからないの？　鈍いわよ」
そんなに熱くならなくたっていいじゃない。ふと時計に目をやると九時だった。結局いつもと変わらない時間だ。家に戻ればいつもと同じくらいになる。これじゃ早く終った意味が無い。美耶子さんと会えたのは嬉しいけれどあまり遅くなるのはよろしくない。
「僕の心は傷ついたよ」
「軟弱ね」
「そう、軟弱なの。だから帰るよ。美耶子さんも早く帰ったほうが良いよ。最近は物騒らしいから」
「もう帰るの？　残念ね、私はもう少しここにいるわ」
なぜかわからず首をかしげると「迎えが来るのよ」と続ける。
「だから私はここを離れられないの。といっても後十分くらいだけどね」
そんなことを云われたら帰りづらいじゃないか。もう時間はいつもと一緒なんだからたった十分なら変わらないな。
「じゃあ……さ。もう少しい居ようかな。邪魔じゃなかったらだけど」
今度は美耶子さんが首をかしげた。
「だってほかの生徒は皆帰ったようだし一人っきりっていうのも嫌でしょ」
「一人は慣れてるからいいわよ。でもどうしてもっていうなら居て

もいいわ」
「わかったよ」
　別にそこまでして居たいという訳じゃないけれどここで一人っきりにするようなことはできない。だって今はどこも物騒だから。
「帰らないのね」
「どうしても居たいからね。それでさ、初めて会った時に言ってた勉強を教えてもらうって話だけど」
「したわね、断られたあの件ね」
「断ったのは裏から手を回すみたいな話さ。で、勉強ってさ。一人でやるより複数でやったほうがいいのかな？　さっきの話は置いといて」
　実際、大学にまで進学した遙さんと一緒にいた時のほうが今より捗っていたかもしれない。そうなると後の一年はペースが落ちるな。それは困る。
「家庭教師や自分より頭のいい人間ならいいでしょうね。でも同じレベルの人間が集まってやってもたいした成果は上がらないと思うわ。特に少しでも遊びを意識する人が一人でもいればそれは大変なことになるでしょうしね」
　美耶子さんはゆっくりと歩いて窓ガラスを見下ろした。僕も隣りに立つ。窓の下には塾帰りの生徒を乗せていく車がたくさんある。
「私のように上から教える事に素晴らしい能力を持つ人間なら勉強することに意義があるかもしれないわ」
「教えるの得意なの？」
「別に得意じゃないわよ。そういった能力に長けていると言ったのよ。中学の時なんかは同級生と勉強しているといつのまにか先生役になってたわ」
　高校の友達相手に教えたりしているのかな。なんだか凄いスパルタに思える。問題を間違えると鞭でビシバシって感じだ。
「じゃあ一緒に勉強するとかなり捗るの？」
「それどころじゃないわ。M高校の隅々まで知ることができるわよ。

なんていっても学生だからいろんなことを教えられるわ。それに教師全員への印象ＭＡＸよ」
「そっか、やっぱり一人でするよりもいいのかも」
「でしょうね。何事も一人でやるには限界というものがあるわね」
いい情報が入ったところで美耶子さんの鞄から聞き覚えのある音が鳴った。モーツァルトのジュピターだった。びっくりだ、僕の携帯電話も一緒の着信音なんだな。
「ちょっとごめんなさいね。なに？」
電話を取り出して再び驚いた。メタリックブルーの輝きが姿を現す。着信音だけじゃなくて携帯電話も一緒じゃないか。
「わかったわ。ありがと」
電話をきる美耶子さん。同じ物を使っているっていうのは偶然なんだろうけどちょっとびっくりだ。
「迎えが着たわ」
驚きながら下を見るとやけに大きな車が停まっていた。
「そ、そっか。じゃあ帰ろうか。アドバイスありがとう」
「お役に立てたのならよかったわ」
何にしろ、今日は一日の最後にとてつもないサプライズを得たことに満足する。しかし美耶子さんと出会う頻度が多いな。もしかするとこれまでに何度かお互いに見ているのかもしれないな。
「それじゃあここで」
塾の入り口で別れる。美耶子さんは塾の向かい側に停まっていた黒のメルセデスに乗り込むとすぐに行ってしまった。しばらくメルセデスが消えるまで僕は立ち尽くしたままだった。脚が動く事は無かった。急いでいたはずの帰宅はもうすでに意味がなく頭の中はいっぱいだった。
ただ偶然が重なっただけだ。美耶子さんとの出会いもケータイが一緒なのも全部、偶然。でもその偶然が何時まで続くのかな。けっこう自分の中で愉しみになっているなと自覚した。
何もかもに考えに答えを求めると僕の思考は停止したようにプツ

ンと途切れそうになる。気を失うわけじゃない。簡単だ、僕の意識は完璧に彼女に向いているだけの事だ。

翌日、学校で森下さんへ返事をしようとしたが彼女は欠席していた。もしかして僕からの返事を待って夜通し起きていたのかもしれない。そんな彼女は風邪をひいて欠席なんてことにでもなったのなと考えたがそれほど彼女が馬鹿なわけがないと首を振った。教師が言うにはそんな陳腐なことではなくどうやら彼女は両親の都合で近々、転校する事になって今日は学校へしばらく来られないのだと説明した。その言葉には驚いた。教師の話によると森下さんは両親の都合で東京から遠く離れた関西の方へ移り住むのだという。

なのに彼女は僕にいきなり接してきた。しかも進路希望も同じだ。彼女はどうしたかったのだろうか。僕は携帯電話に記憶させた電話番号を押せずにいた。

さらに翌日のこと、この否は創立記念日で学校は休みになる。当然、特別に宿題が出されてしまっただけだ。森下さんへの返事をうやむやにしたまま僕は呼び出された。「悪いけど宿題みせてくれないか」と僕を誘い出したのは親友こと夙夜だった。夙夜は僕の家に来た事が無いのでできるだけわかり易い場所を待ち合わせにしてきた。彼の家は僕の家から随分とはなれている。同じ東京でも住む場所は全く違っている。僕の家の周辺にはたいして施設と呼べるものが無いが一件だけ町の中心になる建物が存在している。図書館である。住宅街と繁華街を結ぶように存在する道に大きな庭園と一緒にあるこの図書館は近所の学生達の拠り所であり奥様方の憩いの場としても使われている。駐輪場へ自転車を止めて約束の場所へ向かった。

「わるいな」

「そう思うならちゃんと宿題しような。それとも仕事が大変なの？」

「そういうこと」

悪い悪いと笑う夙夜へノートを渡す。宿題と言うのは数学の問題集だ。おそらく僕の親友は貸したノートを丸写しする気だろう。問

題は無い。問題があるとするなら提出できなかった場合の居残り授業くらいか。その辺はきっちりとやる学校だ。
「それにしても宿題する時間もないのか？」
僕のノートをしまう夙夜。黒い革製のトートバッグにすとんと落ちる。
「学校があるなしに関わらず最近は一日中ずっと調査中だからな。とてもじゃないけど宿題なんかやってる場合じゃないんだ」
「前に捜してた変な奴のこと？　そいついったい何をしたんだ？」
少し間を置いてから答えてくれた。
「まだ何もしてないよ。したら大変なんだ。だから先に見つけたい」
夙夜の仕事について僕は深く知らない。もし必要なら教えるとずっと前に教えてくれた。別に絶対の秘密というわけじゃないと以前に聞いたが僕は知ろうと思わなかった。
「時間があったら少しは話も出来るんだけどな」
「仕方ないよ。お仕事でしょ」
二人してうなずいた。その辺はクールにいこう。子供のように駄々を捏ねるのはよくない。そして笑って別れる事にした。夙夜と少し話しただけで僕の気はまぎれた。
そういえばどういう訳かここへ来るまでに美耶子さんを見たのだ。家から図書館までの道のりに駅はない。当然、近所に住む人達以外に図書館を利用する人はいない。美耶子さんの家がどこなのかは知らないけれど近所じゃないはずだ。この辺りは極普通の庶民しか住んでいない。彼女の家のような華やかさは皆無だ。せいぜい日曜の昼にホームパーティーとしてバーベキューでもやるくらいだ。それに母さんの事だ、家に客として招いているはずだ。
美耶子さんは自転車で走っている僕をじっと見つめていた。声をかけようと近寄ったが生憎の赤信号で停められてしまった。そして車が遮った瞬間、彼女は姿を消していた。
まったく幻を見てしまうほどに僕はいかれてしまったのだろうか。それとも勉強ばかりに頭を使いすぎてノイローゼにでもなっている

のか。そういえば最近ではあの痛いほどに感じていた視線も和らいだように思える。
だけどせっかくだ、図書館へやってきたのだから少しは勉強しよう。図書館の中はほどよく涼しく空調管理がなされていた。中にはやはりというべきか学生が多く皆、机に向かって黙々と勉強していた。僕も同じように参考書を取り出して始める。いや、はじめようとしたんだ。
「あら恭司君じゃない。奇遇ね」
二度あることは三度あるという諺がある。けれど偶然や奇遇で済ませられない事もある。とくにさっき僕を無視して消えてしまったような人からそんな風に声をかけられると思ってもみない苛立ちのような感情が溢れてくる。
「約一週間で約束なしに四度も会えばもう奇跡に近いよね。それか狙ってる？」
美耶子さんは僕の目の前に立っている。さっきは無視したのに。僕が声をかけようと近寄れば逃げるのに。自分からは寄ってくる。そりゃ綺麗だし可愛いけど。
「そうかもね。でも限りなく奇跡に近い偶然もあるかも」
「よしてよ」
何でかな、いい気分にはならない。美耶子さんのことは好きなのに。根に持つような性格じゃないけれど彼女がとったという事に僕は苛立っていた。
彼女は黒髪に指を這わせながらに僕をからかうような笑みを浮かべた。
「じゃあ聞くけど美耶子さん、近所に住んでるの？」
「いいえ。私の家は新宿よ。ここから一時間はかかるわね」
「なら何でこんなところにいるのさ、僕を追いかけてきた？」
「そうだったら？」
「ならなんでさっき、いきなり消えてどっかに行くようなことするのさ？」

表情が変わった。どういう意味かわかっていないようだ。けれどあの姿形は彼女だった。じっと僕を見ていた彼女は僕の視界に入っていた。間違いない。
「なんの話よ」
「ここへ来るまでのこと。僕が自転車に乗ってここまで来る途中、じっと見てたでしょ。声をかけようと近寄ったのにすぐにどっか行っちゃったじゃないか」
「知らないわ」
「じゃあ僕も知らないよ」
美耶子さんに背を向ける。そのまま図書館から出て駐輪場へと向かった。ずっと彼女はついて来る。でも僕はどうしても今日、一緒にいたいとは思わなかった。「ごめん」と一言云ってから図書館を後にした。
後にしてから考えた。どうするべきか、と。このまま家へ帰るのは癪だ。自転車のハンドルを切って家とは別の方向へ進路を取る。幸いポケットには財布が入っているし荷物は参考書が二冊だけだ、たいして重くない。しかもまだ昼にすらなっていないのだ。だから駅に向かう。別の場所へ行けば少しは気が晴れるだろう。勉強する気分じゃもうないんだ。それこそ一日と全財産を使ってでも遊びたい。
どこへ行こうかと迷いながら電車に乗った。それこそ適当だ、一番安い百二十円の切符を買って改札を抜ける。行き先で支払えばいい。なんなら東京を一日中ぐるぐる回っているのもいいかもしれない。景色を観ているだけで満足できる。
否、できなかった。腰が痛くなってきて一度降りる事にする。そこで今度こそ偶然に出会ってしまった。
「あれあれ？　氷上君じゃないの」
「森下さん」
森下さんはベンチに腰を下ろして電車を待っていたようだ。そんな彼女の目の前に僕は出てしまった。突然現われた彼女に対してど

うしようかと思った。言葉が上手く出なかった。
「こんなところで何してるの？」
駅を見ればその言葉は当然のこと。周囲に繁華街はなく遊ぶような場所も無い駅だ。周囲を見れば住宅街が広がっている。僕は無意識のうちにけっこう遠くまできていたんだな。驚くべきは東京をぐるぐる回ろうという最初の考えさえも消し去っていことだ。
「森下さんこそなにしてるの？」
「ここ私の地元なの」
「そうなんだ。僕は適当に遊びに行こうかなって」
「遊びに行くなら逆じゃない？　普通、都心でしょ。ここには何も無いわよ」
もう一度、ぐるりと見回す。やっぱり住宅が広がるだけの僕の望む遊びには無関係なように見える。それどころか少し鬱陶しがられているように見える。そりゃそうだ、勉強止めて一日中、遊ぼうなんて考えているようなやつなんだから。
「ほかに誰かいるの？」
「いないよ。僕一人」
「いつも一緒の東堂君は？」
「いつもってわけじゃないよ。まぁ一緒にいるけど今日は違うよ。さっき別れたんだ。正真正銘、今日は一人ぼっちなんだ」
「ふ～ん。じゃあ一人で遊ぶの」
「ああ」
どういうわけか電車が来てもいないのに森下さんは立ち上がる。
「なら……なら私とデートしてください！」
彼女の一言は僕の休日と傷ついた心に刺さった。

第一章　ドッペルさん　四話

四

喧嘩別れの憂さ晴らしは森下さんの発言からデートと姿を変えていった。内容ともかく誘った彼女もまんざらではなかったように思える。彼女はよく笑っていた。その日、帰る前にちょっとこれからの話しをしたわけだ。やはり引越しは決定したものでいまさら取り消す事は出来ないみたいだ。この前、僕を誘ったのは思い出を作りたかったのだとも彼女の口から聞く。今週が終わると時機早々に転校していなくなってしまうらしい。ただ、彼女はそれでもM高校への進学は諦めていないらしくそれを含めて僕と会いたかったといった。

早く連絡すればよかった、申し訳ないなと云うと今、こうやってデートできている事で満足なのだと笑顔で返された。それが本心なのだとしたら僕は非常に嬉しいがちょっと後ろめたい。

そんな日が終わって次の朝、登校すると夙夜がなにやら真剣な顔でやってきた。

「放課後、話があるから残ってろ」

こういった夙夜の顔は見た事は無かった。いつになく真剣なその表情に授業は手につかなかった。ずっと何の話なのか考えるばかりだった。しかもその話に触れようとすると夙夜は放課後まで待てと云って聞かなかった。

授業の内容も頭に入らない。給食だって喉を通らなかった。これほどのプレッシャーを受けたのは初めてモデルの撮影を行った時以来だった。だって夙夜の目がマジだったから。そんな一日はゆっくりゆっくり病身を刻む音が聞こえてくるほどの速度で過ぎていった。

放課後になると夙夜に連れられてやってきたのは今は使われていない旧校舎だ。旧校舎は耐震問題のため去年から使われていない。

といっても現在の校舎で入りきらない資材置き場として重宝されている。僕も教材を取りに何度か来たが日を増す事に古びていくのが感じ取れた。生徒にとっては面倒なだけの長い廊下を渡ってやってくる。埃だらけの一階を後にして二階に進むと見たことの無いテープがあった。いや、似たようなものなら知っている。実物を見たことは無いけれどドラマなんかで警察が使う黄色いテープ。それが蜘蛛の巣のように何本も貼り付けられている。夙夜はそんなことも関係ないようでテープの隙間を縫うように進んでいく。

「大丈夫だよ、俺が仕掛けただけだ」

先へと進む彼が云った。仕掛けたって勝手にこんな事していいのか。テープをみれば教室の壁にきっちりと取り付けられている。それが幾十にも貼られ外部から出入りを遮断していた。これ、見つかったら怒られるだろうな。

「ここから先は特別な空間になってる。俺のバイト先みたいなもんだ。必要の無い人間はここへ絶対には入れない」

そう言ってテープのバリケードを指差す。そのバイト先がどんな所かは知らないけれど多分、先生達に見つかる事はないって事だろう。

「まだ修行中だからああいった見やすい道具が必要なんだ。それは簡便な」

「べつに気にしないよ。それよりこんな所に来てどうするんだ？もしかして仕事関係なの？」

「最近変わった奴を見なかったかっていったろ？　どうだ心当たりは無いか」

「特にないけど」

返事をすると「じゃあ」と話を切り替えてまた話を進める。

「そうか。これからちょっと……いや今日一日、付き合ってもらうんだけど時間は大丈夫か？」

「構わないさ。それにもしも駄目でも無理やりつき合わせるんだろ？」

夙夜が笑って流した。今から何が起きるのか不安と愉しみ半分で待つことにした。塾の予定はあるけれど一日くらいどうってことは無い。連絡は入れておくよと告げると軽く「いいよ」と返事した。

旧校舎の中を歩き続けやがて僕たちは最も奥から二番目の教室の前で止まった。先には廊下が少し続いているものの階段は無い。そして一つだけ教室が残っていた。夙夜は足を止めた教室へ入っていく。僕も続く。

使われなくなった教室には何もない。薄汚れてしまった床が広がり黒板ももう使われていない。外からの夕焼けがやけに眩しく感じた。教室の中央にはすでに机を二つ並べなにやら道具の用意もされていた。

日が沈み真っ暗になった旧校舎はまるでお化け屋敷にみえる。老朽化が激しいと見えるこの校舎は外からの風に自然と冷えてきた。その間、ずっと夙夜は忙しそうに走り回っていた。誰もいない場所で僕は暇つぶしに夙夜が持っていた小説を貸して貰って読んでいた。

「これを持ってろ」

夙夜が差し出してきたのはお守りだった。赤い布袋で包まれている。やけに熱かった。

「それを持っていればさっきテープがあった場所からこっち側にいる限りは誰にも見つからない。だからそれを持ってじっと立ってろ。それで恭司は助かる」

僕が助かる。すると僕が狙われているってことなのか。

「どういう意味なんだよ」

「それは見てれば解るさ。それより事が終わるまで、俺が教室を出るまでは何があっても絶対に話をするな」

理解できないがどうやらこれから何か始まるらしい。ふざけている様な事もないだろう。彼の言うとおりにしたほうがいい。

さらに時間が経つ。二人で少しばかり話しをしていたが急に夙夜が立ち上がると教室の扉が開いた。

「こんなところに呼び出してどうしたのよ？　それに何よその格好」

入ってきたのは美耶子さんだった。彼女は僕のほうを見ていない。視線は夙夜に向けられている。美耶子さんの言葉遣いもそうだが二人が知り合いだと言う事のほうが驚きだった。夙夜は彼女が来るまでの時間に一人であれこれ設置し着替えていた。今、黒の学生服はなく変わりに神社の神主が着ているような着物となっている。しかし上下共に黒い出で立ちで両腕を広げると広い袖が羽のように見える。

「用件はもうわかってるだろ」

「でも恭司君がいないじゃない」

「まぁな。今回のゲストを招くための餌になってもらったからな」

びっくりだ。本当に美耶子さんは僕が見えていないようだ。そして夙夜はそれが当然だというように話を続ける。それにしても美耶子さんの表情は薄暗いせいか少し険しく見える。

「恭司のことは後だ。今はアンタと少し話をしなきゃならない」

一息、入れる。教室の中央に陣取った夙夜は机の上に置いたお茶のペットボトルに手を伸ばす。机の上にはノートブックPCが一台設置されそこから教室のブラウン管テレビにコードが延びている。夙夜は空いている手でテレビのリモコンを捜査してスイッチを入れた。

「ドッペルさんの件だが……事態は俺が思っていたよりも深刻だったらしくてさ。おかげで一人、軽症を負った。アンタにもその情報は伝わっているはずだ」

「知ってるわ。昨日の夜に見せられたもの」

「被害者は恭司と俺のクラスメイトの委員長だ。彼女は昨日のデートの帰りにやつに襲われたよ。安心しろ、アンタの眼にも見えたとおり彼女は俺が守ったよ。さすがに実体化したドッペルさんは人間とは別物で焦ったけどな」

「そうね、君……死にかけたものね」

「あれには驚いた。たかが呪いの一種だ、戦闘力は皆無だと思っていたが握力七十はあっただろうな。委員長をかばった時に一発もら

ったが危なかったよ」
「ふふっ」
「軽い話じゃないんだ、笑うなよ」
「けっこうゾクゾクしたのよ。仕方ないじゃない」
何もかもが初耳だった。何より穏やかじゃない。森下さんが怪我をしたなんて聴いていなかった。今日も引越しのための欠席だとばかり思っていた。でも夙夜が嘘をついているとは思えない。なら森下さんは今頃……。
「彼女は幸い襲い掛かってきた相手を見ることはなかったし一瞬で気を失ったからなにも覚えていなかったよ。怪我もかすり傷だ、すぐに治る。どこで怪我をしたかすらわからないだろうな。ちょっと擦りむいた程度のものだから不思議じゃないさ」
よかった。でもどうしてそんな……だいたいドッペルさんってなんだ。怪我をさせた人物がいるはずだ。そのドッペルさんというのがその犯人なのか。
「実体化したドッペルさんに対して早急に対処しなければならないと確信した」
「どうやって止めるのよ？　もう実体化したんでしょ。それを倒せば」
「無理だな。昨日戦って解ったんだ。あれは倒してもすぐに復活する。簡単に言うなら目的達成まで動きつづけるゾンビだな」
「じゃあどうするのよ」
「そのために今、ここにいるんだ」
両腕を広げる夙夜。
「ドッペルさんが消える方法は二つ。対象と恋愛対象になる事。つまり恋人同士になるってことだ。そしてもう一つ、対象の死亡だ。今回のケースでは恭司が死ぬってことだ」
心臓が一瞬だけ大きく跳ねた。僕が死ぬ。僕が死ぬってなんだよ。
「そうよ。それを止めるために仕事を依頼しに行ったのよ」
「でも無理だ。アンタが事務所にやってくるのが遅すぎた」

「どういう意味よ」
「時間が無いってことさ。だからって簡単に諦めるわけにはいかなかったよ、何て言ったって今回、生死がかかっているのは俺の親友だからな。対象の死亡でこの事件を終わらせるようなことはしたくなかった」
「なんですって？」
「仕方の無い事だ」
ＰＣのキーボードを叩く。今まで真っ黒だったテレビに映像が流れ出した。そのモニターにはどこかの教室らしき部屋が映った。よく見れば画面には誰かが椅子に座っているのが見える。
「恭司君！」
美耶子さんが叫んだ。僕は見つかったのかと思ったがどうやらモニターに向かって叫んだようだ。そして僕もその光景を見て声をあげそうになった。なぜなら椅子に座っているのは僕自身だった。
「なにしてるの！　親友なんでしょ」
「そうだよ。でもな、タイムリミットだ。今回の事件を完璧な形で終わらせる方法はこれしかない」
そう言って夙夜は携帯電話を取り出した。操作するとモニターの中で何か音がした。
「聴こえるか、恭司」
モニターから音が聞こえた。まるで教室全体に声が響いているようだ。モニターの中の僕は身体を動かして答えた。どうやら身体は椅子に縛られて動けないらしい。
「どこの教室よ！」
「隣りだ。でも無駄だ、教室の扉も窓も完全に封鎖している。人の力じゃ開けられない」
「恭司君を殺すつもり」
「俺が殺すんじゃない。殺すのはドッペルさんだ。ほらアンタには解っているはずだ。奴が今、どこにいるか」
美耶子さんの脚は震えている。そして教室の外から足音が聞こえ

た。コツンコツンとゆっくりと近づくその音に彼女は振り返った。
「早く！　なんとかして！」
「俺は何もしない。例え今、恭司を助けてもその後また追ってくる。それどころか恭司の関係者全員を殺すだろうな。それが望みか？」
あまりにも酷い言い方だった。これが仕事なのか。美耶子さんは自ら歩みより夙夜の肩を掴んだ。
「助けなさいよ」
「なら方法は一つだ」
在り得なかった。夙夜が胸元から取り出したのは銃だった。拳銃、ハンドガンと言えばいいのだろうか。銀と茶の二色がきらりと輝く。
「銃火器に詳しいアンタなら解るだろう？　ベレッタＰＸ４本物だ。これで自分の頭を吹き飛ばせ」
「な、なにを？」
「ドッペルさんを消したいならその根を絶つしかないって事だ。自分で蒔いた種だ、自分で決着をつけるしかない」
そういって美耶子さんへベレッタを渡す。彼女の腕はその重さに一度ぐらりと揺れた。
「頭に密着させて撃てば一撃であの世へ逝ける。その後に残るのは頭に火傷を負った死体だけだ。恭司は助かる」
震えている。どうすることも出来ない彼女はその場で震えている。僕はお守りを強く握った。夙夜の目がこっちを見た。一瞬だったけれどその目が動くなと言っていた。美耶子さんはその場でうずくまっている。その後ろを影が一つ横切った。僕の目には美耶子さんがもう一人映った。僕も美耶子さんも二人いる。意味がわからない。この状況を把握できているのは一人だけだ。
「どうする？」
「い……や、いやよ」
「だろうな、でも」
モニターに変化がおきた。いるはずの無い二人の分身がそこにいてお互いを見つめている。そこに映る美耶子さんは目の前にいる彼

女と全く同じ姿で進んでいく。二人の距離は縮まって彼女の腕はそれが最初からそうだったように僕の首を掴んだ。
なんて酷い光景だ。自分では想像できない事が今、目の前で起きていた。モニターの中の僕は抵抗などしなかった。
「いやあああああああ！」
美耶子さんが叫んだ。
「いや！　放して！　いやあああああ！」
まるで自分が首を絞めているみたいだ。パニックになっていく彼女を放っておきたくない。しかしまたも夙夜が僕を止めた。その時、口元が動いた。「後少しだ」そう見えた。モニターの中で僕がぐったりと倒れた。
自分が死んだようだった。
そこで倒れているのは明らかに僕だ。誰でもない。僕だ。
そしてその場にいた二人目の美耶子さんは何事も無かったように消えた。一切動いていない。ただその場で消えた。
「あ……」
「事件解決だ」
「なにが」
美耶子さんが頭を上げる。
「なにが解決よ！」
銃を夙夜へ向けた。けれど動じる事はなかった。そこにじっと立っている。眼を真っ赤に晴らした美耶子さんは鬼のような表情で夙夜を睨む。
「撃ってみろ」
躊躇いはなかった。引き金をすぐに引いた。けれど銃は弾丸を発射しなかった。ただスライドしただけだった。弾が入っていない。
「えっ？」
何度も引き金を引くが動く事は無いし弾が出る事は無い。
「アンタが死んで事件が解決するならこの問題は大したことはないんだ。そいつは盛り上げる為の道具だ。ああ、勿論本物だから返し

てもらうぜ」
　といってすっと取り戻した。
「今回の事件の解決策は二つ。対象と恋人関係になるか対象の死亡だ。俺は前者も後者も考えたよ。だから恭司との接点を作ったんだ」
「何を言ってるのよ」
「アンタ、言ったじゃないか話をしたことも無いんだって。だから接点を作って無理やりにでも二人をくっつけようとしたのさ。最初はそうだったろ？　思い出してくれ。二人で恭司を落とす方法を色々と模索しただろ」
「ええ。そうだったわね」
「だけど無理だった。それどころか最後には恭司を怒らせちまった。それが最後の引き金だ。ドッペルさんは実体化してしまった」
　夙夜は話を続ける。
「アンタがストーカーだろうがなんだろうが恭司が好きならそれでいいと思ったんだぜ。まぁ好き過ぎるってのもちょっと恐いけどな。特に別宅にあった恭司の写真はびっくりだ。壁一面なんだから」
「部屋に入ったの？」
「ああ。本当に恭司が好きなのかってことを確認したかったんだ」
「そう……引くでしょ」
「まぁな。でも心のそこから好きなら声をかければよかったんだよ。なにもあんなものに頼る必要は無いんだ。アンタはとても綺麗なんだから」
「そんなのもうどうでもいいわ」
　美耶子さんは全身の力が抜けたようにその場で座った。
「どうでもいいか……実はさ、あのモニターに映ってるのは本物じゃないんだ」
「えっ」
「恭司、俺はもう行くぜ。後はお前の気持ち次第だ」
　そう言って教室を出て行ってしまった。最後、出て行くときに手を振った。後は僕の気持ち次第か。そうだな、彼女にいう事がある。

最後は背中を押されるようになったけれどそんなことはどうでもいい。僕はお守りを放す。するとモニターのなかの僕は姿を消した。まるで蛍の光が溢れたように光りの粒子となって消えた。

「美耶子さん」

何度か声をかける。彼女は泣いたまま僕を見た。どう映っているだろうか。幽霊と間違えていないだろうか。本物だとわかるように彼女に触れる。触れた彼女の頬は太陽のように熱かった。その熱で融かされそうになった。「ごめんね」と言った。言わなきゃ駄目だと思った。

「……うそ……なんで」

「最善の方法だったんだろうね。そのドッペルさんていうのが何か詳しくは知らないよ。でも夙夜は僕たち二人を助ける方法を使ったんだと思う」

美耶子さんの眼は真っ赤に腫れていた。すぐ下の床には涙でできただろう水溜りまで出来ている。

「ずっとそこにいたの？」

画面を見て気づいたようだ。さっきの倒れた僕はもういない。彼女には僕しか映っていない。

「うん。見てた」

彼女は僕から顔を背ける。

「私のこと嫌になったでしょ。当然よね、こんなストーカー」

「嫌いじゃないよ」

「嘘よ」

言葉に力が無かった。いつもは彼女が優位に立っていたのに。今じゃ逆だ。

「本当だよ。ストーカーってことは美耶子さんは僕のことが好きってことでしょ」

肯いた。

「僕も美耶子さんのこと好きだよ」

「……嘘」

「本当。確かに会話の端々に小ばかにするような言葉が入っているけどそれって……個性でしょ。なんていうかユニーク？　そうユニーク」
「でも図書館で」
「そりゃ僕だって立て続けに会って馬鹿にされればね。それにあの時、無視したって言ったけどあれはドッペルさんだったんでしょ？
それなら美耶子さんが嘘をついていなかったわけだ。なら謝るのは僕だ」
美耶子さんの目をじっと見る。
「好きになったんだ。付き合ってください」
「……嘘よ」
「本当だよ」
「本当なの？」
小さくうなずく。このままだと全部、嘘になってしまいそうだ。信じてもらう方法は無いかな。ああ、あるじゃないか。
美耶子さんの唇を奪った。桃の味がした。
「で、でも、私、変なのよ。変っていってもちょっとのSやMじゃなくて四六時中君のことばかり考えてるし、その……性欲も強いし。だって恭司君の子と見ながらいっつもやってたのよ」
又、凄い事を言う。なんだろうかパニくったのか。でも今回の内容は僕的、いや男にとって最高のネタでもあるからOKだな。
「それは嬉しいよ」
「えっ？」
「僕も男」
もう一度、キス。彼女の唇はふっくらとしていてまた桃の味がした。人生最大の力の入れ込みだった。
「好き！　好き！　好き！」
返ってきたのは好きという言葉と抱きしめ行為。そして僕はあっという間に倒れた。というより倒された。彼女の長い髪が僕の顔をくすぐってくる。赤く腫れあがった眼が僕を見つめてくる。

「このまま私の物になって」
さすがにこの体勢までは考え付かない。さっきも言ったが僕も男だ。こういうときは出来る事なら僕が上でいたい。押し倒されるのはもう止めにしよう。
「さすがにテンションでやるのは良くないよ。徐々にね」
彼女の瞳が訴えてくる。強い意思を持っていた。たぶん、目まぐるしく変わった環境に頭がおかしくなってるんだろう。それは僕も一緒だけど。
でも、駄目だ。なにより非誠実だろう。
僕は美耶子さんへ……初めて出来た彼女へ「ダメ」と告げた。彼女はゆっくりとじっくりと考えて物凄いスローテンポでうなずいた。もしかすると相当面倒なのかもしれないが僕は彼女のことを好きになったのは事実だ。僕は彼女の熱を感じながらずっと付き合っていこうと心に決めた。

第二章　一話

一

友人、氷上恭司の窮地を救って約一年。巡り巡って春を過ぎた。つまり東堂夙夜をはじめとする中学三年生たちの生活は高校受験が近付く一学期の中盤に差し掛かっていた。そんな六月の事、日差しが強まるなかで教師達は生徒たちの進路先を真剣に考えていた。が、東堂夙夜は進路先など定まっていなかった。すべてにおいて優先する師、洸敷千影は少年にどこの高校を受けろと指示していなかったからである。学校の教師がいうには夙夜の成績なら大半の高校に受かるだろうと言ったが彼らの言葉に興味はなく意味がなかった。彼等が教師という立場にいても自分の師は唯一、一人しかいないのだ。

そんな夙夜は教師たちにM高校を進められてうんざりしていた。M高校は東京人なら誰でも知る有名進学校である。通っている生徒は卒業すれば九割九部は大学へと進学する。就職する生徒は奇跡的なまでに少ない。入学すればもちろん勉強ばかりの日々になる。そうなれば夙夜の今の生活は不可能になるだろう。だから選択肢に含まれない。夙夜にとって高校の選び方はプライベートに回せる時間が多ければ多いほどよいのだ。ちなみに進学しないという選択肢はない。親との約束でもあり千影も絶対としている。

M高校といえば友人、氷上恭司はどうするのかと案じる。彼は一年前の一件以来、曽我部美耶子と彼氏彼女の関係となって勉強を続けている。モデルのバイトもしていて学校以外の場所ではほとんど会わなくなってしまっている。そんな彼の目標はM高校で間違いない。

なぜなら彼女となった美耶子も復学している。ドッペルさんにより登校出来なかった休学中の遅れを取り戻そうとしていた。二人とも頭はいいきっとM高校で先輩後輩の仲になる。

さらに気を回したのは白瀬トオルだった。クラスの中で特に気の合う人物は彼ぐらいなもの。白瀬トオルは目標だったプロボクサーへの道が閉ざされてからというもの適当な毎日を送っている。勉強するわけでもなく趣味と呼べるものに執着するわけでもなく日常をのらりくらりと過ごしている。間違ってもM高校へ進学するような奴じゃないが最近はほんの少しだけ授業を真面目に受けていた。

周りが受験に少なからず対応し始めている。現在、夙夜は教師から進路先について考えておきなさいとやんわりと言われて事務所へやってきた。

事務所には千影がいつものように新聞を読み漁っており夙夜がやってくるなり空になったコップを差し出してきた。コップを持って新しい珈琲を造ろうと備え付けのキッチンで珈琲メーカーの電源を点ける。

親から「高校へは行って欲しい」「できれば大学に通わせてやってくれ」と千影に伝えているんだろうななどとぽつりぽつりと垂れてくる珈琲に目を落している。両親は健在だが日本にはいない。父親はイギリスの本社に滞在し母親もついて行ったきり。日本へ戻ってくるのは一年に四回ほど。夙夜の生活はすべて千影に任せきっている。

実際のところ高校進学はひとつの課題である。成績は悪くはないがあまり時間を取られる場所にはいきたくない。できれば勉強も適当で済むような場所がいい。一件だけ妙に都合のいい高校がある。

「結局、葛葉高校ぐらいしかないよな」

「なにをぼやいているの？」

独り言だったが聞こえていたようだった。千影は新聞に目をやったまま声をかけた。

「進学先ですよ。どこにしようかなって」と返事をすると「ああ、そんなこと」とぽつりと呟いた。そこには一切感情がないように思えるほど冷たい音がした。

「けっこう真剣に迷ってたりするんですよ」

「そんなこと迷うほどの事でもないわ。どうせ大学に進学するんでしょ。だったら高校は適当でいいのよ。大事なのは最終学歴なんだから」
そのとおりだ。大学に入学した当時ならいざ知らず大人になればどこの大学を卒業したか問われることがあっても高校は聞かれない。そんなものだ。だがそれでも当時となる現在にとってみればけっこうな悩みどころである。
「そんなに悩むなら皆が行くところに行けばいいじゃない。私は進学さえすればどこだっていいと思ってるのよ。あぁ、でもこっちの仕事に差し支えがある高校は駄目よ。夙夜はこっちがメインであっちはサブなんだから」
「解ってます」

こっちとは魔術師たちの世界。
あっちとは人間社会。

明確な差を持つ二つの世界は混在しながら時を刻んでいる。東堂夙夜の住む世界はまだどっちにでも転ぶ中立の立場でもある。今なら人として暮らしていける。
珈琲豆がろ過されぽつぽつと滴り落ちるのをじっと眺めていると事務所の外からコンクリートを反響して近付く足音に気付いた。壁は決して薄くはないが夙夜も千影も耳が言いから聴こえるのだ。しかし千影は気にもしていないようにテーブルの広げた新聞紙の山へと読んでいた分を置いた。そして次の分を抜いて手にした。
夙夜はというともう何杯か淹れられるようにセットしてキッチンを出る。まだ千影の分さえ淹れられていない。そんな彼女にひと目くれてから玄関となる扉から鳴る音に視線を移した。
客人は返事を待つ事無くドアノブを回す。この事務所にやってくる人物は全員がそうする。ドアをノックしても返事は返ってこない。恐る恐るあける扉というのも一興である。

篭っていた空気が外気と混ざる。コンクリートで冷やされた外の風が混ざると悩みをかき消したようだった。
「なかなか速いご到着だったわね」
千影が見ていた新聞紙から目を離して客を視線に入れる。客はというと無言でいつもそうやっているように千影の対面に座った。新聞の山をのせたテーブルを挟んだソファーに座ったのは高価そうな黒い着物の男だ。頭髪は白と黒が半々で肩よりも伸びている。髭も生やしており口元のたるみを隠している。年齢は五十ぐらいで室内の誰よりも年上である。対面に座っている千影を目は悪どく澱んでいた。
「千影ちゃんの顔が見たくなっただけだよ」
にっこりと微笑んだがその腹の中に溜まった狂気は隠せていなかった。
この男の名前は依知川藤一郎。新宿の歓楽街や駅周辺に強い勢力を持つ依知川組の頭である。洸敷千影の事務所にやってくるのはなにも善人だけとは限らない。世間を知らない平凡な中学生からこういった組の連中まで千差万別。
「追う！　お前らも入って来い」
頭の声が外へと漏れる。するとぞろぞろと黒いスーツの集団が室内を埋め尽くしていく。当然、彼らはサラリーマンではない。全員、肩ががっしりしており分厚い胸板をしている。いざというときは身を呈して銃弾に晒せる壁になる素質は充分にある。そのなかにとびっきり大きなアメフトの選手に見える男も二人ほどいた。営業などできないだろう眉間に深いしわを作った二重顎の男もいる。全員が怪訝な表情を作っていた。
夙夜はまたこいつらかと思いながらやってくる連中に目を向けていた。依知川組がやってくるのはもおう何度目だろうか。二度や三度ではすまない。これまで事務所を使用する理由は千影を弁護士としてである。彼女は弁護士の資格を所持している。人間社会で魔術師が生きていくにはそれなりに稼がなくてはならないのだ。

また弁護士としての千影を頼ってきたのなら自分には仕事はないなと思いながら夙夜は壁際に立つ。自分の周りを男達が囲んで千影が見えなくなる。スーツ姿の男達の背中を見ていると一人の男が他とは違う様子だったのに気づく。スーツ姿の連中の先頭に立っている人物だ、オールバックの髪に顎鬚をまばらに生やした男である。歳は夙夜の倍ほど。三十前半。屈強な男達に引けを取らない威圧感を持っている。彼だけがソファーに座る頭の隣りに立っていた。

「今日は大勢なのね。なにかあったのかしら？」

「おい、篠崎」と依知川がオールバックに言った。するとオールバックの男は一礼して「人を捜してもらいたいのです」と短く言った。人捜しは弁護士の分野ではない。「洸敷事務所はこういった件にも心強いと聞いております。どうかご協力願えませんか」

名刺はなく腕も出さない。目も動かさないで直立不動だった。最初から馴れ合うつもりはないんだと夙夜は思いながら横目に見る。

「人捜しなら興信所にでも行きなさいな。それともヤクザが人を捜すのは知られたくないことがあるからかしら？」

「妙な詮索はしないでくれんか？」

依知川が右の眉だけ上げて言った。同時にキッチンから珈琲メーカーが音をたてて室内にいる全員の気を引いた。

「するつもりは無いわ。その人捜しに必要だから聞いてるのよ。ぼうや、珈琲を配ってあげて」

「はい」

とはいえ出来上がったのは三人分。室内の男達を数えるとどうやっても足りるはずはない。インスタントならすぐにできるかと立ち上がろうとしたが「いや、必要ない」と依知川が口にした。すると「のようよ、で？」と千影が話の続きを催促した。夙夜は足を止めてまた耳を傾ける。

「俺たちのしのぎの一つだが女が傷つけられてね。その犯人を追ってる。あぁもちろん新聞には載ってない」

篠崎と呼ばれた男はテーブルに山積みになっていた新聞を横目に

言う。
「その“しのぎ”とやらを教えてもらえるかしら？」
「女のアンタにゃきついと思うけど、それにあんな子供がいるようじゃ……」
口を閉ざして夙夜を見る。どんなしのぎでもいいさと興味なさげにしていた夙夜だったが馬鹿にされたように感じる。たいていの事ならすでに理解しているのだと言ってやりたかったが無言で立つ。魔術師として千影の下にやってきた日、その日からもう随分と経つ。過ぎる日々のなかには彼らヤクザと世間一般に呼ばれる組織の非道よりもえぐいものも見てしまった。大体の事なら唾を飲まずして受け入れられる。
「なにか勘違いしてるみたいだけど仕事をするのはこの子よ。私は必要な仕事かどうか判断するだけ」
「はぁ？」
どっと笑いが起きる。笑わなかったのは一人だけ頭の依知川藤一郎だけである。立って並んでいた巨漢の男達は笑いを抑えられなかった。仕方がない事でもある。彼らの身長は最低でも百八十、体重は八十五といったところ。細い太いはあっても誰もが戦士として戦うだろう。比べて夙夜の身体は細く軽い。背も低くとても彼らに太刀打ちできそうに見えない。
「ちょっと待ってくれ、どう見たって中坊だろうが！　馬鹿にしてんのか！　アクション映画の主人公だってこうも差がありゃ実力ははっきりしてる」
篠崎は両腕を肩へとあげて掌を天秤のようにして笑う。あまりに馬鹿馬鹿しいと。
「じゃあ一人選んで相手してみなさい。上の階が空いてるわ。夙夜、今の実力を見せてみなさい」
「へーい」とこれまた興味のない返事をした夙夜は壁から離れて事務所の扉を誰よりも早く抜けていった。構成員たちが近付くと体格差はよく解る。夙夜の頭は構成員たちの肩のあたりを上下するだけ

である。口元の笑いを堪えきれない男達はすうっと歩いていく少年を嘲笑っていた。
「篠崎、今回の件はお前に任しておる。好きにするがええ、わしはここまでじゃ」
「はい」と返事をする。
今度は方向を変えて先に進んでいく夙夜へ「おい」と篠崎が声をかけて追っていく。事務所を出ると先を行く夙夜が足を止めて待っていた。そして夙夜がいたのは下ではなく上であった。続いて篠崎の部下が事務所を出て行く。ぞろぞろと出てくる黒服の男達が数人残る。
「いいの？　彼らに任せて」
「今回の件で一番、頭をいっておるのは源じゃ。わしは千影ちゃんを紹介してやろうと思っただけにすぎん。なんでじゃろうな、奴らに持ち合わせる気なんぞないのにのう」
顎鬚をさすりながら千影を見る。
依知川藤一郎が千影を紹介した理由はただひとつしかない。彼の気分などそこには意味はない。ただ、東堂夙夜に必要な仕事だからである。この事務所に張っている結界がそうさせている。必要のない仕事はこの事務所にやってこない。
「それじゃわしは帰るよ。今日はなんもないが宜しく頼むよ」
「見ていかないの？　喧嘩を見るの、好きなんじゃないの？」
「自分のところの組員がやられるところを見たい物好きはおらんよ」
残った構成員を連れて依知川は事務所を出て行った。入り口の扉は半透明のガラスがついており影くらいなら判別できる。依知川は言ったとおり下へと降りていき誰も上ってかなかった。

洸敷事務所が借りている雑居ビルには他に使用者はいない。一階、三階ともに無人である。三階は仕切りのないコンクリートの一室で階段を登りドアを開くと廃虚と間違えそうな空間が目に広がる。足元には塵か砂利かわからないくずが散乱し革靴の底に音を拾わせた。

壁は塗装が剥げ白とグレーが入り混じっている。長い間放置されているようだった。
二階の事務所と同じ広さのはずだが物がないため広く感じる。そのなかで夙夜は中央に立つと首を回し関節を鳴らした。
身体を跳ねさせてリズムを取る。「いつでもいいぜ」と男達に声をかけると誰が行くと相談もないまま篠崎が「松風、お前がいけ」と名指しした。松風は一番、身体の大きな男だった。夙夜と対峙すると差が大人と子供ほどあった。しかも人の顔を鷲掴みにできそうな大きな掌を持っている。拳をぱきぱきと鳴らせると誰もが任せようと事の次第を見ることにした。
「ぼうず！　ちと痛いが我慢しろよ！」
勢いよく駆け出すと瞬時に間合いを詰めて拳を繰り出した。風圧だけでも人間を吹き飛ばすかというほどの直球ストレート。風など吹いたことのなかっただろう空間に突如巻き上がる。埃が地面から吹き上げたが夙夜の身体には何一つあたりはしなかった。夙夜の目にはまるでスローモーションのように映っていて足裏を滑らすだけだった。複雑な動きではない。身体を少しずらせば回避できる。余分な力を使わずに初撃を流す。
篠崎をはじめとする構成員達の目には鮮やか過ぎる動きが見えていた。
「てめえ！」
二発目の拳もまた空振りに終わる。一発貰えば臓器が押しつぶされる一撃に夙夜は真っ向から向き合っている。なにも恐れてはいない。単なる暴力だけでは捉える事の出来ない力の差がある。足のステップだけで距離を測って男の拳を回避していく。三発目、四発目と繰り出されるうちに距離が縮まっていく。いつのまにか夙夜は壁へと移動していたのだ。
「どうした？　いつまで逃げるってんだ、あぁ？　もう逃げる場所もないってのによ！」
にやにやと下品な笑いを浮かべて近寄る。夙夜はというと汗一つ

かかずに涼しいままだった。ただ足の動きは止めずにリズムは取りつづけていた、壁際にいる今でも変わらない。
「終わりにしてやる！」
逃げる場所をなくしたように見えた。構成員達の目には仲間の背中しか見えていなかった。繰り出される腕が上がり落ちる。すると男のわき腹から夙夜がするりと抜け出してくる。屈めば男と壁の間をすり抜けることぐらい余裕だった。振り落される拳は空をきる。すかさず背後に回った夙夜を追いかけると同時に松風の視界は暗闇へと陥った。
大きな身体は壁に倒れこみ決着はついた。
振り向いた瞬間のこと、夙夜の身体は小さな台風の如く回転し男の眉間に強烈な蹴りを見舞ったのだ。全身の筋肉をバネにした一撃は大男であろうとも仕留めた。
「やるな～」
まだ身体は蹴り終わったポーズで止まっていた。小さな身体に似合わず足は長い。背が伸びればモデルにだってなれるだろうと篠崎は拍手しながら感激していた。
「鮮やかだったぜ、これだったら仕事も任せられる」
「なんなら全員で来てもいいぜ」と言うと構成員達はかっとなったが篠崎が止めた。夙夜の動きは紛れもなく慣れていた。練習だけで身につくものじゃない。彼は自分にここの場所を教えた組長の意向をようやく目の当たりにして手を叩いた。
「改めて仕事を頼みたい。篠崎源一郎だ」
「東堂夙夜だ、よろしくな」
どちらの手も炎のように熱かった。

第二章　二話

二

今日も朝陽の昇りを波止場で見る。

ここ三年間、住居にもなった軽自動車のなかで目を醒ますと目をこすってあくびをする。自分の口臭にだって気づき始めた今日この頃。車内に篭った空気を変えるためドアを開ける。いったん外に出るとシートで固まっていた身体がばきばきと音を立てて元に戻っていく。

意外なことに腹はならない。いつもなら空腹で第一にあくびより先に腹が鳴る。そういえば、と昨夜を思い出す。気前のいい派遣先の弁当を食ったんだと腹を押さえて二度ぽんぽんと叩く。オレにとって一食分浮いたのは気分がいい。

朝陽が昇っていくのをじっと見る。背後でＬＥＤの光る自販機が恨めしい。なんならぶっ壊して中身を強奪してもいいけどそうもいかない。この港はあと十分もすれば職員がやってきてにぎやかになる。夜中を過ごすには人がいないから最適だけど長居できない。今日もそろそろ車のエンジンを点けなきゃならない。

シートに戻ってエンジンを点火する。軽くふぬけた音とともに尻の下が震える。

さて、今日はどこへ行こうか。今頃やつらは血相変えて俺を捜しているはずだ。太陽に向かって笑いがこみ上げてくる。良い気分だ。

愉快極まりない。あの爺の赤くなった顔がまた甦ってくる。直接見たわけじゃないがきっと青筋立ててキレているはずだ。

事の発端はオレが姿をくらます三年前よりもちょっと前だ。依知川組がしきっていた麻薬売買に関与していた頃にまでさかのぼる。依知川藤一郎……やつの下で働いていた頃だ。何人かいる下っ端売人のうちオレはけっこう頑張っていた。他の奴らは三十を超えたお

っさんばかりで昼間は動きたくないとかいう屑ばかりだった。だからか、奴はオレを他の売人とはちょっとだけ扱いを変えていた。

その頃のこと。

組長じきじきにオレを呼びつけてきた。最初はマジで怖かったけどやつの屋敷の大きさには度肝を抜かれたのは今でもよく憶えてる。オレの家が家賃三万五千円のボロにボロを足したような部屋だっていうのにやつの屋敷は部屋がいくつもありやがる。おまけに殿部屋もオレの部屋の何倍も大きいから顎が外れそうになった。そんな屋敷を後ろに張りついて歩いていくとある暗い部屋に入れられた。

真っ暗で太陽の光どころか電灯もない。逃げ道だった扉は外から押さえつけられて出られなくなると部屋の中でがさがさと動く物体と出くわした。

あの女を見たのはその日が最初だった。

なっていったっけか……そうだ……依知川琴音だ。

暗い部屋の中にいたのはあの女だ。歳はいくつだったが憶えてないが成人はしてない。あの女はオレに頭を下げて交尾を強請ってきやがったんだ。最高だった。断る気なんていっさいなかったからな。尻の穴まで味わった。あんな女はどこの娼婦リストにもいやしねえ。

全部が極上だった。

事が終わるとオレを待っていたのはやつの部下どもだ。あいつ、あのでっかい篠崎源一郎が立っていた。殺されるかと思いきやいつもの報酬を手渡してきやがった。あの篠崎の目はいつでも刺してやるといった恐怖が溢れていた。

それからも事あるごとにオレは屋敷に招かれた。

問題が発生したのはオレが売人を辞めてからだ。元々、こんなやばい仕事を長く続けるつもりはなかった。警察だって警戒区域を増やしていくし自警団みたいなのが出来てからやりにくくなったからだ。

とはいえヤツらから放れられたオレは別の仕事についていたがそれも長くは続かなかった。

そして三年前のあの日だ。
時間っていうのは経てばやっぱり変わるものであの女を見たときには心臓が早く早くと鼓動していく。息ができなくなるほどに苦しくなっていつのまにか女を追っていた。
ヤツの娘がなんでこんなところにいるんだという疑問をその時は頭のどこにも浮かべられなかった。ただ後ろをついていって歩いただけだ。女が入って行ったのはマンションの部屋だ。どこにでもあるマンションで別に特別ななにかがあるわけじゃなかった。セキュリティだってないし誰でも出入りできる。
女の入った部屋の前で立ち止まると男がオレの後ろからやってきた。奇妙すぎた。男の風貌はオレより年上で中央から横分け。眼鏡をかけてればオタクに見えるようなひょろいリーマン。
男はいっさい躊躇せずに女の部屋へと入っていった。オレはその男が女と付き合っているのかと思ったがそうは思えない出来事が目の前で行なわれる。部屋の扉が開かれると今度は別のおっさんが出てきた。
どうなってるんだ？
頭の中でどうにか整理しようとするが答えには辿りつけないまま新しい男がやってきて入って行った。そこであの部屋だ。オレが通された部屋が場所を変えたんだとオレは判断した。だとしたらこの部屋は……。
その日の夜、いったんは部屋に戻ったがあの女を抱いた時の感触が甦って堪らなくなっていた。どんな麻薬よりも刺激的なあの身体をもう一度味わいたい。だが普通に抱いただけではあの感触を超えないだろう。妄想の中で女を味わっていると一度だけ誤って爪を立てたときがあった。女の身体がぐっと良くなった瞬間でもある。オレは台所から包丁を持って車に乗っていた。
女の部屋に着くまで時間は掛からなかった。抜き身の包丁を片手に男たちが出入りする部屋を見る。よく見ればわかる。出入りしている男たちはその部屋にだけ立ち入る。そして一時間も経たないう

ちに帰っていく。
ちょっと休憩する、ちょっとトイレに行くというだけのように見える。オレは人気の静まった夜中、三時になってから行動にでた。
部屋に入ると男の姿はない。やけに精子臭い空間に足を踏み入れる。女は、と捜すとベッドにいた。ドアが開きっぱなしで誰でも入れるようになっている。赤い光が壁の上からこっちをみていた。どうやら監視付きらしい。オレの姿はこの時、すでに見られていた。
だが女を目の前にしたオレはもうそんなことには興味がなくなっていた。
女を犯した。
声をあげ誰かに見られていることで普通よりも音を大きくしている感じがあった。おそらくあの赤い光を放っているカメラに対してだろう。オレの顔もばっちり写っている。けどもうここまで来たら引き下がれない。持ってきた包丁で女の身体を切った。いやぁ、あの時は最高に笑えた。清ました表情が一瞬にして青くなって叫んだとき、オレの一物が絞めつけられた。これが最高だった。どんな女よりも気持ちいいのだ。
オレが切りつけるたびに女が叫んできつく絞める。どこでカメラで監視している奴らがやってくるか解らなかった。オレは内心、早く逃げなけりゃと思ってたんだろう。恩なの中に一発放出するとさっさと部屋を出て車へと載って乗り込んだ。それからだ、オレの死に物狂いで逃げる生活がはじまった。
今日も依知川琴音を思い出して何発か出せるほど記憶にこびりついている。
あの感触はまだ憶えている。黒い髪に白色めいた艶のある身体。触れれば柔い筋肉で脂肪は少ない。骨まで触れることのできる細い身体だった。彼女の身体が今、どうなっているかは知らないがもう一度、やりたいもんだ。
涎を袖口で拭いて携帯電話を見る。今日の仕事はないようだ。
俺は依知川琴音に傷をつけた日から逃亡を重ねて三年。日雇い、

現金支給の条件でのみ仕事をして生活費を稼いでいる。必要なのは車のガソリン代と飯代だけだ。月に四万もあれば十分いい物は食えた。あとは暇な日にマンションへ空き巣に入ることがちょっとした趣味になった。金目の物と現金さえ手にすればテレビやパソコンのような電子機器に目もくれず拝借して去った。今、財布の中には諭吉が三人。まだ当分は逃げられる。そのうちに昨日のような部屋を見つけるとしよう。

この三年の中で幸運なことに出会ったのは先週のこと。飯を食うため空き巣に入った時だ。時間は夕方だったか、俺は奇妙な部屋だと思った。

部屋の主は女。髪は黒で年齢は二十前半だった。痩せていたが胸は大きかった。ただ変な事に俺を見ても女はなにも驚かなかったのだ。最初、侵入したときは誰もいなかった。俺は顔を隠していた黒いマスクで部屋の中を物色していると女が帰ってきた。下見もろくにしなかった自分のせいだとおもったが相手は女だ。

丁度いい、頂くとするか。

逃走し続けてすっかりと渇いていた餓えを満たすためにそろそろ女を食べたくなっていた。俺は物陰に隠れて獲物を待った。女は俺の侵入に気付いておらずすぐに部屋儀に着替え始める。彼女の身体は細かい傷がついていてどこかで俺の心が萎えていた。

やはり喰らう女は聖女のように美しくなくてはならない。

だが、渇きを抑えられず俺は女を後ろから抑えると「動くな」とどすの効いた声で脅した。しかし女は恐怖など感じていなかった。無表情のまま着替えをしようと俺を振りほどこうとする。叫び声はおろか俺という人物に気付いていないように振舞う女に俺は手を退けた。

するとどうだろうか。女は暴れず「さっさとしたら」と小声で言ったのだ。あまりにも淡々とした女は俺に対し催促するかのようだった。こうなると自分が何をしているのか解らなくなる。

なにより驚いたのはチャイムも鳴らさず玄関が開くと男が入って

きた。男は俺と同じように黒いマスクで顔を隠していた。
同業者？
そんなはずあるかと否定して男を見た。だが男も同じだった。名前も顔も知らないが奴は俺を長年の友人を見るような瞳で観て頭を下げた。女はジャージのような服を着ているが俺たちには見向きもしない。テーブルの前に座るとテレビを点けて目を向けた。
部屋に入ってきた男はそんな女に向かって歩くとわき腹から手を差し込んで何も言わずにジャージを捲り上げた。
抵抗はない。それどころか自ら腕を上げて脱がせやすくしている。ジャージを脱がせると音なの白いブラジャーが露わになる。続いて男は女を立たせると尻を叩き一気にジャージを引きずり降ろした。
純白のパンティーまでも露わになったとき俺はようやく思い出した。

依知川琴音だ。

システムはすべて一緒だ。
目の前で男が女の性器を舐めまわし始めた。やっぱりそうだ。俺はついている。あの屋敷で見た光景とまったく同じだ。あの爺、二年も同じ事やってやがった。
じっくりと二人の行為を見ているとようやくとばかりに濡れてきた性器に男が猛りだった男根を挿入した。さすがに声をだした女はスイッチが入ったように喘ぎ始める。
あの爺の趣味ならこの部屋はビデオで監視されている。俺が入ってどれだけ時間が経った？　そとはすでに暗くなっている。一時間以上経っているはず……もし奴らが俺を追っているなら飛んでくるはずだがその気配はない。
男が「ふう」と言って行為を終えるとまるで使い捨てオナホールのように女を捨てて俺の肩を叩いてにやりとした。股間の一物をしまうと部屋を後にした。残されたオレはというとレイプされた後の

女を目にして性欲よりも深い欲求を漲らせていた。
放心状態の女は股間から白濁液を滴らせていた。女も少なからず感じていて別の液がてらてらと輝いていた。浅ましい売女がなにをしているんだという感情が溢れ過去のあの日が甦る。
完全に再生だ。
あの少女を食った日のことと同じように女を貪った。
細い腕を折ると豚のような悲鳴をあげた。さっきまであんあんと喘いでいた喉から泡を吹いたようだった。これがたまらない。今の俺は刃物は使わない、琴音の時とは違う。刃物で傷をつけるとすぐに楽しめなくなってしまう。ひたすらに腕力で強引に折って曲げて剥ぎ取った。
爪を剥ぐとさらに大きな悲鳴となる。
性器に爪を立てて悲鳴を貪る。
だが、やりすぎた。
女の悲鳴を聞いて駆けつけたのは奴らじゃない。騒音を撒き散らしてやってきたのは警察だ。ドアを叩き大声をあげる。女も叫び始めてようやく正気に戻った。オレは入ってきた窓から逃げることとなった。次はもっと上手くやる必要がある。
よく観察すればこれと同じ部屋を見つけることは簡単だろう。
またこの快感に出会えるならオレは何度だって危険をおかしてもいい。
最後に部屋につけられたカメラに中指を立てて挑発して部屋を後にした。

「箱娘ねぇ」
事務所二階での大男との戦闘が終わると夙夜を混ぜた一団は車に乗っていた。夙夜に倒された大男こと松風は五分も経たずに意識を取り戻して立ち上がった。だが自分が倒れたことも解らないくらい感覚はなかった。一連の動きを見て夙夜に対するイメージを変えた篠崎は握手を交し三階から降りた。

すでに依知川藤一郎と数人はいなくなっておりスーツの男の数は激減している。今回の事件の依頼人である篠崎源一郎の乗ってきた車は八人乗りの黒塗りワゴン車だった。全面の窓を半透明にして中が映らないようにしていた。とくに見られて困るようなものは無さそうに見えたがやはり彼らを隠すには最適だと考えを改めた。黒服の集団が車一台につめて乗っている光景は目に付いてしまう。

夙夜を一番後ろの窓際に座らせると篠崎が隣りに座る。あとの構成員たちがぞろぞろと入ってくると車はすぐにいっぱいになってしまう。エンジンが付き静かに走り出すと篠崎はようやく今回の事件について話をはじめた。

「そう、箱娘」

「つまり風俗でも稼げないほどの借金をかかえた女が二十四時間、犯され放題、見放題っていう部屋で暮らす。男は大金使って女を利用できるってわけか」

「そうだ」

箱娘。

篠崎源一郎の話しによると彼らのしのぎの名前である。彼ら依知川組の組長、依知川藤一郎の趣味から始まったもの。最初、箱娘は屋敷にいるものとされた。もちろん依知河組の屋敷である。昔から依知川組は合法、非合法関係なく金さえ稼げれば手を出す。そのなかでも麻薬による収益は利益の大半を占めていた。町に売人を放って市民から金を得る。１９９０年代よりも今のほうが稼げると篠崎は言った。大麻やコカインを欲しがっている市場そのものの変化が原因と説明し今では主婦や学生がいいリピーターになっている。あまり聞きたくない話だったが事実である。

少しばかりの溜め息と共に説明は続けられた。

麻薬の売買は構成員ではなく外部の人間で構成されている。売人に渡すまでが依知川組の動きであり直接市場で売買を行なう者は組内にはいない。売人には小額ではあったがその売上に応じて報酬が与えられていた。普通の生活をおくる人間にとっては少なく彼らの

ようにその日暮らしの遊び人には大金となるほどの報酬だった。所詮、世間一般では暮らしていける人間などいない。何度も逮捕され刑務所暮らしに慣れた者も大勢いる。

今の世の中、まっとうに生きるのは馬鹿馬鹿しいと彼らは口をそろえるらしい。

そのなかには金で満足する者だけではない。金よりも酒、酒よりも女。自分の身分では抱けないような女。その点が依知川藤一郎にとって好都合だった。ことの始まりはある男。男への報酬はこれまで現金だったがある日、屋敷の一室へと通された。

襖で仕切られた縁側の部屋だ。しかし部屋の中に入ると太陽の光は届かなくなる。襖は光を遮断するように加工されており闇を作り出していた。中にいるのは少女とも女ともつかぬ美女。髪は黒で細身。胸は生長の途中ではあったが手に納まるほど。

部屋へ案内した依知川藤一郎は姿を消していた。男に対し少女は無抵抗だった。誰かの介入があるわけでもない。男の前で着物を脱ぎ始めた少女はまっさらな身体を見せ付け、男の本能をかきたてる。まるで自分から誘惑するように。

男たちは溜まらず手をかける。それでも誰も助けには来なかった。名前も知らない少女はただ必死に絶えていた。涙を流し声を枯らして時が過ぎるのを待っていた。男が交尾を終えると身体を震わせて泣いた。男は我に戻るなり部屋を出る。大抵の場合こうなった。

構成員の誰かが男を捕まえて事情を話す。今回の報酬だと。男の手には現金はない。身一つであった。だがその報酬を拒めるはずもなく見分不相応の極上の美女をその手にかける。

篠崎の説明によれば彼らへの報酬に一円たりとも払いたくないという組側の考えと依知川藤一郎の趣味によるものとのこと。報酬を女の身体に置き換えると一人あたり数十万浮く。さらには売人たちの動きが活発になる作用も含まれた。また組頭である依知川は男と少女の交尾を別の部屋から監視するように見ていたのだ。

彼の性癖である。

他人のセックスに強い刺激を得るようだ。とくに身内や親しい間柄の女性だとさらにいいらしい。とんだ変態だ。
これが発端。だが少女の役をするには普通の人間では持たなかった。試行錯誤を重ねた結果、現在の箱娘となった。
借金の返済が滞った者、組に立てついた者、理由は何でもいい。逃げられる場所を全て潰し身一つとなった女を作り上げ箱に閉じ込める。といっても出入りは彼女らも自由。三時間以上の外出はできないという制約はついているが部屋の中に絶対いなければならないこともない。
コンクリートのマンションの一室を使いＣＣＤカメラを散りばめる。監視とネットによる動画配信用とのこと。篠崎達は車から監視をしているらしくネットの動画配信サービスの管理と共に行なっていると話す。部屋に立ち入ることはないらしく緊急時以外はほうっているらしい。
「普通こんな話を聞いたら皆気持ち悪がるもんだが……どうなんだ？」
「べつに」と素気ない返事。話を聞く前とそれほど変わらない表情でいた。
「説明を聞くだけならイメージはそれほどでもないさ。それにそういうゲスなことをやってる連中はどこにだっていることぐらい解ってる。なにもあんたらだけがそうじゃないだろ」
逃げる場所がない車中で大口を叩く。夙夜という少年に篠崎は見えない自信と力を感じたような気がした。部下の松風は決して弱くはない。身体の大きさ、人生の経験量。すなわち喧嘩の数は絶対に多いはずだ。なのに一瞬のうちに倒した少年は信頼できるに値する。
「あんたじゃなくって源。源って呼んでくれ」
「源？」
「あんたとか篠崎さんとか言われると背中が痒くなってくる」
と言いながら本当に背中を掻く。事務所にいた時とは雰囲気が変わっていた。硬いイメージのあった構成員たちも今はそれぞれ隣の

男たちと会話していたりする。しかもその内容がまるで学生の会話のようにも聴こえるから肩の緊張は完全になくなっていた。
「じゃあ源さん」
「好きにしな。で、俺たちが追ってる奴の事だ」
懐から写真を取り出すと夙夜に見えるように胸の辺りに差し出した。受け取りこそしなかったが視線を落して写真を見た。金髪に薄い眉毛。半分ぐらいしか空いてない目と磨り減った頬の男の顔がある。
「こいつの名前は樋上太一。数年前まで俺たちの組で麻薬の売人をやってたやつだ」
「今は？」
「姿を消してる。箱娘は最初、屋敷でやってたって言ったろ？　その頃の売人だったんだが突然辞めやがった。まぁ理由はよくあることだが普通に就職したいってんだからそうさせたんだ」
「いいことじゃないか」
「そうなんだがな。こいつ、やっちゃならない事をしでかした。箱娘に手を出したのさ。最初の被害にあった女は今も入院してる。二人目は腕の骨が折られるわ、爪を剥がれるわと使い物にならなくなってる。おまけにカメラへ向かってファックだ。俺たちは絶対に許さねえ」
説明する篠崎の顔色がだんだんと赤くなっていく。身体も震えている。彼の怒りはとても強いものだと誰でもわかる反応だった。しかし夙夜はその怒りに共感することはできなかった。なぜなら怒りを露わにする彼もまた怒りを買う者だから。忘れてはならないのはこの仕事は下種同士の問題であるということ。
千影のもとで仕事を開始する際、彼女からいくつか仕事の内容について説明を受けた。まず仕事は正義と悪に分別できるものではない。自分は正義の味方ではなく依頼人の見方であるということ。例え敵に警察がいたとしても例外はない。
守るべき者を見失わないこととされた。

「で、これからどこに行くのさ」
「まずは二番目の現場だ。お前だって見たいだろ？」
「お前じゃない。夙夜だ」
篠崎が自分を源と呼べと言ったように夙夜も言った。くすりと笑って写真をしまうと篠崎は「わかった、これからは夙夜と呼ぶよ」と肩を叩いて前に座っている連中から缶コーヒーを二本貰った。一本を夙夜に渡すと蓋を開けて飲みはじめる。夙夜は腰のあたりで震えを感じ携帯電話を取り出す。常時バイブにしている携帯は着信音を鳴らしたことはない。
『本日のお帰りは何時ごろになられますか？　お食事はどうなさいます？　北岡めぐみ』と書かれていたメールだった。北岡めぐみは現在、東堂家の住み込みメイドである。両親が海外で暮らしており妹の玲子は学生寮に住んでいる。東堂家は彼女と夙夜の二人で暮らしているようなものだった。彼女からのメールは必ず夕方の四時半に送られてくる。今日のように仕事が入ると家に帰る時間は極端に遅くなる。夙夜は『先に食べてていいよ』と書いて送った。
車は事務所のある新宿駅から離れた住宅街へと入っていく。二十四時間の無人型駐車場で停車させると篠崎は他の構成員たちを残して夙夜だけを連れて外へ出る。「お前らはちょっと待っててくれ。大勢で行くとまた問題になる」と言ってドアを閉めた。
車中で聞いていた第二の現場へと向かっている二人だが篠崎のオールバックと風貌は抜き身の刀のように歩行者を遠ざける。もし車に残った連中も一緒に来るとなったらそれだけで通報されるんじゃないかと背中を見ながら思う。
「現場はどこにあるんだ」
「すぐそこだ、先に言っとくけど現場はもう片付けがすんでるから何もないぞ」
「それでも一度見ておいたほうがいい。だろ？」
「ああ」
無駄な話はせずに歩いていく。夕暮れの道はやはり夕食の買い物

に出かけていた主婦が歩いており篠崎を見ては避けていく。その後ろを歩いている夙夜はもう少しどうにかならないのかとその筋丸出しの男に溜め息をついた。

駐車場から五分も経たないうちにマンションの門をくぐっていく。門といっても外壁の切れ目みたいなもので三人で手を繋いで通ればぴったりなくらいの幅しかない。さらにマンションの壁には黒いヒビがうっすらと入っている。地震の影響ではないだろう、おそらくは老朽化によるひび割れだ。足を止めていると篠崎がどんどんと進んでいく。玄関のところで姿を見失いそうになり慌てて追いかけた。

「おい、おっさん。例の部屋の鍵だ」

玄関には薄いガラス越しに管理人と見られる初老の男性が腰掛けていた。篠崎がガラスに腕を当てて言うと男は迷わずにさっさと鍵を取り出して渡した。小さな鍵をぎゅっと握るように受け取るとまた歩き出す。

「何階？」

「三階だ。エレベーターはないからな」

そんなことは聴いていなかった。このマンションの構造だって知らない夙夜にとって部屋の場所も解らないだけだったが確かにエレベーターがあるようには見えなかった。管理人だろう男は篠崎の後に入ってきた少年に訝しげな目で見ていたが振向いた瞬間に目を足元に落す。

外壁に沿って作られている階段を二人して登っていく。真直で見るとやはり壁が汚くなっている。建設当時は白だったろう壁は黒くくすんでいる。かなりの時間が経っている事を知らせている。古いマンションなんだろうと感じながらどんどん進んでいく篠崎の後ろを歩いていくとようやく三階へと着く。マンションの住民の誰とも会わずに着いた現場の部屋。そこは赤が強めの茶系色のドアがあった。男から受け取った鍵を差し込むとぎい、と金属の擦れる音がして開いた。

「ここが現場だ」

玄関口に立つ。が、別に妙なところはない。フローリングの床は傷もついていないし壁も綺麗だ。部屋のなかへ入っても違和感はなかった。それでも周囲を隈なく見てみる。すると壁と床の間に妙な穴があったり穴から黒い影のような線が浮き上がっていたりする。さっきの説明の中で篠崎はここへ直接やってくる会員以外にもオンラインで動画を見るだけの会員もいると言っていたのを思い出す。

「箱娘ってのはさ、オンラインでも見れるんだよな」

「ああ。会員の数もかなりだ。ん？　カメラなら外してるぞ。ここの部屋は警察もやってきてばれたからな」

「警察は何て？」

「圧力をかけて潰したよ。このマンションだってうちの所有物だから文句はでてない。あるんだったら出て行けってことだ」

部屋の中を歩いていく。風呂場もリビングも寝室に使いそうな部屋も全部一通り見るが何もない。最後に犯人である樋上太一が侵入してきたという窓へと向かう。「ここは弄ってないんだよな」と聴くと篠崎は「ああ」と返事する。この部屋は地上三階にある。窓を開けると隣家との間は二メートル以上足場が離れている。マンションの外壁が隣家の屋根まで伸びている。とてもじゃないがちょっと飛んだだけじゃ掴まれない。しかもその壁の幅は同年代の女子の足裏ほどもない。

「樋上はここから逃げたんだよな」と聴くとまた「ああ」と返事。どうやって逃げられるのか。たとえここから隣家の屋根に飛び乗ってもその先は？　さすがに並の運動神経じゃ持たない。しかも逃走時には警察だっていた。逃走経路を思考する。窓から飛び屋根に乗りさらに飛び降りて走りさる樋上を想像していた。

かなり足は速いと思う。

「なぁ現場の録画映像とかないの？」

「あるぞ。次に行く場所に全部あるんだが、もう行くか？」

「そうしよう。樋上が部屋に入る前に見ておきたい。多分、次にやる時は手際が良くなってるはずだ」

第二章　三話

再び車が走り出す。篠崎はハンドルを持つ男に合流するぞと言ったが夙夜が待ったを掛けた。少年の一言に車が一度、停まってまた動き出す。篠崎は夙夜の要望によって第二現場の周りをゆっくりと走り出す。第二現場のマンション付近は大通りから一本中へ入っている。片側二斜線から対向車が来た時は人の通れる隙間もないほどの道へと変貌する。樋上が逃走しただろうルートを思考する。例の窓が見えると車内から前方を見る。かなり先の方まで一本道が続いている。姿を消せるような場所は見当たらない。樋上が逃げるとき、やってきた警官もいた。奴はどうやって逃げたのか。窓から足場になりそうな場所までは高低差が激しい。自分たちのいる地上に降りるまで段階を踏んでも難しい。

「まだか？」

運転席で声がする。後ろから車が迫ってきている。

また窓のほうへと目を向ける。もう一度、犯人の動きを想像する。樋上の身体能力が常人よりも少し上回っているだけなのか。とするしかない。夙夜は「もういいよ」と言って自分の席へと戻った。

後ろの車は衝突する事無く尻についた。

「樋上の情報は？　まさか写真だけって事はないだろ、あるならくれないか」

隣には篠崎が座っている。元々、組が雇っていた売人、ならば写真だけのはずはない。篠崎がバッグから一枚のＡ５ダブルリングノートを取り出した。コンビニでも売っているものだ。そこから何ページかめくって夙夜へと渡す。先に見た写真をクリップで留めた細かい字だった。樋上の情報というよりは彼のプロフィールから行動情報も記載されている。なかには当時、住んでいた場所まで載っていた。

「ここに行けばいいんじゃないのか？」

「事件の後から戻ってない。そりゃそうだろ、んな馬鹿なやつはいないさ。それに今じゃもう別の奴が住んでる」
「そりゃそうだ……じゃあこの携帯電話の番号も無駄ってわけだな」
「そっちも繋がらない」
すでに新宿駅から随分と遠ざかる。景色も変わり果て歓楽街は一切ない。建造物が大小バラバラのビルとマンションにだけになると走る車もまばらになった。夙夜たちを乗せた黒塗りのワゴンが大通りから姿を消したのは夕陽も落ちるころだった。うっすらとした夜の色に染められはじめると人目を避けるように長く太いビルの間にある駐車場の奥へと侵入した。駐車場はビルに囲まれており出入り口以外は塞がれている。一番奥には黒いワゴンが停まっている。今、到着したワゴンと同型だった。停車してもエンジンは切れなかった。篠崎が夙夜だけに行くぞと言う。
「お前らは組に戻って別件にあたれ。俺は今日も朝まで監視する」
乗ってきたワゴンは二人を降ろすとすぐに後退していく。すでに停まっていたほうのワゴンのドアを二度叩いて開いた。
「おう！　お前ら、元気にしてたか」
まるで友達に言うように篠崎は笑顔で乗り込む。開いたドアの間から見た車内の様子はさっきとは別物だった。車の中というのはシートがあるものだが目前の空間にはシートはなくモニターの電光ばかりが犇きあっている。
「これは」
「凄いだろ。ここが箱娘の監視部屋だ」
篠崎の言葉に中にいた男達もにやりと笑う。まるで子供が自分たちだけが知っている秘密基地に新しい友達を招いたような印象。
ワゴンの中はシートが先頭の二席のみとなっている。代わりに胸のうちで抱えられそうなくらいのモニターが五つ並んでいる。モニターの背後から伸びる配線を隠すように置かれた机にはパソコンが並んでいて二人の構成員はじっとモニターに目を配っている。彼らは車輪つきの軽そうな椅子に座っている。

次にモニターへと視線を移すとすぐさま目を背けたくなるような映像が目に入る。すでに客がいたようだ。左端のモニターにはBとアルファベットが貼られており映像は男女の交わりを映していた。妙だったのは男は覆面をしていたことだ。音はないようで映像だけが淡々と流れている。

「おっようやく反応したな。こいつが客と娘だ」

しかめた表情に篠崎が言葉を足す。

「理解はしてたさ」と返事をして目を背けない。男女の間に情がないことは一目見れば解る。女の目は虚ろで男と視線を交そうともしていない。

「どうだ？　野郎は出たか」

「ずっと見てますけどまだですね」と一人が答える。

篠崎が構成員と会話を始めると夙夜は二人の背後に立ってモニターを覗き込む。どの画面にも一人の女性が映っている。どの部屋も同じように見えた。生活用具はあるが何かがおかしい。生活感がない。また部屋の端が妙に汚かったりする。映像の端々でティッシュやらタオルが散乱していた。パソコンのほうへと目を向けると五つの動画が一斉に動いている。またモニターに目を向けると同じ映像だ。

「こいつがネット配信分で、こっちは直接見てる分だ。別角度も見てみるか？」篠崎と話していなかったほうが夙夜へ言った。彼は目を片時もモニターから離さない。

「いや、いい」と返事を返すと「面白いのに」と無表情のまま言った。

今のところ、男の姿は一人分で最初に見たモニター以外には女が一人でいる姿が映っているだけだ。

「なんだよ、今日は暇だな。ネットの利用率は」

「アクセス数も少ないですよ。いつもだったらもっと多いんですけどね」

篠崎がモニターのチャンネルを弄ると面白いように部屋の角度が

変わっていく。ネットの動画配信サービスも通常利用もやはり樋上の一件を目の当たりにした頃から下がるいっぽうらしい。
監視カメラはリビング一つでも窓側上、ベッド中央から、ベッドに平行と一部屋に三箇所設置されている。他にも玄関に風呂場とまだ代わる。部屋の隅から隅まで見渡せるようになっていた。まるでテレビのチャンネルを変えるようにしているとCと記号のついた画面に一人の男がやってきた。
肩幅が広く少し猫背の男は黒い覆面をしていて人相は知れない。男側のルールのひとつだろう。この動画は会員なら誰もが見れる、つまり自分の顔を晒すなどあってはならない。
「おっ丁度いいCに客だ。音まわせよ」
「わかってますって」
男四人でまるでAV鑑賞のように画面を見る。キーボードとマウスをちょっと弄れば車中に音が漏れ出す。C部屋の画と車中に広がった音が合わさると奇妙な感覚に陥る。まるでこの車も部屋の一部のように思えてくる。侵入してきた男の歩く音も物を動かす音も全部がそこにあるように鳴る。すると夙夜以外の三人の股間が盛り上がっていた。これからはじまる行いを理解して本能が身体を動かしている。
夙夜だけが冷静で部屋の中でセックスが行なわれても勃起しなかった。とてもじゃないが趣味じゃないと目を逸らして車を出たくなるほどだ。夙夜以外の男がモニターに釘付けになるなか一人だけ同じ映像から別のことを考えていた。
どうやって侵入を防ぐべきか、と。
どうやって犯人を、樋上を捕まえるか、と。
「被害者は今どうしてるんだ？」
「どっち？」と隣りにいた男が言った。するとすぐに篠崎が「第二の被害者は病院にいる。第一は面会謝絶だ」と言う。その声が重く

感じられた。会わせてくれと言って会わせてくれるような軟らかさは感じられなかった。
「この女たちは事件の事を知ってるのか？」
「知らない。この女達はこの生活を続けてもらうだけだ」
まるで道具のように言い放つ。その言葉の意味はそのままだろう。彼らにとって箱娘にかける心などあるはずはない。モニターの中で腰を振る女は恍惚の表情などなく目蓋を閉じて歯を食いしばっている。
「言っとくが俺たちは糞だ。承知してる。でもな、この女どもも負けないくらいだ。例えばこのCの女。こいつは最低の尻軽だ。しかも男に貢ぐ癖がある。男を作っては貢いで借金を重ねる。いつだったかな、うちの金貸しから金を借りたわけ。当然、利子は大きい。とてもまともな職じゃ稼げない」
腰を振る男がびくびくと痙攣したように震えている。一度果てたのだろう。
「そのうち、俺らがやってる風呂屋にきて何でもするからと土下座した。もう全部、俺たちの組に浸かったわけだ」
「あの時って源さん、風呂屋も管理してたんですよね。西新宿の。大変だったでしょ」
「だがやらなきゃならなかった。俺がここまで来るのには頭よりも身体を使うっきゃなかったからな。でな、風呂屋で稼いだ金でも返せないような借金をして、挙句逃げようとしたわけよ。夙夜、お前ならどうする？」
「捕まえるな」
「ビンゴ。捕まえた。でもそれで済ませられる話じゃない。俺たちは慈善事業やってるんじゃないからな。あの女の借金は今いくらだったかな？」
「二千万くらいっすかね」
「箱娘の相場だ。DもEも同じさ。男の借金や自分で作った借金やらと理由は色々だが全員一致してるのは屑だってこと」

次に「あれ？」とモニターをじっと見ていた男が声を出す。全員がそのモニターにひきつけられたが理由は緊張感のないもの。やってきた男は早々と事を終わらせ処理をしていたのだ。
「あ～らら。もう終わっちゃったよ。もう一発やりゃいいのに」
最初のモニターも事を終えていた。随分と暇になると「なぁ夙夜、飯でも食いにいかないか？」と篠崎は自分の腹を押さえる。モニターのなかは事後処理をする女が二人にテレビを見る女が三人。いつ樋上がやってくるか解らない中で緊張のない映像が映っている。車内も同じで緊張感はまるでない。篠崎の提案にのることにした。
秘密基地のようなワゴン車から外へ出るとすでに外は暗くなっていた。いかにも夕食時で自然と腹が減る。
コンクリートの上を歩き出すと「夙夜は食いたいもんとかあるのか？」とまるで友達のように話し掛けてくる。「なんでもいいさ。ここらで食える飯屋は？」と返すと「まかせろ！」と胸を叩く。
さすがに人の行き交いがあり言葉はなかった。さすがに公然の場所でできる話しはない。住宅街のなかに別の光があり看板が光っていた。夙夜としては腹に入れば何でも良かったが篠崎はどんどんと先へ行ってしまう。十分も歩いたあと、ようやく足が止まる。
「ここだ」
これまでに通ってきた店とは様子の違うラーメン屋があった。看板だけが掲げられている。客を呼び込むような媚は売らないという頑固さが良く解る店だ。戸を開くとすぐに中から反応が返ってきた。
「らっしゃい……って源か」
「悪かったな。ラーメンふたつな、それとギョーザとチャーハン」
「あいよ」
店の中は静かで客はいない。夕食時の飯屋の雰囲気ではなかった。注文が通るとすぐに調理が始まった。適当な席に座ると篠崎は勝手にコップを二つ手にして水を汲んだ。カウンターのなかにいる店主は何も言わなかった。
「いくつかしておきたい話がある」

「おっなんだ？」
「まだこの仕事の報酬とか時間とかそういったことを話してなかった。まず報酬。これは依知川組に直接行くと思う。報酬内容は千影先生が決める手はずになってるから俺は知らない」
「千影先生……あぁぁ、あの綺麗な人ね。あの人何者？」
「言えない。で、時間についてだ。昼間は学校があるから行動できない。でも樋上が現れたら連絡してくれ、すぐ動く」携帯電話の番号を取り出してみせる。「基本的な活動時間は学校が終わる三時から朝までだ。なにか源さんのほうで確認しておく事は？」
「ないよ。俺は頭の情報を信じてるしあの一戦を見た。信頼はしてる。樋上にだってそうだ。俺たちは部屋をずっと監視する。奴が現れたら連絡する。何も俺たちはお前に全部押し付けることはないぜ、ちょっと手を貸して欲しいだけさ」
「ちょっと、ね」
「へい、ラーメンお待ち」
二人のいる席ではなくカウンターに置かれる。篠崎は立ち上がりわざわざ取りに行く。店内には三人しかいないため店主がその場を離れないと運ばれない。文句の一つもなく取りに行く様は馴れているものだ。席に戻ってくると注文したラーメンの味を確認する。注文する時に何もつけずただラーメンと言って何が出てくるのか、そういえばと店内を見渡すとメニューさえない。篠崎の手にあるラーメンはうっすらとした塩の香りを運んだ。
「さぁ食おうぜ」
事務所にやってきた時との差は増すばかり。問題となっている箱娘についても話す事は少なく本当に考えているのかという疑問さえ感じる。彼から仕事に取り組む姿勢があまり見えない。
ラーメンを食べ始めるとすぐに「ギョーザとチャーハンだ」と言われまた席を立つ。店主は作り終えると椅子に座って新聞を見始める。量は多く味はしっかりとしている。濃い目の塩スープは食欲を掻き立てる。二人は話も忘れて腹の中へと流し込むように食べた。

水を飲んで一服する。しかしその一服すら夙夜にとってはもったいなく思えた。その思いは表情となって顔に現れ対面に座っている男の目に見えた。

「仕事に真面目に取り組んでくれるのは俺としちゃ嬉しいんだが、もうちょっと愛想よくってもいいんじゃないか？」

コップから手を放して目を合わせると見かけでは想像できないほどの殺気めいた意を有無を言わさず飲込まされる。

「それは箱娘の内容を知れば皆、同じような反応をするんじゃないか。それに関わりたくないっていう奴だって出てくるだろ」

「だろうな。その点じゃお前は物分りがいいな」

「違う。割り切ってるんだ」

気分が苛立っていると言いたげなどうしようもない感情はコップの残り水に波紋を起こす。正直なというよりは鋭く尖った夙夜の態度に態度を変える。

「俺だってそうさ。ここだけの話、できればこの仕事を辞めるきっかけを探してる。俺だって割り切らなきゃできねぇよ。でもな、仕事と関係なく樋上の野郎は許せねぇ」

肩が震えている。怒りが爆発する寸前、火山の噴火前のよう。これまでの彼の行動や言動からもしかすると、と親近感が募る。仕事で出会う人間には最低限の感情だけで当たるのが常だが夙夜はそうでなかった。少年は誰にたいしても情をもつ。だからこそ仕事を達成することができた。篠崎源一郎といて感じたのは彼がその筋の人間ぽさがないこと。部下とのやり取りは下品なところがあったが見ていて悪い気はしない。

「あんたいい人なのかもな」

「そんなんじゃないさ」

否定するがそれさえ謙遜に見える。

「なんで源さんがこの件でうちの事務所に来たんだ？　うちの事務所は客を選ぶんだ。誰でも来るわけじゃない。強い意志を持った人間がやってくる。源さんにはそれがないように思える」

「強い意志か」と考え込むが答えらしきものは出ない。
「俺は樋上って野郎を捕まえる。仕事だからな。でもそれ以上になにかあるって言うなら今、聞く。俺にとっては珍しいんだ。こういうの」
「こういうのってのは？」
「人探しとかただの人間を捕まえるっていうことさ」
目標である樋上の素性はまだ知れないがどうも魔術的な要素が絡んでいそうにない。ヤクザと元売人とのいざこざでしかない。なぜ、千影は自分に必要だと思ったのか解らない。夙夜に与えられる仕事はすべて必要なものだけだと言うのに。
そうやって疑問が残る中、篠崎は自分の答えをようやく口にした。
「強い意志っていうのがあるんなら多分、俺の感情なんだろうな。簡単に言えば復讐だ。第一の被害者はな、俺の大事な奴だったんだ。今もそうさ。あの子はこっちの世界にいちゃいけなかったんだ。そいつをあの野郎は壊しやがった。今も入院生活だ、箱娘がどうとかっていうのは正直俺はどうでもいいんだ」
「そうか」
「そうだ」
しばらく互いの目をじっと見る。一人、会話の外でちょっと覗く店長が二人の関係を示唆したがどうにも只事ではない目をしていた。そうやっているうちに携帯電話のバイブが夙夜の腰で震える。震動音がその場に区切りを作ったのか「なら、全力で協力する」と口にした。
「仕事が終わるまで下種と下種の追いかけっこでよかったんだ。その下種同時の争いを食い物にする下種がもう一匹やってきた。それでよかったんだ。でも源さんはそうじゃない。仕事を辞めるきっかけは作れないだろうけど樋上は捕まえてやる。絶対にだ」
「俺も同じさ、おっさん、勘定だ」
「あいよ」とばかりに店長の元へと行く。夙夜が自分の分を払おうとすると篠崎は止めた。勘定を払っている間に携帯電話を確かめる。

『ハロハロ～オレ、トウマ。源ちゃんと一緒なんだ～へぇ～。今、近くのコンビニにいるから寄んなよ』
あまりにも軽い内容で綴られている文章だったが現状を知っているような内容であることに間違いない。差出人は荒垣トウマとなっている。勘定を終えると外に出ると「この近くにコンビニってある？」と聴いた。
「コンビニか……あっちに一件あるな。なにか買うのか？　だったら」
「いや、一人で行く。先に戻ってて」
「わかった」
篠崎の言葉を遮って一人歩き出す。後ろからやってくる気配はなく、彼は言われたとおり車へと戻っていく。言われたとおりにすぐコンビニは見つかった。駐車場もない小さな店だったが路肩に不自然な車が一台停まっていた。篠崎たちの車が黒塗りだったのに対しこちらは白一色で六人乗りだった。この仕事をはじめるよりも少し前から見る憶えのある車だ。この車があるということはコンビニのなかに踏み入る。
缶ジュースやペットボトルの並ぶ棚の前にやってくると連中の一人が横に立ち「へぇヤクザに力貸すんだ～」と声をかけてきた。いや、実際には独り言に近い。知り合ってからどれだけ時間が経ったか解らないほどの男、荒垣トウマである。派遣会社の社員で朝から晩まで働いているはずの男。
「源ちゃんってなに？」
「篠崎源一郎だから源ちゃん」
目もくれずに返事はする。二人の話に誰も耳を持たなかった。金色の髪に細く高い背のトウマは見慣れたスーツ姿で隣りに立つ。二人の男に接点など誰があると思うのか解らないほどである。彼を抜いた連中は周りを囲むように他の客を立ち寄せ付けようとしなかった。
「なるほど、で、いつもは新宿駅で遊んでる連中連れてなにやって

んの？」
「夙夜の監視」
「マジ？」
「マジよ。うちらの鴉がヤクザとつるむなんてちょっとジェラシー超えちゃうかも」
「俺はお前達の仲間じゃないよ。俺はいつだって中立だ。今回はたまたま依頼人がヤクザだったってだけ」
「ふ～ん。ま、いいけどね。でもさ、依知川には気をつけときなよ」
目と目の間、眉間より少し下に人差し指を向けられる。
「やっぱなにかあるのか？」
「あるよ。麻薬から人身売買までたっぷりとね。俺らが売人潰しやってるから最近じゃ上がりが少ないだろうけど」
樋上が売人を辞めたというのが三年前。トウマが回りの連中を引き連れだしたのは丁度その頃。繋がりはあるのかもしれない。
「いろいろとあるみたいだけど今回はちょっと違う」
「知ってる。樋上でしょ。うちの会社に登録してるから知ってるよ。居場所わかったら俺にも教えてね」
「わかった。じゃあ行くわ」
教えるつもりはなかった。自分は中立であり今回は依頼人が篠崎だったにすぎない。何より自分は情報屋でもないリークなどできるはずもない。依頼がなければトウマの側につくが今回はそうもいかない。
「あ～い」とふざけた返事を最後に別れると適当に缶珈琲をつまんでレジへと向かった。連中の誰もが夙夜に道を譲って通した。支払いを済ませると篠崎達の待つ車へと戻る。すっかり暗くなった空には月が姿を見せていた。
車に戻る道の中、まだ箱娘について知らない情報がある。またビルに囲まれた駐車場にやってくるとドアを二度叩く。ドアを開けたのは篠崎だった。
「別にノックとかはしなくていいぞ」

「ちょっと聞きたいことがある。犯人の現れた時間は？」
「いつだったかな。おい、あの時の映像をだしてくれ」
モニターを見ていた一人が足元からノートパソコンを取り出して起動させる。十インチ程度のモニターだったが見る分には充分だった。すぐに問題の動画が再生される。樋上が侵入する少し前からだった動画のなかで壁に掛けられた時計は四時を指している。窓の外から差し込む橙色の光から夕方だとわかる。
動画は再生されつづけ、二番目の被害者が叫び声をあげる。聴いていられなくなり音量を絞る。最小限の音と惨酷な映像はドアを叩く音と警察のものとみられる声がするまで続いた。動画の最後では樋上がカメラ目線で中指を立てて窓から去っている。やはり魔術的な要素はない。
「あと、この部屋の場所を教えてくれないか？　一度、現場になる場所を見ておきたい」
「見ておきたいって今から全部回ったら二時間は掛かるぞ」
「それは車だったらだろ」
「わかった。ちょっと待ってろ」
篠崎は黒皮のバッグを引きずり出すとファイルから一枚の用紙を取り出した。用紙を裏返して部下の前にあったボールペンを取ると何か記入していく。書き終わると「ほらよ」と差し出す。受けとると数字が並び「俺の携帯番号だ」と告げた。裏返すと新宿駅を上にして現在の位置を中心にした地図が載っている。地図の中にAからEまでのアルファベットが書かれている。モニターにはAはなくBからEまでのアルファベットが張られていた。Aの場所は第二現場だった。
「コピーは？」
「ある。そいつは持ってっていい」
「わかった」と懐にしまう。今夜、やるべきことは決まった。
「俺はこれから現場を回ってくる。なにか動きがあったら連絡をくれ」

「おう」
車から出るとビルとの間にある二メートルもの壁を一蹴する。次はビルの外壁に付けられた排水管に足を引っ掛けるようにして跳ぶ。夙夜の身体は重力や筋力といった常識から外れたように夜闇に紛れていく。三棟のビルを順に使って屋上へと登っていく様を見上げて篠崎は少年にこれまでにないほどの期待をした。
すでに太陽は落ちている。暗くなった夜に夙夜はすぐに溶け込んだ。住宅の屋根と電信柱、足場になるものは何でも利用して東京の町を駆け抜けていく。

第二章　四話

夜の町はどの家庭も光を放っている。道端から見れば外灯と民家の光が幾分か消えてしまう。だが、空から見下ろせば昼間と変わらないと言えるほどの光が地上から溢れている事だろう。夙夜の身体は鳥の如く民家の上を翻る。一飛び五メートルはあろうかという跳躍で舞うとすぐに夜へと舞い上がる。

東堂夙夜が仕事をはじめてからしばらく経った頃の事、新宿を中心に噂が広まった。噂とは一匹の黒い影が頭上を飛ぶというもの。争い事が起きるとやってきては争っている両者、または関係者一同を倒してしまう。誰もその影の素性を知る者はおらず憶えもない。時季が変わる頃、影は黒い飛行体ということもあって鴉と呼ばれるようになっていた。

夙夜が空を飛ぶとき、必ずマントのように大きく広がる羽織を着る。これは魔術師の能力を高める道具の一つで鳥にとって羽の役目を担うに匹敵する。厚みはなく半透明のような布はその先まで見通すことができるほど。羽織は夙夜が行動範囲を広げるには必要不可欠な道具である。鴉という名前の由来としても活躍した。羽織が広がった時にできる影はまるで鳥の羽のようでもあったからだ。

周りの民家を眼下に収める高層ビルの屋上へやってきた時、篠崎より渡された箱娘の位置を示す地図を手前に広げる。手にした用紙に載っているアルファベットはCを中心に輪を描いている。西新宿駅からそれほど離れていなかった。車で移動した時、やたらと時間が掛かったように思えたのは入り組んだ道を走っていたためである。アルファベットの文字と間に生える建築物の高低差と道路の具合を確かめる。

樋上が次に狙うのはどこか。逃走経路を作りやすい場所を選ぶのは確かだ。地図を見ればわかるがアルファベットはばらばらに配置されている。一箇所に集まってこそいれば見つけるのは容易いが現

場を捜すのも困難。地図上で見る画では計れない現実を見ようと地図をしまう。
まず一番遠くなるBへと向かう。西南方面へと向かって移動していくと目標の建物が見えた。足場にしている民家の赤い屋根からはとても飛び移れない高さである。用紙には十二階の五号室と書かれている。隣りの建物は高さが半分もない。窓から逃げるのは事実上不可能だ。かといって逃げ道がないわけでもない。また玄関はカード認証によって部外者は入れない。外の壁を見ると足場になりそうなパイプと管が何本か上から続いている。よしあれだ、と助走無しに飛び壁と止め具に足を掛けて登っていく。さらには二階以降にあるベランダの手すりに足をかけて二階の廊下に踊り出た。
一度でも屋内に入ってしまえば移動する事は容易い。一旦、羽織をしまってエレベーターまで行く。非常用階段もあるが目的の部屋は十二階、エレベーターを使うほうがいい。十二階に着くと二階とは違う妙な感覚が夙夜の肌を触った。まるでざらざらしたやすりで擦ったような感触がする。
目的の五号室の前にくると正体がはっきりとする。この部屋のなかから感じるオーラとでも言うべき負の感情が肌に伝わってきていた。夙夜は目的の部屋の前に来ても入ることはなかった。立ち止まらずに歩いていく。前方から一人の男がやってきていたからだ。男は別におかしな所はない。平凡なサラリーマン風で夙夜とは目を合わせない。着ているスーツは別段高額な物ではなかったし袖口から覗く腕時計もブランド物ではなかった。銀色は頭上の照明に反射して眩しかったがそれだけでしかない。男とすれ違う時、いくらか興奮しているのか息が荒かった。男の足音がするなかでケータイを取り出した。篠崎の番号は地図の裏に載っている。男の靴音が途絶えドアの動く音がした直後にかける。
「俺だ、どうした？」と篭った声が聴こえる。まだ車中にいるようだった。
「今、B部屋の近くにいる。一人男が入ったか？」

「なに？　Ｂだと」
ドアの閉まる音がした。振り返って見ると男の姿は消えている。
「ああ、一人入ってきたな。スーツだ」
どうやら場所はあっているようだ。地図に狂いはないようだ。
「しかし驚きだな。まだ十分ほどしか経ってないぞ、車で移動したって……」
「普通の感覚は捨ててくれ。だからうちの事務所に来たんだろ？」
「そうだったな」
軽く笑う篠崎の声を聴いて電源を切った。地図の確認が目的だったため話す事はない。
このままＢ部屋を監視するのもいいと考えたがやることはある。再び羽織を取り出すと夙夜は地上に向かって飛び降りた。着地の瞬間にまた飛びあがる。他の場所も見ておきたいのだ。次にＤ部屋へと移動する。東側へと進んで場所の確認したのちにＥも確認する。Ｅ部屋のすぐ近くに一度見たＡ部屋もあったが行く必要はなかった。Ａ部屋の周囲は頭に入っている。
箱娘の部屋はＡからＥの五部屋。地図に書かれている分である。全てを回り終えたことになる。が、もう一部屋無駄だと解っていても見ておきたい場所がある。
樋上の部屋だ。犯人である樋上太一の住所も把握している。少しの間しか見ていないが文字は覚えている。今いる場所からなら十分も掛からない。携帯電話を開いて時間を見るとまだ夜の九時すぎ。十分な時間がある。休む間もなくまた空へと舞う。樋上の部屋は新宿から離れていたが電車の屋根に乗ってしまえばすぐに着く。空を飛ぶにも体力は消耗する。少しの間だけ休むつもりで発進した電車に飛び乗った。
尻の下で轟音が響く。さしていい気分じゃないなかで電話が鳴った。樋上が現れたかと慌てて取り出すと千影だった。
「ぼうや、今夜は十時までに事務所へ戻って来い」
「何かあったんですか？」

「この件には魔術式は必要ないと言ってるの。少しばかり常人よりも高い身体能力があれば解決するはずよ。時を間違えなければいいだけ」
「了解です」と言って通話を切る。
表示された待ち受け画面にはメールの着信が二件表示されている。夙夜のメールアドレスは自分の知りもしない人物にまで渡っている。中学三年になり本格的に仕事をするようになった時、情報は命だと教えられた。その人物からのメールだった
荒垣トウマとの出会いだ。篠崎と別れコンビニで会った男とその仲間。彼らからの情報は欠かせない。トウマは父親の派遣会社の働く副社長。年齢はまだ二十代前半で高卒。夙夜が新宿を中心に動くために必要な仲間でもある。二十代と十代の情報なら彼を凌ぐ人物は相違ないだろう。トウマは派遣会社で働く傍ら新宿周辺の自警団を動かすトップもしている。彼の派遣会社に登録している者達の大半が組織の一員でもあることから街の情報は彼の元に集まると言うわけだ。
そんなトウマがクラスメイトの白瀬トオルの実の兄だと知ったのはつい最近の事。
内容はさっきコンビニで別れたときとほとんど同じで依知川に気をつけろというものだった。もう一つのメールを開くと今度は後藤とあった。
『明日の放課後、いつものファミレスに来い』
そう書かれていた。こっちもこっちだ。荒垣トウマが二十代後半までの情報源なら後藤はその上をいく。後藤は新宿署のベテラン刑事で千影とも交流がある。その付き合いは夙夜よりも長いと聞く。仕事をし始めたとき色々とお世話になった人でもあるがこうやって直接メールを送ってくるようなことは滅多にない。
つまり依知川組と一緒にいることがばれている可能性はある。『わかった』と返信して携帯電話をしまう。
そうこうしている内に電車が目的の駅に近付いていた。さすがに

駅の中に入ってしまうと見つかるため路上へと飛び出る。動いていた電車からのスピードで身体は勢いが増している。そのまま駆けて跳んでを繰り返し金融会社の看板を足蹴にする。ビルからかけられている看板は全て足場になって屋上へと出る。人ごみを眼下にして無人の暗い世界を歩き行く。

樋上の住んでいたマンションへとたどり着くにはゴミで出来上がったような臭い道を進むしかなかった。壁に亀裂の入った随分ボロボロで小屋のようなマンションだった。住所どおりならここで合っている。夙夜から見れば豚小屋のほうがマシだった。隣りの部屋の玄関が異様に近い。おそらく壁は薄いだろう。大声を出せば筒抜けになる。金属のぶつかる音でさえきっと聴こえる。木でできた玄関扉には厚紙に田中と書いて取り付けられている。表札なんだろう。樋上が姿を消したのは二年前だ。新しい人間が住んでいても間違いはない。戸口の隣には窓がついている。中からの光が漏れていて田中という男が生活をしているのが窺えた。

これで一応の現場となるべき場所はすべてになる。樋上はBからE部屋の四部屋のうちどこかに出現する。ビデオの様子から現れないことはない。何より洸敷事務所にやってきた時点で行動を起こすことは間違いない。事務所の結界は非常に優秀である。時刻は九時半になる。千影は十時と言っていた。時間ぎりぎりまで仕事をするのがベターだ。夙夜は再び西新宿駅方面と飛び事務所から一番近いEの部屋を監視するため再び電車の屋根に乗った。

今からなら十分ほど見られる。戻ってきたE部屋の玄関を目にするには最高の位置はどこかと見渡すと一件のマンションがあった。丁度正面に位置していて高さも程よい。屋上に登ると夜風を感じながら見ることにする。するとまたしてもケータイが鳴った。夙夜の携帯電話は深夜にならない限り良く鳴る。大半はメールの着信だが親しい人物からは電話となる。

「トウマだ」と電源を入れるなり聴こえた。「解ってるよ」と着信中に見ていたことを告げるとふふっと笑っていつもの調子はずれな

声になる。
「樋上のことだけどさ、もし見つけたら二十万分ぶんどってくれない」
「なんだよ。追剥ぎでもしろってか」
「うん、そう。うちの子が被害にあってんのよ。よろぴくね～」
一方的な電話は一方的に切れる。返事もしていないというのに押し付けるようにして切れる。切れた電話を見て二十万分を考えてみる。しかし樋上が持っている可能性は低い。しかし頭の端に入れておくのは忘れない。貸しを作っておくのはいいことだ。とくに荒垣トウマはその点において最上の人物である。たかが二十万でも二百万の価値を引き出すことができる。
十時頃になると篠崎のほうから連絡がかかってきた。
「どうした？」
「今どこにいるんだ？」
「E部屋の玄関が見える場所」
「そうか、今日はもう上がってくれていいぞ。初日だしな。なにか動きがあったらこっちから連絡を入れる」
「そうか。わかった」
初日だからなどという事は夙夜にとってどうでもよかったが確証のない相手にじっとしているのも馬鹿馬鹿しい。なにより千影から十時に戻れという命令もある。断りを入れる手間が省けたと思って現場を後にした。

事務所に戻るなり千影が迫ってきた。彼女の色香に抵抗など一切できずに豊満な胸と尻を味わう。夙夜が中学三年になった時、千影はこれから必ず必要になるといって少年の性へ干渉した。人間が自分を見失う要因は数あれどもっともこの年頃にあるのは性だと彼女は言い切った。
恋愛や性への関心が人の心を狂わす。
夙夜にとって洸敷千影の言う事は絶対である。少年は必要なんだ

と思う反面、好奇心に包まれながら彼女と一夜を共にした。初めて味わう女の感触に酔いしれぬように初めての夜は簡素なものだった。かわりに四月からの二ヶ月あまり同じ歳の者達が絶対に味わえないような快楽を彼女から何度も得る。彼女とのひと時はまるで夢のようであった。

「今回の事件って」

肌を重ねながら夙夜は天井を見て言った。千影の息をする音が耳元に鳴る。細くも鍛えた筋肉が彼女の枕になっていた。

「なに？」

赤ワインの香りを孕んだ吐息で千影は聴いた。

「何で受けたんです？」

「何でって……必要だからよ。いつも言ってるでしょ、ぼうやに必要な授業としてこの事務所を作ったのよ。必要でないものは寄せ付けないように結界を張ってるのもそのため」

洸敷事務所が出来たのは彼女が夙夜を引き取った後である。それまでは事務所の入ったビルはひとつのテナントも出ていない崩壊寸前だった。千影はそんなビルの一階を買い取り看板を出した。やがて夙夜が中学に入り力を行使できるようになったあと仕事を開始。すべては東堂夙夜の為だ。

「それはわかってるんですけど」

「気に入らない？　でもね、世の中きれい事ばかりじゃないって事を知っておくべきよ。でないと人間そのものに絶望するわ」

天井は光を失った蛍光灯が二本並んでいる。目蓋を閉じると昼間の一幕が映る。車内に設置されたモニターだ。画面の中には箱娘と呼ばれる女性が籠の中の鳥のように生活し無残にも犯されていた。入れ替わりやってくる男達とインターネットで見ている会員たちがいる。

「解ってるんです」と自分に言い聞かせるような言葉を吐いた。

言葉を吐いて彼女の胸に顔をうずめた。千影はまるで母親のように夙夜の後頭部に手を回して口元を緩めた。まだ少年は少年のまま

だった。

第二章　五話

夙夜は朝早く起きると朝陽が昇るよりも早くに事務所を飛び出し実家へと戻った。千影との熱い夜を過ごしたというのに身体は冷えていた。実家に帰ると寝ているであろうメイドの北岡めぐみを起こさないように自分の部屋へと進んでいく。東堂家は新宿から離れており東京都の都市部からも随分と遠くにある。マンションがずらりと並ぶ風景はなく東堂家も周りの民家も分厚い壁と門を設置していた。

夙夜の部屋は門をくぐり小さな池のある庭を歩き縁側を歩いてようやくたどり着く。洋式のドアはなく襖を開けるとすぐに部屋となる。いくら放課後が自由でもまだ中学校に通うことになっている。煩わしいと思いながらも支度を済ませる。日常を送るため昼間は学校生活に向かう。

洸敷事務所で魔術師としての生活と昼間の学生生活はすでに身体に染み付いていた。だがこの生活に慣れるには苦労がなかったわけではない。夙夜には入院生活が二年ありその間に同じ歳の友人たちはすでに高校へと進学している。学生時代の二歳差は大きな壁を作り同じクラスや同級生に馴染む事は出来なかった。唯一といってもいい話し相手は氷上恭司くらいだった。恭司もまた飛びぬけた養子と性格のため孤立していた。

帰りのホームルームが終わると誰よりも早く教室を抜け出す。同級生たちの中で彼を目で追ったのは数人の女子くらいだった。夙夜も恭司と同じとはいかないが女子の気を惹くには十分すぎるほど顔がいい。加えて成績は良かったし運動神経は学校でトップ。モテないわけがない。それでも学生生活には興味がなくすぐにメールで指定されたファミレスへと向かう。

昨夜後藤から送られてきたメールをもう一度呼みながら歩く。学校からファミレスまでは歩いて十分程度かかる。ファミレスは新宿

駅に繋がっている大通りにでる手前にある。まだ人の数は少なく他国の言葉もあまり聞こえてこない。そんな通りには人目を惹き付ける建物は少なくファミレスでもちょっと派手ならよく見える。目的のファミレスは二階建ての建物で一階は駐車場になっている。夙夜は入り口に続く階段よりも先に駐車場へと目を向けた。暗がりで目を凝らすと停まっている車のなかに後藤の車があった。黒のセダンでもう中にいると示していた。彼の到着が先だった。夙夜はファミレスの階段を登っていく。

「いらっしゃいませ～」

やたらと甲高い元気のいい挨拶と共に店員が駆け寄ってくる。ピンクのミニスカート姿で太ももは下着が見える寸前だった。来店した男の半数は虜にしそうな微笑みで「一名様ですか～？」と語尾を延ばして聞いてくる。しかし夙夜の心は揺れることなく店員に待ったをかけて店内の席を指差して「相席ね」といった。指さす席にはとても学生の関係者とは見えない中年が座っており夙夜を睨むような鋭い眼光で見ていた。どう見ても機嫌がいい雰囲気は無い。しかもその隣には無表情でいるスーツの女が座っている。夙夜はその女性を見たことはなかった。

「よう」

「俺、オレンジね」と店員に言うと「はーい！」と元気よく手を上げて奥へと向かって行った。

「なんだ、ジュースかよ。子供っぽいの頼むんだな」

といって珈琲を飲むのが後藤。

謎の女性の前にはこの店の特別メニューであるデラックスストロベリーパフェが置かれている。高さは二十五センチほどあり大人でも一人で食べるには無理のありそうな糖分の塊だ。子供っぽいものといえばこの女性もそうだろうと思ったが口にはしなかった。

その座っている女性について紹介する気がないのか目もくれずに話をする。

「ここのは別格なの、長年通ってるんだから一回ぐらい飲めば」

「俺は柑橘類だめなんだよ」
「へぇ〜、で、何の用？」
店員がオレンジジュースを持ってくる。一口、口に含むと甘酸っぱいオレンジの味が広がる。
「何のって、もう解ってんだろ。依知川の件だ。お前さんがあの組の奴と一緒にいたって報告があるんだ」
「一緒にいたらなにか問題が？　個人の付き合いに警察は首を突っ込むの？」
「しないが問題はあるよ。お前はこの街にとっちゃ必要な奴だ」
恥ずかしい台詞を何気に言う。後藤は夙夜に対して回りくどい説明はしない。事実を在りのままに伝える事が多い。それも二人の間柄が立場同士ではないからだ。後藤と知合うきっかけを作ったのは誰であろう千影である。事務所を設立した頃から世話になっている。夙夜が鴉という名前を広めるにも一躍買っている。
「ありがたいけどそれはあんたにとってだろ？　ヤクザでも自警団でもないからな。それより聴きたいんだけどさ。その可愛い人は誰？」
女は眼前のストロベリーパフェと真剣勝負でもするかのように手にしたスプーンをどこから差し込もうかと悩んでいた。完成されたパフェはどこから食べても崩れてしまう。なら好きなところから食べればいいのに彼女は真剣に悩んでいた。悩みすぎて夙夜が出したパスに気づくのが遅れた。
そして……「か、かわいいだと！」と店内に響き渡るように叫んだ。今まで表情を変えなかった女がテーブルを叩いて身を乗り出す。顔は真っ赤にしてポニーテールも大きく揺れた。
「いや可愛いと思うよ。特別仕様のストロベリーパフェ食べてるくらいだしな」
「まだ食べてない！　というよりこれは後藤さんが頼んだんです！」
「後藤さん、なんなんです。どうしても会わせたいって言うから来たのにこんな子供だし。こんな事なら」

身を乗り出したまま後藤へいう。そんな彼女の肩を持ってさげる。
「こっちは楠木朱美。今月からうちの署に配属になった刑事さんだ。お前に会わせておく必要があるって思ったのさ。こいつ……腕はまだまだなのにどこにでも突っ込んでいくんでな、どこかでお前さんと衝突しそうだったから先にと思ったわけだ」
「猪みたいに言わないでください。それにそんな必要がどこにあるんです？　子供ですよ」
確かにその通り。学生服を着てるからそのままにしか見えない。
「見た目はな。今日は制服着てるからもっともだ。だけどな、言ったろ、この街には中立に動く奴が何人もいるって」
「はい。数年前から動いているって確か……鴉って噂ですね」
自分で言って夙夜を見る。夙夜と後藤の顔を何度か交互に見てはっとした。
「嘘でしょ」と大きく叫ぶと店の中だと思い出し周囲の視線に恥ずかしくなる。
「本当だよ。中学の制服着てるが実際の年齢は二つずれてる」
本来なら高校二年。
「顔見せだけなのか？　なら」
「まぁちょっと待て。お前が今追ってるのはなんだ？」
「言えるかよ」
「じゃあこれだけ。俺たち警察は依知川の野郎をここらでぶっ壊しておきたい。けどな、それには下っ端を捕まえる程度じゃ無理だ、解るな」
「ああ」
言われなくたってわかってるとばかりにぶっきらぼうな返事で答えると席を立つ。オレンジジュースを一気に飲み干す。
「いきなり組織の中枢に潜り込むようなことは出来ないだろうが何かあった場合は俺にも噛ませろよ」
何も言わずにファミレスを去っていく。その後姿をじっと見つめたのは楠木だった。後藤はというと去っていく夙夜に思い残しはな

いようで新着メニューに目を通していた。

後藤と別れた後、急いで事務所へ向かう。着替えも道具も全部、事務所に置きっぱなしになっている。実家に戻るとき手にしていた物はなにもない。いつもなら学校から一度帰宅するが今日はそうする時間がなかった。

荷物は事務所に預けることにしてさっさと歩く。東京都庁の前を通りホテルを左手に曲がれば平日の昼間なのにどこからやってきたのか解らない通行人でいっぱいだった。事務所までそうは離れていない。時間にして十五分もあれば余裕がある。が、夙夜は人ごみが大の苦手だった。正確には人ごみというより他人のペースに混ざる事が難しい。足の動きが違いすぎてどうしてもあわせられない。急いでいるわけではないが動きの速さが決定的に違っている。

事務所までの道が一本になると夙夜は一本裏手側へ姿を消すように入る。普通は誰も通らないビルの側面、裏側が並ぶ路地を進む。人の姿などあるはずもなく一息吸うだけでむせ返るほどの臭気が蔓延している。もちろん路地を歩くことはない。そのまま路地を突き抜けて道に出る。こちらの道も少し迂回する形になるが新宿駅へと向かって伸びている。夙夜はいつもこの道を使っていない。

洸敷事務所は新宿駅のすぐ近くに存在する。さっきまでの通りよりも大きく開けた道は車の量が増えている。逆に人間の数は少なく人目を惹くものも飲食店ではなく商社ビルとなる。誰もが忙しなく歩いている。

駅方面へと歩くなかで工事現場に差し当たった。こんな大通りで工事かと現場を見上げる。かなり高い場所まで鉄骨は組み上げられている。工事は随分と時間が経っていたようだが夙夜は知らなかった。

道路には黄色の重機が三台停まっていて歩行者は全員左手側へと促されている。道は完全とはいかずとも真直ぐに歩くことが出来なかった。夙夜も同じように他と一緒にされてまた一本裏へと入る。

今度は路地ではなく単なる迂回だったが工事現場には小塚建設と書かれた垂れ幕が空から掲げられている。中は見えないがとても大きなビルが建つことは予測できる。
「よう」
いつの間にか見上げて足が止まっていた。そこへ前方から知った顔がやってきた。白瀬トオルだ。荒垣トウマの弟でもある。苗字が違う理由は両親が離婚したためでトウマは父方、トオルは母方にいる。トオルはすでに私服に着替えていて涼しそうな姿をしていた。
「よう、トオル」
「そっちは学校終わったばっかり、なんか長くないか？」
「違うよ。後藤のおっさんに呼び出されたんだ。どこで知ったか俺がある奴らと一緒だって聞きつけてやってきやがった」
言うとトオルは肩を揺らして笑い上げた。トオルも後藤は知っていて面倒を見てもらっている。夙夜とは違うがトオルもそこそこ素行が悪い。喧嘩っぱやく売られた喧嘩は全部買い取っている。しかも負けはない。一応ボクシングのプロを目指していただけあって素人に負ける要素はない。タイマンなら尚の事。その喧嘩の後始末を後藤が手を回してなんとかという手はずになっている。
「兄貴から聴いたんだけどヤクザとつるんでるんだって？」
「お前もか」
情報の出所はなんとなしに判明する。おそらくトウマが各所で必要な人物に言い回ったのだ。行動を押さえるため周りから固めている。
「今回もただの仕事さ。他意はないんだ」
「面倒そうだな。俺はそういう面倒くさいのは簡便だわ」
二人して笑って手を挙げるとまた自分の進む方向へと歩きだした。事務所に着くと千影と挨拶を交して着替えと荷物を持って箱娘の地図に載っている場所をまた巡るために事務所を後にする。
実家、学校、事務所、BからEの部屋、監視をする車、この五つの箇所を巡る生活が続くことになる。白瀬トオルの言う通り面倒く

さいことこの上ない生活だった。自分の時間などない監視の日々は過ぎやがて三日が経った。

犯人である樋上が次に現れるのはいつかと皆が待っていた。夙夜は参加してから三日しか経っていないが組の連中や篠崎はすでに長い日々が経っていて誰も彼もが苛立っていた。最初の頃は仲良くなっていた連中の間に亀裂が入ったように口を利かなくなり無言でモニターを見つめる時間が長くなっていく。

彼らの仕事は変わらなかったがいつやってくるとも知れぬ樋上の存在がストレスを肥大化させていく。一台の車のなかでは息苦しくなり最終的には誰か一人がいればいいだろうとばかりに交代していた。

四日目、すでに疲労は限界に達していた。依知川組の連中は目の下の隈をパンダのそれと同じように濃くして座っている。目前のモニターには男女の交わりが絶えず映し出されていたが股間が反応する事はなくただの映像になっていた。彼らが求めたのは直球な肉欲の形ではなく純粋な恋愛劇だった。

監視を続ける車へとやってきた夙夜はその光景を見て直感した。

やつが動く。

洸敷事務所にやってくる仕事はそう長くは続かない。最長二週間程度で結末を知ることになっている。もし夙夜の能力が足りなければ、ミスをしていれば酷い惨劇で終わるだろう。だが、これまで少年は仕事を疎かにした事はなく直向に行なってきた。成果は出ている。今のところ、達成できなかった仕事は存在しない。

周りの男たちが苛立つと頭の回転が鈍る。篠崎の様子も出会った頃とは違い静かになっていた。夙夜の人間的なところではないもっとシンプルな生物としての感覚が肌を貫いた。モニターのなかで繰り返される交わりから目を遠ざけて再び夜空へと飛び立った。今日もこの街は冷たい風が吹いている。足元で走る車や歩く人を見る。そこに樋上の姿はない。奴がどこに現れるのか予想は出来ない。となれば待機する場所はどの部屋にも最短の距離で迎える場所になる。

夙夜が陣取ったのはどの部屋でもなく箱娘の部屋から線を引き点となるビルだった。
屋上の貯水タンクの上で目蓋を閉じる。肌に纏わりつく風の中から、ただ連絡を待つ。
今夜必ず奴が現れる。その確信が夙夜をその場に固定し続けた。

合図があったのは深夜0時ちょうど。
携帯電話が震えて鳴るとすぐに手を伸ばして耳に当てる。
「夙夜！　やろうが出やがった！」
怒りに震えた声が耳を劈く。電話の向こうでかすかにエンジン音が響いている。監視の役目を担っていた車が動いている。
「焦るな、部屋はどこだ」
「D！　Dだ！　野郎、玄関から入り込んできやがった。こんな事なら電子ロックでも付ければよかったんだ」
箱娘の部屋に入る方法はこれといってない。普通にドアを開けばそこは天国。それが箱娘である。
D部屋も他と同じくらい侵入するにも撤退するにも問題のある部屋。あえて選んだ理由はやはり自信か。
「それで樋上はまだ部屋にいるのか？」
「ああ。こっちはもう着く。夙夜、お前も来てくれ」
「言われなくてもな」
電話を切って風の流れに混ざる。後押しされるように飛ぶ。D部屋まで掛かる時間は約五分。監視を続けていた篠崎たちのほうが早く着くだろうが問題はそこからだ。彼らが捕まえられればそこでこの仕事が終わるがそうはならないだろう。彼らが走って捕まえられるなら自分の存在はここにない。暗い空の中で目を凝らせばD部屋のあるマンションが見えてくる。
かすかに声がした。
夜の住宅には相応しくない怒号は確かにマンションに響き渡り住民を震え上がらせている。夙夜は声の通る側、つまりはD部屋の窓

側が見える位置で止まる。民家の屋根だったが仕方がない。D部屋は上、首を曲げて見上げなければならないが他に見を置く場所がないため屋根に伏せて待った。

光の消えていた部屋がぱらぱらと灯りをつけはじめる。おそらく篠崎はまだ叫んでいる。隣りは愚か上下の階の部屋も電気をつけていく。しかしD部屋の様子はまだない。まだか、まだかと思っていると窓に人影が映る。夜の中でも一点の光に向けられる視力はとても強い。

窓が割れると一人の男が落ちていく。はっとしたが落下ではなく男は自ら飛び降りたと判断がついた。その姿がまるで猿のように器用で驚く。マンションの外には小さいながらもベランダがある。夙夜がそうしたように男もベランダに足を掛けて身体を地上へ近づけていく。速さは窮地に立たされた者の動きではなく予測していた行動だった。いっぽう、D部屋のベランダでは篠崎が降りていく男を怒鳴っていた。そしてその手に携帯電話が握られたことを夙夜の目は捉えていた。

「夙夜か、まだ着かないのか？」

着信はバイブ音さえ鳴らさない速度で受け取った。民家の屋根から見る男の敗走シーンはとても躍動的でスポーツマンの活躍にも似ていた。

「いや、もう追わなくていい。俺に任せろ」

「お、おう！　そうさせてもらう」

男が、樋上が走る。どこへ向かっているというのか。駅までそう遠くない。電車に乗られると厄介だ。夙夜は一瞬にして駆け出し樋上を追い抜いた。

傑作だとばかりに顔が引きつって笑っている。依知川の部下である篠崎源一郎が部屋にやってきた時、すでに箱娘はその身体に刃を晒していた。女は叫び声を上げ顔を真っ青にしたが助ける義理はなく身体を無残にも切りつけられた。今回はどんな興奮が得られるか

と胸を躍らせていた樋上は自身の求める快楽を確かな形で得ていた。
「はぁっ……はぁっ……へへッ逃げ切ったか。あとは車に……」
駅が見えたとき樋上は勝利を確信した。誰も追ってこない道には点々とした外灯が並びすでにマンションで聴いたあの怒号もない。すべてが予定通りに進んでいたのだ。
「待てよ」
そんな樋上の前に夙夜は現れた。すでに駅の入り口に立っていた。さらには他の人間は消えていた。車の音も電車の近付いてくる音も消失している。
「あんだ、てめー。邪魔だ、どけ」
しかし樋上にはそんな周りの状況が掴めていない。気がそこまで回っていない。夙夜にとって都合は良かった。夙夜はゆっくりと近付き樋上を正面から見る。写真で見るよりも衰弱しているが心は見てとれるぐらいに表面に浮出ている。
「そいつは無理だ。あんたもさ、もう逃げるのはやめにしたらどうだよ」
「ガキが……ぶっ殺してやる！」
樋上が走り出す。無作為に突っ込んできたように見えたが実は違う。近付くその手には長さ十センチ程度だが銀色に光るナイフがあった。誰かが逃走を邪魔する恐れはあった。箱娘を傷つけたナイフは手にしたままだった。
しかし逃げる必要はない。突進してくる狂気に引く事はない。ようやくこの仕事が終わるのだ。なにより少しは戦いというものを愉しみたかった。ナイフが横一線になぎ払われる。銀色の光が夙夜の首があった場所を切る。だがそこに夙夜はいない。少年の目はナイフの全てを見切っていた。対面した樋上の動きはやはり人間そのものであり異常な能力は見られない。
人間が持つ身体能力では夙夜を捉える事は出来ない。魔術師として培った才能と能力。それは身体能力の上昇を促し五感から得る感覚までもはるかに向上させる。ナイフは止まったように見えていた。

意識を集中すればコマ送りのように見える。そればかりか体の動きも早くなる。樋上が夙夜に追いつくことはない。
ナイフがまたしても空を切ると今度は夙夜の拳が腹をえぐった。腹筋は弱くたった一撃で身体を折り曲げてナイフを落した。長い逃走の中で樋上の身体は戦えるような状態ではなかった。攻撃の手を休めずにもう一度、今度は顔面に叩き込む。襟を持って殴ると樋上の身体がぶっ飛んだ。
「これで、終わりだ」
樋上は最初の一撃だけで身体が動かなくなっていた。松風のときと変わらない。身体能力の向上は動きだけでなく単純な力でもある。見た目以上の衝撃を受けているはず。樋上が立ち上がる気配はない。初撃で決着は着いていた。
倒れた樋上に目をやるとその腰の膨らみが気になった。こんな奴でも持っているんだ、と手にしたのは安物の財布だった。荒垣トウマは樋上から二十万円分、得られないかと言っていた。そんなに持っているはずはないだろうが少しはと思って開いた財布には車の鍵と金二万円があった。こんなものでもないよりはマシだとポケットにしまうと携帯電話を取り出して篠崎の番号を押した。
「夙夜！」
声は大きく耳元に近すぎた。
「よう。樋上ならここにいるぜ。駅で待ってる」
「これで仕事は完了だな。サンキュー」
「大したことないさ。それよりここからだけど、こいつをどうする？」
問いに篠崎は答えをするのが遅れた。足元で倒れる男の処分は想像が出来た。彼らの本業を忘れてはいない。樋上が行なった事はどの分野においても最低で下劣な行いである。それを由とする組織ではない。彼に未来はないだろう。
「それはお前の知るところじゃない」
ようやく出た答えは非常に冷たかった。

「急に冷たくなるな」
「言いたくないんだ」
「そっか」
「こいつはやっちゃいけねぇ事をやった。だからケジメはつけさせる。それだけだ」
「じゃあこれでさよならだ。報酬やらの話は千影先生とやってくれ。俺は一足先に帰るよ」
「そうしてくれ」
樋上は動けるような状態ではない。駅の影に放置して夙夜はその場を後にした。ほどなくして夙夜の携帯に篠崎から連絡が入り「助かった」と一言話をした。その頃、すでに新宿駅に着いていた夙夜は荒垣トウマと会っていた。樋上の身柄は渡す事が出来ないが彼に貸しを作ることには成功した。
樋上の持っていた財布と車の鍵を渡すと少し渋ったが「サンキュ」とトウマはいった。それから事務所へと向かい千影に事件の結末を告げると何気なしに新宿駅の広場にやってきた。考えなどなく約一週間に渡る監視の日々が終わった事にようやく休めると夜空を見上げる。
「やぁ、夙夜」と友人の声が聴こえた。
見ればそこには恋人と腕を組んだ氷上恭司の姿があった。雑誌の表紙を飾るモデルが二人して並ぶのはどうかと思ったがあまりにもお似合いすぎて何もいえなかった。
「仕事は？」
「終わったところ。そっちは？　勉強捗ってる？」
「おかげさまで」と曽我部が言った。
彼女の喉は元に戻りすべてが順調に見えた。一年前、二人を救った身としてはこれほどにない幸福であった。二人は先を急いでいるようで特に身のある話しはしなかったがそれだけでもすさんだ心の浄化には最高だった。
再び一人になって夜空を見上げる。星は見えなかったが濁りはな

く透き通っていた。

第三章　一話

太陽が姿を消し数多の星が姿を現すと夜の代表である月の元、一件のカフェがバーに姿を変貌させる。店の名前はＺＥＲＯ。ちょっと気取った名前は店長の趣味だ。しかしこの名前、実のところ似合っていない。カフェとして店のメニューにあるのは珈琲と紅茶のどちらかをつけたセットメニューだ。おまけに店内はカウンターと円形テーブル六つ。どれも木目のモダンな雰囲気。仰々しい看板を掲げるわけでもなく珍しいメニューがあるわけでもない。ただちょっと可愛い店員が数名存在するカフェである。

そんなＺＥＲＯという店がバーに変わった直後、続々と客はやってきた。まず最初にやってきたのは近くの工事現場からやってきたような薄青の作業着を着た男達。髪は金、黒、茶と色々。顎には髭も生えていて整っていない。自然と生えた不精そのもの。とても昼間のこの店には釣り合わない風体。

作業着の男達の次は歌舞伎町から流れてきたと見れる美女数人。きらきらのドレスが店内の灯りに反射する。白い肌も胸の谷も惜しげもなく見せる美女達に男たちは興奮し鼻息を荒げる。しかし与えられた餌に飛びつくようなことはない。男達の興奮は紛れもない本物だったが彼らは女に向かわなかった。女たちがカウンターではなく円形テーブルへと移動して話をし始める。

男たちはそんな彼女らを横目で見ながらなにやら準備をはじめだす。まずカウンターを乗り越えて壁に手をやる。壁には巨大なコルクボードが掲げられており両端から一人ずつ手をかけて降ろす。壁と思っていた部分には実は十五センチ程度の隙間が存在しており三段の棚があった。棚には焼酎からカクテルの材料までが並んでおり均等に整理されて並んでいた。同時に天井から降り注ぐ光が琥珀に変わり酒瓶のなかの液体が輝いた。

「準備ご苦労」と店の奥から一人の中年が現れた。長く伸びた髪を

耳の後ろ辺りで一本に纏めた長身の男、彼こそこの店の店長である。
「ういーっす」と彼に対し男たちが今時の言葉にならないようなイントネーションの挨拶すると女達は手を振ってみせた。「俺はもう帰って寝るから片付けよろしくな」と店長は店の鍵をカウンターに置いて店を出て行く。彼は最後の最後まで女達を見つづけていた。
店内がすっかり昼間の顔を隠してしまったあと、またしても客がやって来る。これまで男も女も働いていたであろう格好をしていた。だが今回は違う。集団でやってきた三番目の客のなかに働いている素振りはなく全員が私服だった。彼らが到着するとそれまで準備していた作業着の男たちが整列し女達も立ち上がった。
「やっほー、ご苦労さん」
先頭を歩くのは荒垣トウマ。今宵もいつもと変わらぬ気の抜けた挨拶である。そんな彼に全員が頭を下げた。トウマを先頭に集団は店内最奥へと向かっていく。集団の先頭を歩くトウマは誰が見ても群れのリーダーそのもので、その隣には東堂夙夜もいた。さらにはトウマの弟である白瀬トオルも二人の父親である荒垣真治までもが立っている。彼らの向かう先には昼間はなかったソファーが用意されていた。ソファーは四人は座れる大型でカウンターの端も合わせれば八人程度は集まれる。「準備って後、残ってんの？」とソファーに腰をかけるとトウマが言った。すると「全部できてます」と元気の良い返事が返ってくる。三度目の集団が全員店内に入りきると座っていられなくなるほど狭い空間となる。そのなかで誰かが話をすると声が篭ってざわつく。がやがやと五月蝿くなるとトウマは手を叩き全員の視線を自分に集めた。
「今日は俺の親父がみんなに日頃の疲れをとってもらおうって事でこの店を借りきった！　皆じゃんじゃん飲んでストレス発散させていけ！」
店内が一瞬、音を無くしたようにしんとする。が、瞬時に歓声が響いた。誰も彼もがグラスを手にした。カウンターにはドレスの女たちが陣取っており次々にグラスへ酒を注いでいく。そうやって全

員のグラスに酒が注がれると今度はリーダー各である四人、トウマとその家族にも酒が渡る。最後に「夙夜は？」と聞かれ少年は年齢の事など関係なくいつも飲んでいるようにジントニックを注文した。かくして店内にいる全員が酒を手にして頭上に掲げるとトウマは父親に「頼むよ」と小声で言った。父親でありこの場の提供者である荒垣真治は場を盛り上げるのが好きではなかった。自分で作り上げた派遣会社の社長ではあるものの実質、登録者の管理は息子のトウマに任せっきりで自分は経営ばかり。この場にいる九割は自分の会社に登録している者だというのに顔を見たことがない人物もいる。正直、苦手だったが全員の目が自分に向けられるととても逃げられそうにないと観念してソファーを立った。どこへ向かうのかと何十もの視線が注視すると荒垣真治はカウンターに乗り店の中央まで歩いた。この場で一番の年長は自分の半分も生きていない若年からの視線と期待を一身に受け「乾杯！」と高らかに言った。

「乾杯！」

と全員が一斉に言って酒が手元から吸い込まれていく。乾杯の一言が引き金になってパーティーは始まった。男女入り乱れ普段を愚痴を言う。職場の上司、気に入らないやつの話最初は誰もが不満を口にして叫びもした。店内は穏やかな日常をどこかに忘れてきたようにはしゃぎ回る。

ソファの一角にはそんな光景を見ながら談笑する一団がいる。パーティーが始まって一時間もすると一団はある人物の豹変に笑っていた。

「イッエーイ！　みんな飲んでるかー！」

「おおー！」

「イエーイ！　みんな盛り上がってるかー！」

「おおー！」

昭和の香り漂う叫び声がカウンターから怒鳴るように響きみんなが答える。集団をあおるように叫ぶのは荒垣真治だった。彼の顔は真っ赤になって最初の頃とは比べ物にもならないほど酔っていた。

足元には空になった焼酎のボトルが転がっている。普段、大人しい彼は酒を飲むと性格が変わる。というより本性が現れる。枠が外れるといってもいい。本来、祭り好きなのだ。
「今日は俺のおごりだ！みんなじゃんじゃん飲んで行ってくれー！」
「おおー！」
父親の姿を見て笑うのは二人の息子。トウマとトオルは変貌した父親に拍手しながら笑っていた。
「まったく、毎晩毎晩騒がしいな」
手にしたジントニックを半分くらい消費した夙夜が言った。ソファに座っている彼らも頬を赤くしてほんのりと酔いが回っている。
「いいじゃないの。みんなここでストレス発散してるんだから」と言って笑うは兄。「そうだぜ、夙夜。お前も飲めよ」と弟。当然、弟のほうは夙夜よりも一つ下。法律ではまだ酒は飲めない。そんな事を言ってしまえばここにいる人間の大半はアウトになる。真面目な大人と言えるのは数人しかいない。だがここではそんな事は関係ない。
「お前は少し控えるくらいがいいんだよ」
トオルは今夜三杯目のビールを三分の二まで減らしている。
「この歳から飲んでりゃ二十歳になったら酒豪だな」
「そうかもな、そういや幹部四人じゃ誰が一番強いんだ？」
ひとつ、ちょっとした質問だった。ソファ周りには三人のほかにリーダー各四人が座っている。荒垣真治がいれば八人だが今はカウンターに乗って叫んでいるため現在は七人だ。
「ん～、それは困る質問だな～。向坂は普段飲まないし、左近寺は仕事があるときゃ本腰入れないし、相馬はゆっくりだろ、納屋は……どう？」
「……俺は強くない」と真先に振られた納屋は答えた。納屋陸雄、彼はトウマと同じく荒垣真治の作った派遣会社の社員である。短く切った髪は銀色に染め上げた四人のうち一番背の高い男だ。納屋は四人どころか店内でもっとも口数が少ない。納屋は手元にあるグラ

スの中で震える焼酎を一口含んだ。舌の上を這う麦の味を噛締める。
「納谷さん、んなこと言いながらそれ、ロック三杯目でしょ。十分ですよ。僕なんか水割り二杯でダウンです」
少し控えめに言ったのは向坂雄二。納屋と比べると身体つきは幼く筋肉もない。肩は坂道のように下っており手元にはアルコール度の低いチューハイが握られている。おまけに味はストロベリーとお子様向け。向坂も派遣会社の社員で彼は登録者の管理をしている。会社でパソコンを操作、キーボードを打つばかりの仕事である。
「オレは焼酎とか駄目だなぁ。あっ、でもチューハイとかカクテルなら五杯はいけるよ。度数の強いやつ飲まなきゃ普通だ」
へらへら笑ったのは左近寺。会社の関係者ではないレコード店の店員である。この場にいないが夙夜とトオルの友人である氷上恭司も通う店の従業員だ。そんな彼もこの集団と密接に繋がっており今夜四杯目のオレンジチューハイを手にしている。
「みんなよく呑むよね」
リーダー各四人の最後、相馬大輔があきれたような目をしていた。ツンツンに尖った髪に時折触れる。もう片方の手にはハイボールがあった。
「相馬だって呑むじゃない。それ何杯目？」
「さっきウイスキー飲んだからこれで四杯目かな」
トウマが声をかけたのは相馬だけだった。二人の仲は随分と昔から続いている。他のリーダー格と出会うよりも先で学生時代からの縁で繋がっていた。トウマが会社で新宿方面の管理をするいっぽうで相馬は池袋方面を任されている。トウマほどのカリスマ性はないが相馬を慕う者は多い。
「……十分飲んでる。まだ始まったばかりだぞ」
「そうそう。相馬君はペースも速いから強いほうだよ。でもやっぱトウマさんには勝てないよね」
「あの人の遺伝だからね～」と言う先にはまだ飲んでいる真治がいる。父親は性格が変わるものの酔い潰れることはない。そんな彼の

息子二人は顔は赤いが酔っている感覚はなかった。
「親父が酒飲みでおふくろが酒屋じゃそうもなるわな」
荒垣家は派遣会社経営。ならトオルのいる白瀬家はというと酒屋経営である。場所は池袋駅近く。
「ここの酒もトオルの酒屋が卸ろしだったっけ」
「ああ、そうだよ。親父の息が掛かったところはほとんどそうじゃね」
軽く言うがその息は新宿の個人経営店から夜の店まで広くかかっている。「それが営業ってやつなのよ」もちろん息をかけたのは父親ではなくトウマやここにいる登録者である。そのため白瀬酒屋店は繁盛し潤っていた。
「酒が強いのはわかったけどトオルくんや夙夜くんに呑ますのはほどほどにね。二人も一杯くらいにしときなよ。一応、中学生なんだから」
「いいの。保護者もいるんだし……一応」
その保護者は錯乱したように笑っていた。
「まじめな奴なんてここにはいないと思うよ」
「それもそうだな」
皆して笑っているとカウンターの上で一人、立っていた年長者が指を差す。
「おい！　そこのガキども！　こっちに来てなんかやれ！」
「んだよ、親父がやれよ」
「俺はいいんだよ。皆だってみてぇよな！」
その言葉に店内が騒然となる。いったい誰のどんな姿を見たいのか。答えは一つしかない。ソファーに座っている男達の中でもっとも格好良い男だ。店内の沸きだつ歓声を背中に浴びて「ほら見ろ、みんなお前らの一発芸が見たいんだ。さっさと来い！」と誰となしに誘う。最初から逃げ道などなくトウマは歓声に応えるように立ち上がるとカウンターの上ではないが店内中央へと向かっていく。ソファーに並んだ男達には見えなくなると歓声は消えてやがて期待の

目が注がれた。
なにをしているのか気にはなるが期待の眼差しが並ぶ中でトオルの目がどこか淋しくなっているように夙夜は感じた。
「トオル羨ましいのか？」
「アニキは前からモテるだろ。俺と違うんだよ」
以前からだがトオルは兄を見るとき、時々嫉妬深い目をすることがあった。憎しみからのものではなく憧れにも近い感情。荒垣トウマの持つ才能と能力はまるで兄弟とは思えないほど違っている。トウマは昔から頭がよく運動も出来た。言うならば優秀な子供だった。それに比べトオルは頭が悪く素行がよくない。唯一といっていいほど自分を魅せられたボクシングもこの歳にして昔の事だ。遊びに全力をかけても彼女の一人もできない。そんなトオルの目にトウマは仕事も遊びも全部を持った完成されたように見えた。
「そんなこと言ってるとずっとできないぞ。モテるアニキを使って作りゃいいのさ」
「それってなんか違わなくない？」
「大丈夫さ。お前にだって出来る」
と、よく解らない説得をする相馬だが彼にも彼女はいない。リーダー格のなかで彼女がいるのは納屋と左近寺の二人だけである。さらに上のトウマにも彼女はいない。彼には彼女はおろか女の影さえ見当たらない。仕事上、風俗関係の女性とも面識があるが関係が発展する可能性はない。
相馬の説得に「根拠は？」とトオルが言うと「ない」と即答する。
「ないのかよ！」
「ま、そう言わず呑め呑め！」
どっと笑い声が店内に響いた。ソファの場所からはトウマがなにをしたかは解らなかったが店内で起きた爆笑をつまみに飲み始めた。
それからトウマはしばらくソファに戻ってこなかった。罵詈雑言の嵐となっていた店内には笑い声が聴こえはじめ流れが変わっていく。夙夜たちも最近の出来事を話し穏やかながらも騒がしい時間が

流れる。店内に一つだけある時計が三時になるとようやく何人かが酒を飲むのをやめだした。店内に蔓延した酒の匂いはしらふの人間でもすぐに酔いが回るほどの濃さになり宴は終幕を迎えた。帰っていく参加者の大半がいなくなると壁にコルクボードを戻し大量のグラスを洗い終えるとようやく夙夜を含めたリーダーたちも店を後にする。

電車もなくなった深夜にもなると人の数はさすがに消え街は静まっていた。歓楽街からはまだ呼び込みが行なわれてネオンが輝いているが店内から帰ろうとする彼らの目には止まらなかった。帰宅方法は皆、手配済みで近場に車を停めている。比較的酔いの少ない人物にハンドルを握らせて運転する段取りだ。警察もそう簡単に呼び止めはしない。

ばらばらになりながらも車へと向かっていく彼らの一団に一足遅れて夙夜たちが追いついた。すでに車は走っていった後のはずが一団は道のど真ん中で立ち止まり輪を作っていた。

「なにやってんの？」

「あ、トウマさん！　いや、それがあいつ……」

声をかけられた男はどう説明していいかわからないといった顔をした。トウマ達が人を掻き分け中心を見ると二人の男がにらみ合っていた。一人は金髪で見たことのない男だったが強暴な目をしている。しかしもう一人には全員見覚えがあった。相馬はその男を見て「あれ、うちのチームにいる奴だな」と口にした。つまり彼は池袋方面で仕事をしている。

「そうなの？」

「俺たち駅に向かってたんですけど向こうがいきなり因縁つけてきやがって……」

金髪を指して言う。これだけの集団に喧嘩をしかけてくるなんて馬鹿もいいところだが血の気が多いのか金髪はすでに目がイっている。いつ身体が飛び出すか解らない。

「向こうから喧嘩売ってきたの？」

「……はい」
「どうすんのさ」
「どうもこうもない、止めてくる」
相馬は酔いが冷めていた。彼の管理する登録者で問題が起きた場合のことを考えれば当然だがそれ以上に金髪の目が尋常ではないためである。しかしトウマはそうではなかった。
「まぁ待とうよ。あいつ強いの？」
「いや、そんなことないと思いますけど」
「売られた喧嘩も買えないようじゃうちのチームに必要ないよ。それに相手側。武器持ってないみたいだし。大怪我はしないでしょ」
そうこう言っている間に金髪が飛び出した。戦法もなにもない殴り合いだった。二人の男が殴り合いをはじめ最初の一発が顔面を横から殴る。誰も手を出さなかったがお互いに一発ずつ殴るとまるでテレビでボクシングの試合を見るかのように周囲が騒ぎ始める。その騒ぎに感化させられてか二人も激しさを増す。夙夜にとってみればまるでスローモーションにしか見えなかったが一人、目の前で行なわれる喧嘩に腕を震わす男がいた。
そして金髪が倒れる。
どっちが優勢かなどなかった。ただ、ちょっとだけ相馬の知合い側が強かったにすぎない。味方のいない一人の金髪は口元から垂れる血を拭きながらポケットに手を突っ込んだ。なにかぐしゃぐしゃと弄ると口元を緩めてにやりと笑う。「もう終わりかよ」と対峙する男が言うと金髪はポケットからなにやら青く光る瓶を取り出した。十センチ程度の長さに指の太さの瓶を手に持つと蓋を開いて一気に飲み込んでいく。
「なんだあれ？」
「……ポパイか」と納屋が呟く。
「なにそれ？」
「ん？　知らないの？　昔のヒーローなんかでさ。特定の物食べたら強くなるの」と向坂が説明する。しかしながら夙夜もトオルも知

らなかった。
「知らねえよ」
「でもあいつ、動きが変わった」
さっきまでとは違っていた。立ち上がるなり最後の一押しとばかりに殴りに掛かった拳は空を切るだけだった。金髪の動きがどう変わったのか、この場にいる連中のなかで理解できたのは数人しかいない。夙夜は拳の届く距離を正確に見極めていた。それと同じだ。金髪の目は性能こそ違ったが拳の届く位置を把握し限界の場所で回避している。口をめいっぱい開いて歯茎を見せて笑う。馬鹿にされたと思って殴るスピードが早くなったが金髪はその速度にも対応して笑った。
「おわりかよ！」
一発だった。金髪の一撃はこれまでと違い完全にノックアウトさせた。すぐに一人が倒れた男の介抱へと飛びつく。これで喧嘩は終わりだと誰もが思った瞬間だった。金髪は介抱しに寄った男を蹴り上げた。
「おい！　もういいだろ」
誰が止めるでもなくトオルが飛び出した。トウマの弟だと誰もが知っている。その中心に乗り込んだのだ。
「なんだ、てめー」
「もう決着はついただろ。お前の勝ちだよ」
「知るか！　むかつくんだよ、こいつが！　それとも何かコイツの代わりにやるってか？　いいぜ、ガキがぼっこぼこにしてやる」
金髪の目はすでに自分を失っていた。トオルは無言で構えると金髪はまたしても自分から飛び出した。まるでプロ野球選手の投げた球のようなスピードで拳が繰り出される。さっきまで呑んでいた酒の酔いはさっきの殴り合いで冷め頭は驚くほど冷静だった。寸前のところで交す。何年もかけて練習したボクシングの基本は身体が忘れていない。金髪のパンチは早いがそれだけだった。素人のパンチを回避するだけなら余裕だった。回避しジャブ、ストレートと叩き

込む。
単なる暴力に負けるはずはない。トオルを知っている人物はそう思った。だが倒れた金髪はすぐに起き上がり番犬のように噛み付く。
「夙夜、どう思う？」
トオルと金髪の殴り合いから目を離さずにトウマが言った。これまでにない真剣な声だった。
「さっきの青い液体飲んだ後、奴の動きが変わったな。そういう薬物が出回ってるのか？」
「そんなの聴いてない。誰か知ってる？」
声を出した者はいない。全員が首を横に振っただけだ。
「らしいよ。てかそんな凄いのがあるなら俺らじゃなくて夙夜でしょ？　ないの情報？」
少し記憶を探るがやはりそんな情報はどこにもない。麻薬に関してならともかく金髪が所持していたあの青い液体は全くの初見だった。
「ないよ。トオルの奴ちょっとやばくないか」
「そうだな」
次第にトオルに拳が掠めるようになっていた。回避は間に合っていない。拳は腕の皮膚が赤くなっていく。まだ本格的な一撃に到達していないが徐々に追い詰められている。さらにはその掠った拳だけでも相当な痛みがあるらしく辛抱強いトオルの顔が歪んでいる。
「あいつ酔いすぎてるんじゃないか？」
「夙夜、いざとなったら頼むよ」
いざ、そうなる時間はなかった。すでに金髪は頭の血管を千切り噴出しそうになっていたのだ。突然、殴るのをやめて辺りを見渡す。にかっと笑った目の先にはどこでどうなったか解らないが鉄パイプが何本か転がっていた。素手の殴り合いだと誰が決めたかわからなかったがそんなルールなど無視して金髪は飛びついた。一本、手に取る。棒一本といっても鉄だ。集団は一歩どころか数歩後ろに下がった。あろうことか敵対していたトオルを放って金髪は鉄パイプを

振り回し始める。
「全部、叩き割ってやる！」
鉄パイプの奔放さを止めるべく夙夜が飛び出す。夜風よりも速く駆け出して背後から蹴る。衝撃によって鉄パイプを手放した金髪が倒れる。
「な……ん……だ……よ」
何ともなかったように起き上がる。かなり力をいれて蹴ったはずだった。
「そいつは頂けないな」
「手ぇ出すなよ」
「こいつ普通じゃない。意識だけとばす」
もはや手加減などない。一度武器を持った相手に遠慮などする必要はない。夙夜はこれ以上事態が悪化させたくはなかった。二人で並んで構える。トオルの拳が繰り出されると今度は夙夜の拳が飛び出る。と思ったらまたトオルと交互に拳が繰り出され金髪は成すすべなくその身に受ける。回避などさせなかった。足がふらつきもはやサンドバッグ状態になると二人の拳が同時に顔を殴り地に伏せた。
立ち上がろうとはしたがさすがに立てなかった。体力の限界だったのだろうか夙夜の言った通り意識が途絶えていた。倒れた金髪の状態を確認してポケットの中を探る。先ほど状況を変えたあの瓶がまだないかと調べたが残っていなかった。道端に転がった瓶を拾い上げるとポケットにしまう。
「こいつは貰っておく。いいよな」
トウマは頷くだけだった。
「救急車呼んだよ～」
「後の処理はどうする？」
こちらの被害はと喧嘩していた男と寄り添い蹴られた男を見ると立って歩けるようだった。痣はあるがそれほど重症には見えない。本人達も問題ないと答える。救急車に乗せるのは金髪の男のほうだ。
「救急隊員は俺の知り合いだからなんとでもなるさ」

呼んだ相馬がそう言うとここに自分たちがいる事のほうが騒ぎになるからと全員を帰路へ立たせる。トウマが声をかけると集団はばらばらになって駆け足気味に場を離れていく。
「そうか。じゃあ、お開きだな。トウマ頼む」
夙夜は一人、長い帰り道を進むため路地に入りビルを駆け上がる。夜風に紛れると月明かりを背に街の空を黒い影がひとつ、飛翔した。

第三章　二話

身体を熱くさせていたアルコールは夜風にまぎれると急激に冷めていった。しかし男を殴った拳はまだ熱を帯びている。身体の芯たる胸の内にも微かな熱を帯びていた。今、東堂夙夜の身体は炎の球のように宙を舞う。

民家の屋根と電信柱を足場にして飛ぶ事、十分程度。新宿駅での一騒動を頭の中で再生する。今頃、意識をなくした男は病院へと運ばれている事だろう。彼についてはトウマたちがなんとかするはず。その後、聞けばいい。問題は懐にしまった空き瓶。男が喧嘩中に飲んだあの青い液体。あの液体を飲んだ後、男の力は変わった。構えも何もないただの喧嘩だったにすぎないがそれでも対峙した白瀬トオルと渡り合ったのだ。トオルは酒を飲み多少酔っていたがそれで能力が落ちるほど弱くはない。一度構えれば身体が無意識のうちにも戦闘に対応する。拳に宿る力も減っていない。男は最初の一撃で倒れるはずだった。それで全てが上手く納まるはずだったのだ。だが男は何度も立ち上がり夙夜の手を借りてようやく意識を失った。瓶の中身を調べる必要がある。

この街のことならトウマが知っている。彼の元には日々の情報が全て集まる仕組みが構成されており夙夜だけに限らず多くの人が利用する。そのトウマですら知らなかった物がいま自分の手の内にある。千影先生に見せたほうがいい、そう思ったところで実家の門を飛び越えた。

庭に飛び降りると自室へ繋がる縁側廊下に腰かけていた北岡めぐみと目があった。彼女は空から降りてきた夙夜に驚く事もなかった。門の高さは二メートルほどあったが何一つ動じる事がなく帰ってきた主に寄って行く。

「夙夜さま、ご伝言がありますよ」

「なに？」

庭は深海のように暗く足元がおぼつかない。東堂家の庭は両足をそろえて立つとぎりぎりなくらいの石が並んでいる。石は完全に埋まっているわけでなく大地と二センチほど差がある。この差につま先が当たり引っ掛けやすい。しかしながらめぐみは上手く石の中心に足を置いている。

「明日、アーサー・ライバックさまが日本にこられるそうです。是非、夙夜さまにお迎えいただけないかと」と告げた。

アーサー・ライバックの名前を聴いたのは久しぶりだった。実に数年ぶりのことで直接会ったのは千影のところへ預けられる時だった。彼、アーサー・ライバックは遠い親戚になる。東堂家の本家は京都にあり母方の親類に米国との繋がりがある。夙夜は純粋な日本人の血筋であり血の繋がりはない。だが、ライバックはよく親戚の集まりに顔を出し幼い頃の夙夜の面倒を見ていた。

「ってことはもう飛行機に乗ってるな。こっちから連絡はしないほうがいいか……でも随分急だな」

めぐみの説明からするとすでに空の上にいなくてはならない。もうじき日の出なのだ。

「どうしますか？」

「どうもこうもないよ。あの人が俺に迎えを頼むってのはなんとなく理由が解るから行くよ、時間は？」

夙夜を洸敷千影に預けるようにしたのは誰であろう彼である。その彼が何もなしにやってくるはずはない。

「お昼に着くと申しておりました。私のほうから携帯電話の番号をお伝えしておりますので到着したら連絡してくるはずです」

「わかった。ありがと」

「えっ？」と表情の変化が見える。

「だってそれ言うために起きてたんでしょ。ごめんね」

「そんなことないですよ、それではお休みなさいませ」

おじぎすると自分の部屋へと戻っていく。夙夜もまた自室へと歩を進める。当然、足を引っ掛けるようなことはなく廊下へと移る。

すると携帯電話が鳴った。誰からかと見ると洸敷千影の名前が表示されていた。
「朝一で帝のところへ行きなさい。なんでも渡したい物があるそうよ」と通話中になるなり声が聴こえてきた。「了解」と返事をすると驚くほどあっさりと電源が切れた。おそらく機嫌が悪かったのだろう。
すぐに太陽も昇る時間なのだ、とても眠る時間はない。夙夜は仮眠をとるだけにして服は着替えなかった。

日本の首都東京に存在する魔術師の数は推定百四十人。内に東堂夙夜と洸敷千影は含まれていない。百四十という数は東京の魔術師を管理する者のはじきだした数にすぎない。魔術師の行動、能力には制限が掛けられている。人知を超える力の所有者、魔術師……彼らを管理する者が必要なのだ。
帝と呼ばれる存在である。東京二十三区に住む魔術師たちを管理し他の地域との連絡係りでもある。魔術師たちの行動を管理、統治する帝。帝とは二十三区全ての区域に作り上げた扉を介して会う事ができる。その扉は大抵どこぞの雑居ビルのエレベーターにありパスを持った人物が乗り込むことで仕掛けが作動する。
夙夜が利用するのは実家から何本か通りを隔てた場所にある汚らしい無人ビルだ。小さい頃はまだ飲食店が入っていたが今ではすっかりさびれている。しかしビルの中に入るのに問題はない、むしろ誰もいない空間で鍵がかかっている戸もない。コンクリートの箱そのもので電気も通っていない。夙夜は朝陽の昇る頃にはビルの中に侵入していて停止しているエレベーターの前に立っていた。
帝のいる空間へ向かうには魔術師たる証明が必要となる。いわゆるパスだが形ではない。エレベーターの下降ボタンを押せば自ずと仕掛けは作動し魔術師だけを乗せて下降する。地下へと下降するエレベーターは長い時間をかけて移動し到着音を鳴らす。外の景色は一切見えず外には出られない。この仕組みは東京二十三区全てに存

在しコンビニのように利用できる、
到着音が鳴ると扉が開かれた。地下を降りていたはずのエレベーターの外は暗く広い空間に到着していた。夙夜が暗い空間へ足を一歩踏み込むとどこかでぽつぽつと灯が燈る。桜の花びらが舞い散るように足元に光が反射すると赤い社が現れた。夙夜がエレベーターから完全に出ると乗っていた箱はどこかへと消えていく。変わりに社の奥に金色の光が現れる。さらに二段重ねられた座敷と仰々しく飾られた白い垂れ幕が姿を現し両側に背の高い灯篭が片側三本並ぶ。中央で光っていた金色の輝きが薄らとなるとようやく形となっていく。
「なんじゃ、遅かったではないか、もう太陽は昇っておるぞ、夙夜」
光が消えるとともに声がする。光の粒子が浮き出てくるような金色の髪をしており練乳のように白い肌の女だ。ほんのp僅かに尻上がりの目に桜色の唇は男の本能を惹きだす艶をもっている。肌の上に乗る紅白の着物には髪と同じ金色の装飾物が胸元で光る。
「朝一って言われたのは二時間前なんだ勘弁してよ」
「それはそれはわしも連絡を入れるのが遅かったようじゃな。しっかし酒の匂いのする学生というのはいかんな。またあの連中と飲んでおったのか？」
着替えるべきだったかと今になって後悔する。さすがにこの歳で酒の匂いを振り撒くのはよろしくない。
「いいだろ。付き合いは大事なんだ」
「わっちとの？突き合い？はせんのにか？」にやりと頬を緩めて夙夜へ擦り寄る。
天元斎の胸は大きく着物の帯びも止めが緩いためよく揺れる。脚は素足で爪の先から太ももまで露わになっている。美女の進行に年頃の少年なら卒倒してしまうほどの色気が迫り来る。しかし夙夜にとって色気は対処済みであった。毎日、艶の権化のような千影とともに過ごしているため動じない。

「付き合いって言ったの。そっちの？突き合い？じゃない。それで、何のようです？こんな時間に呼び出すなんて」
「わっちがおぬしを呼び出した理由は決まっておるじゃろう、えぇ。おぬしの事を考えて身体を火照らしておったのじゃよ」
　進行は止まらず身体を寄り添わせる。止めなければ食ってしまうぞとばかりに覆い被さる一歩手前でようやく「だから」と言って突き放す。
「千影とはもう何度寝たんじゃ？」
「関係ないでしょ。それに先生とはそういう間柄じゃないの。全部、修行の一環。それに千影先生と恋愛関係になれるほど俺は優等生じゃないよ」
「そうじゃろか？　おぬしのここはけっこう立派じゃと思うが？」
　そう言って指したのは股間だった。
「結局そこなんだろ？」
「長く生きておれば愉しみなど少ないもんじゃ。文献や過去の話が風化して退屈な物に見える。周りの科学技術もうそうじゃ、わっちの能力に比べれば所詮は子供だまし。さすれば気に入った男と交わることこそ最上の快楽になるというものじゃよ」
　そのとき天元斎のほっぺに三本の長い髭が現れる。長く針金のように弾力のある線のようだった。彼女の正体が垣間見える、彼女は人ではない。金の髪も白い肌も人外のもので人間が持つ肉体の美しさをはるかに超えている。人の持つ艶では到底たどり着けない眩さを持っている。彼此三千年の時を得て進化した姿である。人間の姿は三千年の間に身につい変化の術によるものだといつの日か夙夜は聴いた憶えがある。
「悪いけど今日は時間が無いんだ」
　天元斎は髭を引っ込めると「また言い訳か？」と言った。
「違う。今日は親戚が来るんだ」
「どこからじゃ？　東堂家ということは京都か？」
「どこからかな？　多分イギリスじゃないか」

「多分とは何じゃ、親戚なんじゃろ。どこに住んどるか知らんのか」
「各地を転々としててね。一応、イギリスに実家があるって聞いてる。とにかくその人がやってくるから空港にいかなきゃならないんだ」
　実のところライバックがどこに住んでいるか夙夜は知らない。親戚の集まりでしか顔を合わせない彼なのだからおかしくはない。しかも彼の場合、土地を点々としているためどこに住んでいるかなど知る術がない。たまに話をする父親から聞くとアメリカ、イギリス、フランスのどこかで活動していると知る程度だ。
「なら仕方ないのう」とようやく傍から離れて座敷へ戻る。
「呼び出した理由は」
「そう焦るな。実はな、夙夜にひとつ褒美をと思ったんじゃ」
「褒美ね」
　貰う理由を描いてみたが心当たりはなかった。
「おぬしはこの東京で仕事を開始した魔術師のなかでも特に頑張っておるからのう」
　煽てられてもやはり心当たりはない。何より自分は正規の魔術師ではない。天元斎の元で仕事をしているわけでもないのだ。
「だからと思ってある技師に作らせたんじゃ、刀をな」と夙夜の考えを無視して天元斎は一人、話を続けていく。そして一息して
「名は桜紋鴉」
　と、真剣な声で言った。
「さくら、もん、からす？」
　聞いたこともない名前を出されてどう反応したものかと口にだして頭の中で想像する。天元斎の言葉と唱えた言葉は合っていたがそこから読み取れる物ではなかった。
「うむ。鞘と鍔に桜の紋が彫ってあってな。これが美しいのなんのって。しかも刃は鴉のように黒い。だからして桜紋鴉というわけじゃ。どうじゃ、おぬしの通り名のようで格好いいじゃろ」
「そうなのか」とある程度の納得で相槌を打つ。

「さらには刃長八十八センチの野太刀じゃ。他の刀とはまるで違う迫力がある。そうそう目にするものではないぞ」
「八十八って……いくらなんでも長すぎる。俺の身長の半分以上あるじゃないか」
日本刀の長さで八十八はありえない。どれだけ長くとも約八十五であり通常の刀なら六十台である。八十八といえばそれこそ大多数の人間の身体の半分以上になる。柄を装着すれば九十を越えるのは明白だ。ならそれを武器として使用することも容易ではない。しかしその考えを天元斎は真っ向から否定する。
「何を言う。魔術師相手に小太刀など役に立たんぞ。それに刃長だけでなく使用者の魔力を刃に変えることも出来る優れものじゃ。わっちの予想ではおぬしの場合刃長は二メートルに達すると見ておるぞ」
「それをくれるのか？」
金の髪を揺らしてうなずいた。
説明どおりの物ならば喜んで受け取る品だ。持ち運びは難しいだろうが二メートルもの刃は魅力的である。
「だがちと問題が起きよった。その技師が襲撃にあってのう。昨晩じゃ、こちらから連絡をした後すぐに逝きおった」
「刀は？」
「とられた」とあっさりと言った。まるで他人事のように口にする。
「随分と軽く言うな。あんたの管轄だろ、もうちょっと危機感とかないのかよ」
「重くも軽くも無い。わっちはおぬしら人間が粗相せんように見張っておるだけじゃ。今回のような小言に関与せん。じゃが今回はちと違う。おぬしの褒美として作らせた刀を盗まれたわけじゃからのう」
つまりは私用で作らせたに近いのだ。天元斎が独自に作らせたのだろう。この空間には彼女の姿しかないがれっきとした組織だ。目に見えない場所で魔術師たちを管理している。天元斎はその最たる

部分でしかない。彼女が部下を動かし魔術師たちに仕事として犯人を捕まえろと言えば一四十もの魔術師が動き出す。
「それじゃ動くのか？」
「いやそれはまた別の機会じゃな。おい、あれを持て」
どこの誰に言ったのか天元斎の声に反応し何かが動いた。がさごそとまだ暗い部分で動く物体を目を凝らしてみると黒髪の巫女がなにやら長物を手にしていた。こちらの巫女は人間であり物腰柔らかに座敷に座る天元斎の傍に寄った。長物を受け取ると自分の手の内で装飾を光に照らす。夙夜の目にも長物が日本刀だとはっきりと映る。
「これはある刀のコピーなんじゃがな、刀身に魔力を帯びさせておる。桜紋鴉よりは刃長はないし反りも無いがおぬしの体格には合うはずじゃろう」
譲り渡されると鞘から抜いてみる。刃の長さは六十程度だろうか、重さも刃の長さもずっしりと感じとれる。自分にとって最適の距離感だとも思えた。長すぎず短すぎずその適切な刃はまるで自分のためにあるかのような切先を見たような感覚。鞘に再びしまうと黒髪の巫女がどこからか今度はビリヤードのキューを入れる長方形型のバッグを持ってきた。巫女は何も口にしないがどうやら刀をこれに入れろということらしい。そのまま持って行くよりはマシだとバッグを受け取りしまいこむと巫女はにっこり微笑んで再び暗がりのなかへと行ってしまう。
「別にいいさ。話を聞く限りこっちのほうが持ち運びも楽そうだしな。その桜紋鴉に関しては見かけたときに報告するよ」
「頼む。もし手に入れることがあったらそのまま使っても構わんからな」
「ああ」と返事をすると座敷の隣りに立っている灯篭から火が消える。天元斎との時間はこれにて終了となる合図だ。彼女と話をするときはこの空間で他の客のいない時と決まっている。千影にはじめて着いてきた時もそうだった。暗い空間は日本のどこにあるのか全

くの不明でまさに彼女の作り出した世界そのものである。光が足元の花びらだけになるとどこかへと消えていたエレベーターの箱が現れ扉が開く。すると箱の中の電灯が眩しく光帰り道を示す。すでに空間の中には天元斎の姿はなく足元の光さえ消滅している。夙夜は箱の中へ入ると扉を閉めた。このエレベーターには有効な使い方ができる。入り口は固定されているが出口は選択できるのだ。

とてつもなく大きな移動用の箱となる。個人では到底できない魔術式だが皆、気にせず使っている。夙夜も同じで行き先は空港にした。乗り手の思考どおりに箱は移動をはじめ暗闇の中を動く感覚だけを伝える。夙夜の身体に僅かな重力と震動が伝わった。空港までの移動のなかで時間の確認をするとアーサー・ライバックのことが頭に浮かんだ。親戚の集まりは大抵京都の本家にて行なわれる。東京の東堂家にやってくる客は珍しいほど少なくライバックは珍しい人物の一人でもある。彼は夙夜が小さい頃から年に数回、外国からやってきていた。外国というのはアメリカ、イギリス、フランスと毎回変わっており特定されていない。本人に実家の場所はと聞いたことがあったがそのときはイギリスだと答えていた。しかしライバックの容姿はアメリカ人であり名前もそうであった。また屈強な身体をしており夙夜と腕の太さは倍ほどある。魔術師ではないが洸敷千影と関係があり夙夜を預けたのは彼の一存である。

数年前の事故より夙夜を救ったのは他ならぬ彼である。

「よう、夙夜」

空港の中、ゲートから出てくるなり彼は腕を上げて言った。言葉は流暢でとてもその身なりからは想像できないほどだった。短く切った茶髪と細くも鍛えられた胸板をしている。その姿は夙夜にとっての理想であり特に高い背は憧れだった。

「やぁ、ライバックおじさん」

「おじさんってのはやめろよ。まだそんな歳じゃない。アーサーとかライバックとか他の呼び方にしてくれ」

「わかったよ、ライバック」

「そうだ」
合流するなり肩を組んで挨拶となった。だが無駄話をする暇などなく空港を後にする。Tシャツにジーンズという鍛えた身体の表面だけを覆ったシンプルな服装のライバックは旅行バッグだけ持ってタクシー乗り場へと向かった。乗り場には一列に並んだタクシーがあり何気なく一台を選んで二人は乗り込んだ。
「しかし突然だな。もっと早くに言ってくれたらよかったのに」
しばらくは二人とも言葉を介さず外の景色を眺めていた。
「何か用事でもあったのか？」
「いや、特に無い、気にしなくたって構わない。で、そっちの用事は？」
「話が早くていいな。さすがだぞ、夙夜。洸敷女史に教育を任せてよかった」
「突然、日本へやってくるにはそれなりの理由があるんだろ」
「まあな」とライバックは言って黙った。運転に集中する運転手を横目に見ていた。どうやらここでは具合が悪いらしい。家に着くまで口は塞がれた。
家に戻ると自室に戻らず居間に向かう。肩から下げていたバッグを壁にかけるようにして置くと北岡めぐみがやってきた。彼女は簡単な挨拶と茶を注ぎ立ち去る。机を間に挟んで対面するとようやく話は始まった。
「こいつを見てくれ」
旅行バッグの中は見えなかったがそこから出したのは青い液体の入った瓶だった。小さく細く見るものの興味を引く青い液体は見たことがあった。昨夜、路上で見てふところにしまっているものとそっくりだ。
「これは……」
「ある新薬の写真だ。詳しくは言えないがこいつが日本に運び込まれた情報が俺の元にきた。それで調査にやってきたわけだ。できれば市場に出回る前に回収したいというのが目標」

親戚一同の集まりもなければ両親もいない。ライバックがここ日本へやってくる理由は限られている。出された瓶はライバックの手のひらへと移り指の間でくるくると回る。中身が泡立つほどの回転力が加えらていた。
「麻薬なのか」
首を振って否定した。
「こいつに麻薬の代わりは出来ない。快楽を得るための物じゃないからな」
「なら効果は？」
「一時的な身体能力の強化だ。アンフェタミンって知ってるか？」
「聞いたことぐらいはあるよ」と乏しいながらもどこかで得た言葉を思い浮かべる。
確か麻薬の一種だったような記憶がある。
「アンフェタミンは合成覚醒剤の一種だ。食欲低下や体重抑制なんかの治療に使われる。こいつを普通の人間が服用するとハイになるわけだ。まぁ統合失調症様症状や攻撃性の増加から妄想と様々なデメリットを持っているわけだがこの新薬はちょっと違う」
瓶を机に置いた。
「こいつはアンフェタミンや他の薬の効果をさらに超えてる。医療用には絶対に使えない代物だ。通常、人間の力は脳が抑えているのは知ってるな？　そいつを取っ払うのさ、そうやって力を解放させる。つまり自然に抑制してる部分を開放できるわけだ」
「どれくらい強くなるんだ？」
「それは人によって変わるな。日ごろから鍛えている軍人ならともかく一般人ならせいぜい通常時の１．３倍だ、喧嘩でちょっと強くなる程度だろうな。結局、脳が持たないんだ、それと筋肉の細胞。強い衝撃を数発受ければ倒れる。手に入れても使うなよ」
「麻薬じゃないんだろ？」
「違うが副作用はあるんだ。言っただろ脳が持たない、と。そして神経が壊れる。過剰な筋力強化のために溢れた分泌物に脳や血管が

耐え切れず常人なら二回……三回目には効果が持続しているなかで痙攣する。痙攣した後は意識がなくなって倒れ、動けなくなる。そこから死亡まで数十秒で直行だ。医療用でさえ毒性を持ってる。完璧な治療薬なんてない。まして用途が違いすぎるんだ。使ったら最後、精神がぶっ壊れる」
「そいつが日本に？」
「ああ」
言葉の重さが急激に膨れ上がった。すでにその一本を見てしまっている。使用したところもなにもかもだ。ライバックの説明どおり使用した男は力がつきトオルと戦った。夙夜自身も戦いに参加して倒した。男は今、病院にいるはずだ。
「危険だな。どれくらいの量なんだ？」
「そこまではまだ解らん。だがそれ程多くは無いはずだ。生産工場はもう潰したと報告はあがってる。初期ロットは多くて五百未満」
「それほど多くは無いな」
一人で二、三回使用するのが限度なら多くても二百五十人程度になる。数だけならそれほど多くはないだろう。だがそこから連鎖する被害は図れない。
「だが出回れば犠牲者は出る。他の薬と併用していれば死亡に至らなくとも精神を病む可能性は十分ある」
「なら早く回収したほうがいいな」
すでにこの薬は出回っている。ふところの一本だけとも考えられない。緊張は自然とあらわれどこからともなく肩へと圧し掛かる。
「手伝ってくれるか？」
「当然だろ。俺のツレが手にしたら一大事だからな。それに」
「それに、もう見たっていうんだろ、さっきの態度じゃまるわかりだぞ」
「まぁな」
察しがいい。ふところから回収した空き瓶を取り出してまだ未使用の瓶と並べる。空になった瓶は机の色を映す。

「どこで？」
「新宿駅近くでさ。通りで喧嘩してる奴が持ってた」
「そいつはどうなった？」
「病院に運ばれたはずだ。連絡取れるか聴いてみようか？」
「頼む」
今度は携帯電話を取り出して番号を呼び出す。もちろん相手は荒垣トウマだ。彼は呼び出し音二回で出た。
「昨日のあいつはどうなった？」
「あいつって病院に行った奴？　あいつならそのまま入院したよ。病院の名前はね〇〇病院の３０３号室、まだ退院してないよ」
トウマの言う病院は東京の端にある。夙夜は病院の名前を全て知っているわけではない。ただその病院は自分も入院した事があったから知っていただけだ。移動の方法も知っている。
「ありがと」
電話を切る。机の上には並んでいた二本の瓶はなくなっていた。ライバックの旅行バッグの中にあるだろう。
「場所がわかった。どうする？」
「そっちには夙夜が行ってくれ」
「ん？　あんたはどうするんだ？」
「俺は俺で新宿一帯をまわってみる。俺の知り合いもこっちに多いからな」
「了解だ、それでこいつの名前はあるのか？」
「ブルーポーションと呼んでる」
茶を飲み干すと二人してまた家を後にした。

第三章　三話

トウマから聞き出した病院までの経路は電車の乗り継ぎで一時間とかからない。昨夜の男のいる病院は東京の都心から少し離れた緑の山の上にある。最寄の駅からバスに乗り換えて坂を登る。東京の街が随分遠くに見える。

じきに坂を登りきると白一色のまるで要塞のような病院が現れた。バスから降りて中へ入る。誰の目も向けられなかった。受け付けに専念する白装束の一団は横目にちらりと見るだけで夙夜の存在など気にもとめない。独特な匂いのなかを突き抜けて三階にやってくるとやけにざわついた音が聴こえてきた。

廊下を歩く医師らしき人物は眉間に皺を作り、患者らしき人々は皆早歩きだった。

ともかく入院している男を訪ねなければならない。夙夜が歩き出し３０３号室へと歩を進める。エレベーターから最初の廊下の角を曲がり病室へ向かう。一人きりになると前方からの音が響いてきた。すると入院患者ばかりの階にしてはやけに五月蝿い声が聴こえてくる。

「お、おい！　なにやってんだ！」

突然、背後から声を掛けられた。それも大きな声で周りに人がいれば誰もが振り返っただろう。

夙夜の前には誰もいない。

振り返るとそこには篠崎源一郎が立っていた。心の隅でなぜいるのかという疑問と懐かしさが溢れ駆け寄った。

「何だよ、突然。そっちこそ、なにやってるんだよ」

「何って……お前には関係ない」

やけに冷たい言葉だった。

「あっそ。じゃあ俺にも関係ない」と振り返って再び３０３号室を目指す。すると「待て」と呼び止められる。またしても振り返るこ

となった。
「なんだよ。俺がどこに行こうが関係ないだろ」
「何号室だ？」
「３０３号室」
「解ってて来たのか？」
驚いた表情をしていた。
「さっきから要点が見えないな。なんだっていうんだ」
「お前には借りもあるし報酬の件もあるから言っていいか……あの一件の後、うちの組はある物を仕入れた」
「それで？」
「その取引の最中ちょっとした事故があってな。物が全部、奪われた」
「それは大変だな」
「だろ？で、うちの組はその物を追ってるわけだが手掛かりが無かったわけだ。ところが先日うちにたれこみが入った。新宿で馬鹿やってる若いやつが物を飲んでたっていう話だ。それらしい奴を捜してるとここに着いたってわけ」
ブルーポーションの買い付けが誰なのかがはっきりした。依知川組の仕業というわけだ。だが篠崎の話が正しければ依知川組はブルーポーションを持っていない。まだ犯人が他にいる事になる。
「そいつは見事にあってる」と夙夜もまた真実を話した。
「なんで解るんだ？」
「現場にいたしそいつとやったからな」
「じゃあ聞かしてくれ、飲んだ後どうなった？」
「そうだな。簡単に言えば強くなったな」
どこか満足げな表情になる篠崎。依知川組がどのような薬だと思って購入したのかはわからないが篠崎の表情からすると多くは聞いていないようだった。
「で、俺は今からそいつに会いに行くわけ」
「話し聞いてないのかよ。うちの組が張り付いてんだ。病室は満員

御礼状態だぞ」
肩を掴まれ動けなくなる。振り払う事も出来たがする必要はない。
「じゃあ源さんはなにやってんのさ」
「運転手。なんせ今回の件は幹部連中がやけに頭にきてるらしくてな。俺まで運転手扱いだ」
「それにしちゃ満更でもないようだけど」
「まぁな。ちょうど見舞いにもこれたからな」
鼻の頭を人差し指で掻きながら言った。頬はどこか緩んでいてとてもその筋の人間に見えない。
「見舞いって」
「箱娘の第一被害者の依知川琴音だ。階は違うがここに入院してるんだ」
「そっか」
仕事で関わった時、すでに被害にあっていた人物の名前だった。どういう間柄なのかは説明されてはいないが篠崎の言動や表情を見ていればなんとなく察しはつく。
「そんなわけだからここから先には行かないほうがいい。やつから何か情報が出たら俺のほうから連絡するから帰りな」
すでに携帯の番号は交換済みでいつでも連絡はとれる。
「そんなことしていいのかよ」
「ああ。洸敷さんから言われたんだ。報酬は情報で払うことだってな」
仕事の報酬はまだ支払われていない。取り分けて聞くこともなかった。箱娘は魔術師としての能力はいらずちょっとした身体能力の高さだけでどうにかなるような仕事った。だから篠崎と共に箱娘襲撃犯だった樋上を追っていたとき千影から「必要だから受けた」と聞いた。その理由が少しわかったような気がした。千影はここまで見通しての仕事だと受けたのだろう。
「なるほど。わかった、ここは帰るよ」
これには納得するしかない。洸敷千影の名前が出された以上、夙

夜にとってこれ以上ない信頼だ。
３０３号室による事はできなかったがそれでも得た物はある。来た道を帰りはじめると「すまん」と篠崎が言った。
「源さんが謝ることじゃない」
そう言い残して病院を後にする。篠崎の足音が遠ざかっていくのを聞きながら別れた。

第三章　四話

帰りのバスは時間のせいか空席が多く夙夜は一人、空と近付く街の光景を眺めていた。眺める先にはなんでもない日常が繰り広げられている。背の高いビルに深緑地帯のないコンクリートの塊の中で今も人間は動いている。

胸がざわめきだすのを堪えながら目蓋を閉じると荒垣トウマたちの顔が思い浮かぶ。今もきっとせわしなく働いているだろう。自警団を名乗る傍ら本業の派遣会社の仕事も欠かさない。

昼と夜の生活を繰り返し日常は紡がれていく。

トウマをはじめとする自警団との関係は夜だけに限られていて昼間はほとんど連絡も取り合わない。しかし夜になれば昨夜のように一箇所に集まり酒を飲み馬鹿みたいに大声を張り上げる。土日ともなれば朝まで宴は続き昼に目を醒ます。

友達かと問われれば違うと言い、仲間なのかと問われれば違うと言い、じゃあ何なんだと問われれば知り合いだと答える。確かな気持ちとは裏腹に公言できないあやふやな関係が続く。

そのなかに一滴……青い雫が零れ落ちた。

今、目蓋に焼きついている物こそが繋がれた関係の間に割って入るような気がした。彼らとの間に垂れた雫が埋まり集団を個に裂く。とてつもなく胸が痛くなり目蓋を開く。決してそんな事があってはならないと固く誓う。

バスから降りるなり後藤の番号を呼び出し電話をかける。後藤は四コールで電源を入れた。

「どうした？　まだ昼間だぞ」

「ちょっと聞きたいことがあってさ。最近、新宿辺りで新型の麻薬が出回ってるって話しはないか？」

「……ないが？　なにか情報があるのか」

後藤の息を飲む音が聴こえた。彼は平静を装っているようにした

が夙夜の耳には確かに動揺が聞き取れていた。
「特にないさ。ないならいいんだ」
「そうか」と言って後藤は電話を切った。
無音になった携帯電話をしまうと事務所を目指して歩き出す。人の群れに混じって一人歩くなか後藤は何かを知っていると踏む。後藤は金属二十五年以上のベテランだ。麻薬取締課ではないものの培った仲間がいる。何度も話すうちに同期の中には幹部クラスになった者もいて交友関係が続いているとも言っていた。警察の内部情報全てとはいかないが夙夜の動きが良くなるようにと働きかけてくれている。
夙夜に荷担する彼の行動は彼の信じる正義による行動だった。
その彼がどこか隠すような仕草をするということはまだ確信できていないのか隠さなければならない理由があるに違いない。後藤に寄せる信頼はトウマたちと何ら変わりなく存在している。
そうこう考えているうちに事務所の扉をくぐっていた。千影はいつもの様に椅子に腰掛け紅茶を飲んでいる。白いカップには真紅の薔薇模様が刻まれておりβ型の取っ手には金が施されている。親指と人差し指でつまむようにして口元へ運ぶ、ただそれだけの動作があまりにも優雅で麗しかった。
来客用のソファーにはいつ戻ってきたのか解らないアーサー・ライバックがいた。彼の前には何も置かれておらずどこからか集めてきた資料に目を通していた。夙夜が病院での出来事を話すとライバックもまた自分の情報を話したが二人の話には一切といっていいほど期待できるようなものがなかった。携帯電話を取り出してみたが病院で別れたきり篠崎からの連絡はない。彼のほうにも何かあったら連絡をとしているはずが実はない。トウマ達も同様でいっさいここには手掛かりがない。
「収穫がないなんておかしい」
結局、朝から動いた割にはブルーポーションに対する情報はなかった。

「手は抜いてないんでしょう？　ぼうや」
「もちろんですよ。トウマたちにも当たってみたけど手掛かりは無いみたいです」
「トウマ？」
知らない名前にライバックが首をかしげる。
「この辺りの自警団のリーダーさ、ライバックさんは？」
「俺のほうは少しだけな。新宿駅を中心に妙な連中が薬を売ってるって噂だ。噂なんだ、確かな情報じゃない。売人の正体や組織は不明らしいが確かにそういった新参者がいると、それぐらいさ」
そんなことは改めて聞かずとも想像はできる。昨夜、ブルーポーションが使用された時点でいくらか出回っている。残りいくつなのか不明だが売人がさばく前に捕まえる必要がある。ライバックの説明通りの代物ならばなんとしてでも食い止める。
「どこからの情報かしら？」
「俺の関係者だ」
「つまり政府の役人や警察よね」
彼の経歴を夙夜は詳しく知らない。ただ、それとなく話しに耳を傾けていると千影の言葉に該当する人物と繋がりがあると知る。
警察という言葉のなかに後藤はいるのかとふと思う。ただの刑事がどれだけの情報を与えられているのか疑問が頭をよぎる。
「そういうこと。だから情報は正しいはず。なにも君らの情報筋を馬鹿にしてるつもりはない。解ってるだろ？」
「ええ、今回はそちらの情報が早かった。それだけよ」
「そうかな」
「どういうこと？」
ライバックが立ち上がり窓際へと歩き出す。彼の目に日差しがかかると眉間に皺を寄せて口を開いた。
「魔術師が捜せない情報ってのを俺が手に入れた。しかもブルーポーションを見つけたのは出回った後だ。この街にずっといたなら確かな情報は無くてもなにか耳にしているはずだろ。それがなかった」

ライバックの語るとおりだ。夙夜は毎晩のように新宿駅にやってくる。駅から事務所へと歩き繁華街を闊歩する。それは日課のようなもので露店を構える外国人から客引きさらには風俗嬢にまで声をかけられることがある。遊びに時間を費やす連中のなかには麻薬売買に関する話は事欠かない。ヘロインから始まりカクテルと呼ばれる合成麻薬まで噂は尽きない。だというのに今回のブルーポーションの話は目にするまで知らなかった。

そこには絶対的な理由が存在する。

「相手は魔術師」

ライバックが口を開いたとき、ぞっとした。

夙夜の頭の中が空白になったのだ。まるで自分がここからいなくなるような感覚に包まれた。

「そう考えてもいいわね。魔術師は基本一般人と接点を持たないから対魔術師除けの対策をしていればほぼ全ての情報をシャットダウンできるわ」と千影が話すとようやく呆然としていた自分がどこかから戻ってきた。

驚くほど速く思考が進み答えにたどり着く。

「なるほど。それで俺がどこをどう捜しても見つからなかったわけか。じゃあ打開策は？」

「魔術式を破壊する必要があるわね。そのためには相手の式がなにかを突き止める必要があるわ」

ここ、洸敷事務所と同じだ。このビルには結界が張られている。洸敷千影が作り上げた魔術式によるもの、必要な人物以外は立ち寄る事はできない結界。ブルーポーションの売人が夙夜の目を掻い潜った理由にもなる。相手が魔術師ならば出来る事。魔術師にしか出来ない事。この街で活動する魔術師は自分たちだけではないと改めて実感する。

得体の知れない者がいる。

普段は干渉しないはずの存在が動き出した。今朝、帝の言っていた魔術師による襲撃事件もそうだ。自分の周りで何者かが動いてい

る。
　特定できない相手に無言となった事務所に携帯が鳴った。荒垣トウマと表示された画面に飛びつくように通話ボタンを押した。
「どうした？」
「今動けるかい？　例の物の取引現場に案内してあげる」
　迷うまでもないとびっきりの情報だった。
「本当か、助かる」
「売人との取引の方法は向こうが東口のロッカーに薬を入れる。こっちは南口のロッカーに入れて連絡。その後、鍵を交換して各々品を持って立ち去る。どう？」
「何時だ？」
「四時」
「あと一時間か……」室内の二人に目を配ると二人の目と合う。その目が何を言いたいのかは計らずとも察することができる。「わかった。でも俺が行かなくても取引はやってくれ」と告げる。
「どういう意味なのさ？」
「代わりが行くってことさ」
　返事を待たずに電話を切る。
「対魔術師用の術式なら俺が行けばいい、か」
「ああ」
「絶対に成功するって保障はないがそのほうがいいかもしれないな。相手の術式が働くのは避けたい」
「行くのは構わないが映像機器は持ってるの？　できれば売人の姿が映っているものが欲しいのだけれど、もし記憶になにか干渉する式なら」
「俺の記憶は誰にも弄れないさ」
　ライバックが人差し指でこめかみを突っつく。
　自信に満ち溢れた表情に夙夜は頼る事にした。
「それもそうだな、君の脳を弄れるほどの魔術師は世界に数人……いや、それもどうかわからないな」と笑いながら千影は紅茶をまた

一口飲む。
荒垣トウマの連絡先をライバックに教える。時間はあと一時間。
ライバックは前準備のためにと事務所を出て行く。
「じゃあ行って来る。少しの間待っていてくれ」
去る前に言った言葉は自信に満ち溢れていた。

第三章　五話

アーサー・ライバックの帰還は三時間後となった。すでに日が暮れ始め事務所の外は橙色に染まっていた。

夙夜はソファーで体勢を変えながらただライバックを待つばかり。千影が紅茶を淹れさせるがそう何度も飲むことはなかった。ライバックはおろかトウマ達からも連絡がないまま時間が過ぎていった。そのため正体不明の魔術師に頭を悩ます結果になっていた。

これまで他の魔術師と敵対したことはない。今回、敵とは決まっていないがブルーポーションを市民に売ろうとするならいつ接触してもおかしくはない。苛立ちよりも得体の知れない輪郭のない影に不安は募る。

師である千影は何も言わない。

必要ないというのだろうか、と横目にちらっと見るも気にもとめていない様子だった。だから夙夜もなにも言わず頭の中でひたすら想像と妄想を繰り返していた。

ようやくライバックが帰還した時には夙夜はソファーで寝転び天井を見つめていた。連絡してくれればいいのにと口を尖らせて言ったがライバックは愛想笑いもせずに抱えていた機材を事務所の古く廃品一歩手前のブラウン管テレビに装着していく。シルバーの四角い機材は夙夜の知る物ではないがＨＤＭＩ端子があることから映像機器だと判断はつく。またカードスロットが存在している。レンズがない事からおそらく映像を映す装置なのだろう。しかしＨＤＭＩ端子はブラウン管テレビにはなくせっかくの高品質も赤白黄の三色線へと変換して繋がれた。テレビは電源コードだけ繋がれた状態で電源を入れても黒と白の波と雑音だけが映る。ライバックが繋げた機材の側面にあるボタンを押していくとテレビに変化がおきた。

「これで映るはずだ」

その言葉どおりテレビには十時線が入り四つに分かれた画面とな

る。画面が命を宿したように発色すると「取引現場、相手の使うコインロッカー前とこちらのロッカー前、それと使用した通路の映像だ。悪いが音はないぞ、とてもじゃないが拾えん」と言った。テレビ画面に映った映像が動きだす。一目見ればどこか解った。右上は東口ロッカー前、左上は南口。どちらもロッカーの並ぶ壁が画面奥に見えていて人の行き交いが手前になる。ロッカーの蓋を開けば中身が確認できそうなほど鮮明な画だった。だが下側二つはよくわからない。どちらも歩行者の数が多すぎて壁も道も見えない。天井にぶら下っているはずの案内看板も映像が天井から映されているため映像に入らない。

「これどこなのさ？」

「東と南を繋ぐ一番速く動ける道だ。トウマと会って取引の方法を教えてもらった結果だ。売人との接触は一度だけ。ここにトイレに向かう道があるのは解るか？」右下の映像、通路の端を指差した。人の行き交いは左右に動いているが、たまに指を差した場所へ入っていく人がいる。夙夜がうなずくと「売人はトイレで鍵を交換しろと言ってきたらしい。奴と接触するのはその一回だけだ」再びテレビから離れる。

再生された映像が流れ続ける。食い入るように見ていると「いよいよだ」とライバックが言った。彼の言うとおり左上のロッカーに大衆の流れとは別に一人、壁に並ぶロッカーへ向かっていく人物が現れた。非常に特徴のない若い男だ。体格は中肉中背で特に髪型も意識していないような横分け服装もTシャツとジーンズというどこにでもいる男だった。しかしその男のある部分だけが異様に他とは違っていた。

手にしているものは茶色の紙袋。それも硬く重そうな四角い形になっている。かといって大きいようには見えず片手で十分だった。おそらく購入資金だ。男はロッカーの中からまるで指定されているかのように番号を見てひとつの蓋を開いた。紙袋を投入し鍵をかける。すると携帯電話を取り出した。

「この時だ。こっちの取り引きしてる奴と電話してる。このとき金を指定のロッカーにいれたって言ってるんだ。問題はこの後だ、右上」

言われたとおり右上に目を配るとありえない物体が歩いてきた。人間だろうという姿はしているが服装がまるで違う。まるで死神だ。巨大な黒い影がゆっくりとまるで歩を進めているというよりは漂っているようにロッカーへと近付いていく。じっくり見ると黒い影の正体はマントと帽子だと解る。

マントに帽子？

今はもう七月だ。気温は毎日三十度を超えるような猛暑が続いている。ありえない。何より周囲の人々はその人物に対し目を向けない。そんなことはないはずだ。あんな変な奴が目の前にいたら嫌でも見るだろう。

ロッカー壁の前にやってくると黒い影の中からトランクケースが現れる。金属の輝きが反射する。左上の画面で男が携帯電話をポケットにしまうとまるで解っているようにロッカーの蓋を開ける。今度はケースを開ける。カメラの位置はケースの中身をすべてくまなく映し出していてた。

ケースの中には海が広がっていた。一本の太さと大きさが手にしたものと同じだとするならケースの中には二百近いブルーポーションが並んでいる。黒い人物はロッカーの中にブルーポーションをそのまま二本丁寧に並べて置いて鍵をかける。手品のようにケースがマントの中に収まるとロッカーの鍵を手にして踵を返す。いや、返したように見えたに過ぎない。カメラには黒帽子の下は見えない。体格はマントに隠れていて男か女かも解らないのだ。ただ黒い物体が移動しているにすぎない。

いっぽう金をしまった男のほうはすでに左下の画面に映っていた。ライバックは左下の画面はいくつかのカメラに繋がっていて映像を切り替えることができると告げた。その通り男の姿が画面から消えると別のカメラに切り替わる。

相手側がロッカー前から消え右下のカメラに映りこむ。やはり周囲の人々は目を向ける事もない。その割にはぶつかりそうになるとすり抜けるように傍を通る。そして先に説明したトイレに繋がる脇道へと侵入していく。左下の映像でもトイレに通じる道へ入る男の姿が見えた。

「トイレの中は？」

「男のトイレを覗く趣味はない」

言って馬鹿かと思った。トイレの中にカメラがあるわけない。

映像は単調な人の行き交いだけを映して進んでいく。この間にトイレで鍵を交換しているのだろう。だがあの黒い人物とどうやって話をするのだろうか。あの黒い帽子の下にあるだろう顔を見て平常心でいられるだろうか。

思考に三分ほど費やすと先に男が現れた。黒いほうは差をつけて出てきた。お互い何も変わったところはない。先と同じ姿で現れると相手のロッカーを目指して歩き出す。どうやら鍵は交換したらしい。

右と左、ほぼ同じ感覚でロッカーの前に来ると男が先に鍵を差し込んだ。くるっとまわすと黒いほうも鍵を差し込み蓋を開ける。夙夜の目にはどうしても黒の人物の動きが奇妙見えて仕方がなかった。腕の動き脚の動きがないように思える。マントがいくら身体を隠しても動く部位全てを覆い隠せるわけではない。人間が歩けば必ず肩が揺れる。

男がロッカーの中からブルーポーションを見つけるとポケットの中へとすばやくいれた。映像を見ている夙夜たち以外に誰も見ている様子はなかった。黒のほうも同じだ。目を向けるほんのわずかな時間と同じ分だけ差を用いて金を掴む。またしてもマントの中へとしまった。持っていたトランクケースは見えなかった。

また男が携帯電話を取り出した。番号を入力しているらしい。耳に当てると黒いほうも携帯電話を取り出した。やはり黒い携帯電話で帽子とマントの間に差し込むように当てる。男の口が動きだした

ところでライバックが口を開いた。
「これは取引相手とだ。こちらがブルーポーションを受け取ったと連絡してる。これで取引は終了だ」
互いに目的は果たした事になる。
「映像は終わりなのか？」
「いやまだだ。取引が終わった直後、俺は走って追いかけた。あいつらもそうさ、男何人で走ったと思う？　答えは二十だ」
「結果は？」ライバックに答えを求めながらも映像から目を離さない。四つのモニターに全力疾走する男たちが現れる。どこからともなく走り出した男たちは一心不乱に黒い人物を目指してひた走る。映像が答えを出す前にライバックは「失敗だった」と答えた。映像の中にライバックの姿はなかった。
「俺は地上にいた。西側の出口を張ってたんだ。トウマたちは見たとおりそこらじゅうから走っていた。どの通路も塞いでる」
「なら捕まえられたんじゃ」
「それができなかった」首を振った。
映像が答えに追いつこうとしていた。黒いマントは近付く一団に気づいたのか動きを早めて出口を目指す。しかしその出口の先にはライバックがいるはずだった。映像のなかから姿が消えると疾走する男たちが後を追う。
「ここでフッて消えちまったのさ」
人差し指を口元で手首ごと回す。映像では男たちが出口でもめ始めた。ライバックが見逃すはずがない。確かに黒マントは出口をくぐった。映像の場所は夙夜もよく知っている。出口は一つしかない。姿を消せるはずはない。
男達のもみあいが続く中、映像が消える。いったん黒いモニターに戻るとライバックがもう一度、映像をつける。また取引現場の映像が始まる。まだロッカーの前には誰もいない。夙夜の頭の中ではさっき見た映像が点々と一枚画のように映る。
再び取引が始まると「どう思う、ぼうや。この映像から解ること

だけでいいから言ってみなさい」とこれまで口を開かなかった千影が投げかけた。
まだ思考は続いており答えは出ていなかった。上二つのモニターで取引が開始されると「まず、ロッカーのシーン」と声に出す。千影は時間を待つようには思えなかった。
思考に追いつくように黒い売人がロッカーの前に立つ。
「そう、ここ。どこもかしこもおかしいんだけどこの夏に厚着だ。しかも目立つ黒マントに黒の帽子、なのに誰も見てない」
周囲の人々は帽子とマント姿の人物に目もくれずに歩いている。
「ならどうしてかしら？」
「おそらく魔術式において人の視線を避けているのか、視界に入らないようにしているかのどちらかだ」
魔術師のなかには普段から人目を惹く派手な服装をする者がいる。自身の魔術体系から派閥まで理由は多種多様。特に他国から流れてきた魔術師たちはそういった目立つ服装をする傾向にある。しかし魔術師の活動は人目を避けるように生活する。その場合、自身に魔術を仕込むのだ。それも簡単で苦にならない人目を逸らすというだけのものだ。夙夜も簡単に仕込むことができる。
「そいつを突破する必要があるな」
「ええ、このままライバックが一人で行動するなら別だけどさすがに一人じゃ無理でしょ」
「この仕事にはこっちの手助けが欲しいからな。魔術式とやらは破壊する必要がある。媒体が何かわかればいいんだがな」
モニターに金とブルーポーションが投入される。黒い人物はトランクケースをマントの中へと入れる。二人は歩き出し同じ場所を目指す。やはり黒い人物は人目にさらされる事はなく誰の目を惹く事もなくトイレへと繋がる通路へと足を運んだ。しばらく人の流れだけが映る。
取引を行なう二人が見えなくなるなか夙夜は自らの言葉に疑問を感じていた。

本当に人目を避ける魔術式なのか。確かに周りの目はごまかせるだろう、だが自分はどうだ。今回の取引に自分が赴かなかった理由には程遠い。人目を避けるなどという魔術式では魔術師の目はごまかせない。そもそも情報を耳にしなかった件に絡まない。結果、ブルーポーションは売られているのだ。

映像の中では鍵を交換した二人がロッカーの前にいた。トウマ側がブルーポーションを取り出すと黒い人物は金を手にした。続いて携帯電話で連絡をとりあう。

はじめ見たとき妙な違和感があった。携帯電話をかけたとき妙に時間が食い違っていた。黒い人物のほうばかりを見ていた夙夜は電話の色に注視していて正解だった。

「ここだ」と口にすると二人もモニターに目を向けた。

「この電話、電源が入ってない。少なくとも通話中じゃないんだ、ただ会話しているっていう格好だけだ」

確信はある。少なくとも電話は発光するはずだ。帽子とマントの間が照らされるはずなのだ。なのに黒は一切変化なく電話を差し込んだ。

「ほう、それで」

どこか興味を持ったような千影の声に反応した。これまで自分の話があっているかどうか解らなかったが彼女の言葉が一声あるだけで状況は一変される。夙夜の声に自信がついた。

「俺が思うにこいつはドールだ。取引を行なった奴はなんて言ってたんだ」

「黒いやつの正体はわからないって。憶えていない、見ていないの一点張りでな……で、ドールってのはなんだ？」

現場にいたライバックが取引に赴いた男と話していないはずがない。トウマ達もそうだ。映像に映っている全員が接触したただ一人を問い詰めただろう。容易に想像できる。

「なるほど。人形というわけね」

「俺に解るよう説明してくれ」

二人の魔術師がお互いにしか解らない言葉で意思疎通を図るとライバックが両手を広げて要求した。
「ドールってのは言葉どおり人形ってことだ。魔術師が動かす人間に近い固体さ。マントの下は多分、空白か、それこそマネキン。そしてどこかで操っている奴がいる。ライバックさんが追いかけた後、一瞬で消えたって言ったな、それは術が消えたんだ。……いや、違う。結界の外へ出たんだ。千影先生、駅の一部に結界が張っていて人形がその外へ出たらどうなります？」
「そこで術式は途絶える。文字通り消えるわ」
映像の中で男たちが走り出していた。次第に黒い人物を追って集まり全員がぼうっとなる。つまり取引は完全に終幕となった。黒い人物は文字通り消えた。そこに結界の切れ目がある。
「つまりそこが結界とやらの切れ目だと？」とライバックは映像の切れ端に見える出口に指を這わせた。
「ああ」
「なら持ち去った金は？」
「全部フェイクだ。本物はどこかにいる術者が持ってる。必要な時だけこいつが取り出すんだ。だからマントの下からケースを出した。しかもあの大きさだ、マントの中に入れて形を完全に隠す事なんてできない」
「ほう」
「あとは現場に行かなきゃ解らないな。それに場所を限定した結界なら何か結界を作動させているブツがあるはずだ。そいつを壊さなきゃならない」
「だが壊してしまったら向こうにばれるんじゃないか？」
「当然よ、結界の破壊に気づかない魔術師なんていないわ」
そのとおりだ。タイミングが重要。
「せっかく売人の出現場所が確定してるんだ。逃す手は無いぞ」
「ならどうするんだ？」
「まずは駅へ行く。それと夙夜、お前の友達たちを数人集めてくれ。

あいつらも使う」
手際よく機材を取り外すライバック。夙夜は立ち上がると千影を見た。
「それで千影先生、どうです俺の考え」
「合格よ、ぼうや」とまるで母親のような笑みを浮かべた。

第三章　六話（1）

新宿駅周辺に魔術師らしき人物は見えなかった。ライバックと二人して二日間、学校が終わるとすぐに走り回った。一般人が入れる場所はくまなく捜したが目的のものは見つからなかった。ほんとうに魔術師はいるのかと疑心暗鬼になりながらもいないならという考えに答えは見つけ出せない。千影の笑顔を信じるしかなかった。

連絡が来たのは前日の夜だった。トウマからの連絡だ。翌日、朝の十時三十分に再びブルーポーションの売人と取引が行なわれる。相手の姿形さえ掴めないままだったが夙夜は取引の現場に向かう事を決めた。

当日、学校には顔を出さず新宿駅のドトールにやってくる。すでにトウマは幹部四人と仲間数人を待機させていた。新宿駅の各出口にも二人一組で配置している。これで逃すはずはないんだという大群が駅構内のいたるところに存在する。

朝一番の珈琲はエスプレッソで注文しバーカウンターに腰掛けた。右隣りにトウマが座る。トウマは砂糖五個は投入してクリーム三杯入れた甘くもはや珈琲ではない別の何かになった液体を片手にしていた。

「取引までまだ時間あるよ」と言って取引の内容を話し出す。

取引内容は前回と全く同じ。こちらが金を西側ロッカーに投入し鍵を持ってトイレへ。売人も同じようにブルーポーションをロッカーに入れてトイレにやってくる。トイレで鍵を交換し、お互い目的の物を手に入れる。なにもかも前回と同じ。

違ったのはこちらが用意する取引用の人材だけ。

「その取引は誰がやるんだ？　まさかトウマがやるわけないよな」

「そんなことしたらすぐ気づかれちゃうでしょ。俺が麻薬に手を出さないってのは皆知ってるんだから」

「だよな」

「だから用意しました！」
バンとカウンターを叩くと同時に店員が「いらっしゃいませー」と新しい客に声をかけた。幹部四人が入り口に一瞬で移動しやってきた客の姿を隠してしまう。
「知ってるかな？　夙夜君は男の娘って」
「男の子？」
「違うよ、男の“娘”だよ。まるで女の子にしか見えないっていう男の事」
「なんのことだよ」
テンションのグラフが目で見えるなら二人の方向は上下間逆になっている。そこに幹部連中がふふふと笑いながらドトールに妙な空気を作り出した。すでに店員たちはあきれ返って何も言わない。夙夜の目には隠された客のぴょこぴょこ動く端っこだけが目に入る。
「ではお披露目といきましょう！　我らが自警団期待のホープ！　渡瀬忍くんだ！」
幹部が左右に一瞬にして別れた。カウンターに置かれた珈琲を手にとる事を忘れてしまう。入り口でぴょこぴょこしていたのは夙夜よりも背が低く細い少女だった。いや、美をつけてもいい。やや大きめの瞳に色素の薄い白い肌、ゴルフボールも転がりそうななで肩に細い腰。どこからどう見ても女だった。
でも男だ、と夙夜は思った。
理由は渡瀬忍の服装にある。知っている高校の制服を着ているがどうみても男物だった。あまりにも制服は似合っていなかった。女が男の制服を着ているようにしか見えない。
「は、はじめまして渡瀬忍って言います」
ぴょこっと頭を下げる彼女……ではない彼の声はやはり女のもので電話で話せば絶対に女だと勘違いするほど。加えて袖口が手の甲を半分以上隠しているあたり少女率もぐんと増している。
「男なの、か？」
「だから男の娘だって言ってるでしょ、夙夜君」

トウマが忍の隣に立って肩を抱く。慣れていないのかそれだけで忍は頬を赤らめる。
おい、お前は男なんじゃないのかとツッコミを入れたくなるがもはや女にしか見えなくなっていた。
「この忍ちゃんが今日の主役だよ」
「本当にぼくがやるんですか？」
「うん」と満点の笑顔でうなずくと「がんばります」と両腕を胸の辺りにもっていく。ボクサーの構えにも似ていたがどう見てもそれは女の子の仕草だった。
「まぁ誰がやろうと変わりはないだろうけどがんばれよ」
「はい！」と忍は返事した。
ようやく騒ぎが収まると再び席に着く。忍がミルクたっぷりのカフェオレを注文すると夙夜の携帯電話が震えた。篠崎の名前が表示されている。こんな朝早くからなんだと電話に出た。
「夙夜、お前さんもしかして新宿駅にいないか？」
「近くにいる。なにかあったのか、源さん」
「いやガキどもがそこらじゅうにいてな。もしかしてと思ったんだ。あの薬を追ってるんだろ？」
病院での出来事が甦る。篠崎は夙夜がブルーポーションを狙っている事を知っている。おまけにトウマ達の仲間がそこらじゅうにいる。それだけでも自分がここにいる事を知らせているようなものだ。おまけに篠崎が運転手として借り出されるくらいの幹部たちが病院に押し寄せていた。依知川組も頭にきて追っかけている。ブルーポーションを仕入れたのは元々彼らだ。
「依知川組も狙ってるんだよな」
「ああ、だから駅の中にゃたんまりとうちの奴らもいるぞ」
ガラス壁ごしに構内を見渡すがそれらしい人物の姿は見えなかった。それでもこうやって電話をかけてくる辺りどこかにいるのだろう。緊張が増した。
「ありがとよ」

電源を切ると「誰から～」トウマが身体をくっつけてくる。忍とは違い冷静に席へ戻るように押しのける。
「知り合い。今日の取引は大勢になる、できるだけスムーズに終わらせよう」
「十分スムーズよん。南口ロッカーのすぐ傍にだってめっちゃいるしね」
口振りは変わっていなかったが目は笑っていなかった。電話の相手が誰かまでは悟られていないだろうがこの駅構内の状況が芳しくないことはトウマも気づいている。幹部連中にしてもそうだ。夙夜が目を配ればせわしなく電話で誰かと会話している。おそらく配置についた仲間からの連絡だ。依知川組の動向もそのなかに入っている。
最後まで話していた納屋が電話からはなれると四人で話をあわせる。構内にいる仲間たちは全員の指揮系統がばらばらでトウマから四人へと、四人からさらにチームのリーダーへと伝わる。四人の間で報告がまとまると夙夜たちのところまでやってきた。こういう時、口を開くのは納屋の仕事だ。
「トウマ、準備完了だ」と渋くクールな声で囁く。
取引の準備は完了した。あとは店内でゆっくりとカフェオレを飲んでいる男の娘、渡瀬忍が行動を開始すればいい。取引までの時間はまだ少しあったが夙夜は立ち上がる。エスプレッソを喉に流し込んでカップをからにした。
「俺は俺の目的に向かう。そっちは任せる」
「オッケー、オッケーよ。夙夜くんへの連絡は俺の携帯でするから鳴ったら出てね」
「ああ解ってる」軽く笑って店を後にする。
あの黒い人物との取引はトウマ達に任せればいい。そう考えて店の外にでるとどこかで見たような男たちがそこらじゅうに立っていた。二十代前半までは夙夜を見れば頭を下げる。大人の連中は目を合わせれば誰でも喧嘩をはじめそうなほど気を張っていた。

問題は依知川組だ。

時を同じくして新宿駅のすぐ傍。列を形成し客を待つタクシー乗り場に数台の黒いセダンがやってくる。車から三人ずつ降りると運転手は地下の駐車場を目指して走っていった。タクシー乗り場には全員で十二人が集合となった。集合した面子は歳も性別もまばらで統一されていたのは服装だけだった。炎天下の中、十二人は黒のスーツに袖を通して襟元のボタンも一つ残らずつけていた。窮屈なまでに頑なな姿はつま先にまで緊張感を伝えており一人が前に出て何か言うと散らばった。

それは夙夜がドトールから出た直後のことだった。

黒いスーツの集団が散らばり方々へと駆けて行く。車を置いた運転手達も同じだった。出口付近、電車乗り場、トイレ、構内に出店している売店。運転手を含めて全員で十六人が構内に広がった。

うち一人が足を止めたのは自分の持ち場へと向かう途中だった。カツカツと音を響かせていたハイヒールの音が聴こえなくなる。その姿を見ていた同じ黒いスーツの男が耳元に手をやって襟元からマイクを取り出した。

「どうした？　楠木」と耳元で声がする。

声に背筋が振るわせられたように一本の槍のように鋭くなる。声をかけられたのは楠木朱美。新宿署の新米刑事である。彼女は朝一番で今回の任務に借り出された。同じく散らばった黒のスーツたちも刑事である。新宿駅に十六人もの刑事が集合した理由はひとつ。依知川組の動きである。彼らが麻薬の密売に手を出している事はもう数年前から知っていた事で何度も組員と売人を捕まえては刑務所へと放り込んだ。だがそれでは核たる依知川組を潰す事は出来ない。

だが、数日前のこと。匿名で一報が入った。依知川組がこの日、新宿駅で何かをすると。そしてその現場には麻薬の絡んだ取引が行なわれるのだと。一報は誰のものか知れなかったが後藤がその情報の筋を確かだと断定した。一報を持ち込んだのは彼だった。情報の

提供者の名前は明かさなかったが彼は絶対だと仲間を説得したのだ。
「あの……後藤さん、例の子を見つけて」
止まったままの楠木は視界のなかに入った少年の姿を追っていた。別の場所にいた後藤の耳にも彼女の声が届いた。
「夙夜か？　この時間だったらまだ学校だろう。見間違いじゃないのか」
「本人ですよ。後を追います」
誰かが持ち場に向かえと言った。リーダーだ。耳に装着しているイヤホンとマイクは全員と繋がっている。楠木の声は十五人の仲間に伝わっている。リーダーの声とは違い五等が「……かまわんが騒動を起こすな。接触しても平静を保てよ」と楠木に声をかける。彼女は消えそうな後姿を見て「了解」と言い歩を進めた。
少年の姿はどこへ向かっていくのかわからない。西に東にとせわしなく動き回る。とても駅の中を動く足取りは目的がないように見えた。そして楠木は自分に気づいていない事を確信していた。少年は西側エリアの途中まで足を運ぶと左右に首を振って何かを探し始めた。構内には電車の到着で出現した人の群れが少年の姿を隠す。立ち止まっていた少年を逃さぬように走り出す。
やがて少年人ごみに紛れるようにスタッフ用の通路へと入って行った。スタッフ用の通路を使う必要など少年にはない。なにかあるのだ、と楠木は全力で疾走する。人の川を掻き分けて角を曲がり後を追う。そう思考が先走る。気づかれてなどいないのだ。そう自分を冷静に保とうとするが現実は違った。
顔が青ざめた。
角を曲がり人の流れと切り放された瞬間。背後を取られ身体の自由は封じられた。
「そろそろか……どうだ、動きは？」
東口のロッカー前に一人、男が立っていた。アロハシャツを着た眉毛がないスキンヘッドだ。誰が見ても普通じゃない。あきらかに

その筋の男。そのとおり依知川組の構成員だった。彼はロッカーの見える位置で携帯電話片手に視線を向けている。口元には髭がびっしりと生えていた。
「ありません。でも妙な外人がいます」
視界のなかに妙な人物がいるとすれば一人だ。壁に背を預けている男はやけに存在感が強かった。
「どんな奴だ？」
「背が高く、体つきのいい茶髪です。腕っ節の強そうなやつですよ」
「売人の姿はあるか？」
「いや……それらしい人物は……っ！」
言った直後に自らの言葉を否定した。外人のすぐ傍をすり抜けるようにその人物は現れた。まるで陽炎のような黒い人物だった。男はあるがままに報告したが視界がぼんやりして直視できない。まるで砂漠の中にいるみたいだった。
「現れました」
「よしうまく尾行しろ。B班、ガキどもはどうだ？」
電話の相手は別の相手とも話していた。どうやら相手のほうは言い返事を貰ったらしく再び黒い人物を見ている男に声をかけた。
「尾行しろ。どこかで接触する。取引の終了が俺たちの狙い目だ」
「了解」とはいったものの男は困惑した。黒い人物は直視できないのだ。まるで霧のようなもので幻にも見える。近付く事さえ恐ろしい物体にも感じる。身体から汗が噴き出し足が震えていた。この道に入ってもう十年だというのに身体の震えはまったく初めてのものだった。

身をよじる。楠木朱美は一種のパニックに陥っていた。角を曲がった直後、誰かの手が目を通り過ぎ口を塞いだ。甘い香りのする匂いとともに両腕を絡め取られ壁に押し付けられる。暴れようにも力が入らず抵抗することができない。
腕の自由を奪っていた手が離れるが相手は身体を密着させている。

腕はまだ自由にならなかった。手は襟元のボタンをちぎって侵入してくる。熱い指が肌に触れたとき眼を閉じた。
（……いやっ）
何をされるか解らない恐怖におびえると指が止まりマイクを掴んだ。手が自分の身体を触ろうとしているのではないと一瞬、安堵する。しかし乱暴にマイクとイヤホンを千切られ足元へと落される。マイクはばきっと音を立てて壊された。
「なんでここにいるんだ？」
ようやく身体の自由が戻る。押さえていた身体を反転させて乱暴者の姿を見る。するとさっきまで自分の追っていた少年、東堂夙夜がいた。夙夜の背は低く、楠木の背は高い。楠木の目線には夙夜のおでこがあった。
「なっ！　君こそ！　っていうか触らないでよ、ひゃっ！」
振り返った力が強すぎた。ちぎれた襟元のボタンが胸の反動でもう二つちぎれた。純白のブラジャーが夙夜の目の前に露わになった。急いで胸を隠そうとしたが抱えた腕によってできた谷間は結果的に男を誘う形になった。
「変な声出すなよ。無線使ってるってことは後藤さんたちもいるのか？」
顔を真っ赤にして恥ずかしがる楠木に反して夙夜は冷静そのものだった。まるで興味がないように声色を変えずに聞く。さすがにその態度には残念がった。
「君に話す必要はないわ」
「あっそ」と素気ない返事。
俯く楠木の目にはマイクもイヤホンも無残な形で転がっていた。
「なんで俺の後ろをつけたのさ」
気づかれていないはずはなかった。夙夜はいつの頃からか楠木の視線に気づいていた。知っていてもなお行動しなかったのだ。
「気になったの。後藤さんは君を買ってるみたいだし。こんな時間に駅にいるなんて不自然でしょう。学校はどうしたのよ」

「休んでるよ」と悪びれる事もなく言った。
「義務教育でしょ。今からでもいいから行きなさいよ」
はぁと溜め息をついて首を振る。まさに教科書のような硬い人物だと呆れるだけだった。
「んなことできるかよ。とにかく俺のことは放っておいてくれ」
「着いてこられたらヤバイことがあるってこと？」
「言えない。そっちも仕事に戻りな。俺のことは見失ったとか言ってさ」
「ふざけないでよ。それに」
マイクもイヤホンも壊したじゃない。そう言おうとしたが夙夜は強く壁を叩いた。またしても壁に背を預ける事となった。少年の姿からは考えもつかない威圧の目を見た。
「ふざけてない」
強い声だった。仕事だけじゃない、今まで生きてきておそらく初めて脚が震えた。身体の大きさなど超越した第六感のようなあやふやなもの。だがそれは確かに身体を覆い尽くしていた。
「もし次、邪魔したらちょっと乱暴にさせてもらうよ」
携帯電話が鳴ると夙夜は誰かと話し始めた。声は出さなかったが楠木の耳には男のそれも若い声がかすかに聴こえた。電話を切ると「じゃあな」と言ってスタッフ用の通路を駆け出した。
「なんなのよう、あのコ」
楠木はというと追いかける事が出来ずただその場にへたれこんだ。まるで放心してしまい情熱の欠片もなくなっていた。いや、情熱の炎が色を変えて燃えていた。

第三章　六話（1）（後書き）

今回、話が長いので二回に分けています。

第三章　六話（2）

夙夜は無人のスタッフルームを伝って疾走した。再び構内に戻って目指したのは西側だ。楠木とのやり取りの間、かかってきた連絡によれば取引は行なわれトイレで鍵の交換を行なったとのこと。時間は残り少ない。早く結界を見つけ出さなければならない。

この二日間、捜しまわって解ったのは結界の発動条件が決まっているという事だ。確定ではないがおそらく取引の間だけ魔術式が作動し結界を造っている。その可能性が高い。取引が終わるまで後、二十分もない。あとは互いのロッカーへ向かい物品の確認をするだけだ。

構内で残すところは西側だけとなっている。自分の魔力に干渉する全ての気流を感じとる。魔術師が術を使うとき少なからず流れが変わる。魔術師は魔力と呼ばれる力を使って術を行なう。魔力は空気のようなもので目に見えないが使用することで肌で感じ取ることができる。

今は夙夜自身が探知機となっている。魔術師の気を無意識のうちに遠ざける魔術式であろうとも現場にいればさすがに完全に発動するはずはない。走り回る探知機は肌にざらつきを感じとった。やすりで擦ったような感触が脚を止めさせた。

あきらかに不自然な一角が目の前に広がっている。この新宿駅で人間が一人もいない場所など存在するはずはない。必ず誰かがどこかにいる。しかし夙夜の目の前には今は誰もいなかった。歩き通る人の姿さえもなかった。

不気味なまでに無人の一角はポスターが何枚も横並びにされていた。夙夜はポケットから護符を取り出してポスターの上に貼り付ける。白くひっぱればすぐに破れるような護符には赤い文字がびっしりとかかれていた。魔術師は総じて杖を振るう。術式の作動は杖によって行なわれるものだが少年は杖を持っていない。弟子になって

から変わっていない。今も少年は護符によって術式の作動を行なう。
ポスターの上から貼り付けると夙夜は口を動かし何語とも取れぬ言葉を呟いた。
まるで電源スイッチのようだ。
口にした言葉が意味するものはひとつ。携帯電話が唸りをあげる。
「そっちはどう？　準備完了かな」
トウマの声だった。
「目的の物を見つけた。準備完了だ」
トウマたちのほうがどうなっているかは聞く必要はなかった。きっと今頃、渡瀬忍が孤軍奮闘しているに決まっている。鍵の交換を行なってからの時間を考えればロッカーの前にやってきている可能性がある。今いる場所からならその姿を見るまでそう時間はかからない。
「で、どうすんの？　捕まえちゃう？」
「いや、俺に任せてくれないか」
「どゆこと？　夙夜君とあのライバックって外人さんとで全部もってっちゃうつもり？　さすがにそれは欲張りすぎでしょ」
「警察がいるよ」
「知ってる」と即答。
「じゃあ依知川組」
「うそ」
「マジ」
「あっちゃー……あんまり動かないほうがいいみたいね。ブルーポーションのほうはロッカーにしまったままにするよ、鍵はあとで渡す」
「サンキュ」
「でも、こっちは勝手に動くよ。誰が捕まえるか勝負ってことでオーケー？」
電話の向こうでにやりとしているトウマが思い浮かんだ。
「勝手にしろよ」

「勝手にします」とそれこそ勝手に携帯電話を切った。

東堂夙夜が電話を切った途端、構内に怒涛の如く足音が響きだす。怒号が飛び交い男たちが駆け出した。馬鹿騒ぎが起きたのだ。荒垣トウマがゴーサインを全員にだしたのだ。若い血潮がほとばしるのか見えない情熱に浮かされたのか新宿駅は騒然となった。

若い血潮は構内を揺らし感化されたように中年の男たちまで走り出した。

全員の目的は一緒だった。

ある一角に向かって全力でダッシュしている。

南口のロッカーへと向かって爆走する集団は誰が一番乗りするか大いに盛り上がっていた。そのうち黒いスーツの刑事たちまでもが集団に加わった。

ロッカーの前にいたのは黒い人物。

帽子とマントで正体を隠した人間がいた。

集団の先頭にいたのは誰であろう率先して走っていたトウマだった。トウマは迷う事無く黒い人物の肩に手を置いた。

「俺が一番だ」と勝ち誇った声をあげた瞬間。掴んでいたものは消えた。あまりの出来事に勢い余ってこける。背後から迫る人間のビッグウェーブに身体はどんどんと押し寄せられロッカーの前は人間の団子が出来上がった。

誰がどうなったかはわからない。一同が正気に戻り立ち上がると無言のにらみ合いが数分続いた。誰も何もいわない。自警団、依知川組、警察……三つの組織が一堂に会したが何も話す言葉がなかった。ばらばらになっていたメンバーがそれぞれの仲間の場所へと戻ると最初に依知川組が退散した。そのなかには篠崎源一郎がいた。彼の目は東堂夙夜を捜していたがいなかった。

次に警察が動く。一人、前に出たのは後藤だった。この騒動の正体を掴むべくリーダーである荒垣トウマに近寄ろうとするとモーゼが十戒で見せたようにメンバーは左右に広がり道を作った。

「なにをしてたんだ？」
「べっつに。かけっこかな、俺たち皆暇なのよ。エネルギー余っちゃってるし」
「なら外でやれ」と荒げる事無く言った。
二人の間、目と目で何かしらの合図がったのだ。他の刑事には見えない合図が。それはきっと一人の少年の居場所に違いない。しかしその人物はここにはいないのだ。二人のやり取りが終わると自警団を名乗る若者たちは出口へと向かって歩き出した。
警察はおろか誰も何も得るものがなかった。ただ一人を除いて。

騒ぎを遠くに見て大笑いする男がいた。男は笑いながら走っていた。誰もが男を気狂いのように見て避ける。他人の目を気にしない男はただ馬鹿な奴らがいたもんだとばかりに笑いながら西口地下駐車場へとひた走る。しかし足は重く走っているといっても駆け足程度の速度しかない。なぜなら手には重く大きいトランクケースがあったからだ。
「ウヒヒヒッ、馬鹿だ、馬鹿だ。あいつら警察もヤクザも馬鹿だぜまったく。お前らなんかに掴まるかよ」
駐車場へと踏み入ると携帯電話を取り出した。器用に片手で呼び出した相手と繋がると「こっちは取引は終わったぞ。へへっ、こいつを使えばちょろいもんだぜ。二本で十万ぽんとくれたからな。すぐそっちに行くから車の準備しててくれよ」とポケットに入った自殺束を叩いた。
電話の相手は無言のまま電源を切った。
再び足を動かした直後、男の顔から笑いが消えた。彼が誰にも見つからずに逃げ果せたのは“こいつ”のおかげに他ならない。男のポケットには十万円の入った封筒ともうひとつコインが入っている。金色の王様が彫られた硬貨。それが結界の発動を促す道具だった。今も結界は張られたままのはずだった。魔術師の目を背け自警団、ヤクザ、警察の三組織を欺く術式。しかしその結界は男が駐車場へ

入った瞬間に消滅した。
「ど、どうなって……くそっ。なんかヤベーんじゃね」
勝ち誇っていた表情が突然青ざめていく。今まで以上に力を入れて走りだす。だがその足もすぐに止まってしまった。前方に誰かがいると感じた瞬間に男は恐怖を感じたのだ。小さい身体の少年が一人。二、三発殴れば倒れるんじゃないかというほどの子供に男は恐怖した。
「な、なんだよ。お前！　どけ！」
精一杯の強がりだった。
「お前が売人の正体か」
現れたのは誰であろう結界を破壊した東堂夙夜だった。ロッカーの前で一同が呆然となった後、結界を破壊し男の魔力を追っていた。誰の目にも届かない場所で一人、犯人を追いかけていたのだ。結界が壊れた時、男のポケットの中にあるコインが手掛かりとなった。
「あぁっ？　どけっつってんだろ！」
道を譲る気のない少年に強く言うがそんなものはなにも意味がなかった。
「そのケース、悪いが頂く！」
「ひっ！」
夙夜の身体が伸びるように跳んだ。二人の距離は一瞬にして縮まりケースに手が届きそうになる。後一歩だった。男は戦う気などなくただ怯えていただけなのだ。邪魔さえなければケースは夙夜の手に収まっただろう。
二人の間に星が流れたように光が溢れた。
光は殺気を放ち夙夜の袖を斬った。足を踏ん張り後方へと跳ぶ。目に入ったのは黒い斬撃だった。鈍く銀色の光を放つ物体は一目見れば刀だと判明する。思考よりも直感がものを言う。剣先に宿った殺気が強かったため避けられた。動物の直感が命を救った。
「りょ、龍馬……」
飛び退いた先にいたのは長い髪を生やした侍だった。男が龍馬と

呼んだ侍は黒い羽織を着ており時代錯誤の風体で構えていた。夙夜は侍から魔力を感じられなかった。異常なまでの殺気を放っているのはその手にある刀に他ならない。腰元には鞘が掛けられている。

「鞘と鍔に桜の紋が彫ってあってな」

帝である天元斎の言葉が甦った。言葉どおり鞘と鍔には桜が彫られている。刃の長さも話どおりに長い。

「少年、ここは退いてもらう。退かぬならばこの刀にて裂くぞ」

天元斎の話によれば刀の長さは増える。どこまで伸びるかは不明だった。ふところに飛び込むにはつりあいが取れない。ケースを抱える男ががくがくと震えるなか夙夜と侍のにらみ合いが続くこととなった。

（どうすればいい。いちかばちかやってみるか）

武器がないわけではない。今の状態でも夙夜は炎を起こす事ぐらいはできる。刻一刻と進む時間の流れに身を任せていると痺れが切れそうになる。

時間の流れを斬ったのは男三人の誰でもなかった。

「そこの三人！　手を上げなさい！」

車の影から突然、一人の女が現れた。あの騒ぎの中にいなかった一人がそこにいた。楠木朱美だ。彼女は手にした拳銃を両手で構えて威嚇する。しかし拳銃の存在など侍にとって取るに取らないものだった。殺気は夙夜から楠木のほうへと流れ躊躇なくなぎ払われた。

「なっバカッ！」

楠木は何が起きたのか解らなかった。ただ目の前に夙夜が飛び出し赤い血が飛び散った。刀の刃が届くはずのない距離だったが確かに左腕の川は裂かれ肉に切れ目が入る。血が噴出し宙に舞った。

楠木の身体を突き飛ばし自分の後ろに匿った。膝を付いてもなお、侍から目を背けなかった。

「おい、龍馬！」

「エンジンは温めてる。さっさと逃げろ……」
「そいつは無理な話だ」
声がした瞬間、駐車場の奥で一台の車が火を噴き飛んだ。天井にぶつかり粉々に吹飛ぶ。爆風と炎を背後に一人の男が現れたのだ。男の名はアーサー・ライバック。これまでどこにいたか不明の男が一人出現した。
「ひぃっ！」
「しまっ！」
「相当驚いたようだな。原因はこいつか？」
手には男の持つケースと全く同じものが握られていた。
「……貴様、いつのまに」
「簡単なトリックさ。気を惹いてくれた優秀な仲間がいたおかげだ。そこの女刑事、夙夜なら大丈夫だ。顔を見れば解る」
斬られた痛みなど歯を噛み堪えればなんともない。少年の意識ははっきりしている。
「ライバックさん、あいつのケースを！」
「なぁ侍さん、ケースの中身をくれないか？　渡せば助けてやるぞ」
「できんな」
侍の目がライバックに向く。どちらも退く気はない。まさに戦士の二人がにらみ合うなか一人、もう立ってさえいられない男が背後にいた。
「こ、こいつが欲しいのか？　欲しけりゃやるぞ。だけど俺は見逃してくれよ、な、な？」
「お仲間はああ言ってるがどうする？」
「決まっている」
男が泣きそうな声をあげたとき侍の心は決まっていた。一瞬の斬撃は男の身体を文字通り真っ二つに切り裂いた。さらにその身体を噴きだした血ごと刀の中に吸収した。男の存在自体が消滅してしまった。残されたケースがその場に残った。
「こいつを殺してケースを回収するまでよ」

「どうした？　やらんのか？お前はそこの子供と違ってやれるだろ？」
「誰が子供だ！」
「その刀とやる気はない。こっちも死ぬ気はないからな」
「なら少年、おぬしはどうする？」
家に置いてきた刀を持ってくるべきだった。今更後悔しても仕方がない。
「ならば」と侍はコインを一枚ポケットから取り出すと指で弾いた。宙を回転しながら跳ねる。受け取る者はいなかった。侍の姿は忽然と消えコインだけがその場に金音を響かせた。
「夙夜、怪我は？」
「大丈夫さ。すぐにふさがる」
傷口には護符を貼っていた。血は流れていない。夙夜は傷口ではなく自らの失態を噛締めていた。
「刑事さん、キミにこの場を任せるよ。いいな、余計なことは言うな、車が爆発した。それだけだ。行くぞ夙夜」
まだ駐車場では車が燃えている。ライバックが夙夜を連れてどこかへと行ってしまうと一人残った楠木は携帯電話で後藤を呼び出した。事の次第をなんとか事情をつけて説明すると後藤は俺に任せろと言ってすぐに消防車を手配した。

第三章　七話

侍によってばっさりと斬られてしまった売人は見つからなかった。侍の姿もその後を追えるはずはなく彼は忽然と消えてしまったのだ。一時は騒然となった新宿駅は静けさを取り戻しただ一人、渡瀬忍がブルーポーションが二本入った小包を抱えて戻ってきた。場所は西新宿のビルの隙間。荒垣トウマの勤務する派遣会社のすぐ傍である。部外者といえば東堂夙夜とアーサー・ライバックの二人だけだ。取引現場に残るわけにはいかない。散々となった依知川組の構成員もどこに潜んでいるか解らない。できれば人目のつかない場所が良かった。

渡瀬忍が今日の収穫物をアーサーに渡すと彼はにやりとした。取引に使った一本五万円の計十万円は戻ってこなかったが成果は得られた。部外者二人は西口地下駐車場を去った後、怪我の応急処置とトランクケースの中身を確認した。夙夜の怪我は持っていた護符を貼り付けると次第に回復し今では傷口が塞がっている。強力なバンドエイドとでも思ってくれると助かるとライバックに言った。トランクケースの中身はというと百本のブルーポーションが均等に並べて入っていた。どこにも空きはなくおそらく新品のケースなのだろうと思わせた。

取引はこれで完全に終了となった。

売人が死亡した事をトウマに告げると彼は何も言わずにうなずいた。正体不明の侍については語らなかった。それ以上に追求もしなかった。もしなにかあればまた合流する事になる。トウマは自分のやるべき事をすでに念頭においているようである。ライバックの話によればブルーポーションは約五百本。残り半分以上ここ新宿にあることとなる。

ともあれ、売人は消滅しこちらの手にはブルーポーションが手に入った。依知川組は者の見事に敗れ去り警察は手柄なしに署へ戻る。

俺たちの勝ちだとトウマは腕を振り上げ叫んだ。仲間達は皆で腕を上げリーダーに大声で賛同した。

翌朝、ライバックは帰国となった。またしても空港へとやってくると彼は手にトランクケースを持って立っていた。見送りにきた夙夜は何も持っていない。ケースの中身はブルーポーションだったが検査は問題なく通った。検問に引っかからないところを見るとおそらく持ち込んだときも同じだったのだろう。元よりその薬物は日本で作られた物ではない。

「結局、何本集めたのさ」

「ケース一箱に百本とばらの五本……全部で百五本だ。あぁ空を合わせればもう一本だな」

映像を撮りながらの最初の取引で得た二本。夙夜が夜道で拾った空の一本。二度目の取引で手に入れた二本。そしてライバックが奪った百本入りのケース。これが結果だ。

「半分以下だな。いいのかよ、こんな状態で帰って」

「後はこの国の奴に任せるさ。とくにあの侍はお前がやるしかないだろ？　あの刀だって知ってるみたいだしな」

「そう、だな」

心当たりはある。

ライバックを迎えに来た日、ここで会う少し前のことだ。帝との話であの刀について触れられた。

名を桜紋鴉という。

東堂夙夜のために作らせたという刀。

侍がなぜその刀を手にしていたかだが襲撃班なのだろう。ブルーポーションに関わっている犯人たちは必ずどこかで繋がっている。今回、取引の際に持ちいれられた魔術式を封入したコインも気になるところ。まだなにひとつ解明されていない。

「魔術師たちの相手ってのは好かないんだ、よろしく頼むよ」

「もちろんだ、俺だってこのままで終わらせるつもりはない」

呼び出しのアナウンスが空港に響き渡る。
「時間だな。それじゃまたな」
「ああ」
名残惜しい別れだが時間がきた。二人はそれぞれ行く先に目を向けて歩き出す。

西口地下駐車場での一件は一人の女につらく響いていた。楠木朱美の頭の中では侍の斬撃と爆ぜる車と少年の血が離れないままだった。駐車場の火災は車一台となったがその車の持ち主は割り出せなかった。
新宿で何かが動いているということは後藤も他の刑事達も口にしなかったが感じていた。刑事たちの住処では散々な目にあった十六人が茶を飲んでいた。
「みんな聞いてくれ！」と部屋全体に聞こえるように男が言った。この新宿署の刑事課家長である。後藤、楠木の上司に当たる彼の隣には若い男が立っていた。
「本日イギリスから我が新宿署にやってきた小塚英太郎君だ。彼にはまじかに迫る……えぇ……シエラ。シエラのライブの警備隊長として指揮してもらうことになっている。小塚君、挨拶を頼む」
要領を得ていないのか歯切りの悪い説明だった。
「おはよう。紹介に預かりました小塚です。迫るシエラ・ライブの護衛でやってきた。が、それだけではなくこの地域のゴミを一掃するため力を貸していただきたい」
とても人間とは思えない冷たい声をしている。目も鋭く刃物のように光っていた。楠木だけでなく室内にひしめく刑事達は背筋が凍るような思いで彼を見る。細く肉体的には負けるはずのなさそうな男達が単純に恐れを感じていたのだ。楠木は彼の言葉を復唱するように「……ゴミ」と呟いた。
その声はとても聴こえるようなものではなかったが小塚には聴こえたようで「そうだ、ゴミだ」と話を続けた。

「私は昨夜この街へやってきたが酷いものだった。若者はモラルを持たず好き勝手に暴れ大人は札束で少女を買っている。挙句の果てには自ら実を売る少女までいる。奴らはゴミだ。ゴミでいい。皆でこの新宿を美しい街にしようじゃないか」

目が血走る。

「こ、小塚君……」

課長が咳払いをすると「いや、すまない」と息をつく。

「この街を綺麗にすることも大事だがこれから名前を呼ぶ者にはシエラのライブを成功させることも念頭に入れてもらいたい」

小塚が名前を呼ぶ。呼ばれた刑事は返事をする。小塚の声はまるで刃物のように鋭く呼ばれただけで緊張した。呼ばれた後藤も緊張していた。同席している刑事のなかで彼はもっとも年齢が高いためその緊張が周りに伝わるとよけいにぴりぴりとした雰囲気になる。最後に呼ばれたのは楠木朱美だ。シエラという名前に彼女は一切の知識をもっていなかった。

「君達には特別部隊としてライブの警備をしてもらう、以上だ」

呼ばれた刑事たちは小塚から資料を受け取る事となった。

資料にはシエラザード・エルムンク・ビビッドハートという名前が書かれており巨大な船とライトに照らされたどことも知れぬ海があった。

第三章　七話（後書き）

これにて、第三章は終了となります。
つぎの更新は翌週金曜日となります。

第四章　一話

新宿駅での騒動は一先ず幕を落す形となり駅付近には平穏が戻った。日は過ぎ東堂夙夜は中学校生活最後の夏休みをむかえた。夙夜は二つ歳が違っており順調に生活していれば今頃は高校二年になる。周りと違う少年は同級生とは遊ぶ事はなかった。かわりに夏休みの序盤となる二週間を歳の離れた仲間たちと過ごしていた。

アーサー・ライバックの来日より活性化したブルーポーション撲滅の運動が荒垣トウマとその仲間達によって新宿区全体で繰り広げられている。しかし売人たちは次々にブルーポーションの販売を行いいつまで経っても根絶に至らない。夙夜もまた売人追跡に協力していたが後一歩のところで逃げられた。

駅の地下で見た侍はあれ以来現れていない。結局、魔術師の正体にしても不明のままだった。

暗い地下の部屋。再びやってきた帝との接見に夙夜はやってきていた。帝が夙夜を呼んだのは先日の深夜。いつものように突然、理由もなく呼び出し会う事を強制した。会って五分も経たないうちに新宿駅でのことを話すと彼女は首を縦に振ってにやついた。その笑みが他人事のようで夙夜には必死に駆け回る自分たちをひどく見下したように見えた。

「ほうほうほう。なるほどなぁ、で？　その侍はどうしておるのじゃ」

帝にとってブルーポーションのことなど興味はないようだった。口にしないということはその程度の事で地上に蔓延る麻薬など人間で解決しろという事なのだ。帝はこの東京の魔術師たちを収めているものの実際は放任主義で地上の出来事を酒のつまみにしている。夙夜はそんな彼女から目を背ける。

「逃したよ。でもあれで良かったんだ。あの時は。とても戦える状態じゃなかったしブルーポーションもこちらが手に入れた。奴らは

失敗したんだ」
「そうじゃの」
その言葉にやはり気はなく空気のように軽い声だった。だが帝の態度に夙夜は悪態をつくほど子供ではない。彼女との付き合いも彼此数年と経つ。これまで何が起きても手を出さずにいる帝をずっと見てきた。彼女にとって人間がどうなるかなどほんの些細な事でしかない。なにより動かない帝に構っていられるほど事態は穏やかではない。
地下駐車場で出会った魔術師の仲間と思しき侍。彼の持っていた刀はおそらく襲撃された魔術師の作り上げた桜紋鴉である。夙夜のために作られた刀は敵の手に落ちている。もし荒垣トウマやその仲間達が刀と出会えば唯ではすまない。夙夜は自らの体験で刀の力を観ていた。剣先は黒く歪んだ刃を孕み物質を越えた刃を形成していた。帝の話しでは魔力を帯びて伸びる代物。侍から魔力は感じられなかったが確かに刃は伸びていた。
「桜紋鴉を作った技師のこと教えてくれないか」
「いい男じゃったよ。年齢はもう七十は超えとったがな……人里は嫌だと強情で山ごもりするような奴じゃ。本当ならわっちがそうする所じゃのにのう。変わった男じゃったよ」
「なんで狙われたと？」
「さぁ心当たりはない。言った通り人嫌いなところがあったから付き合いのある人物はそういないと思う。怨恨の線はないな。おそらくわっちが作らせた刀の情報を掴んだ奴がいた」
帝の目を見る。嘘を言っているようには見えなかったが存在自体が嘘のような彼女に真意を求めるのはどうなのかと内心呟いた。そして彼女が自分から情報を流すかどうか考える。おそらくはない。隠す事もなかったのだろう。ある魔術師に刀の製作を依頼した。ただそれだけのこと。その話しを相手側が聞きつけた。そう解釈するしかない。
「やっぱりあの侍か」

「じゃろうな。じゃがの、その侍一人で済むはずないじゃろう」
そのとおり。いかに年老いた魔術師といっても普通の人間相手ならどうにかして逃げる事ができたはずである。何より、帝も言っているとおり人嫌いで人里を離れていたのだ。結界の一つや二つあって当然である。とてもあの男に突破できるとは考えられない。
加えてもう一人。売人の男だ。正体不明のまま消滅してしまったが彼もまた魔術師ではない。現在、ブルーポーションを売り歩く売人達も同様だろう。
「奴らから魔術師の特徴は感じられなかった。売人の男もだ。コインを使って姿を消したがあれは奴らの術式じゃない」
「コインかえ？」
「これだ」
駐車場で龍馬が消えた際、その場に残ったのは一枚のコインだった。それを夙夜は拾っていた。たった一つの手掛かりを帝へと差し出す。しっかりとした厚みがあり日本の硬貨でいうなら五百円玉よりも一回り大きかった。コインは銀色で堀の深い女の顔を刻まれていたが傷がついており元の模様まではわからない。
「見た事ないのう。この絵柄は女か？」
「多分。とにかく魔術師の手掛かりはこいつだけだ」
コインは夙夜の手に戻る。
「あまり関心ないんだな」
「そう見えるかえ？」
「ああ。まるで他人事だ」
「その通りじゃ。わっちに期待するでないわ」
この街の、いや、首都東京の管理者がこの有様である。帝はまた自分勝手にも部屋の灯りを消して去っていった。一人残った夙夜はいつものとおりやってきたエレベーターに乗って地上を目指す。暗室に留まる必要がいっさいなかった。エレベーターは地上を目指し左右にぶれながら上昇していく。しかしそれは感覚でしかない。夙夜の乗っている箱は原理不明のまま地上へとたどり着いた。

エレベーターの到着音が鳴ると扉が開く。到着した場所は実家からすぐ近くの廃ビルで入り口にも使用した場所だった。
すでに陽は落ちていて外灯が足元を照らしている。
ビルを出ると大通りには出らずにすぐ路地へと向かう。四角いコンクリートブロックを何段にも積み上げた塀でできた迷路の入り口のような道が目の前に現れると迷いもなく踏み込む。塀の先には民家の屋根が見え隙間には庭から伸びる緑の木々がちらほらと目を癒す。人二人が通れるぎりぎりの幅の道を進むとちょうど廃ビルの裏手にやってくる。そこにはあまりにも風景と不釣合いなバイクが一台あった。
十日前のこと、アーサー・ライバックから夙夜宛てに大きな荷物が届いた。それが目の前のバイクである。ＣＢＲ八〇〇という型番のバイクは主を待っていた。ボディは黒く塗り込まれ外装パーツが取り付けられたオリジナルカスタム仕様と題されたこの一台はライバック帰国にあわせて届いた。車体の変更点はまだある、エンジンからマフラーまで消音システムが備わっており走行中はほぼ無音である。
届いた物は他に
『今回の依頼の報酬だ。受け取ってくれ』
という短い手紙が添えられていた。
ハンドルにかけていたヘルメットを取り頭から被る。当然のようにエンジンをかけて発進した。向かう場所は決まっている。バイクに跨る夙夜の姿は少し小柄に見えるが問題はない。ヘルメットを被れば容姿は消える。エンジン音もほぼ無いため周りからは特に注目されることはなくなる。とはいえ夙夜がバイクの免許を持っているはずはなかった。年齢は足りているがまだ義務教育のなかにいる。
そこである免許の携帯となった。
事情を千影に相談したところあるカードを渡された。カードには自分の顔写真が張ってあり住所や番号が所狭しと書いてある。
「そいつを持ってろ。万が一警官に呼び止められてもごまかせる」

渡されたカードの作用である。おそらくカードを見た人物は本物だと誤解するのだろう。使用する機会はなさそうだがと思いながらも財布にしまった。

後は運転技術だがぬかりはない。これまでの生活のなかでバイクを運転した事は何度もあった。まるで計ったようにライバックと会う時はバイクや車の運転を練習させられた。それだけでは留まらず荒垣トウマたちとの出会いで何度も無茶な運転をした。高度なドライビングテクニックとまではいかずとも並んで走る車と車の間をすり抜けて進むくらいなら何とかなる。届いたバイクと偽の免許カードを手にして乗ったバイクはおぼつかない走りながらも車道に乗り出した。

無音のバイクが道を走り新宿を目指す。

赤いテールランプがラインを作り夜闇を切る。生暖かい風を身に受けながら走ると人の群れに出くわす。走行距離がかさむなか、人の群れを避けるように南方へと進行する。すると夜十一時に閉まったカフェやレストランの通りに入る。背の高い丸い球の形をした外灯が均等に並ぶ。昼間はこの通りにも人の行き交いは絶えずあるのだが現在はというと日を跨いでいるため誰もいない。

会社帰りに遊んでいるサラリーマンや若者の歩く道とは世界が違っている。

そんな通りには一店舗だけ灯りがついたところがある。やけに存在感を増していた。店にはピザの画が大きく掲げられておりポスターが何枚も貼られていた。

夙夜はバイクを店の前に停めると店内を見た。店は通りに面している部分がガラスになっていて灯りがだだ漏れになっている。

客の姿は無いようだがバイクの前には一台のバンが停まっている。

彼らが先に到着している事はあきらかだった。

店に入ると外からは見えなかった奥のほうで腕が一本掲げられた。見れば手首が曲がったり元に戻ったりをくりかえしている。手のほうへと向かっていく。

「これが今日の回収分だよ～ん」
今夜も今夜とて緊張感の無い声で出現したのは荒垣トウマ。四人席を二つくっつけて幹部四人と一緒にピザを食っていた。ピザ屋なのだからおかしくはない。しかし男五人でピザを囲む彼らの今はすこし悲しいものがあった。女っけのないこの場所には全部で四枚のピザがばらばらに散らばっている。夙夜はトウマから回収分をいれたバッグを手にしながらも空いている片手で一切れ頂いた。
ピザソースの甘味と野菜がふんだんに盛られた一切れは腹の隙間を一瞬で埋める。指についたソースを舐めとると渡されたバッグのなかを見た。そこには灯りに反射するように蒼く光るブルーポーションがあった。数えると七本程度になる。
「サンキュ。でもこれはそっちで持っていてくれ」
渡されたバッグごとトウマの傍へ置く。「了解」と何も聞かずに了承する。今まで集めたブルーポーションはすべて彼ら自警団で管理している。
「それにしてもバイクなんて乗れたんだ」
「まぁな」
席に座ると納屋が何も言わずに黒い炭酸水が入ったグラスを置いた。トウマは店の外に見えるバイクをぼうっと見つめている。
新宿駅での一件依頼、彼らはブルーポーションの密売人を追っている。目的は仲間を守る事にある。ブルーポーションは数回の使用で人体を破壊しかねない代物だ。仲間が手にしないとも限らない。トウマは自分の仲間全員に警告を出し手に入れた場合は渡せと指示を出している。
取り引きの回数は日増しに増えている。自警団の仲間はどこからか取り引きの情報を手に入れ、張り込みとブルーポーションを高値で買い取っている。今まで集めた本数はライバックが言っていた五百という目安に近付いていた。
魔術師の関与も続いていた。攻撃はいまのところない。トウマは妨害されてはいるものの仲間と上手くやっていた。現在、ブルーポ

ーションで死亡したというニュース三流スポーツ雑誌にも載っていない。
「これで通算三百本、あと二百か～。まだ続けるのかい？」
「なくなるまで頼む」
次の一切れを掴んで口に含む。今度はカレーソースがかかっていた。腹がすいていてまだまだ食べられる。帰宅するにはまだ時間が掛かるためここで何枚か詰め込んでおきたかった。しかし、三枚目のピザに手を伸ばしたとき四人の幹部メンバーが一斉にテーブルからピザを持ち上げた。
「そりゃやるけどね。どうにも金の尽きが見えてきちゃってんのよ。そこん所どうにかならない？」
全員の顔が真剣だった。へらへらしているのはトウマだけであった。彼らもただで動けるわけはない。自警団の大半は荒垣トウマの父が立ち上げた派遣会社に登録し日々仕事をしている。多くても給料は月額三十万ほどで仕事を休めば当然、給料は低くなる。世知辛い世の中ではあるがわからない話ではない。
なるほど、そこまできつかったのかと伸ばした腕を引っ込める。
「資金問題は考えておく。なんとかするよ」
なんとか、できるほど持っているはずは無い。夙夜の小遣いは定額制で同級生と変わりは無い。千影からバイト代などでるはずもない。たまに依頼人から報酬として小額貰う事はある程度。ぽんと出せる金は無い。
トウマの見る先にあるバイクは定額百二十万だと知っているが売れる代物ではない。なにしろ改造を施しておりとても買い取ってもらえるものではない。それに売り物ではない。
「考えとくから」
「お願いよ」
真剣八割、冗談二割の声でトウマが言った。ようやくピザがテーブルに置かれて食事は再開となった。今度は六人が同時にピザへと腕を伸ばしていった。

新宿からだんだんと人がいなくなる。客も店もゼロになるなかコンビニの灯りだけが残る。そうなってから六人は店を後にして新宿から遠ざかった。店の奥から彼らを見送っていたのはまだ三十代の店長だった。彼もまたトウマの仲間である。

第四章　二話

翌日の事、昼間は晴天だったが夕方からは曇天となった。いつ雨が降るかと歩行者のなかに心配する者が増えていたが雨は一向に振る事はない。曇り空の下、夙夜はバイクの運転練習がてらに新宿駅の周辺を何度か回ってから事務所へと向かった。人通りの無い事務所の前には見慣れない車が一台停まっていた。車種はハマーＨ３、事務所前の通りは図々しいほどの巨躯で塞がれてしまっている。自転車でさえスピードを落さなければ通れないほど道はせまい。

事務所側にこのような車に乗っている人物はいない。千影の車は事務所の裏側にある駐車場に停められている。長年付き合って知る彼女の趣味はスポーツカーでこのような大きな車は好まない。だから彼女の車ではないのは明白だ。

現在、事務所のビルは他に借り主がおらず千影と夙夜の二人だけが出入りする。あとは依頼人だけだ。しかしハマーに乗りそうな人物に心当たりは無かった。

新しい客が来ているのだろう。

脇を抜けるようにゆっくりと通る。事務所の裏側にある駐車場へしまう。やはり千影の車は駐車場にあった。

通りに戻ってくるとすぐにはす向かいにあるビルに目を奪われた。一週間ほど前だったか、この人通りの全くない道から一本外に出た大通りに一件のメイド喫茶ができた。すでにブームが過ぎ去ったような時期にできた店は夜遅くまでその光を放っている。メイド喫茶は四六時中電気がついたままで絶え間なく光を与えている。それからというもの静かに怒っているのが事務所の主こと洸敷千影である。下から見上げる店の光は事務所の窓からぴったり平行になって見える。絶えず事務所に光が差し込んでいる。

あんな店というと酷いが客は少なくないらしい、繁盛しているとこの街の住民は言っていた。入り口は大通方面にあり人の多さは変

わっていないのが幸いである。
今夜も賑わいを見せるメイド喫茶に背を向けて全く人気のないぼろいビルの階段を歩く。このビルの一階と三階は依然として無人のままである。ガラスの扉を開けるとすぐに事務所の中に客がいることに気づく。やはりハマーの乗り手はここにいた。
千影の顔が見えて客の後頭部がソファーから突き出している。肩幅は広く耳全体が見えるほどさっぱりした短髪はここ最近、知りあった篠崎源一郎その人のものだとはっきりわかった。
さては報酬を渡しにきたのか。
この短期間でまた依頼を頼みに来るはずはない。何より二度目はそう滅多にない。
「よう、源さんじゃないか」
「よっ。やっと来たな夙夜」
もうただの知り合いというには言葉が足りない関係だった。随分、長い間待っていたように言った。いつもと同じようにスーツ姿だったが篠崎の隣りにはスーツケースではなく学生が持つようなバッグを置いていた。夙夜が目を向けると篠崎はにやっと口を緩めてバッグのジップを開く。
「今日はな、こいつを見せようって思ってきたんだ。ほら洸敷さんの言う報酬ってやつだ。現金よりも情報って言うから上の連中を騙して持ってきた」
とても彼の職業からは想像できない笑顔だった。やはり彼からはその筋の男達とはちょっと違った印象を受ける。ごちゃごちゃとしたバッグの中から取り出す源を見る。夙夜にとってみれば現金のほうが良かった。なにせトウマから急かされている。なにか手を打たないとブルーポーションを回収することも困難になる。
その考えを反転させるほど篠崎の取り出したものはそそられる代物だった。バッグの中に入っていたのはビデオカメラ。それも手でもつタイプではなくカメラの部分は小さくコードで本体と繋がっていた。所謂、車両用の搭載カメラだ。

事務所のテレビに三色線で接続すると本体のボタンを弄って動画がはじまった。それほど画質はよくない。ライトで照らす夜道を走っている映像だ。どうやらカメラは運転席の横、車体の中心に取り付けられていたようでまるで自分が運転しているようにも見える。

車はどこか坂道を登っているようで車自体が出す光以外はない。しかも道は良くないようで随分揺れていた。坂を登りきるとコンクリートの平面に出る。どこかの山なのだろうか外灯が立っていて光に照らされた部分には土と木がコンクリートと混合していた。かなり開けた場所で車は停まった。動画の中もすでに夜だ。少ない光の中で車内の声が聴こえる。やけに時間を気にしていた。右側に立つ外灯の光がちらちらと輝いている。車のライトが足元を照らす中、何度も映像が揺れた。

この映像がなんだと聞こうとしたが篠崎は動画の説明する様子はない。

彼もまた傍で動画に見入っている。

見てれば解るって事か。千影先生も何も言わない。

黒服の男たちが車の前に立ち並ぶと前方からも一台の車がやってきた。エンジン音は聴こえず静かな軽車両だった。ライトが眩しく画面を覆うとすぐに消えた。やってきた車から男が四人降りてくる。

どうやら日本人ではないらしい。肌の色は白く髪は金だった。黒服の男たちに負けじと劣らぬ体格をしていた。やがて互いに一人が前に出る。おそらく代表なのだろう。なにか話をはじめている。

「このあいだ……夙夜やガキ連中が駅で繰り広げた原因だ」

ようやく口を開く。

画面の中では前に出ていた男二人のほかにもう一人、続いていく。どちらも重そうなケースを次々と持ってくる。こちら側、篠崎の持ってきた男たちのほうは全部で三つ。金髪の男たちは全部で五つ。その場に置いた。

代表だった男二人が相手側のケースを開いて中身を確認している。

「ここだ。この先が俺たちにはさっぱりなんだ」

動画は正常に見えた。時間は確かにカウントされている。何がさっぱりなのか見ていてその奇妙さに夙夜が気づいたのは十秒ほど経った時だった。動画の中で男たちが動きが止まっている。停止している。しかしカウントは止まっていない。動画は正常に動いている。

「どうなってる？」

口から漏れたとき画面に変化がおきた。

何者かが現れた。

たった一人、その場に現われたのは車椅子にのった男。ウェーブのかかった長い髪をしていて顔までは見えないが足がやたら細く見えた。上半身も大きくは無い。きりきりと車輪の鳴る音が聴こえてくるようだった。

不気味な男。その瞬間から夙夜の背筋に汗が流れ出した。暑いはずはない。ただ車椅子の男があまりにも不気味なのだ。映像からいつでも浮き出てくるような存在感とその場を支配している力が伝わってくる。周りの男たちは固まってしまっている。彼らは一切の動きを封じられたように何一つ行動しなかった。

「解るか？　こいつは時間を止めたようにしてやったのさ」

篠崎の声もどことなしに震えている。

車椅子の男は金髪たちの運んだスーツケースに何かを貼り付けていく。画面の奥で動いている為、それが何であるかまでははっきりとしない。暗がりの中でうごめく男は五つのケースを回るとまた来たほうへと進んでいく。

男たちはまだ動かない。かわりに動き出したのはケースだった。宙に浮かんでダンスでもするかのように陽気に跳ねる。

男の正体は言わずとして理解した。

奴は魔術師だ。

そしてケースの中身が何であるかも理解する。あれはブルーポーションの入ったケース。黒服の男たちが揃えたのはおそらく金だろ

う。これはブルーポーションの取り引き現場だ。あの新宿駅での一件を作り出した原因だ。
車椅子の男が画面から消えると次はケースたちも次々と消えていく。そしてようやく男たちが動き出した。まるで彼らは自分たちがどうなったのかさえ把握できていないようだった。口論が始まり先に手を出したのは黒服の側だった。四人の金髪と揉めあい次々にその場に倒れていく。最後は乱闘というよりは一方的な暴力だった。金髪のほうも二人足を引きずっていたが黒服達よりはましだった。彼らは全員がその場に倒れている。
結局、ケースは金髪たちが持ち去った。
篠崎は動画を止めた。テレビから線を引っ張りぬくとバッグにしまう。
「あれが魔術師……敵」
真っ黒になったテレビに向かって言った。
「どういう魔術式かは映像以外には判断できんな。この構成員たちはいまどうしてる？」
千影も同じように動画に見入っていた。三人ともいつのまにか肩に力が入っていてカメラをバッグにしまうまで硬直していた。
「どうって……特に問題なく働いてる。この動画で見たとおり止ってたのはあの時間だけなんだ。今は普通に仕事してる」
「敵は……あの魔術師は隠す気が無いのか」
新宿駅の一件もおなじだ。ライバックの持ってきた映像にも相手は映っていた。今回も同じだ。気づいていないのか、余裕なのか意図は不明だ。だけど、こうやってビデオに写るって言うのはどうなんだ。それにここにはあの侍野郎は映っていない。
「それで、今回はこれだけか？」
「そっちの報酬になりそうなのはこれだけしかない。でもこれだって立派なもんだろ」
夙夜はうなずくだけにした。不満はあったがこれ以上ない情報でもある。映像記録に魔術師の姿がそれも魔術式を披露するなどあり

えない。見れただけでもよしとする必要がある。
「篠崎さん、その映像コピーは？」
「とってないが必要なら……」
渡そうか、そう告げようとしたが千影は「しないで」と口を塞いだ。夙夜も同じ気持ちだった。この映像は消したほうがいい。二人の目の力だけで篠崎は言わんとする事を感じとりうなずいた。
「上の連中はなんて言ってるんだ。そうとう揉めてるんだろ」
「まぁな。この映像を見せても連中は事態が飲み込めてないんだ。薬はどこだっていうわ、金を取り返せって叫ぶばかりだ。でも相手は連絡がつかない。でもな」
ふっと笑った。
「一つだけ手掛かりってのがある。保険とも言うべきだな。ＧＰＳ発信機だ。それほど高性能じゃないからある程度までしか感知できないがな」
カメラをしまったバッグからは手を放した。
「でも問題がいくつかある。今日、ここへ来たのは問題解決に手を貸してもらいたい。ここに映ってた二人……」
再びバッグに手を置いたが篠崎の言っているのはバッグではなく中の映像だ。黒服の男たちのこと。四人いたうちの二人なんだろう。
「二人、俺の部下なんだが連絡が途絶えた」
「どういうことか説明してくれ」
「取り引きの最中に持ってったトランクケースのうち一つにはＧＰＳチップが取り付けられててな。万が一に備えてたってわけだ。信号はだいたいの位置しか解らないが数日前に反応があったんだ。ほら、夙夜があのガキ連中と暴れた日だよ。あの晩、二人が信号の場所へ行った」
「二週間前か……随分前だな」
「で？」千影が話しを求めた。
「最初は連絡が取れていたんだ。ＧＰＳ信号の発信場所についた時は確かに電話してきた。場所が山場だったから近くの民宿に泊まっ

てそこから固定電話ってわけだ」
「最後の連絡は？」
「一週間前の昼間だ。これからまた山に入るとか言ってた。でもそこまでだ。それ以降連絡はない」
「なんで源さんがそいつらを助けに行くんだ？　そういうのはもっと下っ端の奴らが行くのが普通だろ？」
「そりゃな。だからもう一組送った。これで全部で四人だ。でもそいつらも連絡が途絶えた。もう上の連中は馬鹿になってるのさ。だから俺が行って見てくる羽目になった。でもな、俺はちょっとラッキーでもあるんだ。部下の面倒を見ることができる」
　本当にヤクザなのかと思いたくなるほどの穏やかな顔をしていた。
「なんていうのかな。前にも言ったろ、俺はこの世界から足を洗いたいんだ。そいつが今回の依頼でもあるんだ。夙夜、前に病院で会った時うちの偉いさんが集まってたって言ったろ。うちの親父なんて取り引き失敗の後はずっと火山が噴火したみたいに怒鳴り散らして喚いてばかりだ。それだけじゃない、新宿駅でしくじった後は最悪さ、新入りは問答無用で殴られてたよ」
「なんか悪いな」
「気にするな。夙夜のせいじゃない。何よりあれについては礼が言いたいくらいだ。だってよ、馬鹿になったオヤジたちに部下四人を連れ戻して薬の回収をすることで俺を抜けさせてくれないかって提案したら首を縦に振りやがったんだ。だから俺としてはなんとしてでもやり遂げたい。自分のためにも」
　机に両手をついて頭を下げる。三人並べるほどのテーブルの大半を占拠してしまった。
「今回の依頼は部下二人、いや四人の救出だ……手を貸してくれ」
　篠崎源一郎の声は気楽なものではなかった。真剣さは夙夜にも伝わっている。十分すぎるほどの思いが事務所をいっぱいにしている。ヤクザが組を出るにはどれだけの苦労が伴うかは知らないわけではない。夙夜の目には指十本揃っていた。

「こちらに拒否する理由はないわ。貴方がここにきた時点で私は仕事を引き受けるって決めている」
「ああ。源さんの依頼は引き受ける。それでＧＰＳの発信場所はどこなんだ？　ここから近いのか？」
「静岡だ。いつ出られる？　俺としては今からでも」
「大丈夫。俺も出られる。幸い刀もここにある。千影先生」
「ああ刀は持っておけ、何が出るか解らん」
話がとんとんと進んでいくが物騒な言葉を発した少年に篠崎は驚いた。なぜ刀などという言葉が出てくるのかさっぱり解らなかった。これから行くのは山の中でする事といえば発信源を辿ってケースの回収だ。なのに夙夜も千影も自分とは考えが違っていた。
「随分と物騒だな。ケースを捜しに行くだけだぞ」
「そちらはね。でも映像に映っていた魔術師が動いているのも事実よ。どこでどう巡りあうか解らないの。新宿の取り引き現場にもその魔術師の仲間らしき人物と接触してる。部下四人が連絡できない状況というのが現在よ」
「そう、だな。でもやり合う奴って危ないのか？」
「ああ。いつでも戦闘ができるようにしておく必要があるってわけさ」
「なるほどな」
「じゃあ出発だ」
バッグを抱えて事務所を出ていく篠崎。夙夜は事務所の奥へと向かって行き備品を収納しているロッカーへと進んだ。事務所のなかは資料や千影の道具でいっぱいに溢れかえっている。しまうような事は無いため夙夜は自分の物はロッカーにしまう癖をつけている。ロッカーの中には帝から手渡された刀がキューバッグに入れたままになっていた。

第四章　三話

洸敷千影の事務所の前はやはり人が行き交う風景が無く、時折り餌を求めて舞い降りるカラスが数羽足元にいるだけだった。先に出てきた篠崎は薄暗い通りで空を見る。ビルの隙間から見える空の色は黒一色だった。背広の内側から煙草を取り出し火をつける。ぼうっと自分の顔の前だけが熱くなる。一息吸って肺の中に煙を入れた。

二度目の依頼にやってきた時、東堂夙夜はいなかった。主である千影と二人きりになった彼はひどく緊張して過ごしていたのだ。何も言わず問わずの千影は対面に座って夙夜の到着を待つ。その間、時間にして三十分となかったが篠崎は彼女の目をまともに見れなかった。

映画のスクリーンや舞台を見にいったとしても彼女と同じぐらい美しい人間は滅多に見られない。自分の美術感覚を根底から揺るがすほどの美女といてひどく不安になっっていた。美女と一緒にいられる幸福なんてものは感じられなかった。いつとって食われるかという恐怖が地に着けた足裏から背中にまでも感じていた。

「あれじゃ魔術師っていうより魔女だろ……」

夙夜とはあまりにも違いすぎる彼女の存在に意識はすでに食われていた。

「なにが魔女なんだ」

背中に投げかけられた言葉にはっとして振り返る。夙夜が長細いバッグを肩から掛けていた。「いや、なんでもない」と濁すと追求はしなかった。夙夜の千影に向ける眼差しが自分へとは違う事ぐらいよくわかっていたからだ。両親や親族に向ける眼差しよりも暖かいどこか信仰じみた目をしている。夙夜に対して千影のことは悪く言いたくは無かった。

「準備は？」

「こっちは準備ＯＫだ」

「ＯＫってさっき言ってた刀はどこだ？　まさか……」
変わった所といえば肩から下げるバッグぐらいなもの。
「ああ、こいつに入ってる。見てみるか？」
肩から下げようとした。
「いや遠慮しとくよ」
「鞘にけっこう綺麗な装飾が施されてたりするから見て損はないと思うけど」
「そういうことじゃねえ。服とか替えはどうするんだ？」
自慢気に語るが篠崎は興味が無かった。それよりも夙夜の持ち物があまりにも少ない事のほうが気になる。しかし夙夜は「これだけさ」と両手を持ち上げて言った。服装はいたってシンプル。胸板にぴっちり張り付いたＴシャツとジーンズで足元なんて革靴。それでも夙夜は問題なんてあるのかといった表情で隣に立つ。
「必要ないさ。そんなに時間がかかるとは思えない」
「でも静岡だぞ」と念を押す。
「部下が四人、連絡が取れないんだろ？　だったら急ぐ必要があるじゃないか。服の心配なんて後でいいよ」
「そっか。そうだな。わかった」
心配はしているがここは東京でＧＰＳの発信源は静岡にある。時間はどうしてもかかる。
「幸い今は夏休みで学校はないんだ、日を跨いでも問題ないよ。夜中までには着くさ」
「随分やる気だな。こっちとしては嬉しい限りだぜ」
ハマーに乗り込むとすぐにエンジンをかけた。巨大な図体をしている割に車内は静かで震動も緩やかだった。二人の間には小型ノートパソコンが一台置かれていて画面は運転席を向いている。パソコンからは線が二本伸びていて一本はバッテリー、もう一本はカーナビに繋がっている。篠崎がキーボードを捜査すると繋がっていたナビゲーションと連動し夙夜の側からも地図が見えた。
手で掴めるほどのモニターに線が走り赤い点が点る。赤い点は丸

い縁を外へ向かって放つ。その点がＧＰＳの発信源、線は地図。場所は篠崎の言うとおり静岡を現していた。夙夜はその地図を見たが土地鑑が無く線上の地図では良くわからなかった。
「信号があったのは静岡のどの辺りなんだ？」
「南方に位置する……ここだ。この山の辺り」信号は伊豆を指している。夙夜に解るよう指を差して細かく教える。「あいつらの話によると草がぼうぼうに生えた場所らしい」
「だとすると俺よりも源さんのほうが問題かもな」
「なんでだよ」
「その靴」と指差す。篠崎の靴も夙夜と同じで革で出来ている。それも営業に出るサラリーマンが履くような安物ではなく硬く上物の靴を履いている。篠崎のほうこそ山に登る準備を怠っている。
「その靴じゃとても山道を歩けるようには思えないってことさ。それにスーツじゃなにかと不便だろ」
「スーツは……替えはないが、靴ならあるぞ」と後部座席を指すとそこにはライトやらスコップが乱暴に詰まれていた。おかげで皮張りのシートは汚れ傷付いている。
「じゃあ連絡してきたっていう場所は？　どこかに滞在してたんだろ？」
　またモニターのほうへ指をあてがい、赤い点のちょっと下を押すように示す。
「もちろん予約してるさ。今夜中には着くって言ってある。心配すんな」
「わかったよ」
　ハマーはようやく走り出す。まっすぐに通りを抜けて大通りへと出る。ネオンと走る車のヘッドライトが流星群のように瞬く。群れに合流して北上し始めた。しばらく無音で走ったが煙草の火が消えるとカーナビを操作した。機械が動き音楽を奏でだす。機械じみた歌声が車内に響く。夙夜も聴いた事ぐらいある。シエラと呼ばれる外国のシステムだった。日本でもこの数年で大きく成長したシステ

ムで音楽のランキングにも影響を与えている。シエラはアメリカの会社が造ったもので欧米でも高い評価を受けていると世間をにぎわしている。
「なぁ」もうじき東京を出ようというときなって篠崎がハンドルを切った。「どうしたのさ？」と声をかけたがすでに静岡へとは逆の方向へと進んでいた。
「ちょっと寄り道していいか？」
いいかどうかの判断をする事などできなかった。夙夜は「好きにしろ」と告げてどこに向かっているのか聴いた。返答は「病院だ」とだけ短かった。高速に侵入するとすぐ都心から少しだけ放れた丘の上にやってきた。周囲にはビルは無く緑に囲まれていている。夙夜も走っている場所がどこか思い出した。あの日、篠崎と再会した病院の近くだった。ハマーの窓を開けると澄み切った空気が入ってくる。円を描くような坂を登り駐車場へと突き抜けた。
「お前もくるか？」と聞かれ、車の中で待つのもなんなので「ああ」と答える。
玄関口には警備員が立っていて二人がやってくると他の人と同じように目を向けた。目指すのは入院患者のいる棟でずんずんと踏み進む。目的の場所までかなり離れている。
「それで誰の見舞いなんだ？」
「妹さ。といっても血は繋がってないがな」
患者のいなくなった病院の中は静かでスタッフも交代していた。深夜の顔に変わる病院でまっすぐ歩く二人の姿は異質な物に見えた。そんな廊下には二人以外が存在していないようにさえ思ってしまうほどだ。すると篠崎は声を小さく話しを始めた。
「実はさ、俺は孤児でな。篠崎ってのは俺の身元引受人の名前なんだよ。だからどうしても馴染めない。源一郎って名前だって孤児院で付けられたんだ」
「じゃあ妹っていうのは？」
「孤児院にいた頃、仲がよかった兄妹の妹のほうさ。名前は琴音っ

ていうんだ」
「俺はその兄妹よりも少し先に引き取られたんだがよく遊んでいたよ。俺を引き取ってくれた人たちもいい人でな。二人をよく家に招いてくれた」
「でも二人を引き取ったのは」
言葉を出すのが辛そうに見えた。篠崎の出そうとしている名前はなんとなくだが想像がつく。琴音という名前を聞いた時からある人物にいきついていた。
「……依知川」
「そうだ」
箱娘のとき、第一被害者の名前と合致する。犯人である樋上によって傷つけられた具合は話によれば酷いもののはず。
二人はエレベーターに乗り密室に入った。
「依知川が目をつけたのは兄貴のほうさ。龍馬って言うんだが非常に剣の腕がたってな。ちゃんと練習できる環境にいれば県大会……いや日本一にだってなれるような奴だった。でもな俺達は孤児だ。そんなのは夢だよ。防具も竹刀も手に入らない。そんな龍馬の腕を買った組長は二人を養子にしたってわけだ」
「なるほど」
「琴音はついでだったんだ」
悲しい声をしていた。エレベーターの動きが止まると二人はまた白い廊下を歩き出す。同じ白い壁だがさっきまでとは雰囲気は違っていた。まず空気が違う。どんよりとした肩に掛かる重いものだった。夙夜はとくにその重さを感じていて蔓延する消毒した匂いにも嫌悪した。自分の入院時代を思い出して嫌になる。
「じゃあ源さんが依知川組に入ったのは」
「ただの偶然さ。単純に性に合ってたんだ。最初はな。ここだ」
部屋と廊下を隔てるドアの前で動きが止まる。ネームプレートには依知川琴音と書かれたプレートが挟まれている。篠崎が間違っている事は無い。どうしたのかと彼の顔を横目に見るとやけに深刻そ

うにしていた。
「中へ入ったら驚くと思うがあまり動揺しないでくれないか」
「琴音さんはどういう病状なんだ？」
「病気じゃないんだ。箱娘の時を憶えているか？」
憶えている。おそらく身体的に治療しているのだ。夙夜はうなずいてみせた。篠崎は信頼したのかうなずいてドアをノックした。返事がないままにドアを開ける。スライド式のドアが開いていくと夙夜の目に彼女の姿が見えた。
「よう琴音」
篠崎の声が高くなった。仲間に向けて発する声よりも高い。それだけ彼女のことを想っているのだろう。その彼女の姿は見る者の目を熱くさせるに十分だった。ベッドから上半身を起こしている彼女の右肩から手の先まで包帯に包まれており、篠崎の声に反応して動いた顔も三分の一が包帯だった。目が見えない。眉から鼻の半分あたりまでが隠れてしまっている。
「源兄さん？　あっ……龍馬お兄ちゃんも？」
彼女の声は掠れていた。喉にも傷を受けている。喉のあたりにも白いガーゼのようなものが貼られていた。
やってきた二人に向けて表情の筋肉は笑顔を作ろうとしていたのだろうがひくひくとまるでひきつっているように見えた。篠崎が夙夜を見て二人でいるから誤解したんだと思った。ここに彼女の兄はいない。
「違うよ。龍馬は来てない。こいつは」
「はじめまして東堂夙夜って言います」
「夙夜さん……すみません。兄と同じ匂いがしたものだから私てっきり」
彼女の笑顔が消えてしまった。近付くとベッドの上が全て見えるようになると心が絞めつけらる。服の裾から管が何本も見える。管の繋がる先は機械の山で光と数字が散乱していた。彼女の状態がどうかなど聞くまでもない。

「ちょっと東京を放れる事になってな。その前に会っておこうと思ったんだが……龍馬のやつはやっぱり来てないのか？」
「うん。お兄ちゃん忙しいのかな。電話もしてくれないの」
「組……義父さんは？」
琴音は首を横に振るだけだった。
「まったくあいつらときたら」
「でもいいんです。私にはこうして玄兄さんが見舞いに来てくれるし今日は夙夜さんも来てくれました。私はそれだけで嬉しいです」
琴音の容態はひどいものだと解る。夙夜は自身の中にいる少女の魂に呼びかけた。心臓の隣りあたりからもう一つ熱く込上げるものが浮かび上がり今度は瞳に宿る。黒い瞳に青い靄がかかる。霞みがかった瞳で琴音の身体を見ると身体の端々が赤く光っている。身体の中、胸の辺りには黒い塊が見えた。
過去の自分を思い出す。
交通事故に遭い死の一歩手前にまで追いやられた時の事。洸敷千影によって助けられた日のことを。彼女は夙夜の身体に黒い塊を見たという。それは死を現す色。科学や医学では見ることの出来ない魔術師の目でしか確認できないもの。今、死を乗り越えた夙夜は内にいる少女を介して見ることができた。

黒い塊は死を告げる。

夙夜のように千影のような人物が現れない限り彼女は元に戻る事はない。しかし千影は彼女に手を差し伸べる事は無いだろう。彼女を救おうとする理由が無い。
「そうだ。これから静岡に行くんだ。土産ちゃんと買ってくるから待ってろよ」
「静岡？　私も行きたいな」
「ああ。治ったら行こうな」
「源さん」

治ったら、その言葉に心臓がぎゅっと絞めつけられた。
「ん、ああ。そうだな。行かなきゃな。顔見れて安心したよ」
「うん。お仕事頑張ってね」
部屋を出る最後まで彼女は包帯の無い左腕を振っていた。
ドアが閉まり歩き出す。資料を見ていた看護士たちが二人の姿を見て頭を下げる。二人も同じようにしてエレベーターに乗り込んだ。
「驚いただろ？」
「樋上に襲われたあとずっとああなんだ。見たとおり体の殆どは切刻まれている。目だって完治する事は無いって医者が言ってた」
「義父さんは？　あんたの組長なんだろ」
「組長は知らんぷりさ。建前で命は助けたが琴音が言うとおり見舞いに来る事もない。龍馬を目当てに養子に入れたくらいだからな。あの子はついでなのさ、あの人の目には本当の娘だって映ってない」
「本当の？」
「ああ双子の姉妹だ」
想像がつかない。
「でも源さんはこうやって見舞いに来てる」
「当然だ。俺がいなきゃ琴音は一人ぼっちだ」
「医者はそれ以外に何か言ってた？　外傷以外に」
「ん？　なにもないと言っていたがどうした」
彼女の身体の奥に見えた黒い塊の正体は不明である。病気で無いというなら臓器の寿命かもしれない。
「いやなんでもない。ただ、ちょっとかわいそうだって思っただけさ」
「そう思ってくれるだけましさ」
病院から出ると生暖かい風に吹かれながら駐車場へと向かう。再びハマーに乗り込むと「さ、行こう。あいつらも待ってる」と言って出発した。
東京から出ると思い出したように篠崎が口を開いた。
「そうだ、報酬。今回の依頼のほうはどうすりゃいいんだ？　あの

ビデオは前の分だろ、てことはまた何か払わなきゃならないよな」
「それか」
「やっぱ情報なのか？」
「そのへんは俺じゃなくって千影先生に直接聞いてくれ」
「俺あの人苦手なんだよな。さっきだってお前が来るまで緊張しっぱなしだったんだぞ」
灰皿に置いた煙草の残りを見て言った。あの緊張の正体はなんだったのかと。
「なんでさ？」
「わかんね。なんていうんだ？　人間なんだけど人間じゃないっていうのかな」
「なるほど」
正直なところ、篠崎は夙夜が怒るのではないかと思っていた。千影に対する夙夜の目を見ると彼女に向ける感情はきっと小さなものではない。自分が血が繋がっていない琴音を妹のように見るのと同じか、それ以上だ。
「な、なんだよ。何がおかしいってんだ」
「いやよく解るってことさ、その気持ち。俺もはじめはそうだったんだ」

第四章　四話

まだ小学校に通う頃、東堂夙夜は交通事故に遭った。一年に数回だが京都にある本家に出向く事がある。その時だけはいつも海外にいる両親が帰ってくるのだ。そして夙夜は憧れの女性に会いに行く日だといつも心躍らせていた。

事故に遭ったのは夏の頃だった。夏祭りに出かけるなかで親戚の姉、月影蒼華が居眠り運転の車に轢かれそうになった。まだ小さな子供だった夙夜だが大人達から言われていた言葉を実践したに過ぎない。

「自分が好きな人は何が何でも守れ」

幼い夙夜は自らを省みずその言葉に従ったのだ。そのせいで夙夜は病院送りとなり数日間意識不明となった。この日、集まった親族の中にアーサー・ライバックがいた事が全ての始まり。彼は病院に運ばれる間に一人の女に電話をつないだ。呼んだのは洸敷千影その人。彼女は夙夜の両親といくつかの約束を交し少年を救ってみせた。

人間の生死はまだ科学、医学で解析できる範囲にない。血の巡り、細胞の損傷、肉体にかかる負担を取り除いたからといっても意識が戻るわけではない。もっと根本的な部分、いわゆる魂たる部分は未知数である。夙夜も同じである。少年の身体を治すには問題はなかった。意識はなくとも生きている。身体の具合は回復傾向にあった。

集まった数人の大人に千影は肉体の死と精神の死は別にあると説明した。現在の状態では肉体面の手術が成功しても目を醒ます事は無いと説明した。千影は魔術によって夙夜の意識を元に戻すと言い体現した。それはまるで魔法か奇跡だった。彼女の語る魔術という妙に理屈めいたものとは違ってみえた。千影の処置に医者はどう判断したらいいか口を挟めなかった。彼女はただやってきて細く女子

中学生でも折れそうな杖を振っただけにすぎない。
医者の戸惑いをはるかに超えた次元でも少年は目を醒ました。入院していたのはそれから三日ほどだった。退院許可を申請するまでも無い。夙夜は病院を自分の家のように歩き回っていたのだから。その頃から夙夜の意識は強く大きくなった。
今にして思う。
依知川琴音に自分にとっての千影は現れるのだろうか、と。
千影によると生死の淵をさ迷う者の前に現れる人物が死神か天使かは決まっているのだという。救われるには運命付けられた出会いが必要だと。夙夜と千影は出会うべくして出会い命を救ったにすぎない。他の人間が同じとは絶対に言えない。もし、自分の前に助けたいと思った人物がいても助けられない可能性は存分にある。その時は歯を食いしばれと教えられた。
完璧なまでの死の因子を見たのは今夜が初めてだった。
ハマーがいよいよ東京から離れ山にできた高速を突き進む。同じ進路を辿る車はまばらであった。シエラの歌がかかる車中では男二人が無言でいた。シエラは機械によって操作されている偶像の歌姫。声は合成音声で製作されたと公式に書かれている。車内に流れる歌声は機械音声などではない生の人間が歌っているようにしか聴こえない。とてもコンピューターソフトウェアのだせる域ではない。二人とも黙って歌に耳を傾けている。世間話なんてものが長く続くはずもなくおしゃべりなわけでもなかった。
再び口を開いたのは大きな休憩所のあるインターに入って缶コーヒーと地図を買おうとした時だった。長時間の運転で肩のこった篠崎が休憩のため停まると夙夜が聴いた。
「琴音さんのことだけど兄貴がいるんだろ？　源さんじゃなくて本当の。その人はどうしたんだ。同じ組にいるなら」
「龍馬は行方不明だ」
ハンドルに寄りかかるようにしていた篠崎が缶コーヒーを一口飲む。喉を鳴らすと万歳するように腕を振り上げた。

「琴音が入院してからすぐだ。組長と喧嘩してな。琴音の入院費や手術代が結構な額でさ。それだけでも払ってやったんだぞと怒鳴ったのさ。琴音はまだ手術を必要としてて……このままだとあと何ヶ月持つかわからねぇんだ」
なるほどあの黒い点はそれか。
源さんは何ヶ月って言ってるけど実際はもっと短いだろうな。
自分の胸を擦る。事故のとき身体に受けた傷はまだ残っている。時間が経てば消えると説明されたがまだ手のひらと同じ大きさの蜘蛛のような手術跡が残っている。傷跡は肌の色より濃い。脱ぐとよくわかる。
「そんな状態の妹を放ったらかしにしてどこに行くって言うんだよ」
「わからねぇ。けど俺が知ってる龍馬は琴音を放ってどこかへ行くような奴じゃない」
「信じてるんだな」
「当然だ、妹は大事だからな」エンジンをかけた。
ハマーは再び高速に入り静岡へと向かって走り出す。
「確かにな、妹は大切だ」
「ん、夙夜にも妹がいるのか？」
「ああ、一人ね。でも学校の寮に行ってるから帰ってくるときは夏休みと冬休みくらいさ」
「そっか」そう二人して言った。
暗い道路を見ると妹の顔がふと窓に映ったように思い出す。妹の玲子は金持ちの集まるお嬢様学校に小学生の頃から通っている。学校は全寮制で家に帰るときは学校側へ申告する必要がある。場所はそれほど離れているわけではないが家に帰ってくる事は少ない。両親の気持ちとしては二人を平等に見ているが夙夜には千影がついているため玲子に対しては過保護になっている節がある。
玲子も実家へ帰ってもそれほど親密に話すことはない。
静岡の県境へ差し掛かる。車内のカーナビには目的地がおおまかに表示されている。赤い点はここからだとまだまだ遠い。インター

で買った地図と合わせると発信場所はやはり山に囲まれている。街らしき場所からも放れていて道路も無い。携帯電話が通じるような場所じゃないのはあきらかだった。いうなら穴のような場所だ。
「ＧＰＳは大丈夫のようだな」
今度は映像に映っていた魔術師と侍を思い返す。やつもそういえば龍馬と呼ばれていた。なにか間違いであってほしいと願いながら彼らの目的はなんだと探る。
映像がブルーポーションの取り引きだったのは間違いない。彼らがＧＰＳに気づかないわけは無い。それに中身はどうなっているのか。新宿で見つかったブルーポーションの数はまだ目安の五百に到達していない。その残りが捨てられているとでもいうのか。この目で確認するまで答えはでそうに無い。
「どれくらい正確なんだ？」
「発信位置から一・五キロくらいだ。それだけで充分だろ」
それはかなり危なくないかと考える。平地で一・五キロというのではない。山の中での作業だ。最悪、谷や崖があるかもしれない。
「山登りをしたことはある？」
「ないな」
即答。不安は募るばかりだった。
あと一時間もかからないだろう距離まで来るとまた適当な話しをしはじめた。篠崎の眠気はないようだったが喋りつづけていないと集中できそうになかった。見慣れた街と景色はがらりと変わり日の落ちた今は延々と高速道路のライトが続く。まるで巨大な血管のよう。日本という身体のなかに造られた大量の道という名の血管を二人の乗る車や他の車がわんさかと走っている。
「次の出口で出る、ＧＰＳは動いてないのか？」
標識に差し掛かったとき篠崎が話しをぶつ切りにして言った。問題ないと返した。ＧＰＳの発信信号は何一つ動いていなかった。
月がぼんやりと光っている。高速道路を降りた車は山を切り開いた道を走っていた。高速道路を下りると東京とは違う別世界が広が

っていた。広がるのは田畑と山ばかり住宅街はコンクリートで固められた洋式の家ではなく日本家屋。スーパーや商店は店を閉じている。二十四時間のコンビニも少ない。
「夙夜は伊豆に来たことはあるのか？」
「ないよ。源さんは？」
首を横に振った。
「部下はどうしてる。一度連絡をとったほうがいいと思うんだけど。やっぱり繋がらないのか」
「それもそうだ」
車は大きな駐車場へ停まる。キャッチボールどころか子供が野球を出来るほどの大きさがある駐車場だった。その随分と先に一軒家程度の小さなコンビニがある。駐車場が埋まった場合、店内に客は入りきらないだろう広大な土地を持っている。おかしなバランスで成り立っていた。
「なんか買ってくるなら今のうちだぞ。カーナビで周辺を見たがここいら一帯、何にもありゃしねぇ」
「わかったよ。行ってくる」
携帯の通話ボタンを押していた篠崎を残して車を降りる。篠崎はというとハマーから降りそうになかった。コンビニへと入ると小さな店舗にしてはそれなりの商品が陳列していた。高速の出入り口になっているだけのことはある。だが客は滅多にこないようで店員も煙草を吹かして奥にいるほどだった。夙夜が来店した事でようやく奥から出てくる。煙草の匂いは消えていない。ミネラルウォーターを二本買って出る。やる気の無い挨拶を背中に受けるとハマーのなかを遠めに覗く。
篠崎は携帯電話を睨んでいた。
ここまで来る途中、篠崎は他愛ない事でも笑っていたが内心そうではないと感じる。そうだ、部下四人の身柄は不明なのだ。篠崎が心配していないはずは無い。
彼から目を背けると周囲の暗さに驚いた。東京なら深夜でも昼間

より眩しいところはそこら中にある。背の高い建造物がないから良く見渡せる。今いるここは外灯がぽつりぽつりとある程度。遠くの空に浮き上がる壁から零れてくる明かりにこの街は照らされていた。高速道路の光がないとここは昔の暗いままだろう。

「買ってきたぜ」

車中に戻ると篠崎は肩を落としていた。やはり繋がらなかったようである。じっと携帯電話の小さな画面を見ている。冷えきったミネラルウォーターを渡すとコーヒーじゃないのかと言った。喉が渇いているのは解るがカフェインの取りすぎだと告げるとふっと笑顔が戻った。

「あいつらまだ圏外だ。こっちに着信もメールも無い。まったく使えねえ奴らだ。休みは程々にしていくか」

「それは構わないけど泊まる場所は？　もう遅すぎるぜ」

「そっちにも連絡した。遅くなっても構わないってよ。ＧＰＳの信号からすぐの場所にある。先に信号の場所へ行ってからだ」

「わかった。でもな、最悪の事態を想定して行動すること」

「ん？　どういうことだ」

「うちの先生が言う言葉さ。俺達はこれからあの大きな山の中へ行く。しかも天候は最悪」東京を出発した頃から空は曇っていた。もうじき雨が降る。夙夜は肌で感じ取っていた。「一歩手前なくらいですぐにでも雨が降るんじゃないかってことを考えれば準備していく方がいい。できるならな」

「じゃあカッパでも買ってくるか？」

「いらないさ。降ったら退散だ。部下のことが気になるのはわかるけど気持ちを落ち着かせる事も大事だってことさ」

いつのまにか携帯電話を持っていた手が汗を掻いていた。篠崎は自分の気づかないうちに身体が強張っていた。自分の半生も生きていない夙夜に言われてようやく自分を取り戻した。狂乱したわけではないにしろ普通ではなかったのだ。

ハマーが道を走り出した。山の麓にはもう閉まってしまったが土

産物屋が並んでいる。どうやらさきほどのコンビニ以外に夜の時間を営業している店は無いようだ。行き交う車も少なく一台でも通るものならスピードを落して食い入るように見た。
「違う」「こいつも違う」とぶつぶつ言う。
部下の乗った車かどうかを調べていたのだ。幸い二人の乗るハマーは目立つ。こちらが気づかなくとも相手は気づくだろう。冷静になっても篠崎は部下を思う気持ちだけは押さえきれていなかった。
「ここを左に……って一般車は進入禁止になってるな」
山道の途中辺りでＧＰＳの発信場所が少しずれていた。真直ぐに進んだ場合、そのまま頂上へと着いてしまう。その場合、全く別方向へと進んでしまう。けれども前には立ち入り禁止の看板が立っていて進めない。看板によると先は工事中とのこと。ヘッドライトの先には木を切り崩して作られた土の道があるだけだった。
「車を置いていくか……それとも行ける所まで行くか」
「この時間に工事をしているとは思えない。進めるところまで行く」
周囲に車を置ける場所は無かった。ＧＰＳの場所まではまだ距離がある。この先をまだ進む必要がある。ハマーは看板を無視して走り出す。外灯が遠ざかるとヘッドライトで照らす部分だけが目に入る。両側後方が完全に黒一色に染まると明かりが欲しくなったのか篠崎は車内の光をあるだけ全部光らせた。
真っ暗闇の樹海を走る。ライトに照らされた土にはトラックの走った跡でできた二本のタイヤ跡が残っている。まるでなぞるようにして走ると徐々に坂道になっていて下っている事が解った。夙夜は辺りを見ようとしたが木に囲まれた細い道は外の景色を抹消していた。不安になりながらの走行だった。道がどこまで続いているのか見えないのだ。篠崎はアクセルを踏む力を弱めていた。
やがてそんな不安が吹飛ぶ。工事現場らしき大きな広場に出た。そこには緑はなく切られた大木が横になって並んでいる。どこからか運ばれた重機も並んでいた。広場の隅にはプレハブ小屋が建っていたが人の気配は無い。

「工事現場はここか。ＧＰＳはどうだ」
「このまま真直ぐだ」
広場を素通りしてまだ走る。現場を中心してまだ道は続いている。地図を見ると走り出した道を進むと山を降りた場所へつく。頂上付近から麓まで繋がっている。モニターに映される赤い点の中心はすぐそこだったが麓まで降りてしまうと点から遠ざかってしまう。ＧＰＳの中心地点に行くにはこのあたりで降り、暗闇に入るしかない。
「車はここに置く」
まだ坂道が続いているというのに停車した。右にも左にも寄れない狭い道に堂々とハマーは鎮座した。
「こんな時間に通る奴がいるはずないだろ」
後部座席に用意していた靴に履き替えはじめる。ＧＰＳの発進信号はすぐそこにある。夙夜はハマーから降りると周りを見た。が、やはり暗く視界は無いに等しい。篠崎から懐中電灯を渡されてようやく足元が見えるほどだ。篠崎もハマーから降りるとヘッドライトが消えた。
二本の懐中電灯をあわせるとある程度の明るさが前方に広がった。
「で、どこから捜す？」
「とりあえずこっちにするか」
発進信号はこれ以上詳しくならない。周囲に見えるすべてが捜索場所になる。先に篠崎が足を動かした。足もとは自由気ままに生えた草が噛み付くように跳ね返ってくる。力強い自然の力に東京ではなかった不自由を伝える。ここがコンクリートだったらどれだけ楽か、そう考えて夙夜も踏み出す。ぐいぐいと奥へ進む篠崎の背を追っていく。草を掻き分けるように篠崎とは別のほうへと進む。
「夙夜！　そっちはあったか」
草むらは二人で捜せるほど小さくは無い。懐中電灯の光が届く範囲で自分の周りを手探りしながら進むしかない。足元が見えないためケースがどこに落ちているか解らない。
「こっちにもない」

声を張り上げる。もう少しＧＰＳの感度がよければと思いつつ自分たちの足場を捜す。実際やってきて思うが信号から半径一・五キロというのはかなり無茶がある。自分の立っている場所さえあやふやで危険極まりない。

やはり昼間に来たほうが、と首を持ち上げ空を見る。嫌なことというのは連鎖する。首筋にひんやりとした感触。上を見上げれば一番の恐れていたことが起こった。感触の正体は雨の粒。ぽつりと雫が垂れた次の瞬間、雨は降り始めた。とてもすぐ止む気配は無い。

「こりゃ駄目だな」

「ああ、捜索は明日にしよう」

二人とも切り替えは早かった。服に染み込む雨から逃げようと走っていく。ハマーまでは離れていない。すぐにたどり着いた。それほど濡れずにすんだ。

「さっさと予約してるっていう民宿に行こうぜ」

ハマーはエンジンが付くと麓を目指して走って行く。雨はどんどんと強くなっていくばかりで坂道は獣道と変わりはしなかった。走るには無茶な道に二人とも思えた。ワイパーの動きに拍車がかかる。麓に到着すると大きな道路に出る。山に入る前に走っていた道路だった。やってきたときと同じ方角に向かって走ると風景が宿だらけになる。とはいえ旅行客がはしゃいでいる姿は無くどの宿も暗いままだった。外灯が延々と続きそうな道を走るとコンクリートが途切れ砂利道に変わる。民宿が遠くに消えていってしまう。

篠崎は停まることがなかった。車ががりがりと音を立てて走ると林を切り崩した広場に出た。左手側には一軒家があった。

「なんだ、ここ」

夙夜の声に篠崎もまた「なんだ、ここ」と言った。

一軒家の玄関には確かに谷津倉荘と書かれた看板が立ててある。家は二階建てのようだが見る限り幅は無い。商店街の一店舗が消えた場合すっぽりと入るほどの建物は周りに何もないため余計に小さく見えた。

くらべて車が停まった場所は広すぎた。他に車もない。篠崎が捜していた部下の車もなかった。彼らが泊まっていたというのが本当なら彼らの車が無ければならない。しかし駐車場には二人以外に存在していない。さらに夙夜は携帯電話を取り出して画面を見ると圏外と表示されている。携帯電話の電波は嘘ではない。

「しかし古い家だな。あいつらの車も無いし。どこかに出かけているのか？」

「さあな。でもここが圏外なのは確かだ」

一軒家は木造建築でかなり古く見える。暗い周囲に光を与えているのはこの家だけで周囲はやはり黒で統一されている。強くなった雨のなかを小走りで移動すると玄関口に立った。インターホンらしきものはなく仕方が無いと戸を開けた。がらがらという音を立てた。

外同様、建物の中も古めかしい作りをしている。床の板は掃除しているだろうが輝きはなく壁にも長い時間で出来あがった染みがいくつもある。また右手側には二階へと続く階段がある。左手側には奥に繋がる廊下がある。

「ごめんください！」

奥に向かって篠崎が叫ぶ。玄関の戸が開いた音では誰も迎えることはなかったからか少々大袈裟な声量だった。玄関から見える場所には全て電気が点いている。誰もいないはずは無い。しかし何一つ返ってくるものはなかった。

「誰かいないのか！」

篠崎の声はむなしく消えていった。ふと下駄箱を見ているとホテルのフロントに置いているような丸いチンベルが備え付けられていた。それだけが銀色に輝いている。他とは違っているようだった。篠崎が仕方なく押してみる。が、チンベルは壊れてしまっていてうんともすんともいわなかった。壊れたチンベルの隣りにはさらにもうひとつ赤いボタンが壁についている。御用の方はこちらでお知らせくださいとまで書いてあった。

「じゃあこっちか」

「なんだそよれ？」
「チンベルの替わりだろ？　押すぜ」
赤いボタンを押す。変わった様子はない。音も鳴らない、光が放たれるわけでもなかった。何事も起きない時間がただ流れただけだった。ようやく痺れを切らした篠崎がもう一度押そうとした時、廊下の奥から誰かがやってくる音がした。服を引きずるような擦れた音。
「あらあら、ようこそお出でくださいました」
調子よくリズムを刻みながらやってきたのは木造建築のこの家によく似合う着物姿の女だった。

第四章　五話

「すいませんねぇ」

奥からやってきたのは三十代の女だった。長い黒髪を纏めてあげているため着物と髪の間ではうなじが見え隠れしていた。その着物だが夙夜も篠崎も呆気に取られるほど豪華だった。この建物の古臭い外見にそぐわぬ宝物に出会ったように呆然と立ち尽くす。着物は深い藍と花柄で彩られており彼女の容姿を引き立たせている。彼女の美しさを引き立てるものはそれだけではない。彼女の髪に挿された金のかんざし。古風ではあるが黄金のように光るかんざしが眩いまでに心を惹く。

夙夜は一目見て彼女を怖いと思った。

篠崎は一目見て彼女を美しいと思った。

二人の目に映る女は一人しかいない。夙夜と篠崎、二人の感性の違いが出たにすぎない。

篠崎は女の少しばかり主張が強すぎる胸の脹らみに目を移す。押し上げられた見事な山を目は登って降りた。

女の顔はといえば極上の美人である。このような美人が山奥にひとりで宿を経営しているなど考えも着かなかった。二人はせっせと足を動かす女の動きに見蕩れそうになっていた。彼女が一歩前へ出るたびに腰が左右へ揺れるのだ。身体のラインがはっきりと出るほどきつく締めた着物のせいで男の性を駆り立てているようでもあった。

足を止めると美人が頭を下げた。見れば篠崎はいつの間にか頭を下げていた。夙夜がどこか妙に硬くなっている篠崎の表情を窺うと岩石のような顔が赤くなっていた。それでもしっかりと目だけは女から離していなかった。

「お待たせしたようで申し訳ございません。ええっと……」

「昼間に予約した篠崎です。ああっこっちは息子で」

頭を上げて話すがまだ硬さはそのままだった。
なぜ、じぶんがここまで彼女に心ときめくのか解らなかった。女をじっくりとみながら頭の中は半生を超絶的なスピードで再生していく。そのうち自分のよく借りる映画のシリーズに行き着いた。今週も近所のビデオレンタル店に行き借りた。その借りた映画というのはいわゆる任侠物で出てくる人物はヤクザばかりといった内容だ。ヤクザ同士の抗争を描き「玉を取ったる」や銃をハジキと呼んだりする作品。篠崎は自分の世界とは違う映像のなかのヤクザを馬鹿馬鹿しく思いながらも暇なときに見ていたのだ。
女は、その作品シリーズの女頭と似ていた。いや美貌も身につけている着物も彼女のほうが上だ。だからこそ心が破裂する勢いで高鳴っている。
「篠崎さま……はいはい。ええ確かに受け賜りましたわ。二名様で」
「いやぁ遅くなってしまって申し訳ない」と頭をかく。
「いえいえ、どうぞお上がりくださいませ」
頬をやんわりと緩める。「おう」と言って篠崎が靴を脱ぐ。夙夜も同じだ。見れば二人の立っている隣に靴棚がある。もとあった緑色が薄くなったスリッパが並んでいる。外出用の靴は見られない。女は靴棚の上にあるノートを開いてボールペンと一緒に篠崎へ差し出した。
「こちらに記入をお願いしますね」
ノートには名前、住所、電話番号とあった。篠崎は言われたとおりに記入すると女に返す。女は確認せずにノートを置いた。
「それにしてもこの雨の中大変だったでしょう」
「そうなんだよ。突然降って来てな」
「どちらか外に出られておいででした？」
二人とも肩から背中まで濡れていた。車から戸口までの間に濡れる量ではない。
「い、いや特に」
普通に否定すればいいだけだったが高鳴る胸がどうにかならない

ようにするだけで精一杯だった。
「そうですか。随分濡れてらっしゃるので外にいたのかと思いましたわ。お部屋は二階になりますので。ささっどうぞ」
スリッパに履き替えるとようやく足を踏み入れる。女の立っている床は冷たく木のきしみは分厚かった。外から見るよりもしっかりしている作りにすこしほっとする。そういえばと外で降る豪雨にも似た強い雨の音も聴こえない。
「お荷物はそれだけですか？」
女が言ったのは夙夜の肩からぶら下ったキュー入れのバッグ。黒くて長い、ジップ式ポケットが七つ付いている。他の荷物はすべて車の中にあるままだ。
「はい。後は車の中にありますよ」
「そうですか。あぁ、紹介が遅れて申し訳ございません。私、この宿の女将……といっても一人しかいませんが女将の谷津倉雫と申します。どうぞ、よろしく」
名乗った谷津倉は頭を下げた。黒い髪がさらりと揺れる。夙夜たちも頭を下げるが挨拶も程ほどに歩き始める。先頭を進む谷津倉は右手側に見えた階段を登りだす。階段は二人並んでいられるほどの幅は無く篠崎が続き夙夜が最後尾となる。天井の光はというと二階のほうから降り注ぐものだけで足元の段差は見えにくい。さっさと先を進んでいく谷津倉に足元を見ながら篠崎は後を追う。
「でもこんな夜遅くにどちらからこられたんですか？」
「東京からさ。こっちにいるツレに呼ばれてね」
彼女は先ほど篠崎の記入ししたノートを確認してなかった。
「それはそれは」と言いながら夙夜のほうを見る。
よほど気になるのかキュー入れバッグに視線を向ける。
「で、息子さんの肩から下げている大きなものはなんです？それだけ持って歩くなんてよほど大事なんですね」
不意に足が止まる。キュー入れバッグの中身はキューではない。帝から頂いた日本刀が入っている。あまり関心を持たれるのはよろ

しくない。
「ビリヤードのキューだよ。近々大会があってね。その練習をしていたらこんな時間ってわけ」
「ビリヤード……玉突きですよね。ええ知ってますよ。さぁこちらの部屋が篠崎さまのお部屋になります」
にこやかに笑って階段を登る。続こうとしたとき夙夜の目の端に蜘蛛が見えた。蜘蛛は人差し指程度の大きさだった。害はないだろう。ただ、一匹こちらを見ているように固まっていただけだった。夙夜はその蜘蛛とじっと見合った。目をそらしてはならないと感じた。
魔術師は人間と感覚が違う。人間は物言わずに相手に意思を伝えることが出来る。魔術師はその感覚を何倍にも高める。第六感ともいうべき感覚が常人の比ではないのだ。そして感覚は人間以外にも感知する。今、目の前にいる蜘蛛はじっと視線を夙夜と合わせていた。
「どうかしました？」
「夙夜、どうした？」
二人がなかなか階段を登ろうとしなかった夙夜に声をかけた。
「蜘蛛がいる」
「蜘蛛ぐらいでますよ。こんな場所だといくらでも沸きます、潰さないでくださいね。彼らだって雨宿りしてるだけなんですから」
谷津倉がそう言うと蜘蛛は走り出し奥へと行ってしまった。二人の後を追うようにして夙夜も階段を登る。一足先に二階へ着いた二人に追いつくと左右の壁には襖があった。さらに奥へ目を向けると丸いノブつきの部屋らしきものがある。両隣の襖が部屋だとは解るがその先はどうかしれない。
「なぁ女将」と篠崎が谷津倉の行動を止めた。
「なんでしょう」と振り返る。
「俺の仕事仲間が数日前ここに泊まったはずなんだが知らないか」
どうやら篠崎はあまり女に免疫がないのか谷津倉の顔をまともに

みれないようだった。箱娘なる売春宿のようなものを管理している男とは見えない。だが、彼は谷津倉にお熱で言葉に詰まっていた。口だけならよかったが手の先にさえ緊張が伝わってぶらぶらとさせる。そして彼が右側の襖に手を置いたとき、

「あけないでください！」と大きく叫んだ。

さきまでの谷津倉の言動とは思えないほどきつく大きかった。篠崎ばかりか夙夜も驚く。

「すまん、すまん。客がいるのか」

「いいえ。今夜お泊りになたれているのは篠崎さまだけです。ですがお客様でも勝手な行動は取らないでいただけますか」

声だけでなく目も本気の怒りを現していた。見るもの全てを威圧しようとする目だった。女の形相に頭を下げたのは篠崎だ。彼は対抗する事はなく自ら彼女に勝ちを譲った。

「俺が悪かった」

まるで母親に怒られたようにしゅんとなる。

「この家には鍵をつけている場所はありません。戸のある場所には勝手に出入りなさらぬようお願いします」

本気の怒りように夙夜も篠崎へ「源さんが悪い」と小さく言った。彼も「そうだな」と小さく言った。鍵はついていないということは奥のドアノブにもないのだろう。管理は彼女一人で鍵はない。まともな宿じゃないな、と一人夙夜は思う。

「篠崎さまのご友人に関しては私は知りません」

怒りの収まっていない口調だった。

「なら昨日は？」

「誰も来ておりません。この数日、閑古鳥が鳴いておりましたから」

嘘を付いているように見えないが彼女の身なりからは本当だとは思えなかった。閑古鳥が鳴こうが喚こうがこんな美女が一人で切り盛りしているのであれば男どもがやってきても不思議ではないというのに。

襖を開けると畳の部屋が現れる。どこまでも質素で壁も一色で統

一されている。部屋の中で目を惹くものといえば今では見ることの少ないブラウン管テレビだけだ。他に丸いテーブルと折りたたんだ布団があった。夙夜は壁にバッグを立てかける。二人して腰をおろすと「お茶でも入れてきますね」と谷津倉だけが一階へと降りていく。

　すると篠崎は部屋から首だけ出して階段を降りて行く彼女の姿をじいっと見つめつづけた。彼の目には暗い階段を降りる彼女の背中、というよりうなじがはっきりと見えていた。さらに篠崎の姿を後ろから見ていた夙夜はというと少しばかり呆れていた。彼女の姿が見えなくなると部屋に戻る。テーブル越しに向かい合う。襖は閉めていない。夙夜の目からはもう片方の部屋との仕切りになっている襖が見えている。

「しっかしなにもあんなに大声で言わなくたっていいじゃねぇか」

　それこそ叱られた子供のようだった。とはいえ、先程の谷津倉の顔といい声といい尋常ではなかった。

「確かにな。他に客がいないなら問題なんて無いだろうしな」

　谷津倉の只事ではない形相には確かに驚いた。あれほどの怒りを客に向けるなど滅多にない。しかも襖の奥には誰もいないのだ。彼女は泊り客は二人だけだと。何が問題だというのか。

　テレビの電源をつけるとザーっという白黒の砂漠が映る。チャンネルを替えてみるがどこも同じで何も映らなかった、昔ならいざ知らず最近ならどの局も三時ぐらいまで放送している。まるで電波が届いていないようだった。

　しかしそんなことを思う気もないのか床に寝転がる篠崎。ここまでずっと運転してきた彼の身体は非常に疲れていた。背を伸ばせばバキバキと音が鳴る。

　しかし階段の下から再び足音が聴こえてくると座って構えた。谷津倉がお盆にきゅうすと湯飲みを乗せて現れる。篠崎は背を正した。これまで見てきた彼とはあまりにも違って見えて笑いがこみ上げてくる。そうとは知らずに谷津倉は茶を入れて二人の前に差し出した。

彼女にも篠崎の行動は面白く見えたのか頬が緩んでいる。
「ご夕食は食べられましたか？」
口にしたものは飲み物ばかりだった。腹はすいている。それも掴んでも何も搾れないほどに。二人して「いや食べてないな」谷津倉は胸の前で両手を合わせて今まで以上に微笑んだ。
「よかった。材料を無駄にせず助かりましたわ。ではさっそくご用意致しますね」
「こちらこそ頼みます」
時刻は日を跨いでいたがよかった。腹がすいていては眠れそうにも無い。
「では私はご用意を致しますので先にお風呂などいかがですか？うちは見ての通りのボロ屋ですが風呂は一級品ですよ」
「いいな、なぁ夙夜」
うなずいて見せた。
「ではお風呂の方へ案内しますね」
茶を飲むと谷津倉を筆頭にまた一階へと降りていく。最後尾を歩くのはまたしても夙夜。廊下に出たとき、少年の足が止まった。不意に止まったわけではない。もっと確信めいたものに惹きつけられたのだ。目蓋を閉じて気配を探る。建物のなかから伝わる気配は確かな形で捕らえる事が出来なかった。だが、何かが蔓延っているのは確かだ。部屋に戻りキューバッグを担ぐ。中身が震えていた。魔術師たちの感覚はそれぞれの持ち物に敏感に伝わる。刀の震えは何かと共鳴している証拠だ。

それが例え、魔術師でなくとも

歩を進め先を行く二人を追う。すでに離れていて玄関にやってくるとさらに右へと向かった。居間らしき大部屋が左に見えた。客用の部屋とは大違いでそこだけが山奥の民宿に相応しいなりをしていた。木目調の床は赤く燃え上がるように色を変えている。部屋の中

心で燃える火のせいだ。天井からロープで吊るされた鍋が火に宛がわれ熱を帯びている。鍋の中は木の蓋で閉じられていて見えないが漂ってくる味噌の香りに食欲がそそられた。
「こちらですよ」
再び前を向くと谷津倉が手招きしていた。廊下はかなり奥まで続いており先は曲がっている。彼女は曲がり角に立って待っている。谷津倉のいる角まで場所までいくと今度は半透明のガラスで区切られていた。
「こちら、脱衣所になっております。お風呂の方は露天風呂ですよ。丁度、見下ろす形になりますので下の街が綺麗に見えますよ」
「露天風呂か、そりゃいいな」
「必ず身体を綺麗にしてくださいね。それとこちらが着替えになります」
そう言って差し出したのは薄い着物だった。海のように澄んだ色合いをしていて肌触りも良い。
「きちんと言ったとおりにしてくださいね。でないと夕食はなしですよ」
注意深く言う彼女が去っていく。じっと、この場所にいたのか彼女の匂いが残る。しかし少年の鼻腔をくすぐったのは甘い女の色香とは違っていた。女の匂いは人ではなく獣の類。匂いをたぐれば捕まり食われる匂い、決して男を惑わす香りではなかった。
夙夜には違いがわかった。すでに緊張していたのだ。肩から下げたバッグの中でも同じ事が起きている。少年の身に触れる他者の感触に刀が震えている。背後を歩く谷津倉の姿を見るとさきほど見た部屋へと入っていく。
どうやら襲って来る気配はないようだ。
扉を開け脱衣所に入る。半透明のガラス戸に挟まれた部屋は男女を区別する事無く一部屋であった。さらに奥のガラス戸の向こうには篠崎が上機嫌で鼻歌を口ずさんでいる。呑気な音をしている、彼にも手は出していなかった。服を脱いでガラス戸を開けるとやはり

呑気な篠崎がいた。すでに湯に使っており手を振る。
「何やってんだ、はやくこいよ」
浴場は石畳で広がっており空は雨除けが作られている。篠崎が手を振る温泉の上にまで張り巡らされた雨除けの先ではまだ雨が降りつづけている。石畳は雨の熱に冷やかされ足の裏を冷やす。
女将の正体を知ったら彼はどう思うだろうかなどと考えながら湯を浴びて入る。冷えた足裏が湯に溶かされる勢いで熱くなる。篠崎の傍に行くと谷津倉の言った通り夜の街の姿が見えた。びっしりと敷き詰められた箱の屋敷と蛍の尾のように光る街灯が賑わっている。
「おわっ」
突如、篠崎が驚きの声をあげた。叫んだ彼の隣りには親指ほどの蜘蛛がいた。天井を見上げれば他にも小さな蜘蛛が雨除けにぶら下がっている。どの蜘蛛も降りてくる気配は無い。じっとしているだけだ。かれらも雨をしのいでいるにすぎない。
「なんだよ。ただの蜘蛛じゃないか」
「ただの蜘蛛って……俺、こういう足の多い生き物、嫌いなんだよ」
でかい図体で何を言っているんだか。蜘蛛から見ればあんたはじゅうぶん化物だよ。
天井からぶら下がっている蜘蛛はせいぜい五センチ程度の小さな身体だ。とても人間が恐れるような存在じゃない。
「潰しておくか」
「やめなよ」
蜘蛛は微動だにしない。石の上で固まっている。
「気味が悪いのはわかるけど無意味に殺すのはよくないよ。それに何もしやしないさ。ちょっと我慢すればどこかに行くよ。こいつらだって雨を避けているだけなんだ」
「そ、そうか。解った」
蜘蛛は夙夜の言うとおりそそくさと走り去り見えなくなった。ぶら下がっている蜘蛛たちもそこから動く事は無い。湯に浸かって気分が落ち着いたのか篠崎が街を見下ろしながら言った。

「なぁ夙夜は歳いくつになるんだ」
「十六だけど、なに？」
「じゃあ高校生か。あれ？　確か中学……」
「中学で合ってるよ。二年学校に行ってなかったんだ。周りが真面目でね、復学は同じ学年からだ」
「若いと思っていたがそこまでとはな。こんな事件に首突っ込んでいていいのか？」
「先生の弟子になったのはもう随分昔だからな。修行の期間は五年以上だし素質があるやつはもっと小さい頃から仕事してるらしいよ、それこそ幼稚園児くらいから魔術師の道に進む連中がいるらしいし」
全部、千影からの受け売りでしかない。他の魔術師とはつながりが無い。
「そう、なのか。魔術師ってのはなんでそんなに行き急いでるんだ？」
「別に急いでなんかないさ。それに親が魔術師だったり家系がそうだったりする人だけ。一部だよ。そのなかでも仕事をしているのはきちんと認可を受けたやつだけさ。全部が全部って訳じゃない。あとあまり聞かないでくれ、こういった話はしないほうがいいんだ」
「そうなのか」
その問いにうなずく。
「口伝にでも知ってしまえばその手の奴らに関わってしまうんだ」
「どういうことだ？」
「自分が立っている場所があやふやになるんだ。世界の境界線が壊れる、みたいな」
「境界線か」
魔術師の世界は踏み込めば戻ってこれなくなる。千影から聞いた。我々の世界はきれいなものではない。あやふやな幻想でしかない。のめり込めば帰ってこれなくなる。人間の世界にいるうちは自ら足を踏み入れるな、と。
「知っていることでそういう類の連中と知らない間に繋がってしま

うのさ。その結果、よくないことが起きる。源さんは今のままのほうがいい」
「深入りするなってことだな」
夙夜は踏み入れた人間。そうすることでしかその後の人生を歩けなかった人間。死に触れ魔術師に命を救われた人間。すでに人とは違う世界にいる。
篠崎は口を閉ざした。彼の好奇心を考えれば質問におかしなところは無い。興味が湧くのは当然だ。その興味を塞いでしまう。「悪い」と一言言ったら首を横に振ったがどこかさっきまでとは違う。口を開かなくなった。
できれば深入りするようなことはしないほうがいい。源さんの場合、怪異との関連は居間のところない。谷津倉の正体も仕事の本質とは関係ない。トランクケースを回収することこそが彼の目的だ。妖怪、怪異と呼ばれるこちら側に近づけたくは無い。それが一番彼が安全でいる方法だ。あちらが襲ってくるのならそれは俺でしかない。
「で、源さんはいくつになるんだ？」
「俺は三十四だ。もう中年だよ」
聞けば答えを返す。拒絶したわけではない。篠崎もどう口を開けばいいのか解らないだけだ。彼にとって少年はとても不思議で仕方が無い。なにも東堂夙夜という少年について調べていないわけではない。新宿駅から北西にある中学校に通っている事や周辺地域に仲良くしている連中が大勢いること。しかもその中には自警団を気取る荒垣トウマとその仲間たちがいることも知っている。これまでにも依知川組の関与する部分で手を出した事もあると調べはついている。
しかし、本人と付き合ってみてはじめてわかる事もある。家の大きさを得としない少年は自ら泥を被っているようにしか見えない。
「ヒィィッ！　またかよ！」
まるで女のような声をあげる。また傍に一匹蜘蛛がいた。湯気に

隠れていたのか何匹か石の上に蜘蛛がいる。周囲を囲んでいる森からやってきたのか、雨をしのぐとはいえこの数は多すぎる。
「もも、もういい！　先に出る」
堪らなくなった篠崎はおそらく身体を洗わないまま出て行ってしまった。手のひらに乗り切る蜘蛛から足早にして逃げ出す男の背中はどう見ても弱虫でしかなかった。一人残った夙夜はというと湯船の真中に移動した。湯の温度は程よく目を瞑れば眠りそうだった。
蜘蛛たちの視線が向けられる。
こいつはもしかすると……胸の奥で鼓動が一つ増えた。
心臓の隣りにもう一つの鼓動。警告音。
東堂夙夜が今を生きている理由たる存在が早鐘を鳴らして伝えた。
身体の汚れを落すのはまだ早い。

第四章　六話

風呂場から慌てて飛び出してきた篠崎は谷津倉から渡された着替えに袖を通す。着ていたスーツを再び着ようとしたが指先が震えてままならなかった。くらべ着物は適当に羽織るだけで済む。どちらを選ぶかは簡単だった。ただ、どうしても譲れなかったのが煙草。精神の乱れを直すなら尚の事、必要だった。

ジャケットから煙草を取り出すとさっさと廊下へ出て行く。身体はまだ濡れておりせっかくの和服も所々滲み出していた。廊下に出た彼はようやく蜘蛛の大群から逃げ出せたと安心し、ふうと深く息を吸い込む。篠崎は周囲の人間よりも一回り身体が大きい。比べてさきほど逃げ出した蜘蛛はというと小指にも負けている。これは身体を鍛えてもなんともできなかった生理現象のような物だった。昔から虫が大の苦手だったのだ。

できれば誰かが見ている前であのような醜態は晒したくは無かったが嫌いなものは嫌いなのだと自分に言い聞かせて歩く。幸い、組の仲間でなかったのが救いだ。

向かうは二階の部屋である。気分を落ち着かせようと足音はいつの間にか建物全体に響くほどにまで増長していた。どうしても一服したいという思慮が歯止めを失わせていたのだ。手に握った煙草のケースがぐちゃりと握りつぶしそうになりながら進むと囲炉裏のある部屋からなにやらいい香りがしてくる。横目でちらりと見る。中央の鍋からの匂いだった。さらに奥では谷津倉が正座してこちらを見ている。

「もう、上がられたのですか？」

「え、ええ」

彼女の視線に自分の姿がどう映っているのだろうかと考え着物の襟を整える。

「身体はきちんと洗いましたか？」

「い……いやぁ、まぁ」
歯切れの悪い声しか出ない。それもそのはず風呂に入った時間はわずかで身体を洗う時間などあるはずもない。その発言に谷津倉の表情は厳しくなる。そこまで拘らなくてもいいじゃないかと思いながらも「後で入りますよ」と柄にも無い丁寧な口調で答えた。彼女の表情は変わらなかった。目は厳しくこめかみに血管が浮かび上がりそうだった。
足を止めていられず、愛想笑いと共に二階へ上がっていく。どうしてここは自分のペースで物事を進められないのかと疑問に思う。自分たちの部屋の前にやってくると先ほど怒られた反対側の襖に目をやった。
押すなと書かれた非常用ボタンを見ると押したくなる。まるで子供の好奇心をくすぐるような襖だった。谷津倉は言っていた。ここ最近の宿泊客は自分たちだけだと。しかしそんなはずはないのだ。篠崎は知っている。自分の部下がここに泊まりトランクケースを捜していた事を。なら、谷津倉が嘘をついているのか。真意を確かめる方法は一つしかない。この建物を調べること。
トランクケースの在処よりも仲間の所在を突き止めたい。ただ、それだけで襖に手をかけた。部屋は無人で自分たちの部屋と変わりなかった。畳まれた布団も床に放り出されている。
「いるわけないか。となると」
安堵にも似たため息交じりの言葉を吐く。
もし部屋の中を覗いて部下がいたら……それも自分の想像を遥に凌ぐ凄惨な状態だったらと最悪の状況に追い込まれたらという恐怖から開放された。もしもそんな光景を見てしまったら自分は立ち直れなくなる。
気を取り直して廊下の先を見る。この階にはもう一部屋ある。奥のドアノブの先だ。篠崎は足音を立てずに近寄ると間髪いれずにノブを回した。出現したのは左右へ広がる廊下と光の粒だった。廊下のほかには木の板が斜めになって前方に広がっている。露天風呂の

雨除けだ。足を乗せる事は出来そうに無い。さらに二階から上には雨除けが無いため跳ねる雨粒のせいで足元が濡れる。とくに見るものもないため篠崎は中に入った。

「あいつら、どこにいったんだ」

部屋に戻る。いないというなら彼らはどこにいるのだろうか。携帯電話はまだ圏外で連絡は取れそうに無い。煙草を一本箱から取り出すと火をつけた。吸って肺を煙で満たすとようやく少し落ち着いた。

湯船の真中で大の字になって浮かぶ。耳は湯に浸かり音が聴こえなくなる。天井の木に入った線を何本あるか数えられるほど頭の中は真白だった。

仲間がどこにいるのか。

トランクケースはどこにあるのか。

二つの難問は答えからかなり距離がありそうだった。雨を避けてやってきた蜘蛛がじっと夙夜を見つめていた。小さな瞳に映し出された自分の姿と谷津倉の瞳が重なった。彼女の体臭と雰囲気に人とは違った空気を感じる。あれからは決して目を離さないほうがいい。そう、篠崎を一人きりにするのは危ない。

湯船からあがり脱衣所へと向かう。身体の汗はすでに落ちている。谷津倉から渡された着物には着替えずまた自分の服へと着替える。篠崎の服はまだ残っていた。彼がスーツから着物に着替えた事は明白だ。廊下に出ると鍋から漂う香りが強くなっていた。

「お風呂はもうよろしいのですか。きちんと身体は洗いましたか？」

「洗ったよ。汗だくだったしね。それより源……オヤジは知らない？」

「さっき慌てるように二階へ上がっていきましたわよ。彼に言っておいて下さい。もう一度お風呂に入り体を洗ってくださいと」

正直に言ったのだろう。谷津倉はくすくすと笑うだけで立とうとはしなかった。

「言っとくよ」
立ち去ろうとするとまた警告音が鳴る。
俺の中にいるあいつが何かを訴えようとしている。大丈夫、何を言いたいのかは理解できている。
「夕食の用意ができておりますのですぐに降りてきて下さいね」
「すぐ降りてきますよ」
階段を上がる。この民宿で一人きりになるのはとても危険だ。
二階につくと煙草の煙が鼻先にかかる。煙草の匂いは嫌いではなかった。師匠である洸敷千影もまた煙草を吸う。それも一日に一箱消費する勢いだ。彼女の吸う煙草は甘い香りがしていつの間にか懐かしい匂いになっていた。
襖を開くと篠崎がテーブルの横でぼうっとしながら煙草を吹かしていた。あまりにも危機感の無い姿に肩の力がぐっと抜ける。
「ど、どした？」
危険を伝えようとしたが本人はどうやらそんなに気にしているようではなかった。部屋に戻ってさっそくの一服だ。右手に煙草を持っていて横になっている。床にはスポーツ新聞を広げて読んでいた。
「いやぁ、今日は殆ど吸ってなかったからさ。一本くらい、いいだろ」
「別にいいけど。そっちは？」
すぐそばにはティッシュが球状になって転がっている。思春期の男だったら大体は想像がつくがそうではないと信じたかった。
「蜘蛛だよ。また出やがった。いくらなんでも多すぎるだろ」
いたるところ蜘蛛だらけ。その割にほかの虫は見ていない。ムカデやヤモリを一匹くらい見ても不思議ではないがいなかった。なのに風呂も部屋も蜘蛛だけは出る。それも篠崎のいる辺りに這いよる。
キューバッグのポケットを一つ開けると名刺サイズのカードを取り出す。カードは厚紙のように硬い。赤色の墨汁を垂らして文字を書いてある。千影からの支給品であり夙夜の仕事道具である。
「これを持ってて」

「なんだよそれ。お守りか？」
「虫除けさ」
カードの文字は篠崎には読めなかった。蛇のようにぐにゃりと曲がった字で出来上がっている。
「煙草吸ってんだ、近寄ってこないさ」
無言で突き出す。篠崎が受け取るまで引き下がらなかった。しぶしぶ受け取ると両面を見て着物の腰部分にあるポケットにしまった。バッグを担いでと立ち上がる。
「先に下へ行ってるぜ」
「ああ、俺は後一本吸ったら行くよ」
バッグの必要性を聞きはしなかった。煙草を吹かすばかりの篠崎を残して廊下に出る。眼前に現れる襖を見て振り返る。
「どうした？」
足を止めた背中に投げかける。襖に手を当てる。篠崎には夙夜の行動がわからなかった。さきほど自分が見たときは何も無かった部屋だ。
「源さん、下に来る前に一度この戸を開けてみて」
「おいおい。さっき女将があんなに怒ったんだぞ」
「女将の相手は俺がしてるよ。だからそいつを吸い終わったら、な」
「……おう」
一応、返事はしたものの篠崎はさっき開けた時を思い返す。夙夜は知らないだろうが変なところは何もなかったのだ。
煙草の火は五分は持つ。渡した虫除けがうまい事働けば彼に危険が及ぶ事は無い。一階へ降り、谷津倉の待つ部屋に着くと彼女は先ほどと変わらず鍋の前に陣取っていた。部屋の天井には薄い琥珀色の電球がぶら下っており壁際まで光は届いていない。囲炉裏で燃える火が谷津倉の顔を赤く照らしている。鍋をじっと見る女の顔は非常に冷たく感じる。
「いい香りですね」
本心だった。彼女の正体がなんであれ鍋の中で煮え滾っている味

噌の匂いは甘い風味を轟かせていた。
「ええ、今夜の鍋は格別よ。あら、お父様さまは？　どうされたのかしら？」
「部屋で煙草吸ってますよ」
「……煙草ですって？」目線だけを動かして夙夜を見た。
火の明るみに照らされた顔が不気味な美しさを与えた。ぞくりとしながらも彼女の対面に座る。
「ええ、一本だけ。駄目でしたか？」
「い、いいえ。そんなことはないわ。た、煙草ね」
「それとこの建物はよく蜘蛛が出るんですね。風呂もそうだし部屋にも」
「この季節ですもの。蜘蛛ぐらいでますよ……」
鍋の蓋を開くとどっと匂いが溢れ出す。泡立つ鍋には材料が入っていなかった。見ればいつ用意したのか谷津倉の傍に切られた野菜がボウルに用意されていた。彼女は手づかみで鍋に投入していく。手が震えているのを見逃さなかった。
「そんなに気にしなくたって、もうすぐ来ると思いますよ」
バッグを隣に置く。蓋は彼女のほうを向いている。
「部屋へ置いてくればいいのに。本当に、大事なんですね」
「大事なものだからいつも傍に持っておきたいんだ」
彼女はそれ以上、追求しては来なかった。野菜は鍋の底に溜まり芯まで浸かる。再び蓋を閉めると囲炉裏に薪を足した。
「野菜鍋なんですか？」
「いいえお肉もありますよ。それもとても新鮮な」
どこにも肉はない。鍋の具はさきほどのボウルに入った分だけだった。さらに肉を加えるとしたら二人分にしては多い。
「今日の客は俺達だけ、でしたね」
「来られた時、言ったじゃないですか。ここには私とお二方しかいませんよ」
「オヤジの仕事仲間の二人、携帯電話が通じないんだ。先に来てこ

の民宿に泊まってる手はずなんだけどね」
谷津倉の表情に変化は無い。
「ですが泊まってらっしゃいませんよ。そのお二人とはどこかで逢えますわよ。それより……」鍋の下で火が強く燃える。ばちっと音が立ち火の粉がふわりと浮いた。「なぜ、私が用意した着物を着ていないのですか？　言いましたよね」
彼女の声が深いところから聴こえてきた。下を向いている。鍋の下の火を見つめたままだ。
「なぜってこの服が気に入ってるからさ」
「雨に濡れたその服が、ですか？」
肩の辺りは変色している。まだ渇いていない。どことなく野生の匂いも染み付いている。下も同じで裾は湿っている。
「そこまで……まぁいいでしょう」
彼女が立ち上がった。やはり肉は見当たらない。鍋を迂回し夙夜の傍へと移るとまた腰をおろした。あの獣じみたの匂いは鍋の香りよりも強い。あっという間に息が鼻にかかるほどの距離にまでやってくる。身体は密着し服の下にある肉を押し付けられた。
「私、お客様がやって来られたときからずっと見ておりましたのよ」
「なにを」
「貴方のこと」
心臓の隣りで鼓動が鳴る。自分のものではない。本当にその臓器があるわけでもない。幻想のなかの鼓動が危険を伝えている。彼女を近づけるなと頭のなかでアラートが鳴る。危険信号だ。
谷津倉の腕が肩に伸びる。肌の感触は女の、それも見た目よりもずっと若い少女のようだった。信号の鳴る音は聴こえているが腕を払いのけなかった。漏れる吐息が甘かったからだろう。彼女に身を任せると寝かされる。身体を密着させたまま寝転ぶ事になった。夙夜の目には着物の間から覗く山間地帯が写った。茜色に染まった山は徐々に間が広がっていく。着物の帯びが緩んでいる。時期に桃色の突起が現れるだろう。

放っておけばどこまでするつもりか。部屋を遮るものはない。篠崎がやってくれれば状況は目の当たりとなってしまう。谷津倉の動きは留まる事は無い。彼女の指が股間のチャックに伸びたときさすがにこれまでだと手をあてがい止めた。
「悪いけどこういうのやめてくれませんか」
「あら？　私とじゃあ不満かしら。それとも初めてなのかしらね、坊やは。いい匂いがするもの」
坊や、と呼ばれてすべてが終わった。
千影先生以外に坊やと呼ばれるのは正直、面白くない。
「なにも童貞だってわけじゃないさ。あんたは美人だ。でもな、俺が相手にしている美人はあんたが役不足になるほど極上なんだ」
気分を害したのか手を振り解く。帯を締めて立ち上がった。最初の位置に戻ると薪をくべる。
「さぁ、さっさとお食べくださいね」
人間味を失ったように言った。鍋から蓋を外すと碗を手にして中身を取り出す。碗一杯に注がれた野菜鍋だが夙夜は受け取らなかった。
「どうしたのです？　腹が減っているのでしょう、さっさと食べなさいな」
「オヤジ、遅いなと思ってさ」
もうそろそろかな。
谷津倉の腕がじっと鍋の上で止まっている。彼女が痺れを切らして中身を鍋に戻した。碗の中身が空になると同時に階段のほうでも足音が鳴った。二階から男が降りてくる。篠崎だった。彼は血相変えて階段を降りて廊下を走ってきた。
「夙夜！　大変だ！」
開口一番、大きく叫んだ。振り返った夙夜に向けられたのは鍋側からの殺気だった。

第四章　七話（1）

放物線を描いて飛んだ碗は夙夜の座っていた場所で二度跳ねた。椀の中で残っていた鍋の汁が飛び散る。二階から必死に降りてきた篠崎は夙夜の姿を目で追う事が出来なかった。自分が声をかけた少年は一瞬のうちに姿を消している。まるで少年が碗に変化したようにさえ見えた。

椀から目を逸らし部屋を全力で追う。夙夜はおよそ一歩では移動しきれない壁際にいた。

「何があった！」

叫んだのは夙夜だった。またしても強い言葉で叫ぶ夙夜の声を聴く。いつの間にか呆然としていた。はっとして向けば夙夜の姿に安堵し思考力が戻ってくる。いったい全体どうやって移動したのか。

篠崎には夙夜を理解できていない。体格も歳もまだまだ少年の域を出ない夙夜に篠崎は呆気に取られるばかり。まるで狸か狐に化かされている気分だ。

碗がからからとその場で回転するのを見直していた。間抜け面をして立っているだけでしかない。二階で夙夜に言われたとおりにし見た結果をどうしても伝えたかったが口にしようにもなんと言っていいか悩んだ。一刻も早く伝えてしまいたいが口は開いた固まってしまっている。

それでも目だけは動いていた。一瞬で移動した夙夜と転がっている碗ともう一人。部屋の奥で碗を放り投げたとみられる谷津倉の顔を見たとき間抜け面は吹き飛んだ。

この屋敷の中には三人しかいないはず。奥にいるのは谷津倉で間違いない。出会った時の美しいと思った女はそこにいなかった。いるのはただの怪物。異物に違いなかった。谷津倉の髪がふわりと浮き上がる。髪止めは役目をはたしていない。髪がいくつかの束になって持ち上がる。もはや彼女に抱く感情は映像の中で見る化物でし

かない。
「何があった！」
またしても夙夜が言った。これまでのどんな言葉よりも強く激しい声だった。動かなくなった身体の呪縛を解き放つ。電流が流れたように「そうだ、言わなければならない」と脳が思考を開始する。ようやく篠崎はこの場にいることを実感できたのだ。
「襖の奥だ、奥！　お前に言われたとおり言ったらあいつらがいて！」
篠崎は夙夜の言った通りにしたのだ。煙草を一本吸い終わるともう一本、新たに火を付けて部屋の外へ出た。夙夜から貰ったお守りを持って。眼前に現れた襖を開く。さきほど見たときは何も無かった部屋だ。だというのに緊張した。喉を鳴らしてつばを飲むほどに。
「それで」
「蜘蛛の糸みたいなのでぐるぐる巻きになってて……どうなってんだ」
どう説明したらいいのか。
襖を開くと頭がぐらついてまるで車に酔ったみたいに気分が悪くなる。立ってさえいられない不思議な重力に倒れそうになった。ぐっと堪えて壁に手を置いて姿勢を保つ。目を向けるとそこには壁が見えないほどに白色に染まっている部屋があった。煙草の火が部屋のなかに浮かび上がる。白色の中に黒い物体があることに気づいた。手で掴めそうなほどの塊に見える。床にはまだ進める部分がある。どういうわけかその黒い物体に身体が引き寄せられる。足を滑らすように進むと物体の数が増えていく。一つの大きさはさほど変わらないが数は六。篠崎は手で掴む寸前になってようやく理解した……人間の頭だった。
「部下は見つかったんだな」
思考の先を告げられた。口を動かすまでもない。
「そ、そうだ」
「そっちの男なんで動いてるの、なぜ、動けるのよ」

立ち上がる谷津倉は目を開いていた。驚愕の表情を浮かべている。
「お守りのおかげさ」と返す。
手に汗を掻きながらもお守りを放さなかった。ずっと持ったままだ。そしてお守りに目を向けた。赤い文字は光を滲ませたように光っている。仕掛けはわからなかったがこれが自分を守ったことにはうなずける。
「対策は万全だ。あんたが何者かも予想はついているってわけさ。あんたが刺客として送り込んだ蜘蛛は今頃、息をしてない」
「っは！」
今になってようやく何かに気づく。
「ぼうやのせいか！」
谷津倉の口が裂けそうなほど開かれた。彼女は気づいたのだ。やってきた篠崎を捉えようとした蜘蛛の死を。
お守りの赤い光は効果が発揮されている証。篠崎の手の中で燃えるような赤はまさしく彼を守るために敵を排除した。赤を見て怒り満ち溢れる。人を殺せる眼は夙夜に向けられた。
眼前で繰り広げられる二人のやり取りについていけなくなる。いや、最初から立っている場所が違うのだ。敵対する関係ながら互いに知り合う仲に篠崎は歯を噛んだ。一人、取り残されたのがあまりにも歯がゆかった。
目の前の二人は彼を置いて先へと進んでいく。まるで自分はこの部屋に入る事は許されていないと。
「源さん、ここから仕事の本番だ」
茫然自失の男に少年は彼に声をかける。
仕事という言葉に胸が高鳴った。
少年の仕事はなんだ。自分と静岡へドライブする事か？　トランクケースを捜すために深夜山奥へと出向く事か？　いや、そんなものは仕事ではない。そんなものは自分でできるのだ。少年を雇った理由はひとつ……自分には手に負えないものがある。
あと数年で四十を迎えようとする篠崎が十代半ばの少年の力を借

りる理由は明白だ。まるで自分のほうが子供の頃に戻ったように高揚する。
「……なぜ……なぜ……」
心臓の高鳴りが早さを増していくなか、谷津倉の声も次第に大きくなっていく。彼女の表情はすでに人間のものではなくなっていた。口が大きく裂ける。肉も皮も避けた部分から見えていた。人間にあるまじき牙のように長く鋭い牙が現われる。瞳は赤く変色する。もう人だった頃の美しさはない。あるのは恐怖と怖気を呼ぶ獣の姿だけだ。
「なぜ、なぜ殺した！」
着物の下で肉と骨が黒い塊になって膨れる。両足が大鎌に変化するにつれ腰から下も膨張する。玉のようになった尻には篠崎の身体が丸ごと入る大きさにまで脹らんだ。尻の左右に三本ずつの大鎌が生える。身体の膨張に伴って着物の帯びが切れた。肩からするりと抜け落ちて彼女は変化した。彼女の身体は天井に迫るほどとなる。
さなぎが蝶に羽化するように彼女は人から蜘蛛へとなったのだ。
さすがに夙夜も気を引き締めている。余裕のない表情はここへ来るまでの雰囲気を一切持っていなかった。
「源さん！　左に飛べ！」
なぜ、という疑問よりも先に足の震えを利用して言われたとおりに飛ぶ。全く同じタイミングで谷津倉だった怪物が股の間から白い糸を吐き出した。糸といっても太く分厚い大木のようであった。糸は壁にぶち当たるとその壁を貫く。篠崎の行動が、夙夜の声が一秒でも遅かったらば篠崎の身体に穴が空いていただろう。
「正体を現したな。この建物にいる蜘蛛の母親ってところか」
化け蜘蛛となった谷津倉の人間たる部分が夙夜を見る。鎌のような足が持ち上がり床の木板を破壊しながら進みだす。天井から吊るされていた鍋は転がり火が消える。暗闇の中、部屋の外から零れる光が谷津倉の瞳を映した。
蜘蛛との距離が近付いても夙夜は動かない。手にはなにもなく背

中は壁に近い窮地だというのに。そう、逃げる術を持っていなかった。いや、持つ必要が無かった。
「発！」
最後の一歩だった。
夙夜の声にあわせてバッグのジップがすべて開放される。キューバッグのポケットから大量の紙が飛び出した。紙は篠崎の持つお守りと同型の護符である。暗い部屋の中で赤い文字が浮かびあがる。夙夜が魔術を扱う際に使用する護符、それが蜘蛛の糸のように連なって飛ぶ。蜘蛛の足に取り付き部屋の壁一面に貼られていく。
「よし！」
あと一歩。鎌の矛先が夙夜の頭を潰そうとする。
その一歩は踏み出せなかった。
バッグから放出された護符がすべて出尽くすと蜘蛛の身体が動かなくなった。谷津倉が身体をなんとかして動かそうと力を入れている。しかし脚は止まったままであった。護符は股間にも貼られており糸も出せない。
そんな蜘蛛の前をゆっくりと歩き出しバッグを手にとる。
「悪いけど動きは封じる。源さんは上の階にいる仲間を助けに行ってくれ」
「でも……」
「俺の渡したお守りがあんたを護ってるんだ。それと煙草に火をつけてれば大丈夫さ。あんた煙草の煙り、嫌いなんだろ？」
すでに谷津倉……いや、谷津倉だった怪物の怒りは限界に達していた。勝ち誇った夙夜に対し憎悪をぶつける。そこに人間味はなく獣の雄たけびだった。
「行かせるものか！」
化物となった下半身は動かない。動くのはその眼、その口。人間の身体を残した部分だけである。
腹いっぱいに息を吸って人の口から糸を噴く。
さすがの夙夜も戸惑った。糸は下の口からしか出ないものだと思

っていた。だが、人の口からも吐けたのだ。細いが速度はあった。糸の射角は篠崎を狙っている。囲炉裏の間と廊下に挟まれる壁は人差し指程度しかない。蜘蛛の糸がどれだけの破壊力を持っているかは先の一撃で証明されている。壁は貫かれるだろう。

どうするか、迷いはない。自ら断ち切ればいい。

「させるか！」

一閃。銀の光が煌めいて糸を切り裂いた。

第四章　七話（2）

キューバッグに仕込んでいたのは護符ばかりではない。手には刀が握られている。刀身がきらり輝き糸を寸断した。斬れた糸は勢いをなくし落ちる。

「おのれ……おのれ」

「あきらめな」

「臭い男はもういいわ。鍋の中に入れれば旨そうな肉だと思ったけど煙草なんて吸ってるんじゃ臓器は美味しくないでしょうしね」

篠崎が駆け出す。夙夜はまさに戦士として申し分ない力を彼に魅せ付けていた。

「こっちの坊やのほうが食べ応えありそう骨の髄まで蕩けさせてあげる。さぁお姉さんがじっくりねっとりと可愛がってあげる」

谷津倉の目が夙夜へと再び向けられる。しかし蜘蛛の身体は動けるはずが無かった。まだ護符は張り付いたままで硬直している。

「うるせえよ！　自分の状態がわからないわけでもないだろ」

「でもないわよ」

にやりと笑うと張り付いていた護符が黒く滲み出す。護符は特殊な施工を施された魔術道具。墨で塗っても滲むことはない。なんだ、とよく見ると体内からなにやら液体が溢れ出している。護符を通じて液体の正体を知覚する。毒だ……体内に溜まった毒素の塊だ。まるで汗か油のような濃厚な液体は護符の効力を破壊し剥がれていく。すかさずポケットから新しい護符を取り出し口元に当てる。神経を研ぎ澄まし護符に力を注ぎ込む。

「炎舞！」

放つ。護符は夙夜の声と力によって姿を変える。トリックなど無い。ただ、魔術式によって体現させただけに過ぎない。護符は東堂夙夜にとって杖も同様である。魔術師として魔術式を使用する際の道具。作動した式は護符を炎に変化し飛ぶ。

「炎ですって！」
向かってくる炎はまるで銃弾のようだった。炎の弾の熱さは見た目以上にある。触れれば身が燃える。天井高くにそびえる身を屈め避けようとする。谷津倉の身体がいかに細くとも自由の利かない室内ではかわせそうになかった。
しかし炎は蜘蛛へとあたる事は無かった。頬を霞める程度ですり抜けた。
「これでも魔術師の弟子なんでね、みっともない戦いはできない」
「やっぱりあの魔術師の」
「炎舞！」
二度目、炎が舞う。今度は顔面に向けて放たれている。今度こそ避けることはできそうになかった。だが、二度目の炎も蜘蛛には当たらなかった。夙夜は当たる直前に炎を自ら消した。変わりに部屋の壁に張り付いていた護符が剥がれだした護符の上から貼られていく。また動きが封じられる。
「えっ？　殺さないの？」
動けなくなったもの動かなければ別段痛みはない。人間の瞳で夙夜を見た。殺そうという意思はそこになかった。
「無駄な戦いはしたくないだけだ。それより魔術師って言ったな」
「ええ」
二人の間に奇妙な空間が生まれた。谷津倉は怒りよりも放心にあり夙夜の声に耳を貸す。姿からは想像できないほど素直に話せるようだった。蜘蛛も夙夜の言葉を受け入れたようだった。
「そいつ、車椅子に乗ってなかったか」
「なんで知ってるの？　まさか仲間？」
「違う、そいつは敵だ。俺はそいつを捜してる。その魔術師は今どこにいるんだ？」
「知らないわ」
「本当に？」
「ええ。嘘なんて言ってないもの。第一、あの男達は目的の刀が手

に入ったらどこかに行っちゃったわよ」
「なっ！　刀だと」
おそらく桜紋鴉に違いない。
「ええ。なんでも凄く切れ味がいい大太刀よ。坊やの刀なんてちっぽけにみえるわ」
手にした刀に目をやる。帝より受けとった刀にみすぼらしさなど無い。これがちっぽけに見える刀など夙夜には一本しか心当たりが無かった。桜紋鴉で間違いない。本来、受け取るはずだった刀。
「あの刀は盗品だ。造った魔術師を襲ったのはあんたか？」
口元を緩めて首を縦にふる。
随分正直に認めるじゃないか。
「決まってるじゃない。人間にあの男の工房が解るわけないわ。魔術師達も喜んでた」
得意げに笑う女の顔は自分の行いがどういうものか解っているように思えなかった。まるで私のおかげよ、と自慢げに話をしている。
「そういう問題じゃない。自分が何をしたか解ってないのか？」
「わかってるわ。取り引きよ」
「取り引きだと」
「どうせ、坊やもあの薬が欲しいんでしょ。匂いがするもの甘い、あの匂いよ。薬の。ねぇぼうやは持ってないの？」
「ケースはここにあるんだな」
ＧＰＳの発信信号の位置はこの建物も含められる。
あやしく笑う。仕事の真の目的はトランクケースの回収だ。ケースがこの建物にあるならもうじき篠崎が見つけるだろう。彼女の笑みがどういうものかはもうじき解る。ここで得られたのなら儲け物だろう。あとは桜紋鴉の情報だ。彼女は誰と取り引きしたのか。その姿がちらちらと見え隠れしている。篠崎が持ち込んできたあの映像に映っていた車椅子の魔術師。
「おい。聞いてるのか？」
返事が無かった。あれだけ話をしていたのに突然だ。嫌な予感が

した。女の口から薬、ブルーポーションの話がでた後での笑みは身体に緊張を走らせる。感覚が一瞬だけ鈍ったのだ。
「ッ！」
陶酔にも似たあの言葉が出た瞬間、少しでも気を緩めてはいけなかった。蜘蛛の身体から膿を出すようにして生えでた青い瓶に遅れをとった。女の腕は健在だ。ぐにゃりと腰を曲げると瓶が握られる。やめろ、と言いたかったが間にあわない。女の腕は無理やりに瓶を身体に刺す。瓶には蓋がされているが関係なく刺さると身体の内側で瓶が割れる。赤い血と青い液が混ざり合う。
「この薬の力がどんなものか試したの？」
目が血走ってしている。身体中の血管が浮き上がり青い線が浮かび上がった。初めての使用でないのはあきらかだった。内側の筋肉が盛り上がり人の姿であった上半身さえ獣じみた色になる。
彼女がこれまで何度、ブルーポーションを使用したか、その度合いは確かだった。もはや、後戻りはできない。
「ほうら行くわよ」
人語を喋るだけはマシだ。奇声を上げて突進されるのは勘弁願いたいかった。理性の外れた暴力に立ち向かうほどの圧倒的な戦力差はない。
身体の呪縛は振りほどかれる。すでに護符の効果などない。
下の口が糸を吐く。さっきまでとは別物だった。速度も、威力も。夙夜は切り払えず飛び退いた。すかさず追い討ちをかけるように脚が一本なぎ払われる。巨躯は残りの足で支えられている。一本ぐらいなくなろうが問題なさそうだった。わき腹を抉るように激突すると少年の身体は飛んだ。
「なんだこの力？」
床に顔をつけながら思う。鍛え方が悪ければ骨まで折れていた。
「ハハハッ！　さっきとは違うわよ。この力、ぼうやだって欲しいんでしょ。だから来たんでしょ。私のところへ」
狂ったように笑っている。体勢を立て直し護符に火をつける。体

内のもう一つの鼓動が高鳴った。液体を身体に流し込んだ空の瓶が床に落ちた。
あんな物が無くても俺にはもっと大事な力がある。
護符から変化した炎を壁に放つ。壁際で小さな爆発を起こす。火の粉が舞い蜘蛛の動きが危機を察知し止まった。夙夜は部屋自体を檻にすることで蜘蛛の動きを封じたのだ。
「そんな物飲まなくたって俺は！」
二つの鼓動が重なる。夙夜の瞳の色が蒼く燃える。変色と共に視界が変わる。見ていた世界が色を変える。物質を色で判断できる。赤、青、黄の靄ような炎が瞳に映る。ブルーポーションによって変化した蜘蛛とはまた違った変化を身体に起こす。両者ともども、力の増すことに変わりない。
蜘蛛は毒を使った。
夙夜は生命の限りを尽くした。
決定的な差がそこにはある。生命の火は少年に生きるための力を与える。化蜘蛛の体内を駆け巡る力の波を寸分違わずはっきりと見せる。その道を絶つ。
一太刀。
踏み込みから斬撃まで刹那。肉体に傷をつけず化蜘蛛の体内に流れるその力だけを断つ。刃は身体の芯を貫く。巡る力が止まり芯が冷えていく。彼女の瞳を見た。すでに正気は失っている。アーサー・ライバックは言った。ブルーポーションは数度の使用で人間の細胞を破壊する。なら、眼前の蜘蛛はどうなる。彼女の身体が人間を凌駕していることなどはっきりしている。いったい何本使ったらここまで酷い有様になるのか。
「へぇ坊や強いのね」
声を出す事も一苦労のはず。
「師匠がいいからな」
「でも！」
最後の一吐きだったのだろう。体内に溜めた糸を吐こうとした。

「ハァッ！」
夙夜は喉を斬り落とした。
「グヒィィッ！」
「本当なら殺さないがあんたを殺しておかなきゃここから出れそうにないんでな。それに、先は短いんだろ。介錯してやる」
胴と頭が分かれた。彼女の眼は夙夜を見てはいるがぴくりとも動かない。血が切れた首から滴り落ちる。それでも死には至っていなかった。
すでにブルーポーションの使用量が限界に近づいているのは読み取れる。あの薬は人間だけを犯すものではない。谷津倉という怪物までも壊していく。改めて危険な代物だと認識する。
谷津倉の髪を持って自分の目の高さに持ちあげた。牙をもった口がぱくぱくしている。蜘蛛の身体が燃え上がる。部屋の壁を燃やしていた炎が行き場を求めている。足元まで後少しだった。
首の下、血が滴り落ちていく。手を放そうとした。そのとき、口は最後の一息を糸から血に変えて夙夜に浴びせた。頬に数滴だが赤黒い血が付着した。
「……出ら、れないわ、よ、こ、こから……」
最後の言葉だった。
呪いの言葉だった。
谷津倉の瞳から生気が消える。首を炎のなかに放り込んだ。

第四章　七話（3）

しばらくして篠崎がやってくる。彼の目には炎を前にして手を合わせる夙夜が立っていた。蜘蛛の怪物は消えていた。どうなったかは見てしか判断できなかった。

「夙夜、全員運び出したぞ、谷津倉さん……あのバケモンは？」

夙夜は炎を前にして何も言わなかった。すでにあの巨躯は砕け炎の中で燃え尽きている。

二人で建物を出ると同時に炎は竜巻のようになって燃やし尽くす。屋根にまで昇った炎は建物を燃え上がらせる。

雨は止んでいた。炎を消すものはない。ハマーの中には部下四人が腰を曲げて座らされていた。端にはトランクケースも並んでいる。どうやらここにあったようだ。しかし救助した仲間達の顔色は悪くとても無事だとはいい難い。

「部下四人とじいさん、ばあさんか」

「犯人は他にいる。あれは協力したにすぎないよ」

民宿の経営者と見られる二人は横に並ばせているが息はしていなかった。篠崎が見つけたときはすでにこの状態だったらしい。今夜やってくる随分前から命を削り取られていたのだろう。ハマーに六人を収容すると夙夜は自分の荷物だけを持って外に出る。運転席に篠崎が座るとドア越しに夙夜を見た。

「源さんは部下を連れて下まで降りろ。俺の護符があれば出られるはずだ。そしたら病院へ連れて行けばよくなる」

「どういうこった？　夙夜、お前は？」

まだハマーには乗れる場所がある。

「俺は別ルートで東京に向かう。早く行かなきゃやばいぜ」

「だったら車で」

一緒に行けばいいと告げようとしたが首を振って否定した。

「駄目だ。俺といると襲われる可能性がある。さっきあの蜘蛛に血

をかけられた。俺はこっちの協会に顔を出す必要もあるからここでお別れだ」
「……大丈夫なのか」
魔術師の世界について口を出すほど無粋ではない。少年がそうしろというならそうしたほうがいいのだ。それでも心配はする。友情のようなものがいつのまにか篠崎のなかにあった。
「問題はない。それより、ふもとに降りたらすぐにここへ連絡して俺の番号を伝えてくれ。それで今回の仕事は終わりだ」
「わかった」
ハマーが走り出す。テールライトが消えると携帯電話を取り出した。やはり圏外である。誰とも連絡はつかない。篠崎が電話をし救援がくるまでおそらくあと三十分ほどかかる。蜘蛛が言った魔術師と桜紋鴉の行方に考えをめぐらせる時間にちょうど良いとさえ感じるが周囲の草木がざわついた。
頬にかかった血の匂いは拭えていない。
「よっぽど東京に来て欲しくないんだな」
護符の残りはあとわずか。手にした刀と身体だけでどこまでやれるのか。ここで死ぬなんて勘弁だと、燃える民宿を背に一番乗りで飛びついてきた怪異を切り捨てた。
今宵、山奥にて時代はずれの剣戟が舞う。

閑話　一話

アメリカからの長い船旅がようやく終わりを告げる。大陸からやってきた二隻の船は東京湾の東側に入港していく。巨大な長方形の要塞はほどなくして停船する。

全長百五十メートル、幅二十三メートルの巨大な塊には一人の女のイラストが描かれている。大きな瞳に黄金の髪をした絶世の美女。美女の顔は人間的な面影はあるものの真の人ではない。３Ｄグラフィックスによるモデルでしかない。壁一面に描かれた巨大なイラストは港の男達のハートをぐっと鷲掴みにする。これから毎朝、女神を見られるのは彼らにとって幸いだった。

船は背も大きい。甲板から数えて五階建ての超巨大要塞。地下も存在する。地下を含めれば全十階ともなる。この上、五階のうち９５％は使用されていない。全ては地下の施設に要点が絞られる。なぜならこの船は一個のシステムであり機材でしかないのだから。

黒い船体部分より上には普通の船にはない装置が幾つも並んでいる。人間大の巨大な照明器具にスピーカーが端から端まで備わっている。

停船と同時に今度は船と繋がるコンクリートの道に一台の車がやってくる。静かに唸るエンジンを回してやってくる。運転は若い女。助手席には深いしわが何本も入った男が乗っていた。後部座席にも一人、男が乗っており三人とも船の入港を眺めている。車が停まると船の動きも落ち着いていく。従業員たちが慌しく動いて叫んで入港を完了させた。船とコンクリート道路が繋がると後部の男がドアを開けた。

「小塚警視正、帰りはどうするんです？」

「構わない。自分でなんとかするよ。二人ともご苦労」

前席二人のうち、一人の男とは親子ほど歳が離れているというにも関わらず位は若い方が上だった。しかし後ろの男は顔色一つ変え

ず、ご苦労という言葉さえ気持ちは篭っていなかった。まるで機械か道具に対するように言った。かといって二人とも良い顔などするはずはなく男が車から出ていくのを確認した。車を降りた小塚は振り向くことなく船に向かっていく。

車は再び走りだし去っていく。小塚はひとり繋がった橋を渡り船の中へと静かに侵入していく。足裏に響く靴音が彼の身体に染み付いた年月を思い出させていった。

操舵室は静かだった。アメリカからの船旅でスタッフの疲れはピークに達している。途中、中国で一度、横浜で一度停泊したが疲れを取る暇は無かった。四六時中、船の安全に気をつけ運ぶ機材を看病するように付きっきりで世話をした。東京に着くまでに休む暇などなかったのだ。誰もが椅子に座っているだけで眠気に襲われてくる。それを察してか船長は自分の隣りでパソコンをじっと見る男に相談を持ちかけた。

石造のように固まっていた男はウィリアム・バークレイ。船長以下、数十名の乗組員を雇うプロジェクトのリーダーである。彼の目に映るパソコンのモニターには一人の巨大な女がスクリーンに映し出されている。女は船に描かれた美女と全く同じ。パソコンの中でも３Ｄグラフィックスが流動している。

音は左耳に掛けたイヤホンだけで聴いている。何かあったとき声をかけられて反応できるようにしている。船長が彼に声をかけると固まったまま口だけを動かした。休みが欲しいという船長の頼みを彼は首を縦に振るだけで合意を示した。

「各員持ち場のチェックが終わったら休んでいいぞ」

「了解です」

船長の言葉はすぐに船員に伝わる。船のどこもかもで喜びの声が開放された。最後に力でチェックを終わらせる。着替えを済ませた者から次々に上陸していく。船員たちの行く場所は酒場と決まっていた。汗だくの身体を引きずってビールの刺激とアルコールを求め

る。一人、そうしなかったのがウィリアムだった。彼は一人きりになってもその場を動かなかった。パソコンのモニターに映る女の歌声をじっと聴いていた。動画の再生時間は船員たちが船を降りた時点で残り十分。彼はその十分を堪能し眺めていた。

動画が終わると電源を落す。甲板に出て東京の空を眺め無表情のまま船の奥へと向かっていく。船の中はいくつもの防壁によって区切られている。どこもかしこも設備とシステムの乱立で出来上がっている。普通の客船や貨物船ではない。この船自体が一つの機材として存在している。

船員たちが移動できるのは防壁の前までで船の心臓部たる区画には余程の事が無ければ立ち入りを許されなかった。防壁は上部にもあり船の六十％は船員の立ち入り不可域となっていた。防壁は厚さ三センチの鉄の塊で出来ている。重く、絶えず圧力が掛けられるため人間の力では開けられない。壁に設置されたロックを解く必要がある。ロックの引き金はカードと暗証番号になる。ウィリアムはすべての防壁を破る術を持っている。彼の入れない場所はない。

二枚、三枚と次々に防壁を開け閉めし通路を進んでいく。次第に電球の色が薄くなり洞窟の奥へとやってきたと実感させられる。船の最奥たる部屋のドアを開く。

「さて……調子はどうかな。我が愛しの“シエラ”よ」

部屋の中に光は無い。ウィリアムが開いたドアから入る光が部屋の中を照らしただけだった。光に暖かみは無い。部屋は小さく手足を伸ばす事さえできない。椅子が一つと女が一人入っているだけだった。

「いいわけないわ」

掠れた声だった。絹のように美しい金色の髪にミルククリームのような肌をした女が下着姿で椅子に拘束されている。だが、彼女の肌は赤い線が何本も引かれ所によっては腫れあがっていた。両目はマスクで塞がれている。彼女の身体で自由なのは指先と口と鼻だった。

「悲しいことを言わないでくれ。君の声は天使の声なんだ。悲しい言葉を紡ぐためにあるんじゃない」
「ならここから出して……」
塞がれた目はきっと涙を流している。口元からは涎が垂れる。ここへ入る前の美しさは皆無となっていた。だがそれはウィリアムにとっての完成を意味している。彼女で必要な箇所はすでに整っている。
「駄目だ。君はここで生きていくんだ。？シエラ？として」
女の名前は違っていた。シエラと呼ばれた女は否定しなかった。なぜなら否定した場合を知っているから。また、ぶたれる。また、骨を折られる。その繰り返し。だから否定しなかった。
ウィリアムの指が頬をなぞる。彼の指は火傷しそうなほどに熱い。彼の心の熱を伝えているかのようであった。熱に触れると女はウィリアムの心の中を知る術をもっと早くに欲しかったと強く思った。そうすれば今の自分は消えているはずなのだ。
「あなたなんか死ねばいいのよ」
「死ぬものか。君がいる限りはね」
恐怖のなかで言った言葉に意味など無かった。女の身体は心と同様にずたぼろになっている。すでに生きる力さえ尽きかけていた。
「ライブの日取りまでまだ日はある。こちらの調整はしておく。？シエラ？も準備をしておくように」
「私は？シエラ？じゃない……」
耐えられなかった。名前を取り上げられた事。今の自分。なにより自分の都合だけで人を人とも思わない彼に対して押さえられなかった。
「あぐっ！」
しかし状況が変わる事は無い。触れていた指は形を変えて拳になった。女の頬が赤くなる。頬肉がゆれて腫れる。顔中に電気が走った。ウィリアムの拳は彼女の腹に狙いを買える。
「ぐえっ！　がっ！　えうっ！」

一撃ごとに声がひりだされる。もはや彼女にとっての生はない、ただ彼の拷問に耐えるだけの煉獄となっていた。唯一の幸せがあるとするなら歌える事。

「もう二年だぞ。二年、お前に費やしたんだ。もうちょっと自分という物を考えろ。お前は？シエラ？なんだ。ええ？　そこをきちんと理解しておけ！」

「ぐぅっ！」

最後の一撃はまた顔だった。口内が切れ血が流れる。鼻からも血が垂れる。痛みと悲しみに身体が震え最後には椅子の下に水溜りができた。彼女は殴られるなかで失禁していた。部屋の中に尿の臭いが蔓延していく。

「まったく……四肢を切断せずにいるだけマシだと思えよ。お前の必要なパーツは声だけなんだからな」

「すいません……」

どうにか声を出す。

「調整、頼むよ。最近力が弱ってるからね」

「はい」

意識が朦朧としてくる。身体を拘束していたものが外されていくのがわかった。部屋の扉は開けられたままだった。痛みに耐えながら船内を歩く。傷の手当てと“シエラ”のために喉を潤さなくてはならない。

彼女には救いの手が必要だった。

閑話　二話

船の中を自由に歩ける者は限られている。船員たちが上陸している今、ウィリアム・バークレイが船内を歩いても誰とも会うことは無い。さきほどまで彼が可愛がっていた女も行動できる場所は決まっている。汚物にまみれた小部屋と飯を食う部屋がひとつしかない。彼のほかに自由に歩ける者達は船内を歩くことはほとんどない。船のなかにいる者達は自分の行動域をきっちりと守っていた。

船の最奥から出てくると今度は下へと階段を降りていく。また何度かロック式の防壁を開け閉めして辿り着いたのは鉄の壁が剥き出しになった暗い通路だった。靴音が奥の奥へと響く。船の中で一番、人気の無い場所だ。本来、貨物室として使う区画である。硬く重い扉が一枚、眼前に現れノブを回す。部屋の中は天井からのライトで光が溢れている。

「あまり彼女を痛めつけるでない」

部屋に入ってすぐ男の声がした。白髪と黒髪がちょうど半分ずつに分かれた初老の男がウィリアムを見上げる。彼の視線は低くウィリアムの腰辺りにある。彼は車椅子に乗っていた。瞳はこんがりと焼けた肌の黒よりももっと濁っている。

部屋の中には小さなモニターが並列され壁を埋め尽くしている。初老の男の眼前に広がるそのモニターの中にはさきほどの女が小さな部屋で食事をとる姿が映し出されていた。また隣りのモニターには女の閉じ込められていた小さな空間が映っている。この男はこの最下層たる鉄の部屋で船の全てを監視している。

「説教ですか？　ですが彼女にはあのくらいがいいんですよ。でないと怠けてしまう。貴方だって彼女に怠けられては困るでしょう、アブドゥル」

男の名前だった。アブドゥル・ジアー・マフディ。この二艘の船のオーナーでありウィリアムの愛する“シエラ”プロジェクトに多

額の資金を投資する男だ。彼の資金援助なくしてこのプロジェクトの成功は無い。それどころかすぐに頓挫しウィリアムは夢を失う。優秀な人間がいようとも最高の技術者がいようとも資金がなければどうもこうもできない。

とくに“シエラ”たる女をなくせば全てが破綻する。

シエラとはウィリアムを発起人とする偶像の歌姫をプロデュースする企画のこと。アブドゥルは企画をサポートする立場。男達が手塩にかけて育てたのは

シエラザード・エルムンク・ビビッドハート

という映像の姫君。

水で造る超巨大スクリーンに映像を投影させ音楽を奏でる一大エンターテイメント。シエラの人気が爆発的に加速したのは一年前のこと。まだ機械的音声によるボーカルしかなかったソフトウェアに比べシエラは人間よりも人間らしい感情を持っていると評価された。市場に彼女の姿が映り込む。瞬く間に姫君は他の歌姫を抜きトップの座を勝ち取る。まさにウィリアムの勝利に他ならない。

船を拠点とするシエラのイベントは海岸沿いで行なわれる。そればかりかインターネットでの中継生ライブは世界中にファンを作り上げてきた。いまやファンは彼女の声を聴くために世界から集まる。

「死なせてはもともこうもないということだ」

「それはそうですが、気づいていますか？　最近、魔力の溜まり具合が悪かったこと。もう残量も少ないのですよ」

モニターの並ぶ壁の右隣り、ウィリアムの立っている入り口から真正面にはさらに扉がある。ウィリアムの眼は扉の奥を見つめていた。

「二ヶ月前からだな。シエラのシステムに不具合は？」

「あるはずないでしょう。メンテナンスは週一回、システムに限っては毎日チェックしているんです。すべては彼女の力の寿命でしょ

うな」
　彼らの言うシステムは科学の範疇を超えている。彼らの本分たる魔術において成功した魔力吸収装置を指す。システムの完成は二年前になる。システムは女を使って行なうシエラプロジェクトの初期段階から何度も改造を繰り返してきた。一人あたりから吸収できる魔力量と貯蔵できる量の増加は完成した初期とは違っている。今ではライブで失神するほどの吸収量となっている。事実、ライブ中に失神するファンが多いとニュースにもなった。しかし対策は万全だった。警備の責任者は最高の人物だ。もし妙な噂が立ったとしてもライブ会場で倒れるファンがいても不思議ではない。興奮の余り倒れたと言えば問題はない。その興奮を味わおうとさらにファンが増えるだけのことだろう。
　歌姫はすべてを吸収して巨大になっていった。
　ウィリアム・バークレイは夢を手にしたのだ。自分の思い描く姫を作り上げた。
　ウィリアムの夢を完成させた男にもまた夢や願いはある。続くように現れたアブドゥルは彼をサポートすることで自分自身を守っている。
　アブドゥルがこのプロジェクトに莫大な資金を投資している理由もシステムにある。人間の身体から魔力を吸収するシステムに自分の身体の命運がかかっていた。
　魔力はシエラの人気に応じて溜まる量が変わる。アブドゥルは溜まった魔力を資金で買う。システムの存続に金はどうしても必要だった。膨大な電力に宣伝費、活動費は並みの歌手とは違う。シエラはプログラムなのだ、息をするたび金を食う。市販されているＣＤやＤＶＤでは賄えない。
　システムはシエラが活動するために必要不可欠な装置でもある。
　そのシステムに不具合が生じたのは二ヶ月ほど前のこと。予兆はあった。シエラのライブは一度に十万単位で人が集まる。システムが許容量を超えてしまっていた。膨大な力を吸収しきれなくなって

いた。嬉しい誤算ではあったが吸収しきれなくなった力はシステムを故障に導いた。
「そんな事でこの先どうする？　改善策はないのか？」
膝の上に手を置いてさする。アブドゥルが魔力を必要とする理由は自分の身体を守るため。彼の足は細く筋肉がなかった。骨に肉と皮がついているだけでぴくりともしない。完全に機能を停止していた。
筋萎縮性側索硬化症。
現代でも原因不明とされる病気である。五十歳を越えたあたりから兆候が見られた。まず足首の辺りがうまく動かなくなり立てなくなった。続いてふくらはぎ、膝とまるで沼に使っていくように足が崩壊していく。病気の進行は速度を増し始めた。一年以内には腰まであがってくるだろうと宣告された。
このとき彼は自分の力を最大限に生かすことを決めたのだ。普通ならすでに身体全身が動かなくなっていただろう。アブドゥルが症状を脚だけで押さえているのは彼が魔術師だったからである。科学も医学もなにも通じない。対抗できたのは彼の本分である魔術だけだった。原因を調べることはできなかったが症状を抑えることは出来ていた。代わりに大量の魔力を必要とする。絶えず生命力たる魔力を流す事で病気の進行を食い止める。他に術は無い。いや、無かった。
「そのためのブルーポーションでしょう？」
事の発端は一ヶ月以上前。ある製薬会社の新製品にある。彼らの仲間である警備主任が昔の仲間から聞いたその薬について調べたのだ。まだどこの誰にも回っていない情報だった。ブルーポーションの効果は麻薬としてではなく身体能力の強化にある。詳しく調べてみると人間の細胞を極限レベルにまで活性化させることのできる代物だと判明する。しかし製品レベルは低く一定以上の使用量を超えると肉体が持たず内部崩壊がはじまるのだ。
加えて製薬会社が捜査の対象になるという情報まで入る。

彼らは賭けに出た。
ブルーポーションというまだ未完成の薬を警察よりも早く回収し手に入れた。どこの所属だろうが情報を得るには十分な資財とコネがある。まんまと手に入れた彼らはブルーポーションの進化を科学から魔術へと切り替えたのだ。
魔術師が集まると欲望に歯止めが効かなくなる。
実験は成功。ブルーポーションは次第に精巧さを増していった。薬の能力を高める方法として用いたのはシエラのファンから奪った魔力に他ならない。
だが、まだアブドゥルの身体を治癒する能力を持っていない。
彼らが回収したブルーポーションはすでに底をつきかけている。たとえ薬の能力を高めたとしても増産することができる施設はなかった。
新たな情報が舞いこんで来たのは製薬会社の崩壊から数日後。ブルーポーションを持っている人間が他にいた。製薬会社のスポンサー企業だ。市場に出回る事の無くなったブルーポーションを新製作の麻薬と偽って処分するらしい。場所は日本だった。シエラの次のライブ会場はすぐに日本に決定した。
残りのブルーポーションをすべて回収する。数は少なくても関係なかった。いてもたってもいられないのはアブドゥルだった。彼は船からいったん降りて日本を目指した。つきの出ている間だけだった。
依知川組という組織が取引相手であった。アブドゥルは仲間と合流しブルーポーションだけを掠め取った。なんとしても自分の手で回収したかったのだ。
すべてが手に入った夜だった。それからというものアブドゥルはブルーポーションの研究に没頭し続けている。研究と実験のなかで何人もの人間が被検体として日常を送っている。しかし現在の状態では脚を蝕む病魔を退治する事は出来ない。まだ彼の望むものは出来上がっていない。

「まだ使用できる段階ではないだろう。使った奴らの最後は暴走だ。あんなもの飲めるか」
「なら彼女に期待するしかないでしょうな。それか……新しい？シエラ？を調達するか」
「できるものか。学院もそろそろ気づくぞ」
女を手に入れたのはまっとうな手段ではない。拉致に近い形だった。しかし必要だったのだ。ウィリアムにとってシエラの完成に必要だったのだ。
「その時はその時でしょう」
「貴様はそれでいいかもしれんが」
「解っています。貴方の足の事。貯めた魔力はあと一か月分はここにあるのです。次のライブでまた蓄えが増えますよ」
「だといいがな」
シエラのライブは八月、もうすぐに行なわれる。場所はアクアラインのど真ん中。巨大な橋をすべて手中に収める。スクリーンは海を使って作り上げる。船に増設している巨大な機材が可能にする。チケットは全て完売しており推定客数は二十五万人を超える。資金と魔力の回収は十分すぎるほどに可能。
「なにをそんなに心配しているのです？　ここは日本ですよ。平和ボケしたやつらの国だ。なにも心配はない」
「君はこの国の魔術師を知らんのか」
心配があるとするならこの点以外他は無い。現在、陸で活動している仲間達から報告が入っている。市場に出回っているブルーポーションの大半は船で増産した改造品だ。売人には使用者の情報を流すように仕向けている。実験の結果は実地で行なわれている。
だが、問題は起こっている。取り引き現場に現れる集団がいる。地元の情報によると自警団らしいのだがその連中の中に魔術師がいると報告があった。
「なにをバカな。この国出身の魔術師など取るに足らない存在ばかりではないですか。学院でも日本出身など数えるばかりでしたよ。

いても大して目立つ存在じゃなかった」
「なら小塚はどうだ？　彼もそうか？」
最後の一人の名前がでる。プロジェクトの警備班最高責任者である。引き入れたのはウィリアムでアブドゥルと出会うよりも前になる。彼らはともに魔術師の学院で浮いた存在だった。友人ではなく知人、同士ではなく協力関係。
「彼は特にそうでしょう。授業の成績は良かったが実績はない。私と貴方が目をかけてやらなければアメリカでの成功もなかった」
「ふむ」
深く息をする。眉間にしわが寄り険しい表情でモニターに目を向けている。彼の瞳にはひとりの男、小塚が部屋に向かって歩く姿が映っている。ウィリアムもその姿を見ていた。スーツ姿で冷たい目をした小塚は一定の歩幅で歩いている。
「貴方が足を心配をするのは解りますがそう気を病んでいると本当にうまくいきませんよ。どうです？　外に出ませんか？　私も記者会見やインタビューで留守にするんですから一緒にどうです？」
「そう、だな。久しぶりに太陽の下に出るか」
アブドゥルが太陽の下にいたのはもう何ヶ月も前のことになる。太陽の下で行動するのは嫌だった。脚を誰かに見られたくなかったから。

閑話　三話

作業を終えた乗組員たちが船を下りるのと同時に一人の男が船に入った。洞窟のようなパイプと緑の壁の中を一人無言で歩く。パトカーから降りた男だ。名前を小塚英太郎。彼もこの船の乗組員の一人である。シエラの護衛が任務でありアメリカからの船旅では同船せずに空から一足先にやってきていた。

彼の前にも他の者同様、カードキーによる防壁が立ち塞がる。船の中を全て移動できる人物は三人と決まっている。ウィリアム、アブドゥル、そして小塚の三名だ。小塚の目指したのは二人のいる部屋。彼は船のどの部屋へも向かうことなく直行した。

「二人で何を話していた」

小塚が部屋に入るなり無言の二人がいた。

「べつに、あまりにも彼が病んでいただけですよ」

「気にするな。足の事が気になっただけだ。それよりどうだ？　ブルーポーションの具合は？」

「段取りはついている。すべて手配済みなのだ。私がミスをするはずはないだろう」

「あまり自身を過信するな」

「過信ではないよ。真実だ。生産工場のほうも確認してきた。父の話によるとあと数日で完成する」

小塚の実家は小塚建設という土建屋である。規模はまあまあだが地元の政治家と繋がりがあるため大きな仕事を年何件か都合してもらっている。新宿区の公共事業のうち実に見入りのいい仕事は彼の父が取っている。

現在、ブルーポーションの数はせいぜい五百。市場に流せばすぐになくなる。とてもアブドゥルの身体を直す薬を造るには足りない。この日本で増産する必要があった。が、すでに他の国では情報が回っている。表立って工場たる施設を作ることが出来なかった。彼ら

は船内での製造に着手したが数が足りるはずも無かった。
増産と改造を両方共に行うには船では不可能に近かったのだ。
この案件にまかせろと言ったのは誰でもない、小塚だ。彼は自分の実家が新宿で幅を利かせられることを告げるとアブドゥルが土地を買った。すべて突貫工事で社員は地獄のような業務を強いられている。
「そうか。で、改良のほどはどうだ？」
「まだ駄目だな。こればかりは私の手ではどうにもならん」
部屋の奥に輝く魔力に目を向ける。ブルーポーションはいまだアブドゥルの欲する力を持っていない。これでは増産しても意味が無い。加えて船に溜まっている魔力はもうじき底をつく。
「だが、成果は徐々に出てきている。私のほうで用意した奴らの中にとびきり上等な女がいてね。彼女の身体で証明されている。特効薬はもうじき完成する」
「そうか」
アブドゥルが足を擦る。小塚は少し冷ややかな目で見ていた。彼の身体に同情こそすれど特定の感情を持ち合わせていなかった。ただ、脚を見てある場面を思い出す。
船が港に着くまでの間、小塚は新宿区の警察に紛れていた。その初日、新宿区である騒動に出くわしていた。男たちが何人、何十人と馬鹿騒ぎをして駆けずり回っていたのだ。彼が市場に流したブルーポーションと密売人を巡って。
「ただ一つ、気になることがある」
「なんだ？」
「市場に流しているブルーポーションを止めている連中がいる」
「ほう」
小塚が何かに対して危険だというような事を言ったことはない。彼はどんな仕事でもそつなくこなしていく。
「まぁ、気にするほどの事でもないが目障りでね。改良した品質も確かめたい」

「私が出向こうか？」
「かまわん。そのために私の女を使う。彼女はいいよ、きっと連中の目を欺いてくれる」
「あの男はどうする？」
あの男……小塚がこちらへ戻ってきたときブルーポーション奪取に協力した男がいる。名を依知川龍馬。ブルーポーションの取引きを持ちかけた依知川組の養子だ。彼は現在、小塚のために用意されたホテルに一人留守番という形で居座っている。
「龍馬か？　しばらくは様子を見る。彼の望みを叶えることも簡単ではないからね。アブドゥル、心配せずとも貴方の望みは叶えられる。安心したか？」
「少しはな。あとはライブ当日か」
「そういうことだ。なに、お二人が心配することなど何もない」
部屋を出る。小塚はアブドゥルの危惧する表情とウィリアムの焦りを感じていた。二人とも焦っている。すべてが順調に見えてそうではない。
当初、ブルーポーションの話を聞いたとき飛びついたのはアブドゥルである。しかしブルーポーションは彼の目的に到底役立ちそうに無い。現在もそう。魔術師として薬品の質を高めようとして入るが時間がかかってしまっている。あまり時間は掛けられない。
またウィリアムにとっても時間は無かった。シエラの本体である彼女の存在はずっと前から落ちている。あの女がいつまで持つのかさえ解らないのだ。替えが存在しないシエラの寿命は見えていた。
船の中を移動する。
ウィリアムがシエラの本体である彼女を隔離している区画があるように小塚もまたある一部分を自分専用の箱にしている。
箱の中は薄暗く生臭い。血の臭いが充満していた。
小塚はこの箱の中に女達を閉じ込めていた。身元不明の少女からシエラのライブスタッフに選ばれた人間達だ。数は十五。年齢も背も国籍もばらばらの女達をひとつの部屋に閉じ込めていた。

部屋に入ると一人、立ち上がる。
髪はぼさぼさで長く全身を血の匂いで湿らせていた。
「さぁ来なさい」
「なにをするの？」
日本語で話す彼女の足元には肉塊が広がっており白い骨が何本も転がっていた。彼女が勝者となったのだ。アメリカからの船旅で彼女らに与えた餌はゼロ。最終的には誰かが誰かを食うことになる。生存本能による闘争だ。彼女は足元の元人間を食って生きた。
「君のやりたい事をすればいい。人殺しでも、強姦でも、売春でもとにかくなんでもだ」
「なんでも？」
手をとると彼女の目に生気が宿る。人間の感情がいままでなかったように今、ここに復活を遂げたように息をする。
「そうだ。君のしたいようにすればいい。世間をちょっと騒がせられればいいのさ」
「そう……わかったわ。あなたの考えがなにか知らないけどここから出られるならそれでいいわ」
「ここが嫌なのか？　君にとって最高の箱だと思ったけど」
「逢いたい子がいるのよ。それにあなたの言うなんでもっていうのがしたくって堪らないわ」
「何をするんだい？」
「……決まってるじゃない」
彼女の手には一本のナイフが握られている。人間の身体を分解するのにちょうどいい長さと切れ味を持った一品だ。そのナイフを渡したのは誰でもない小塚である。彼は箱に入れたとき、彼女が勝つように仕組んだのだ。すべて予定通り。小塚の予定通りに進んでいる。
「君の持っていた荷物は上の部屋に置いたままにしてあるよ」
「ありがと。力をくれて」
彼女が笑った。ナイフについた血を舐め取り抜き身のままで持っ

て行く。小塚は血と肉と骨の散乱する部屋を出る。唯一部屋に入る事のできる扉に手をあてて念じる。船は彼らの魔術師としての工房である。小塚の箱は彼の意思どおりに中身を消し去った。はじめから中に女など一人もいなかったように。

第五章　登場人物紹介

登場人物紹介

主要人物のみ

氷上恭司（ひかみ・きょうじ）

背が高くモデルのバイトをしている。
曽我部美耶子とは恋人関係にある。

曽我部美耶子（そがべ・みやこ）

ドッペルさんを呼び出した高校生。
夙夜の手助けを借り、怪異を退けた後、恭司と付き合う。

芹沢遥（せりざわ・はるか）

氷上恭司の元家庭教師。
一年前、恭司の前から姿を消す。

白瀬トオル（しらせ・とおる）

池袋の白瀬酒屋店、次男坊。
現在、恋人募集中。

荒垣トウマ（あらがき・とうま）

白瀬トオルの兄。苗字が違うのは両親が離婚しているため。
昼は父親の経営する派遣会社の副社長。夜は自警団のリーダー。

後藤（ごとう）

新宿署の刑事。現場主義の男で地元の若者ともよく通じ合っている。
かなりの人脈があり夙夜、白瀬親子とも繋がりがある。
依知川組に対しては以前から危惧している。現在は楠木朱美の教育係として同行する。

東堂夙夜（とうどう・しゅくや）

魔術師、洸敷千影の弟子。
二年間の休学のため、同級生とは二つ歳が離れている。

洸敷千影（こうしき・ちかげ）

東堂夙夜の師匠である魔術師。。
新宿駅近くに事務所を持っており夙夜に指導している。

第五章　一話

「ねぇ……この状況、どうやって覆す？」

黒い髪に白い肌。

長い指に少量の筋肉がついて弛みのない腕。

「そうだな、まずは腕を払って僕が上になる……かな」

「へ～え、私の腕を払うんだ？　怪我しちゃうかもしれないわよ」

妖怪のように妖しい瞳。

服の隙間から出現する鎖骨。

贅肉のない完璧なボディ。

「しないようにすればいいよ」

「何なら私のことを抱き寄せてみるくらいの勢いを見せなさいよ」

「それは……」

「言葉が濁ってる。二〇点」

妥協を許さない厳しい点数。

あの日、あの夜から随分と時間が流れた。氷上家では家主の氷上恵子を不在とし二人の年頃の男女だけがいた。男はこの家の長男で女は客だった。恵子は二人が家にやってきてすぐに家を出た。気を利かせたわけではなく仕事に出かけなければならなかった。

客が来たのは二時間前。夕方の四時ごろだった。三ヶ月ほど前から女の客はやってきている。恵子がいる時は夕飯を一緒に作り三人で食べる。まるで家族のように接している。が、しかしだ。今夜は

違った。向かい合って座っていた机はひっくり返りいつのまにか恭司は女の下に倒れていた。

痛みはない。ただ、倒れ背中が床に着いている。客、曽我部美耶子の顔だけが目に映る。彼女の髪が垂れてくると先端が触れるか触れないかのぎりぎりに当たる。肌をくすぐる髪をこそばゆく思う。

「ねぇ、ここまでしてまだしないつもり？」

顔色一つ変えないまま頬の筋肉を最低限動かして言った。恭司の心臓は今にも破裂しそうなほどに脈を打っている。が、表情は変えなかった。美耶子の服が襟元からだらり垂れる。謎の空間足るべき穴が作られる。天井の光を浴びると服が透けて中の白と青の花柄模様の下着が見えた。

どくん。

よりいっそう大きな太鼓の響きの如く心臓が鳴った。

「ほら、胸の谷間見えちゃってるわよ。見ないの？　それとも興味がない？」

このまま手を伸ばせばその花をむしることができる。身体を引き寄せれば美耶子の身体はすんなりと自分の物になる。それは彼女をすべて自分の物にできるということ。力をいれて抱けば折れそうなほど細い腰も最近肉付きの良くなってきたお尻も太ももも唇も何もかも全てを独占できる。思春期の少年なら喉から手が出るほど欲しくてたまらないはずだった。

恭司自身、美耶子が欲しくて堪らなかった。だが手は出していな

い。恭司はまだ彼女にキスをするだけで自分からは胸さえ直接揉んでいない。目の前の果実の匂いも形も知らないままだった。恭司もまた年頃である。自分を好いている女に恥をかかせる気は無かった。いつでもラブホテルなりこの部屋なりで行為に及ぶ事はできる。

しかし、事に及ぶことはなかった。

美女に言い寄られても頑として手を出さなかった理由はひとつ。恭司が利口だっただけだ。まだ中学三年生の恭司だが早くに子供が出来て結婚した人間達を自分の目で見ているからだ。もしもの場合を考えた時、恭司はどうしてもその手を動かせなくなっていた。自分にはやらなければならない事が決まっていたから。

いや、それは愚かな考えでしかない。

自分の考えがどれだけ馬鹿げているのか理解していた。美耶子のことと言いながらその実は臆病でしかないのだ。先の不安が目に見えて手を出せないだけだった。

美耶子はというとそんな恭司に苛立っていた。自分の身体に不満があるのかと一度関係が崩壊しかけた事もある。しかし恭司の心がそうではないと知ったからこそこれまで彼氏彼女の仲を続けている。自分を大切にしてくれている恭司を知っている。自分が恭司を好きな気持ちはこの一年でさらに大きくなっている。だから別れることは無かった。

そんな二人の間にちょっとした事件が起きたのは三日前。

二人で熱海へと旅行へ行ったのだ。恵子もいない正真正銘二人きりの旅行だった。とうぜん部屋は一室で朝から晩まで一緒だった。

だというのに恭司は変わらなかったのだ。そのへんの中学生と同じように接するだけで二人に甘い夜は存在しなかった。

「私の子宮が疼くのよ」

美しい乙女の声だった。

精一杯、振り絞った欲情させる言葉。

今、手を伸ばせばスカートを退ける事さえできる。彼女の黒いスカートは太ももをきっちりと隠している。もしも頭が逆の位置にあれば美耶子の下着はおろか尻の形まで丸見えになる。妄想が先走りする。

「それは困ったね。でも……解ってるでしょ。しないって言ったよね」

「できちゃったらって事よね。私ずっと考えてるんだけどいいんじゃないの、べつに？」

「それを言っちゃ駄目だよ。べつに美耶子が嫌いになったわけじゃない。セックスだけが好きって事を確かめる方法じゃないでしょ」

「じゃあ他の方法で教えてくれないかしら？　でなきゃ落第よ」

恭司はそっと身を起こしキスをした。ピンク色の唇が重なる。美耶子の身体がどすんと落ちて密着する。足を絡ませ股間を擦りつける。恭司は身体を離さなかった。本心は今すぐにでも服を脱ぎ去りたい。

雄の本能をぐっと堪える。

スカートの薄い生地と下着がジーンズのごわごわした生地に触れると色を変えた。四本の腕が互いの背骨にたどり着き唇の間に透明

の粘液が溢れ出す。ひとつの塊になろうとする。むさぼるようなキスに情熱を燃やす。

二人は身体を吸着し服越しに好きだと言い続けた。

唾液まみれになった口をそのままに身体を離す。

「これで好きってこと？」

「今はまだこれが限界だってことだよ。せめて高校に入ったらって思ってる」

「そんなこと言って……身体は反応してるわよ」

「そりゃそうさ」

股間の一物は限界に達していた。密着していた時、そのふくらみに気づかないわけが無かった。美耶子は恭司の一物に気づいていた。ベルトを脱がして下着の間から手を入れようとする。柔らかく白い指は男の肌とは別の生物のように感じられまだふれてもいないのに震わせた。竿を扱き睾丸を弄ぶ。美耶子はいつもクールな恭司の顔が真っ赤になるのがとても好きだった。

もう、すぐにでも発射しそうな恭司のモノを扱く。

初めてのことだった。性器に直接触れることも、いきり立った熱さを知ることも。

恭司は美耶子の顔を見たまま果てた。何分と持たず彼女に搾り取られるように。白濁液は美耶子の制服を汚した。心のどこかで汚れた制服を見て嬉しさにも似た感情を憶えた。

「ごめん」

「気にしなくたっていいのよ。今は私の指でイった事のほうが私は嬉しいんだもの。百点満点よ、恭司」

白濁液を指先ですくうと舐める。さっきまでの感情が突然、恐怖に変わる。たまらなく怖かった。液を口に含む仕草にまるで自分が食べられたような感じがしたのだ。

「さっぱりしたでしょ。お勉強の続き、しましょう」

ひっくり返った机を元にもどすと数学の問題集が広げられた。

美耶子と付き合い始めてから三ヵ月後、つまり十一月頃になるが恭司は塾を止めた。なにも突然止めたわけではなく恭司の偏差値や前年度の模擬試験で合格点を超えたからである。加えて今は曽我部美耶子という家庭教師もいる。塾へ通う費用を無くせるならと考えた結果だった。

もう学力は問題なく後は時期を待つだけとなった。ちなみに曽我部美耶子の学力は校内でもトップクラス。ドッペルさんの事件が終わり一息ついた後、復学した。登校していなかった間も自主練習を欠かさなかった彼女は成績を落す事は無かった。社会復帰も時間はかからなかった。

心強い教師が味方についている。今の恭司に受験に失敗する理由はない。

二人の生活は学校生活を終えた後始まる。今日のように夕方頃落ち合い氷上家へと向かうかどこかで勉強となる。だが実のところ、勉強というのは口実で今日のようにイチャイチャするのが大半となっていた。

第五章　二話

「ここは……こうでしょ」

問題集に取り掛かるもすぐに否定される。甘く囁く美声はかつてのかすれた声を掻き消していた。気を抜けばまた身体の一部分を火照らすことになる。

恭司が前にしている問題集は目標にしているM高校よりもレベルの高い高校用だった。美耶子の授業は通っていた塾よりもきつく中学の授業がまるで幼稚園のように思えるほど難しいものだった。しかし嫌だと断らず受け入れた。すると美耶子の授業を半年も受けるとこれまで以上に伸びた。

夕方になると家を出る。夏の日差しは時の過ぎる時間を遅くしまだ昼間のように明るく照っている。今日の東京は３４度。美耶子は日傘を差し日光をさえぎって歩く。恭司は白のTシャツにジーンズというラフスタイルで外に出る。大人びた背とスタイルで着るとそれだけで決まってしまう。

二人は並んで歩くとどこから見てもお似合いの青年と美女に他ならない。肩を並べて歩けばそれだけで絵になる。しかし二人はそうしない。美耶子が先を歩き数歩送れて恭司が追うように歩く。

いつだったか、ただ街を歩いているだけで声をかけられたことがある。声をかけてきたのは同年代の女の子。声をかけられたのは目を惹く美耶子ではなく恭司であった。美耶子同様、恭司もまたモデル業に精を出している。母の手伝いとしてやったモデルのバイトの成果を目の当たりにした。声をかけられる頻度は瞬く間に増えだし

た。嬉しく思えたが彼ら彼女らが声をかけてくる度、複雑な思いをする。

いつまでモデルの仕事を続けるのだろうか、と。

美耶子の機嫌はどうか、と。

心のどこかで美耶子の機嫌を伺っていた。彼女は他の女と話すだけで気分を悪くする。彼女のよく言う点数に現れるだけでなく時として暴力に訴え出る時があった。

何より事務所から問題とされた。完全復帰した美耶子の仕事量は恭司とは違う。今日のようにゆっくりした時間をすごせるのは月に二度あるかないか。恭司も同じである。そんな二人が居合わせるわけにはいかない。どこで誰が見ているか解らない。

お互い、一歩ずつずらして動く。

美耶子の背後を歩く。今、自分の頭を悩ませるのは目前に迫る受験。なによりその先に彼女との未来がある。

学校生活に問題はない。学業を疎かにしておらず授業には退屈と感じられる余裕さえある。成績は校内でもトップクラスを維持している。M高校よりも偏差値の高い高校へと進学しようとしている同級生と同等。一切の不備はなく準備はできていた。

問題は……高校に入ってどうなるのか……不安は尽きなかった。M高校は入学するだけでも困難とされる。また入学して終わりではない。その後、本当の実力が試される。三年間学校に通いその後、大学受験に突入する。長い人生のなかでまだ恭司のいる場所は入り

口に過ぎない。

自分が何でもできる天才ならどれだけ不安は消化されるだろうか。

駅に着くと切符売り場で並ぶ。

「仕事は？」

Ｓｕｉｃａの普及により切符売り場に並ぶ人は少ない。二人も持っているがわざと切符売り場で立つ。当然、二人の周りに人は寄り付かず肩を寄せ合っても不思議に思う人はいない。

「今日は事務所によるだけよ。確認しないといけないことが多くてね。恭司のほうは？」

「僕もなんだ。ちょっと参考書を買いに行くだけ」

「なら、そこまで一緒ね」

切符売り場からは二人揃って行動する。電車に揺られて十分、新宿駅に最短時間で到着する。

学生が夏休みで全国一斉に休日になっているなか働くサラリーマンたちも暑いだろうスーツに身を包みながら出て行く。二人も電車を降りると駅の出口まで同行し別れた。

美耶子の事務所は新宿にあり徒歩十分とかからない。恭司は別方向に歩き大型書店の入り口に入っていく。二人の時間を名残惜しみながら。

第五章　三話

電車の走る音が鳴り止まぬコンクリートの道に一人の女がやってくる。黒い髪をざっくりと切ったショートカットで汚れを払っていない汗の染み付いた服を着ている。スカートは長く膝の下まで隠れていた。暗い夜の道に赤い双眸が映える。

死の淵からでもさらに死を感じるその赤き瞳に女を見据える男は目を背けられなかった。

高架下の暗い道には二人のほかに人はいない。ゆっくりと女は歩く。殺意に似た双眸は何度も揺れながら近づいてくる。まるで酔っているような足取りで歩く彼女はある男の傍まで行く。懐から何も言わずに折りたたんだ一万円札を差し出した。くしゃくしゃの一万円を広げて確認すると男も無言のままポケットにしまう。

すると今度は男が腰ポケットから紙袋を取り出した。手のひらに埋まるほどの紙袋は女の渡した札と同じように、くしゃくしゃだったが女は何も言わずに受け取る。

二人のあいだに言葉はなかった。ここで会うことを約束したわけでもなかった。ただ、ここに来る人間には理由が解っているにすぎない。

目的の物を手に入れたことを確認できると女は踵を返して歩き出す。今度は駅を目指して歩き出した。男はやはり呼び止めない。彼もまた目的を終えたのを確認するとその場にひっそりと佇んだ。

女が日本へ帰ってきて幾日すぎたか。故郷たる東京に戻ってきたところで身体の渇きは満たされなかった。古き知人に会おうにも現

状の自分を見せたくないと足がすくんだ。

外見の異常ではない。彼女の容姿はそこいらの女性を凌いでいる。理由は彼女の内面にある。

まず箱から出て数時間すると五感が揺るいだ。視覚、聴覚、触覚、味覚の感覚が絶望的なまでに壊れたのだ。わけなど解るはずもない。ただ、彼女はそうなるべくしてなった。そして残ったのは嗅覚のみ。絶望的状況のなか常人たる行動にでられたのは異常なまでに発達した嗅覚のせいだった。

外の匂いを嗅ぎ分けて歩き生活する。それだけで精一杯だったのだ。

次の異変は渇きである。喉が焼けるように身体が熱くなると止められない渇きに飢えた。緊急時に連絡を取るあの男に聞けば薬物の摂取によって改善されると説明された。

コカイン、マリファナ、スピード……この街で得られるいくつもの麻薬を買いあさり日替わり定食のように試した。まだ数日しか経っていないがすでに身体は汚染されている。しかし身体に加わる刺激はほとんど感じられず精神状態もさして変化しなかった。

出回っていた麻薬は彼女の渇きを満たすことができなかった。さらに男へ伝えると男はある薬を彼女に送った。

――――ブルーポーション――――

東京全体、いや世界でも稀にみる新薬である。男は箱から出た女に一日三本、各地の売人へ渡す分を送った。新宿駅を拠点とする売人は全員で二人。女の仕事は二人にブルーポーションへの供給することとなった。

船旅で得た力はまだ使用していない。
あの日、あの時、得た力はまだ彼女の身体に眠っている。
彼女は箱のような部屋に同じ年頃の女達とともに閉じ込められた。食料はすぐに尽き貪りあう日々が続いた。隣にいる人間がただの肉に見えたとき彼女たちに崩壊は訪れ人ですらなくなった。獣のように相手の身体を傷つけあった。

特に箱の中では女が優勢だった。箱の中に入れられる前に男から一本のナイフを持たされていた。他の娘達は何も持っていなかったのにだ。最初から彼女が勝つように仕向けられたのだ。

唯一、凶器を持った彼女が最後まで神経を保っていた。気をやってしまう周りの女達が一人、死んだ後は簡単だった。狂気だけが箱の中に存在し互いの身体に爪を立てる。女は箱に入れた男に渡された一本のナイフで場をくぐった。それが魔術師の作り出した式の中だと知らずに。

生き抜き箱から出た女には力が宿っていた。どうして自分にそんな力がついたのか彼女には知る由もない。ただ、箱から出たときに力が憑いていたのだ。

女はの懐には百万円程度の資金がある。男が陸に上がる前に用意した金だ。最初、手切れ金かと思ったが足りなくなったら言えと言われた。さらにこうやって身を案じブルーポーションまで振舞う。放ったらかしにしているわけではないようだった。

実家に帰ろうとしたがやはり身体の異常に気をやるばかりで池袋駅近くのホテルに部屋を借りた。陸に上がったところですることはなく快楽を求める事だけが目的になっていた。何をするにも不自由

な身体と渇きを潤すことが先決となった。

渇きを癒すなら方法は選ばなかった。麻薬だろうがブルーポーションだろうがなんでも……。

しかしだ。満たされない心もある。人と交わることによって得られる心情を欲した。

人は一人では生きていけないとはよく言ったものだと彼女は感心しながら我が身、我が人生を振り返る。いつも傍に誰かがいた。今は孤独のなかに身を置いている。

物思いにふけているといつの間にやら歓楽街へとやってきていた。池袋の汚い雑居ビルが乱立する通りにいかがわしい看板が並んでいる。どの店も男をターゲットとした店で入れなかった。

ホテルに戻るとケータイで店舗の検索をはじめる。もう何年も前に買った古い携帯電話だが支払いは続けられていたらしく機能する。

なにがいいだろうか、デリヘルというものがいいのか、女性客は断られないだろうか。操作する指が汗を掻き始める。そして一件の店に行き着く。池袋のＳＭ専門店で女性客も大丈夫と書いている。ＳＭに興味はなかったが直感と合致した。彼女の身体には目いっぱい力を込めて握らなければ痛みも伝わらない。だからか……女はすぐに電話をかけた。

「お電話ありがとうございます。ＳＭ倶楽部アゲハです」

男の声がした。清潔感というよりは義務的な感情を消した声だった。

「私、女なんだけど出張……頼めるかしら？」
「女性のお客様でも当店は出張可能です。場所はどちらになられますか？」

ホテルの場所を告げる。男は案内をはじめ掛かる時間と費用を説明する。女はすべてにイエスで答えた。途中、気になる嬢はいるかと言われたが特に答えは無かった。誰でも良かったのだ。歳があまり離れておらず可愛げのある女を希望した。

電話で契約する。時間が過ぎるのを待つ。契約どおり一時間経つと扉をノックする音がした。出迎えると男と女が立っていた。扉を叩いたのはちょっと男のほうだった。男は一歩前に出ていて女との間に立つ。

女は一週間海外にでも行くのかというぐらい大きな旅行バッグを引っ提げていた。俯いて気の乗らない表情をぶら下げていたが出迎えた女と目が合うとぱあっと花が開いたように明るくなった。

第五章　四話

二人を部屋に迎えると契約書を渡された。プレイの前に注意事項の説明と支払いを済ませるシステムになっていた。男は契約書にサインが終わるなり頭を下げて部屋を出て行く。二人きりになった。

「はじめまして、お客様。ニナ、と申します。お客様の事、何てお呼びしましょうか」

風俗の、それもＳＭ倶楽部で働いているとは思えないほど彼女は清潔そうに見えた。笑顔もぎこちなくは無い。可憐という言葉がよく合う。

「はじめまして。私のことは……そうね。男と同じでご主人様でいいわ。ニナさんは女の客ははじめて？」

「え、ええ」

ニナの頬を撫でると可憐さがひび割れた。肌が触れた瞬間、彼女の営業スマイルは破壊された。

「緊張しないで。することは男とそんなに変わらないわ。貴女を縛ったり、蝋燭をたらしたり、鞭で叩いたり……痛いのは、好き？」

「好きですよ。でないとＭ嬢なんてできないもの」

女もＳＭなど初めてだったがニナよりかは上手かった。二人の間には人生の経験が差として生まれ上下関係はいつのまにか決まっていた。

「それもそうね。じゃあさっそくそこの椅子に座っていただけるか

しら」

システム説明の際に確認は取っている。風呂はなく先に入ってから来る。すでに準備は完了している。ニナはベッドから少し離れた場所にある椅子に言われるがままに座った。持ってきた旅行バッグを開く。用意してもらった道具が入っている。赤い縄を手にしてニナを追う。ニナは服を脱いでいた。肢体はとても美しい。もはや一メートル先さえ見ることのできない視覚で確認するとニナの身体は傷がなかった。

「綺麗ね。傷もない」

「残らないだけ……ですよ。それに良く見れば結構あざが残ってるはずです」

全裸で座るニナは秘部さえさらけ出している。無抵抗のまま赤い縄が身体に巻きつけられていく。無抵抗のままニナは身体の自由を失った。

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」

縄が身体を締め付ける。じんわりと出てきた汗を吸っていく。それだけで彼女の股間は濡れだした。彼女の臭いが部屋に香り始める。異常発達した嗅覚が匂いに敏感に反応する。

ニナの体臭……いやその奥から漂う生物の香りに身を狂おしく掻き毟りたくなるほどの愛おしさを感じる。なぜかなど理解できなかった。

ただ、鼻を刺激するニナの体臭に異常なまでの興奮を覚えた。

「動ける？」

「無理……ですね……」
「次は口を閉めるわよ。アイマスクはしてもいいかしら？」
「契約書どおりであればお客様に従いますわ」

革のマスクで視覚を奪い、その言葉を最後に口を塞がれた。次はピンク色の丸いボールを噛ませる。言葉さえ奪われたニナは女の成すがままになる。

「従順な犬ね。でもわたし……嫌いなのよ。なんでもはいって言うヒトは」

ふとももをつねる。

「んふぅッ！」

歯を噛締める。つねられた部分は赤くなる。手加減なしにつねったせいか本物の声だった。

「その顔いいわ。汗も出てきたわね、ニナ」

女は自分が女王になったように声を荒げていく。　抵抗できないニナの全身を舐めあげ、つねって、叩いた。なにか一つ接触するたびに声をあげ身体をくねらせるニナはまるで玩具のようだった。涎が下腹部に垂れだすと椅子からひょいと掴みあげベッドへと放った。女の持つ腕力ではなかった。

四つん這いで尻を掲げるようにして転がるニナ。女は旅行バッグから鞭を取り出すと標的をニナの尻に定めた。バシンと音が鳴り桃のような尻は赤く腫れあがる。叩くと身体がびくんと跳ねるのが堪らなかった。何度も叩くうちに尻が真っ赤になる。そして赤で統一

されるとタイマーが鳴った。

最後の一振りを掲げたが夢の終わりを知らせる音に意識が現実に引き戻された。だがこの一時は麻薬などでは得られなかった興奮を彼女に与えた。鞭を捨てニナの身体を拘束する全てを解く。ニナは痛みのなかで極度の興奮状態にあったようだ。股の間から透明の液をこぼししていた。

厭らしい牝の匂いは女の身体の渇きを潤す媚薬。どれほど上質な麻薬でさえ与えてくれなかった秘薬に他ならない。

「よくするんですか？」

プレイが終わり、落ち着きを取り戻すとニナが言った。迎えがやってくるまであと十分ほどある。

「いいえ、出張女を呼んだのは初めてよ。一年ほどアメリカにいて帰ってきたの」

「アメリカ……」

「今日はありがとうね」

「また、指名してくださいね。女性のお客様だと安心できますから」

名刺を出すと女は躊躇無く受け取った。店の名前とニナという名前と携帯の電話番号が載っていた。店の番号ではなく個人の番号らしい。

男がやってきてニナが帰っていく。彼女のいたベッドに寝転がる。興奮は冷めていなかった。火照る身体は次第に頭に熱を上らせる。目が覚めたままじっとニナの名刺を見つめていた。

女は深夜二時になると起き上がり携帯電話を取りだす。名刺に載っている番号を押した。コール音が数回耳元で鳴ると「はい」と女の聞き覚えのあるニナの声がした。

「ねぇ今から会えない？」

やはりもっと深いところで繋がらなければ愛は得られない。

夜の闇に紛れた時と変わらず瞳は真紅に輝いていた。

第五章　五話

今日も今日とて電車から周りの大人たちと一緒に恭司も降りる。サラリーマンたちは何を考えて仕事をしているのだろう。どんな学生生活を送り今に至るのだろうか。他人を見る恭司の目は羨望とも疑心とも付かぬ目をしていた。

悩みながらでも受けた仕事はするしかない。今日の仕事は母、恵子には関係なかった。内容は雑誌の対談。あるグラビアモデルが対談したい相手を指名するコーナー。掲載されるページは四ページと多い。その企画に恭司は指名された。指名してきた相手のグラビアアイドルとの対談になる。

母、恵子によるとその企画を行っている雑誌はファッション誌ではなく書評が大半を占める文学誌らしい。四ページ中、見開き二ページに大きな写真つきということだ。誰もが拒否することのない仕事というわけだ。

恭司を指名したグラビアアイドルの名前は西田リサという。恭司は彼女を知らなかった。調べてみると週間少年漫画誌の表紙を飾る絶頂期のモデルらしい。顔ぐらいは知っておこうと昨日、参考書ついでに彼女の載っていた最新号を購入した。

髪はボブカット。背は百五十五センチ。痩せ型で胸のサイズはＤとあった。くびれにはぷよっとした可愛いお肉がついていて愛くるしい顔で笑いかけてくる。美耶子の涼しい美貌とは別の可愛らしさを持っていた。

駅から出ると大勢の人が喋る声と騒音が耳だけでなく身体に響き

渡る。スタジオの場所は新宿駅から南西にある。人の行き交いは常に多い場所だった。

「本日未明、カメラマンの佐伯奏さんが……」

歩いているとふと耳に入る。テレビから流れる女の声が耳に入ったのだ。何気なしに足が止まった。画面には白いスーツを着た女性アナウンサーが映っている。その下には大きなテロップでカメラマンの名前が載っている。

佐伯奏。

その名前に心臓が高鳴る。数日前、彼女とは仕事で会った仲だった。貰った名刺はバッグの中に入っている。テレビ画面に彼女の顔写真が現れる。記憶の中の彼女と一致した。ウェーブのかかった肩までの茶髪に厚ぼったい唇。やはり彼女だった。モデルの仕事は一度で何十人という人と会う。スタッフ全員を覚えているなんてことはないが直接、接するカメラマンは憶えていた。

画面はスタジオに映像を映す。横に並ぶ四人と司会者が冥福を祈るように弔いを口にすると事件の内容に触れていく。彼女の死体がどのような状態であったか説明される。

「またですね」

辛辣な顔をしたスタジオの一同。

「ええ、この事件昨日もあってですね。今日で二人めということです」

「これは本当に人間の犯行なんですかね？　残酷すぎますよ」

コメンテーターの女が言った。

最初の事件がフリップで紹介される。厚い板に書かれた絵と字が物語る。司会者が説明を開始するよりも先に恭司は理解していく。

最初の事件……つまり昨日おきた事件。被害者の名前は多田美奈とあり被害の状況が書かれていた。

遺体が見つかったのは路上。それも人通りの多い大通り。まるで放置さたように転がっていたらしい。外傷は一点のみ。首が鋭い刃物で寸断されており血が抜けていた。切られた首は繋がっているように供えられていたとあった。さらに抜けた血は一滴も現場に残っておらず犯人は何処かから遺体を持ち運んだと見られている。しかし現場は人通りの多い場所、犯人がどうやって被害者を運んだのかはっきりとしていない。

あまりにも残酷な殺人事件。

「これは人のできることではないということですか？」

「まるでトリックですよ。しかも二人めです、なにか組織じゃないでしょうか」

しばらくして恭司にスタジオの進行がおいついた。

「それは捜査が進んで解明されるでしょう」

テレビの中では勝手な憶測が繰り広げられる。最終的に佐伯奏が死亡した、という事実だけが残る。他殺であることは明白だが方法はわからないままだった。

「やはり先日の多田美奈さんと事件が繋がっているということですかね？」
「はい。両者の状態や犯行現場が近いこと、殺害方法が一致していることからこれは連続殺人事件と断定しています」

多田美奈……この名前にも恭司は心当たりがあった。

画面の中で話が進むと多田美奈と名前が写真と共に写る。やはり記憶に間違いはなかった。佐伯奏と会った日のこと、多田美奈というモデルとも会っていた。多田はモデルだった。彼女のことは憶えている。その二人が相次いで死亡した。とてもいい気分ではない。

「犯人の特定は？」
「まだそこまで捜査は進展しておりません。ただ二人の遺体が酷似していたことから犯人が同じなのではないかと推測されています」
「では次の犯行はあると思いますか？」
「断定できませんね」
その一言を最後にテレビは次のニュースへと切り替わる。映像が変わると出演者の表情もすぐに変わり人の死に対する表情ではなくなった。

氷上恭司も番組の切り替わりにあわせて再び歩き出す。

同じ犯人だというならこれは連続殺人事件になるのではないだろうか。

当日の現場を思い返した。二人とも誰かから恨みを買うようには見えなかった。多田は真面目だったしスタッフの言う事にも素直に従っていた。モデルにしては妙に礼儀正しく我侭は言っていなかっ

た。カメラマンの佐伯は強気だったがこの業界においては普通だった。気の強い女性は五万といる彼女は全体の中で見れば目を惹く存在ではなかった。

全てを知っているわけではなかったが恭司のなかではそうだった。

足取り重く撮影スタジオの前に着く。くしくも先ほど報道のあった二人と会ったスタジオと同じだった。フォトスタジオ・アガサというネームプレートが眼前にある。人の行き交いは背中で行なわれている。時間ぴったりで中へ入った。

スタジオのなかは異様なまでに明るく振舞っているように見えた。スタッフも二人の死人に対して触れなかった。スタジオに出入りする人間は様々で死んだ二人に構っていられないようだった。だが二人に対して心を向けているのは恭司だけだった。ここにいるスタッフはあの日と違う。そう思うがちらほらと見知った顔が忙しなく動いていた。

やってきた雑誌スタッフに案内されたのは明るい照明に照らされた場所ではなく影になる端だった。椅子とテーブルが並べられておりスタッフが茶を注いだ。証明のなかでは世界が違っていて設営を行なう。数人の手で出来上がっていく世界に目を向けていた。

設営が終わりそうになった頃、恭司の座る椅子の隣に一人の女が現れた。白いワンピースを着た女だった。

「はじめまして、西田リサです。氷上くん、だよね。すっごくかっこいいね！」

「あ、ありがとうございます」

いきなり手をとりはしゃぐリサ。

「ずっと会いたかったんだ。よろしくね！」

笑顔は眩しかったが恭司はなんとも思わなかった。彼女に向ける神経が無かった。

曽我部美耶子と付き合い始めて変わったことがある。美耶子以外の女性に対しての接し方だ。これまではどっち付かずの曖昧な態度を取る事が多かったが頑なに心を寄せようとはしなくなった。なぜなら美耶子の嫉妬心にある。恭司が他の女と接するたびに美耶子の感情は荒れた。ただファンが声をかけて握手する。それだけで会った瞬間強く手を握る。足を踏むなどの行動に出る。

とにかく美耶子の自分へ対する大きな愛の証だった。

リサは恭司との挨拶を終えるとさっそうとスタッフのところへ駆け寄っていく。雑誌の記者はもちろんのことカメラマンには念入りに挨拶をしている。恭司はその姿を見ていたが特に男性スタッフには強めのアピールに見えた。

雑誌に使う写真を一人数枚取るとセットを変更させる。かなり手の込んだ撮影だ。今度はカフェのひとコマのようにテーブルと椅子が用意される。白く花柄模様に縁取られた背もたれの椅子だった。二人がテーブルを挟んで座ると対談は始まった。

スタッフは質問と簡単な返答用台詞をある程度用意していた。恭司は自分の言葉に替えながら話をしていく。悩みは解消されていなかったが悟られまいとした。

話のなか、西田リサの事を知る。
初めて話す相手だったが無理なく会話に集中できた。
対談の中で話すリサは眩しいくらいに可愛かった。それはまぎれもない本心だった。

「お疲れ様でーす」

その一言で現場スタッフは撤収作用へと移った。恭司も待つ間座っていた椅子へと戻り渇いた喉に水を流す。西田リサはというとまたスタッフのもとへ走っていった。暗い天井を見上げる。ふう、と息をつく。ここには母、恵子も美耶子もいない。見渡す限り恭司の知っているスタッフは一人もいなかった。何度も足を運んだ現場とは思えなかった。

さぁ帰ろう。そう思って仕度する。といっても持ってきたバッグを手にするだけだった。その姿を見てか雑誌のスタッフと西田リサがやってきた。

「ねぇこれで終わりだよね」
「はい。お二人ともお疲れ様です」

恭司に聴こえるように話をする二人。恭司の視線が二人に向く。するとリサが急に恭司の腕をぴっぱった。まるで胸を押し付けるように引っ付く。

「じゃぁさ、じゃぁさ。これからアタシとご飯食べに行かない？」
「えっ今から？」
「そう、今から」

スタジオ内の時計を見ると十時になろうとしていた。

「もう十時だよ。僕は帰らないと」
「真面目だなぁ、恭司ってば。アタシが誘ってんのよ。断るつもり？」

何気なく名前を呼んでくる。見れば雑誌社のスタッフが後ろで目を瞑って両手を合わせている。どうやら彼女の言うことに付き合ってやってくれという雰囲気を出していた。誰もがそうしてくれると助かるといった顔をしていた。断れそうにも無い。あきらめて彼女を見た。

「わかったよ。でも日付が変わるような時間までは無理だからね」
「いいわよっ」

ぎゅっと腕をぴっぱる力が一段と強くなった。

第五章　六話

強引に連れてこられたのは駅から近いレストランだった。大通りに面した入り口は入ってすぐ、エレベーターになっており目的の店舗に合わせて移動する形式となっている。恭司たちがやってきたのは五階にある暗色の強い壁と蝋燭のような小さな明かりが演出する洋食店だった。

店内には静かな音楽が流れていた。スピーカーはどこか解らなかったが店内に余すところなく響いている。客の姿は確認できない。壁ではなく観葉植物が席の間に盛大に盛られて区切られていた。

西田リサは常連なのか出迎えたのは一介のスタッフではなく店長だった。胸のネームプレートにそうあった。深々とお辞儀をする店長はどう見ても四十過ぎに見える。

「これはこれは西田さま。奥の個室が空いております。どうぞ」

「ありがとう。店長さん」

腕を組み並ぶ恭司に対しては目もくれなかった。客のいるフロアを過ぎると重そうな扉で仕切られた一角がある。リサは扉を軽々と開いて進む。店の雰囲気はがらりと変わる。どうみてもここは一般用ではない。一段と高級感のある個室が数部屋続く。どの部屋もきちんとした戸が付いており中は見えない。見れば足元に靴がある。すでに客が入っているのだ。リサは入り口の空いている部屋に恭司を連れ込んだ。

なすがまま、されるがままに部屋へ入るとようやく身体が離れた。部屋にはカラオケボックスに付いている通信機が備えられており

リサは早速とばかりにボタンを押して注文を済ませる。恭司はすべてリサに任せることにした。

「でさー、そのスタッフったらサイテーなのよ。いつもやらしい目で見てくるしさ～どう思う？」

「どうっていわれてもな」

時間が経つに連れ、彼女の態度は豹変していく。テーブルの上にはアルコールはない。ただ、彼女の仕事場とは違う態度に恭司はなんとなくの相槌を打つだけだった。

あのプロデューサーは仕事ができない。

私の使い方を知らない。

口から出るのは不満ではなく他人に対する悪辣な言葉ばかり。我侭なきらいはあったがそれ以上に口が悪い。恭司がスタジオで見ていた彼女は媚を売っていたにすぎない。恭司は口の悪さよりも彼女の態度の変化にうんざりしていた。こういう人物を見たことがないわけではない。母について現場を回っていれば目にする光景だった。だが、直接一対一で面と向かうことはこれまでなかった。

あまりにも酷いものを見せられている。

「ねぇ恭司くんってこういうのイヤなの？」

「えっ」

「全然楽しくなさそうなんだけど……アタシの事イヤ？」

「イヤじゃないよ。ただ、僕には」

言葉が詰まる。リサに対する好意はないが嫌いにもなれなかった。納得していないが理解はしている。スタッフに対しての振る舞いは

当然のように思えたし彼女が悪態をつく理由もなんとなしに理解できたから。

しかし言葉が詰まった理由はまったく別にある。

言っていいものか。美耶子も同業者である。恭司よりも仕事に関しては真面目にやっている。おそらく自分から辞める事は無い。

「彼女がいるのね？」

「知ってるの？」

反応してしまった。ふふっと笑うリサに今更、嘘は通じない。

「ううん。知らないよ。でもいるのかな～って思ってた。だって格好いいし、いてもおかしくないでしょ」

「それって外見だけ？」

「そりゃそうでしょ。会った事無いんだから人気と外見以外知らないもん」

「それもそっか」

まだリサと出会って半日も経っていない。自分も彼女のことを知らないのだ。この場での態度が本当の彼女かどうか解らない。

「ねぇ、カノジョって誰？」

「言えないよ」

「言えないってことは関係者なんだ」

「なんで……そんな事聞くの？」

言葉を紡げばぼろを出してしまいそうだった。できれば話を切り替えたいとこちらから質問をする。するとリサはまだ半分以上残っているオレンジチューハイのグラスを見た。グラスの縁を人差し指

でなぞり溜め息をつく。一瞬、リサの目が合った。

「危機感、かな。アタシみたいなのって次から次に出てくるでしょ。しょーもないアイドルの番組に水着で出て名前売ってるけどさ。いつまで続くかわかんないじゃない。ささっと稼いで辞めたいけどどこかで大きく名前を売りたいわけよ」

口調はこれまでと違っていた。彼女の言いたい事はわかる。モデル業界はそんな簡単なものじゃない。恭司の場合、母の手伝いで顔を出すだけだが周りはそうではない。読モと呼ばれる連中が現れたときから現場の雰囲気は変わっていた。事務所に所属するモデルたちでも相当のレベルでなければ仕事にありつけない。それがメジャーな仕事であればあるほどだ。西田リサが背後から迫ってくる新人に畏れるのも納得できる。

「恭司くんはこの業界でやってくつもり？」

「え？」

「だってそうでしょ。高校に入ってモデル続けても結果良いようにはならないと思うよ」

自分のしたいこと、将来というのはあまりにも大きい悩みであった。美耶子はおそらく大学に進学してもモデルを辞めないだろう。

なら自分はどうなる？

進学するのはM高校と決めている。しかしその先だ、最終学歴となるだろう大学はまだ決めていない。

勉強をし続けて何になる？

なりたい職業などない。あるのは母を少しでも楽にさせたいという願いくらいだ。

「僕はモデルの仕事を母さんの手伝い程度に考えてる。本業にすることはないと思うよ」
「ほんとに？」

それだけは決まっている。モデルなんてのは若い頃の蓄えが全てになる。芸能界で食っていこうなど地に足のつかない夢物語にはどうしても考えはつかない。氷上恭司という人間はどこまでも夢とは無縁の場所にいる。

「僕はそんなに夢を見ていないよ」
「そう……夢、ね……君には夢、なんだ」

リサは大きく溜め息をついた。

彼女のなかにある氷上恭司への評価だったのだろう。業界内では母親に氷上恵子という人物を持つ氷上恭司は大きなネームバリューがある。背は高く顔もいい、礼儀正しく仕事を疎かにしない。評判はよく本気を出せば雑誌業界だけでなくテレビを含むマスコミで取り上げられる事間違いなしだ。人間の身体的特徴というのは才能ではなく先天的に得られるもの。それに恭司は気づいていない。自分の身体がもつ真価に。

そればかりでなくモデルは続ける気は無いとまで言う。

「あたし、帰るわ。今日は……ごめんね」

口元を拭くと立ち上がった。テーブルの端に置かれた伝票を手にする。

「支払いはアタシがしとくから恭司くんはゆっくり食べて。あっ」

「なに？」

出て行こうとしたリサが足を止める。

「シエラのライブ、行くんでしょ？　聞いたよ」

「ああ、あれね」

シエラとは東京湾のアクアラインを舞台に繰り広げられる超巨大ライブのヒロインである。日本でも有名なコンピュータソフトウェアによるバーチャルアイドルの凱旋ライブ。シエラ・プロジェクトという巨大な組織がアメリカからやってきてライブを行なう。当日はアクアラインの端から端までを埋め尽くすだろう。プロジェクト側から日本の芸能界にＶＩＰ席が用意されている。恭司もまたチケットを貰っていた。

「けっこう芸能人も集まるって。ＶＩＰ席のチケットってさ……」

「ごめん。あれ第三者に渡せないんだ」

「そっかじゃあね」

深く追求しなかった。恭司はチケットを三枚保有している。友達を誘ってくればいいと母親から渡されたのだ。

白瀬トオルと電話で話したときチケットの話を聞いたことがある。観客動員数はおそらく過去最高と言われ現在チケットの値段はインターネットオークションで原価の五倍になっている。最低三万円は出さなければ落札不可能と言っていた。

そんなトオルは兄からチケットを貰う予定だとも言っていた。

手を振って部屋を出て行くリサを見送ると一人きり部屋の中でし

んとする。テーブルに並んだ料理に箸を伸ばそうとしたが気づかぬうちに指が震えていて上手に動かせなかった。

将来に不安ばかりが募っていく。

他人の目には自分はどう映っているのだろうか。

身体ばかりが成長し心はまだ年相応の悩める少年のままだった。

第五章　七話

店の外ではリサが小走りに駆け男と合流を果たしていた。男はこの二時間、暑いなか通りの向かい側でじっと立っていたのだ。肩から紐のようなものが垂れ胸の間で銀色のカメラが光っている。ぶら下げていたのは一眼レフカメラで男の持ち物でもっとも高価な物だ。ひったくられまいとする力がカメラを持つ手に汗を滲ませていた。

「撮れたんでしょうね？」

「う、うん」

男の肩ががくがく震えている。足も震えていた。まるで彼だけが地震にあっているかのようだった。リサは口元を緩ませると手を挙げてタクシーを止める。タクシーのドアが開くと男の首を掴むようにして放り込んだ。続いて自分が入る。タクシーはまた走り出し新宿駅から遠ざかって行った。

／　／　／

恭司が店を出たのは三十分ほど経ってからだった。小さな部屋の中、自問自答を繰り返す。将来、自分は何を仕事にするのか。何のために勉学に勤しみ高校、大学へと進学するのか。そろそろ答えを出しておくべきなのかもしれないという結論に至ったにすぎない。

すでに太陽は沈んでいる。月が薄くぼんやりと浮かんでいる。星の見えない新宿の空でも月だけは輝いて見えた。

昼間と変わらないほど明るい路上に出ると携帯電話が鳴った。

『やぁ恭司くん。お久しぶり～』
「お久しぶりですね、左近寺さん。どうしたんです、こんな夜に」
電話の主はいつも利用するCDショップの店員、左近寺だった。
最近ではめっきり店に行く事も無い。理由は美耶子との生活にある。
ここ数ヶ月、恭司は満足に一人で過ごす時間がなかった。

『いやいや～見てたのよ。恭司くんと女の子。あの子アレでしょ、西田リサ』
「覗き見ですか？」

首を振ってそれらしき人物を探す。まだいるのかと思った。駅の入り口から反対側まで見たが左近寺はいなかった。恭司の目に映った駅周辺は雑踏という言葉が似合っていた。いつも歩いている場所に何百人という人がひっきりなしに動いている。タクシーの運転手、荷物を運ぶトラック、サラリーマンすべてが目に入る。みんな自分の人生を歩いている。

気が遠くなりそうななか左近寺の声が聴こえてくる。

『違う違う。店に入ってくのが見えたの。でさ本題はそっちじゃないんだけどリヴァイアサンのライブチケットあるって伝えときたかったの』

「ああ」といつのまにか気の無い返事をしていた。

『トオルもさ、何枚か買ってったんだけどどうする？』
「いつのチケットなんです？」
『ええっとね……』

がさがさと手探りする音が聴こえてきた。

『五日だね』

五日といえばもう日がない。明日は四日だ。チケット代は払えるが今、ライブに行く機にはなれなかった。リヴァイアサンはオルタナティヴ・ロックのバンド。いつも騒がしい音楽で幕を開けそのまま最後まで突っ走る。激情が身体を駆け巡って魂に火がつく快感が堪らないのだ。もしかしたら自分に足らないのはその激情なのかもしれない。

「今のところ予定はないけど……確保ってことでいいですか？」

『いいよ。でも預かって置けるのは当日の昼までだからね』

「はい」

『じゃあおやすみ。早く帰りなよ』

踏ん切りのつかない心がとてつもなく嫌になった夜だった。

第五章　八話

女の借りている部屋に電話が鳴る。備え付けの電話だった。女はぶっきらぼうに受話器を手にすると耳に当てた。細く神経質そうな声が女の名前を呼んだ。

「どうしたの？　もう帰ってきてほしいなんて言わないわよね」

「そんな無粋な事はしない。君宛に小包を送っておいた。君用のブルーポーションだ、これまでの物より精度がいいはずだ。もうすぐなくなると思ってね、補充分にと思って届けておいた。フロントに行って取って来るといい」

部屋に持ち込んだ荷物のなかで最も大切にしていたバッグがある。小脇に抱えられる程度の小さく薄いハンドバッグだ。なかにはブルーポーションの瓶が入っている。電話の相手が言うとおり残り二本になるまで減っていた。

女の身体にはブルーポーションが必要だった。箱のなかで再生を果たした肉体にはブルーポーションが必要不可欠となっていた。肉体の感覚は戻ることなく失われたまま。強大な嗅覚だけが彼女の感覚となって幾日。すでに普通の感覚は失われた。

わずか数日の間に彼女はブルーポーションを消費し売人に渡すはずの仕事さえ忘れていた。電話の男もそれには気づいていたはずだ。だというのに咎めなかった。

礼も言わずに受話器を下ろす。部屋を出てフロントへ行くと小包は確かに届いていた。抱えて戻ってきた部屋のなかで中身を確認すると綺麗に整頓された九本の瓶が並んでいた。

ブルーポーションという薬がどうやって誕生したかは知らない。中身の成分もどういう薬なのかも知らなかった。ただ、どこの薬局に行っても売っている代物ではなかった。新宿だけでなく東京で麻薬を探してもやはり見つからなかった。他にも自分の思いつく限り、調べてみたが似たような物は一切見つからなかった。ただ知ったのはこの薬が無ければ自分が持たないということだ。飲まなければすぐに気分が悪くなり手足が痺れてくる。思考力も減り段々と落ち着きがなくなる。

いつの間にか完全に依存している。

一本のブルーポーションの効果が続く時間は最初の頃と違って六時間が限界になっていた。船から降りた時は十時間は持っていたというのに今では一日に三、四本の消費になっている。この先、自分はどうなるのか。女は恐怖を抱きながらも目の前にある青い瓶に涎を垂らしていた。

その日の夜、女はホテルから二キロほど離れたところにあるＢＡＲにやってきた。ネオンの煌めく街道で洞穴のような質素な玄関を構える店だった。店の看板がなければ多田の扉にしか見えない入り口にはどうやっても客の入りがいいようには見えない。女はそんな店を嗅覚だけで探し当てたのだ。肉体の変化は五感が教えている。視覚、聴覚といった五の内、四つの感覚が薄まり嗅覚だけが特化していた。そのせいか、特に匂いに対して妙に心を惹かれるようになっていた。まるで犬だ。すべて匂いで嗅ぎ分けることができる。自分が人間である事、二本足で歩いていることが不思議なくらいだった。

ＢＡＲのなかは静かにバイオリンの音楽が流れていた。外からは考えもつかないほど客がいる。女が入ってきた事に店内の視線が集

中した。一人きりの女に向けられた視線はどれも妖しげなものを見るような視線だった。連れはいないのかと後ろを見る者もいたが女は一人きりだ。一人、カウンターへと赴き適当なカクテルを頼んだ。

背中に刺さるような視線を浴びながら自分の身体と鼻に掛かる酒の匂いに気分が良くなる。過敏になった嗅覚のせいかアルコールは身体中持て余す事無く充満していくようだった。

店内の客は誰もが誰かと話をしている。女は店の中で浮いていた。カウンターを挟んでバーテンダーがいるが何一つ言葉を介していない。一人きり、黙々とカクテルを口に含んでは流し込む。

どれだけ時間が経った頃か、四杯目のカクテルを受け取ると背後の視線にひとつ不思議なくらい突き刺さるものを見つけた。第六感とでもいうべきか彼女は気配を察知し振り返った。そこにはまだ酒を飲めるようになって間もないばかりの女が肩を抱かれていた。女との年齢差はないようだった。しかし視線の主である肩を抱いた女王気取りの女のほうは違う。彼女とは五つは離れている。ウェーブのかかった髪にスーツを着た女の目は振り返った女の目と合い一瞬でお互いの底までも見通したようだった。

カウンター席を立つ以外に選択肢はなかった。カクテルグラスを持って立つと相手の女も肩に回していた腕をほどき席を空けろといわんばかりに追いやった。おかげで年の若い女はやってきた女に無愛想な表情で目を向けてカウンターへと交代していった。

「いいの？」

カウンター席に移動した女はすぐにバーテンダーに新しい酒を頼んでいる。どうもいい雰囲気ではない。

「構わないわ、あの子は大勢いるなかの一人よ」
「私もそのうちの一人になるのかしら」
女の隣に座る。まださっきまで座っていた若い女の熱が残っている。
「したいわね。でも、貴女の場合、大勢のうち一人なんて柄じゃないでしょ」
女の傍に何人いるかなど問題ではなかった。二人の女はどちらも唯一のものでなければならないと考えていたのだ。視線があった瞬間、二人ともそんなことは解りきっていた。このＢＡＲへやってきた理由もお互いに知り尽くした感があった。
「当たり前よ。貴女だって私の大勢のうちの一人なんて言ったら嫌でしょ」
「そんなの私のプライドが許さないわ」
「ねぇ名前は？」
「ハルカよ。貴女は」
「かなでっていうの。ハルカ、無駄話はしたくないの、出ない？」
「いいわ」
カウンター席に女を残したまま、ハルカとかなでは店を後にする。金はかなでが全て支払った。彼女の財布は分厚いブランド物で金を持っていると無言で見せている。彼女の着ているスーツもやはり安物ではない。少なくとも数十万はする代物だとハルカは隣りに立って知ることとなった。
かなでの泊まっているホテルは近くでハルカのホテルまでより少

ない時間で着いた。部屋の中へ入った瞬間、二人の理性は吹っ飛ぶ。まるで獣のように貪りあった。シャワーを浴びることもなく着ている物をすべて引き裂かんばかりに脱ぎ去ると肉体を押し付けあう。まるで失った部分を補うように身体をくっつけあう。二人の間に言葉は必要ない。愛撫するたび震える肉体が全てだった。

この一瞬こそが全てだという甘美な一時。愛などという美しいものではなく情欲だけの一時に身を委ねる。

かなでの身体から臭う淫臭も汗の臭いも全て吸ったときハルカの心に隙間ができた。身体の芯は火照っていたはず。だがどういうわけか熱が冷める。まるで昨夜のようだ。冷静になっていく思慮にもう一度火をつける方法はなにか、自分の冷めた感情をかなでに知られたくないとなんとかして考える。

昨夜はどうだった？

あの風俗嬢を呼び出した後はどうだった？

身体の芯まで燃え上がらせる快楽を得た方法は？

かなでの身体がベッドに横になる。ハルカは馬乗りになってかなでの両腕を脚で固定した。かなではこういうのも悪くないとばかりに目を瞑って胸をピンと張る。天井に向かって規律するピンクの先端をハルカは指で弾いた。頬を火照らせるかなでに向けたハルカの欲望はそれまでとは違っていた。

そうだ、昨夜もそうだった。子供じみたセックスでは感じられなかった快楽。肉体を合わせるだけでは決して得られない快感。それは自分の指さえ触れる必要のない力の行使でしかない。ハルカは人差し指をかなでの首に向けると横に引いた。白い肌に亀裂が入ると赤い血がどっと噴出した。目を見開き声にならない声を出す。切れ

た喉は音を出せず擦れた空気音が部屋に響いた。

身体はハルカの尻を退けることができずびくびくと痙攣するばかり。全身の力が抜けていく。早く元に戻さなければ息さえできない。どうして自分がこうなったのかわからないまま、かなではハルカを見上げていた。時期に眼球は見えなくなり白目へと変貌した。血のシャワーを浴びたハルカは舌で唇を拭うと味を確かめた。部屋に蔓延した血の匂いに身体を震わせオルガスムスに到達する。漏らしたように潮を噴き自分の変貌した姿を鏡に見た。

昨夜もそううだった。電話で呼び出した風俗嬢ニナとの甘い一夜は今夜のように鮮血を浴びる一夜と変貌し首を狩ったのだ。殺人に対する贖罪の気持ちなど持ち合わせていない。ハルカは血まみれのままかなでのバッグを手にすると彼女の運転免許証を見つける。

「佐伯奏か」

彼女の名前だった。首がごろんと落ちる。見えない刃で両断された首は床に転がった。

転がった生首を見ながら処理はどうしようかと考え答えを出さなかった。途中で面倒になった。彼女はすでに死亡し部屋の中は血の匂いで一杯だった。ハルカの嗅覚はすでになんの感情も抱かせる事はなかった。指先の見えない刃も消えている。あとはこの場所から自分が消えるだけだった。ハルカは口をくちゃくちゃと動かす。日本語ではない、また英語でもない言語を発すると部屋から消えた。それは奇跡にも似た瞬間移動であった。

第五章　九話

翌、項垂れそうな夏の暑さに辛抱できずに氷上家ではクーラーの電気を点けた。ようやく涼しくなってきたところである。今では母、恵子もやって来て執筆活動の最中。二人の間に交わすことはなく恭司は夏の宿題のラストを片付けていた。まだ二十日以上あるといっても恭司にとってみればその半分が自分の時間として使えるかどうか解らない。

十一時を過ぎ一段落しようかという雰囲気になると玄関でベルの音が鳴った。恵子を気づかって恭司が出る。恵子は執筆中まるで機械になったようにその場から動けなくなる。ひたすらに執筆活動を行なう機械と化すのだ。母のそんな背中に音を立てずに出迎えに行く。

「美耶子！」
「おはよう、恭司」

玄関口に立っていたのは黒髪の彼女。彼女の身体は白のワンピースに身を包んでいた。肌の白さがまるで同化したように黒の髪を浮き立たせる。ぼんやりとではなくはっきりとした隆起で輪郭を整えた美耶子の顔がまぶしいばかりに瞳に映る。

はっとしていつもと違う美耶子に驚きを隠せなかった。美耶子はいつも黒調の服を着ている。一年前のあの頃からずっと彼女の色は黒だった。彼女は黒以外の服を一切着たことはない。氷上恭司にとって黒は曽我部美耶子を現す色でもあった。だからこそ肌の白さが彼女の美しさを控えめにしていたのだ。

今、玄関口で立つ白い姿に度肝を抜かれた。

まるで彼女はいつもそうであるかのような清楚なお嬢様然として立っていた。

「上がっていいかしら？　駄目って言われても上がるけど」

「別に構いやしないさ」

ワンピースに目をやられているばかりではない。恭司は美耶子の普段持ち歩かないバッグにも気づいた。彼女のハンドバッグは黒光した蛇の鱗模様のはずだった。化粧品や小物を入れておくだけの物だ。恭司は以前このバッグに対して趣味じゃないよねと聞いた事がある。美耶子も貰い物だといっていたが値段は相応になる。恭司の持ち物では上回る物はない。

そんな目新しいバッグは口が開いたままの白く、どう見ても適当に買ったとしか思えない質素なものだった。利便性を重視したと言えば聴こえはいいが美耶子の姿とつりあっていない。

靴を脱ぐと恭司は自分の部屋ではなく居間へと案内する。クーラーの効いた部屋のほうがいいと思った。

「でも、どうしたのこんな時間に、連絡もなしにさ」

「今日はね、夕方から私が仕事あるから先に来ちゃったの。お邪魔だった？」

「全然。昨日会えなかったから嬉しいよ」

「そう、よかった」

「で、それなに？」

バッグの口からちらちら見えるのは派手な色をした紙がある。それも一枚や二枚じゃない。見れば見るほど多くあるように見えた。

美耶子は足を止めて恭司を見た。空いているほうの腕を水平にあげて人差し指と中指を立てる。ピースサインを作り上げる。

「夏休み旅行企画第二弾よ」

まるで今から戦争をはじめるように言った。

「立山黒部アルペンルート、上高地、白馬、千畳敷カールなどなど取り揃えております」

居間に入ると恵子も執筆活動から離れて美耶子を招待した。三人は麦茶を前にして一つのテーブルに集まる。美耶子の持っていたバッグから出されたのは旅行代理店のパンフレットばかりだった。どれも今からでも間に合うような内容で二学期の始まりには十分間に合うように構成されている。

緑いっぱいのパンフレットに一番ときめいたのは恵子だった。彼女はさっきまでじっと見ていた字の海から離れるとパンフレットの写真に釘付けになる。そんな恵子に流されるように恭司も一枚手にとって見る。アルペンルートへの旅行だった。二泊三日で二名以上となっている。値段も手ごろときている。

しかし旅行には行きたいとは思えない。前の熱海旅行から帰ってきたばかりだった。

「旅行ってまた行くの？」

「なに恭司は行きたくないの」

「いや熱海に行ったばかりじゃないか」

「せっかく美耶子ちゃんが誘ってくれてるんだから行ってきなさいよ。それともなに？　恭司の夏休みはもう終わっちゃうの？」

「母さんまで」

恵子はパンフレットから目を離そうとしない。じっくり食い入るように見ている。熱海旅行は恭司と美耶子と二人きりで行ってきた。恵子は仕事上、付き添う事はできなかったのだ。

「恵子さんもいかがです。今度は一緒に」

「ごめんなさいね。原稿の締め切りが迫っちゃっててね」

執筆に使うパソコンは電源を切っていない。目で追うと隠す事無く画面は字の海を映し出していた。

「日帰りならいいんだけど」

「なら日帰りにしますよ」とパンフレットの中から探し出す。

恭司と付き合いだしてからも美耶子は恵子に対して態度を変えていない。やはり業界の中でも彼女のなかでも氷上恵子に対する情はゆるぎないものだった。

「だめよ。二人はちゃんと泊まってきなさい。一泊なんて言わないわ。二泊、三泊でもしてくればいいの」

「またそんなこと言って……」

冗談めいた言葉に感じたのだ、恭司は。

「恭司、ちょっと来なさい」

息子の言葉に溜め息まじりに立ち上がり手で招く。美耶子は何食わぬ顔でパンフレットに目を向けて二人から目を背けた。二人の女の間に立つ男はどうしてこうも肩身が狭くなるのかの。恭司は立ち

上がり母の元へと行く。居間から出るとキッチンへと移動した。美耶子が聴いている様子はない。

恵子は棚からお菓子を取り出しパッケージを開けていく。一つの袋からまた小さな袋に入った菓子を笊に移していく。

「あんたねぇ、熱海に行った時何もしなかったんだって」

「何で知って」

ぎろりと恵子の目が刺さった。母の目ではない。女の目だと判断できるほど強いものだった。

熱海での旅行はそれはそれは健全なものであった。昼は観光、夜はぐっすりといった具合に過ぎた。恭司は後悔していないしこれでいいと思った。だが、そうではない人もいる。それが母親だというのは頭を悩ます種ではある。

「そんなの見てれば解るわよ。母さん、恭司がもうちょっと男らしくしてくれればと思ってるの。その意味解るわね」

「……まぁね」

「はぁ……」

本意気の溜め息だった。母といっても恵子が恭司を産んだのは美耶子とそう年齢の変わらない頃だった。彼女は自分と同じ事を恭司と美耶子にも願っているような節がある。

恭司からしてみれば恵子の姿を見ているから不安もある。彼女の夫にして恭司の父親はすでに他界しているだから。

人はいつ死ぬか解らない。

将来にむけての不安はひとつではすまない。

「さ、持ってって」

一通りお菓子を詰めると笊を恭司に持っていかせる。数秒、足が棒のようになっていた恭司だがゆっくりと歩き出した。何か言おうとした息子の背中を見て母は拳を空中で振った。息子の頭を叩いたのだ。本当に殴ってやりたかった。殴ってさっさと美耶子とセックスすればいいと言いたかった。

自分の息子に男女の情熱はそうではないと思い知らせてやりたかった。

三人が再び居間に揃う。恭司はカシューナッツの小袋を手にして一つまみする。笊の中から全員、一袋手にしている。

「あのう、恵子さん」

「なにかしら美耶子ちゃん」

「旅行の話しなんですが」

「え、ええ、ええ。しましょ。旅行の話。美耶子ちゃんはどこに行きたいのかしら」

「そうですね……」

再び話が始まる。恭司は相槌をうつ程度だった。

二人の話で駄目だと決定付けられたパンフレットを眺めながら想像する。どの旅行もホテルに泊まるとは記載されていない。宿泊施設はペンションのような場所となっている。避暑地のペンションで二人きり。薄い壁でもなければ仲居もいない。

「う～ん。どこも今ひとつね。恭司はどう？」

「どこが良いとか悪いとか僕には解らないよ。美耶子が行きたいところでいいんじゃないかな」

まるで計ったかのようだった。どのパンフレットに書かれた旅行の内容はややパンチに欠けている。思えば熱海旅行も美耶子の案にしては質素すぎた。彼女の考えから他人が隣りの部屋にいるような場所を選ぶことは考えられなかった。二人きりでいたいというなら尚の事。

「じゃあさ……これに載ってる分は省かなきゃいけないわね」

パンフレットを全てテーブルの上から落としていく。

「あら美耶子ちゃん。他に選択肢が？」

「ちょっと旅行っていうには物足りないんですけどね。私の家が小笠原に別荘を持ってまして」

バッグの中から新たな選択肢を取り出す。といっても出したのはパンフレットではなく写真だった。白枠の中に自然の森に囲まれた中に丸太で作られた小屋がある。小屋の前には美耶子と細くも高い背をした男と肩を抱かれる女が写っていた。家族写真だった。いつの写真か、少なくとも一年以上前だった。

「まぁなんて素晴らしいの！　恭司、行って来なさいよ」

「そこって僕が行ってもいいの？」

俄然、テンションのあがる恵子だった。

「いいわよ。恭司はもう私の家族みたいなものだから……あっ」

「いいのいいの、気にしないで。それに美耶子ちゃんがこの子を貰ってくれるなら」

「私は貰うより貰われる側ですから」

白と黒以外にピンクが浮き上がる。頬に手をあてて照れたりする。
「あら？　そうなの。恭司、ちゃんと放さないようにしなさいよ」
「はいはい」
「何その気のない返事。ねぇ美耶子ちゃん、お昼食べてくよね」
「頂けるんですか」
「もちろんよ、恭司が家族みたいなものなら美耶子ちゃんも私の家族でしょ」
「はい！」

女のテンションというのは男には付いていけないときがある。恭司は賑やかに離す二人に付いていけずただひたすら食事に専念した。夕方から仕事の入っていた美耶子は食べる量こそ少なかったがよく味わっていた。

食事の片づけが終わると再び恵子は執筆作業へと戻り二人は二階の恭司の部屋へと移動した。勉強をする雰囲気もなくただ二人で小さなテレビを眺めていた。美耶子のいう小笠原の別荘に行く日取りを決めるのは後日になった。曽我部家は氷上家ほど融通の聞く家庭ではない。何より念入りに計画を立てなければ見つかってしまうとテレビを眺めながら美耶子が言った。

曽我部家に恭司が足を運んだことは二度しかない。どちらの時も父親は不在で母だけがいた。恵子と比べると若干ながら歳は上で派手だった。金銀ブランドにまみれ首も指もきらきらと輝いていた。その輝きは恭司にとっては落胆するだけでしかなかった。求める輝きとは人間の内側と己のなかで磨き上げた思いだと知らされた。美耶子に見る輝きとはまったくもって違ったのだ。

「ねぇ恭司って私のこと好き？」

突然の一言。何気なく呟いたように問う。
「どうしたの急に」
「好きか嫌いか」
目だけが動いて答えを求める。冗談ではないと知るなり「好き」とだけ答えた。
「なら今すぐここで抱いて」
腕の中に彼女の胸が押し当てられる。ワンピースの下、ブラジャーの感触が伝わる。具の重さ、やわらかさも指を動かせば確かめられる。またもう一方では腰と尻があたっている。
「できないよ。それにこの後仕事でしょ。どうしたの？」
「私たち、もう付き合って一年でしょ。なのに恭司は未だに私へ何もしない」
「それは」
「わかってる。でもね、私は子作りしたいっていうんじゃないの。ただ私のことを好きだっていう証がほしいの」
「証か」
「セックスするだけならコンドームすればいいし、ピルだって飲む。私は……恭司と繋がりたいの。恭司はどう？」
どう答えればいいのかわからなかった。曽我部美耶子と付き合って一年。彼女はずっと好きだと言ってくれていた。恭司も好きだと告げていたが二人の温度に差があるのは自分自身が一番よく知っている。愛の重さは恭司のほうが軽い。自分のなかで考えが決まってしまっている。

一歩踏み出すことができないのはなぜか……。

「答えないのね。恭司のこと好きよ。でもね、それだけじゃ耐えられないときがある。女ってそういうものだって思うときがあるのよ」

「僕は……」

「これは私のぼやきよ。恭司が誠実だって知ってるし。私のことを大切にしてるって証拠だもの」

臆病なだけだ。

「仕事……行きましょ」

二時になると二人して家を出る。新宿駅までやってくると美耶子は一人、事務所へと向かって歩く。彼女の白い後姿を見送ると恭司も歩き出した。いつものように騒がしい新宿駅前はどういうわけかさらに騒がしくなっていた。まるでお祭りのようにはしゃいでいる男たちがいる。なかに友人である白瀬トオルの兄、荒垣トウマの姿があった。彼は先頭を切って走っていた。トウマは恭司に気づいてはいなかった。仲間と遊ぶように騒ぎ立てていたに過ぎない。そのとき、昨夜の電話を思い出した。リヴァイアサンのチケットが残っている。左近寺からの連絡だ。美耶子の趣味ではないだろうが好きなものを共有したいと思う心はある。店に行こう。行ってチケットを買い二人でライブに行こうと心で呟いた。

第五章　十話

頭上高くそびえるビル群に一瞥もくれずに足元を見る。いつもと違う白のワンピースに目をやる。なにも変わっていないはずだというのに見慣れない色の服に身体は他人だと錯覚しそうになる。

朝方、服を選ぶなか今日こそはという感情でクローゼットから服を散乱させていた。美耶子の私服は黒かそれに準じた色彩で今日のような白は全く持っていない。白のワンピースはモデルの仕事で貰った一品に過ぎない。

何十分と悩んでワンピースを手に取った。

どうすれば恭司の気を惹けるのか困惑していた。

己の身に降りかかったあの怪異から開放されて一年。恋人になった氷上恭司は未だに自分の女を見ようとしない。触れようともしない。いや触れたいのは知っていた。年頃の男と同じで少年は雑念にも似た雄の本能を少量だけ見せていた。

しかしそれでは足りない。

曽我部美耶子にとって愛を語らうには足りない。

好きだと告げて、愛を囁く時間は一年前、すでに幕を降ろしていた。今は一秒でも長く身体の芯で繋がる事が愛なのである。それこそが信条。でなければ感じる事ができない。

精神のつながりよりも肉体のつながりを彼女は欲していた。

肝心の氷上恭司は手を出さずにいる。彼の行動や心情についてある程度、理解はしていたがやはり解せない面もある。とはいえ、今すぐにでも襲い掛かってきそうな気配もある。その一歩を彼は頑なに拒んでいる。

事務所につくとマネージャーが駆け寄ってくる。時間はまだあるはずだったが先方はすぐにでも取材が可能だと連絡を寄越したらしい。美耶子はゆっくりする時間もないままに相手方に合わせるように事務所を出た。

今日の仕事は簡単な取材である。ライターとカメラマンの二人一組と合いそのまま仕事に関する話をする。ただそれだけ。なのに足は時たま止まって思考はぐるぐると同じと頃を回っている。

「お久しぶりですね、曽我部さん」

現場に着くとすでに用意は終わっていた。喫茶店の一部にこれから何かが始まると名目付けられたかのような華やかな一席があり男が二人立っている。

「お久しぶりです。大塚さん、小峰さん」

いつ振りだったか二人とは会ったことがある。うっすらと頭皮の見える髪に無精ひげが大塚播宗。フリーライターとして活動する彼はこの道、二十年以上どこの社にも属していない。

隣りのカメラマンである小峰は趣味でやっている所があり本業ではないらしい。聞けば大塚の仕事で有名人に会えるということで引き受けているのだとか。

四十台の男が並んで頭を下げる姿はまさしく曽我部美耶子を女王たらしめていた。

それでは、とばかりに取材は始まり店内でフラッシュがたかれはじめる。

胸中では面白くないと思いつつも臆面にも出さず笑顔で答える時間が続いた。

「今日はありがとうございました」

互いに一礼する。仕事はおそらくベストの状態だった。悩みもストレスもない清純なイメージそのものであった。不備などあろうはずもない。

「いや、こちらのほうこそ。急な話だったのに請けて下さってありがとうございます」

「急な……そうだったんですか？」

そういえばそうだった。この仕事が入ったのは先日の事。突然、事務所から話を持ちかけられた。美耶子の仕事は三日以上空けてからというのが常だった。今日はただ、気分を変えたいというだけで了承したのだ。

「いやいや美耶子ちゃんが気を使う必要ないんですよ。それでなんだけどね」

「……はい」

「注目のモデルって話したじゃない」

「はい」

取材内容だ。美耶子は後輩達の名前を出していた。美耶子の所属する事務所は自分以外に多くのモデルを抱えている。ならば同じ事務所の子の名前を出すのは当然のこと。

「氷上恭司ってモデル知ってるよね」

「ええ。お母様が氷上恵子さん」

「そう、その氷上恭司なんですがね。彼と何度か仕事一緒にしてるよね」

大塚の目を見る。このライターの本性は下卑た話題を作ることと知っていた。芸能人の熱愛報道や浮気写真、はたまた不祥事を起こした政治家の写真など。フリーでやっているわけはいくらでもある。

これまで恭司との間柄は週刊誌に何度か取り上げられている。恭司はそれほどでもないが美耶子はモデル業界のなかでも注目株。ネタになるだろうとやってくる姑息な輩はどこにでもいる。だから滅多な事でもなければ一緒に街を闊歩する事はない。

どこかでボロがでたのか。それとも熱海旅行がばれたのか。

「一年前からでしょうか。何度か」

何食わぬ顔で返事をする。

「昨日うちにこんな写真が届けられたんですよ」

懐から写真を一枚取り出した。まっさらな写真には恭司と女が写っていた。どこだろうかと詮索するまでもなく二人の歩いている場所が今いる場所から駅に向かって歩けばすぐだと解る。何度か食事をした事もあった。

解らないのは恭司の腕は女の胸の前にあり女は身体を密着させているということ。

「……これ」

「まだオフレコなんだけどね。裏を取っておこうと思ったんだけど……美耶子ちゃん、何か知らないかな？」

「なぜ私なんですか？」

にやりと大塚が歯を剥き出しにする。
「けっこう交友関係あると思っただけ」
誘っている。表情は変えない。やはり彼もその類の人物だった。
写真が取り上げられる。
「もしかしたら美耶子ちゃんは何か聞いてると思ったんだけど……」
「さぁ。私は知りませんよ」
「ははっ、そうか、そうか。でもまぁ、さすがにこの写真一枚じゃね、ねぇ」
「これどこで？」
「さぁね。誰が撮ったのか……。店のほうは特定できてるよ。店員のなかには仲良くしてたっていう人もいてね」
「その女、誰？」
冷静に口を開く。恭司の隣にいた女に心当たりはなかった。あまりにも心を冷静に振り舞おうとした結果、美耶子は機械のような心のこもっていない目になった。最小限の筋肉が働いて冷酷な殺人鬼のようになる。
「えっ」
二人の男は美耶子の顔に唾を飲む。
「この女よ。一緒にいる……」
「西田リサっていうグラドルですよ。まぁあんまりいい噂は聞かないっすね。……もしかして、曽我部さんも氷上くんのこと」
「そんなことないわ、失礼します」

ガタン、と音をたてて立ち上がる。一礼すると店を颯爽と出て行った。もし大塚がさらなる一言を投げかけていたら美耶子はグラスに残ったジュースをぶちまけていただろう。

後姿は凛々しくもあり優雅でもあったがあきらかなに憎悪を含んでいた。

「ありゃ脈ありだな」

培ってきた記者としての感が大塚にそう言わせた。

店を出る。何でもいいから殴りたいという衝動に狩られている。一年前の日のことを思い出す。ドッペルさんに憑かれていたころ彼女の目はもう一人の自分を介していた。氷上恭司の姿をずっと見続けていた。傍に女がいれば当然の如くその女も映る。その頃抱いていた嫉妬心とは違う想いが身体中を巡っている。

携帯電話のメール機能を起動させると『今日の予定はなしよ。ちょっと用事が出来たの』とだけ書いて送る。

とても会えそうになかった。

会えば無理にでも押し倒してしまう。

そうすれば自分が恭司に嫌われるのではないかと不安にもなる。事務所に寄る事も忘れて街から出ようとした。

駅で彼女を見るまでは。

第五章　十一話

曽我部美耶子と別れＣＤショップを目指して歩く。騒々しい駅前とは違い随分と人の姿がなくなってくる。目的のＣＤショップは人の溢れる場所にはない。他にもショップはあるがメジャーな物を扱っている店は一軒もない。もとより有名なアーティストのＣＤが欲しければ駅のすぐ傍で大型店舗がどんと店を構えている。店長である左近寺の経営する小さな一軒家改造店などには足を運ぶことはない。大型店舗に個人店が太刀打ちできるはずもないのだ。左近寺の経営する小さなショップは輸入品やインディーズバンドのＣＤとチケットが主な収益になっている。訪れる客も目当てはそこにあり、ひとつのコミュニティとして有名である。大型店舗とは趣向が違う。

恭司も数年前からこの店の常連になっている。特に白瀬トオルと仲が良くなってからは尚の事。彼の兄と左近寺がよくつるんでいる事やモデル業から特上の客としても買われている。

最近、特に目立つようになってきた彼は取材を受けることもある。その場合、テンプレートではあるが好きな音楽はと聞かれ、返答の大半はこの店に並んでいるインディーズバンドの名前を挙げている。

例えばリヴァイアサンというバンドが三年前、デビューしてからのお気に入りになっていた。今では美耶子も同じようにＣＤを聴いている。

通りに出ると妙に騒がしい。店を目の前にして肩からギターケースをぶら下げた男たちが数人、じっと固まっているように立っている。風体からして男たちのバンド仲間らしき人物もいる。目の前に店があるにも関わらず彼らは路上で立っていた。

いつもはこんなはずではないというのにどうしたことか。
男たちの傍に立ってみても彼らはじっとしていた。誰もが店内に向かわず立ち尽くしている。何かあったのは明白だったが、気にしていても仕方がない。男達の間をするりと抜けいざ、店へ向かおうとすると同時に店の中から大きな音が響いた。

足がすくんでその場に止まる。恭司と同様に男達も驚いていた。
通りの男達を震え上がらせたのは音楽の音ではない。店内でかかる音楽はどれも中性的でトーンの高い歌声ばかり。甲高い音ばかりが絶叫のごとく響くものなのだが聴こえた音はまるで演歌を歌う親父の声だった。それは歌ではなく暴音であった。
何事かと店内を見る。

「だ、か、ら、さぁ～。言ってるでしょ、さっきから。うちの店は普通の店なの。麻薬なんて売ってないって！　おっさん達からすればロックもパンクも一緒かもしれないけどそういう音楽が好きだからってクスリに手を出すなんて馬鹿馬鹿しいよ」

カウンターでいつものように客を相手している左近寺がいる。暴音に負けじと大きな声で話しているが目の前の男には効果がなかった。左近寺と恭司の間に一人、スーツの男が立っている。カウンターに手を着いて左近寺を見下ろしていた。
頭皮の見えそうな後頭部にスーツ姿。

「じゃあこの前の騒ぎは何だ！　ああ？」

叫ぶ声の力強さからある人物の顔が思い浮かんだ。刑事の後藤である。この界隈でヤンチャしようものならこの男に首根っこを引っ掴まれて説教というのがお決まりだ。ということは何かあったのだ。

「あれは……ほら、かけっこだよ。うちのボスが騒ごうぜって言っちゃってさ。そしたらノリのいい奴らが、ね」
「なんか隠してるんだろ？」

二人が話をしている隣りで店の棚をまじまじと見ている女性がいた。彼女の目には男か女か解らない輪郭のぼやけた顔に金髪のボーカルがマイク片手に歌っているポスターが飾られている。そんなに気になるのか。

そんな彼女もスーツを着ているが見たことはなかった。客のようにも見えない。おそらく後藤と同じ刑事なのだろうが恭司の目にはそうは見えなかった。

左近寺と後藤の話は長く続いている。後ろで立ち尽くすバンドマンも男達も後藤が出て行くのを待っていたのだ。だとするとどれだけ前から言い合いをしているのかと頭を悩ませる。仕方なくらちが明きそうにない二人の言い合いに声を投げ入れた。

「あの、左近寺さん？」

呼ばれた左近寺はひょい、と顔を右にやって確かめた。店の外から覗く恭司に一瞬だけ嬉しそうに微笑んで立ち上がる。後藤の眉が片方だけ持ち上がった。

「よ、よう氷上君。ささ、お客さん来たから帰ってくれない。それとも業務妨害で署に連絡しよっか？」

店の外から覗いているのが恭司だけでないことに気づくと頭を掻いた。男たちが店の外を囲むように立っている。さすがに営業妨害だと言われても仕方ない。

「今日はここまでにしておく。だがな！　またお前らの悪いところが出てきてんだ。ごまかせねぇからな！　ちゃんと躾けておけってボスに言っとけ！　また昔みたいに戻るってんなら俺らもこのままにしちゃおけないからな」

まくしたてるようにして言うと店内にいた女も一緒に後藤と歩き出す。恭司は入り口を譲るようにすると後藤が立ち止まった。夏の日差しに目を細くして恭司の姿をじっくり見る。周囲の男たちも喉に溜まった唾を飲むこむ。

「おう、氷上のガキじゃねえか。モデルの仕事ちゃんとやってんのか？」

ようやく出た言葉はとても優しかった。

「はい」

「ったくトオルもお前ぐらい勉強してくれりゃぁいいんだがな。あいつとは会ってるか？　仲良くしてやってくれよ。出ないとロクな道に進まねぇからな」

氷上恭司に落ち度はない。第三者から見れば恭司は外見も中身も完璧に見える。勉強はしすぎで馬鹿に見えるほど行い、モデル業にも不備はない。だれでも素晴らしい男だと思うに決まっている。

「なんだ、トオルは一緒じゃねえのか？」

「今日は僕、一人です」

「そっか……鴉の坊主もいないのか」

道を左右に首を振ってまで確認している。だが鴉こと東堂夙夜の

姿はない。
この夏、二人とはほとんど会っていない。トオルとは何度か会う機会はあったものの特に夙夜は電話しても時間がないと忙しなく行動しているようだった。

ピロピロと軽快なリズムが鳴ると後藤の後ろにひっついていた女が携帯電話を取り出した。クールに見えた女だったが着信音は軽かった。

「……はい。後藤さんもいます。解りました、すぐ合流します」
「どうした？」

店から出るなり真剣な顔で「事件です」と、言った。
溜め息をつく間もなく「わかった。じゃあな」と告げる。
後藤と女が駆けて行った。二人のいなくなった道はようやく入れると恭司に礼をしながらぞろぞろ侵入していく。あっという間に店内はいっぱいになった。恭司も入るとほとんど移動できる隙間もないほどになっている。カウンターまでなんとかして辿り着くと左近寺が助かったよと手を握ってきた。

「ごめんね、氷上君」
「いえ、どうかしたんですか？　後藤さんがここに来るのって随分久しぶりですよね」
「まぁね。ちょっとこの所、動いてるから偵察なんじゃない？　鴉くんと連絡取ってないみたいだし」
「夙夜が……」

今頃、何をしているのだろうか。やはり魔術的な事柄で動いているのか。夙夜が忙しい時などそれ以外に考えがつかなかった。

「うん。いつもだったら後藤さんにだけは連絡取ってるはずなんだけど、ないみたい。あれ？　聞いてないの？」
「はい」
「じゃあちょっとだけ教えといてあげる」

いつものへらへらとした態度ではなくなった。他の客に聴こえないように恭司の耳に貸せとばかりに手で招く。恭司が近付く。

「夏休みに入った頃からだったかな。新薬が出回り始めてる」
「新薬……それって」

この場合、一つしかない。新宿駅は歓楽街とも連結しており良からぬ連中はどこにでもいる。ここはなにも綺麗な街ではない。百も承知であるが最近、それも白瀬トオルの兄であり左近寺のリーダーである荒垣トウマが自警団を組織し動き出してからはそれなりに安全になっていた。単に彼のおかげというわけではないが薬はほとんど撲滅したといって間違いなかった。

「そう麻薬。新宿駅の周りの売人はだいぶ潰したんだけどね、なんか新手の奴らがいるんよ。そいつら見境なくその新薬を売ってるってわけ。俺ら何とかして売人から回収してるけど大変なの」
「後藤さんが追ってたのって」
「多分それ」

客は何も気づかず商品棚に目を向けている。他にもコミュニティノートに何かを書いている男もいる。レジは恭司が占有しているため使えそうになかった。

「売人はどうなったの？」
「まだ捕まえてないよ。いつもあと一息ってところで逃げられちゃ

ってさ。もう意味不明なの」
「だから夙夜が……」
「鴉と連絡は？　聞いてないみたいだけど」

もし、その新薬が出回っているというなら危険だと知らせてくれるはず。なのに夙夜は何一つ告げていなかった。

「聞いてない。っていうか最近は会っても無いな」
「ふ～ん。友達なんだからもっと親睦を深めときなよ。学生やってるときが一番楽しいんだからさ。で、今日は？」

左近寺の目がどこか遠くを見ているようだった。左近寺の年齢はまだ二十歳そこそこ。その彼が学生の時と語るのはおそらく高校時代だろう。荒垣トウマやその他の中間達も底時代からの仲間と聴く。恭司にとっては夙夜でありトオルである。

「昨日の件。ライブのチケット買おうと思って」
「いいよ。はいこれ、二枚」

カウンターの下からすぐに取り出した。チケットに表記されている値段を二枚分払う。

「トオルの席はすぐ隣ね。ダイジョブ二人で行くんでしょ？」

ちょっと困ってそうな顔をした。二人というのはもちろん美耶子な訳だ。白瀬トオルからまだ彼女ができたという報告は受けてない。いつだったか彼女ができたら真先に連絡すると言っていたから間違いない。

「よほどトオルが餓えてるみたいなんだけど」

「いんや～ははっ」

愛想笑いにしては大袈裟だったかもしれない。

「大丈夫ですよ」

「ははっあいつ彼女、彼女って言ってるから。恭司とあの子見たら嫉妬心の塊になっちゃうかもよ」

「気をつけときますよ」

「うん。また今度ね～」

外に出るとすぐ携帯電話が鳴った。まるで後藤と女刑事のようだった。二人も電話のあとすぐにここを離れた。恭司の携帯にはメールの着信が光っていた。相手は曽我部美耶子である。

『今日の予定はなしよ。ちょっと用事が出来たの』

帰りは一緒になる。そこでデートの約束をしよう。その約束はできなくなった。なにか悲しくなるような文面だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2054t/

蒼の月　鴉

2011年10月19日06時11分発行